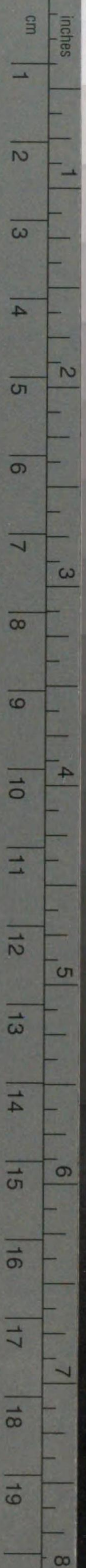


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

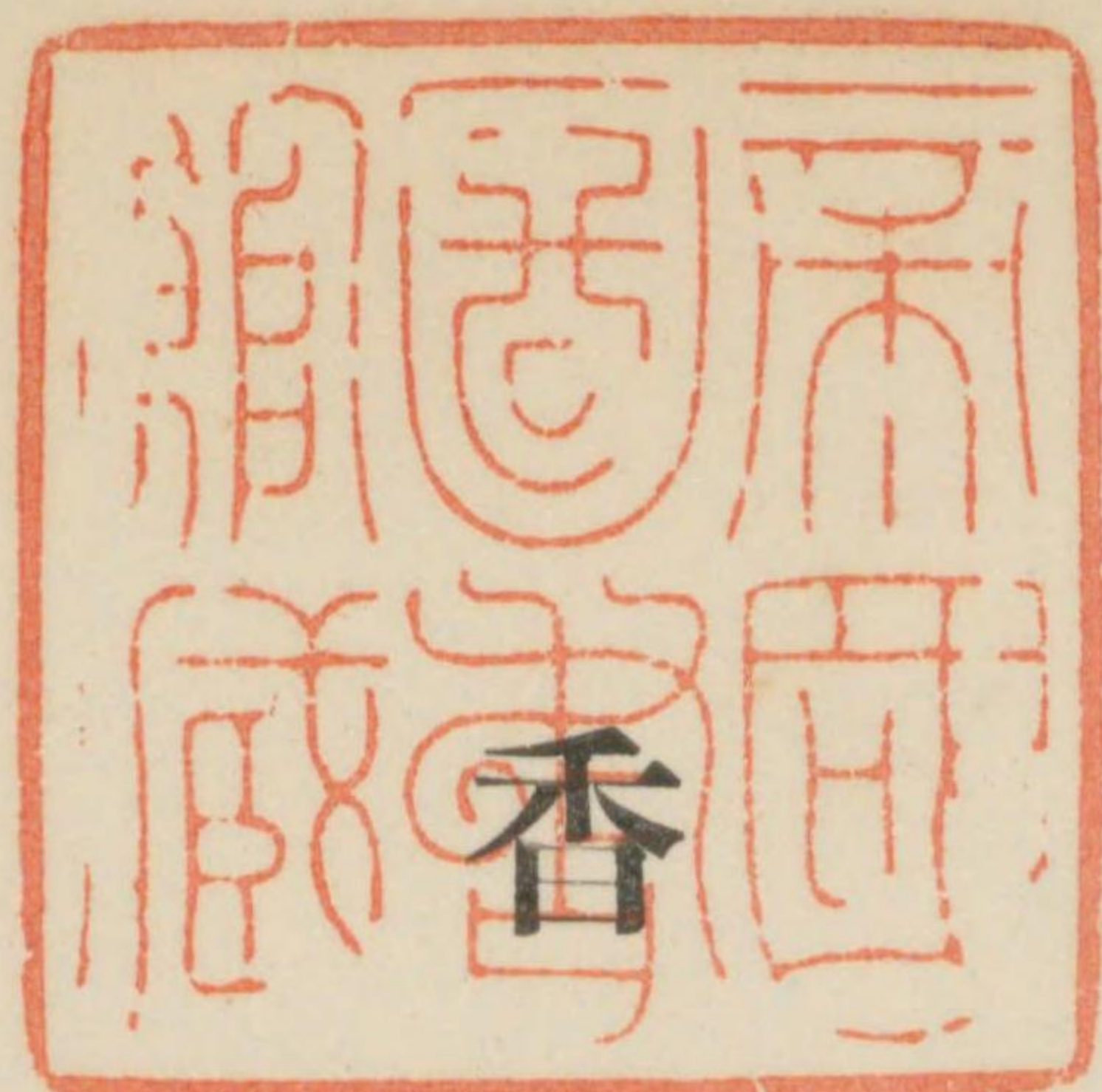
Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]



702-108
1200501582757

〇 複写

614



川
縣
神
社
誌

下
卷



702
108

香川縣神社誌 下卷目次

第七章 綾歌郡

第一節 綾歌郡概説

第二節 綾歌郡内神社

目次	一、坂出町	二、宇多津町	三、林田村	四、松山村	五、王越村	六、加茂村	七、府中村	八、端岡村	九、山内村	一〇、昭和三村	一一、陶宮村	一二、瀧宮村
	四	四	一八	三	三〇	三五	四	四	五	六	六	六

目次

一六、十	鄉	村	二四七
一五、七	箇	村	二四三
一四、吉	野	村	二三九
一三、神	野	村	二三四
一二、四	條	村	二三三
一一、榎	井	村	二三〇
一〇、象	鄉	村	二二二
九、高	篠	村	二一八
八、垂	水	村	二一五
七、龍	川	村	二一三
六、與	北	村	二一〇
五、郡	家	村	二〇六
四、南		村	二〇三
三、多	度	町	一九九
二、琴	平	町	一九四
一、善	通	寺	一八二
第一節	仲多度郡概說		一七八
第二節	仲多度郡内神社		一八二

第八章 仲多度郡

二九、美	合	村	一七六
二八、造	田	村	一七五
二七、長	炭	村	一七〇
二六、岡	田	村	一四〇
二五、栗	熊	村	一三七
二四、富	熊	村	一三三
二三、法	勳	村	一三九
二二、坂	本	村	一三三
二一、飯	野	村	一三六
二〇、川	西	村	一三三
一九、土	器	村	一三〇
一八、川	津	村	一〇四
一七、粉	所	村	九七
一六、山	田	村	九八
一五、西	分	村	八三
一四、羽	床	村	九七
一三、羽	床	村	七

目次

目次

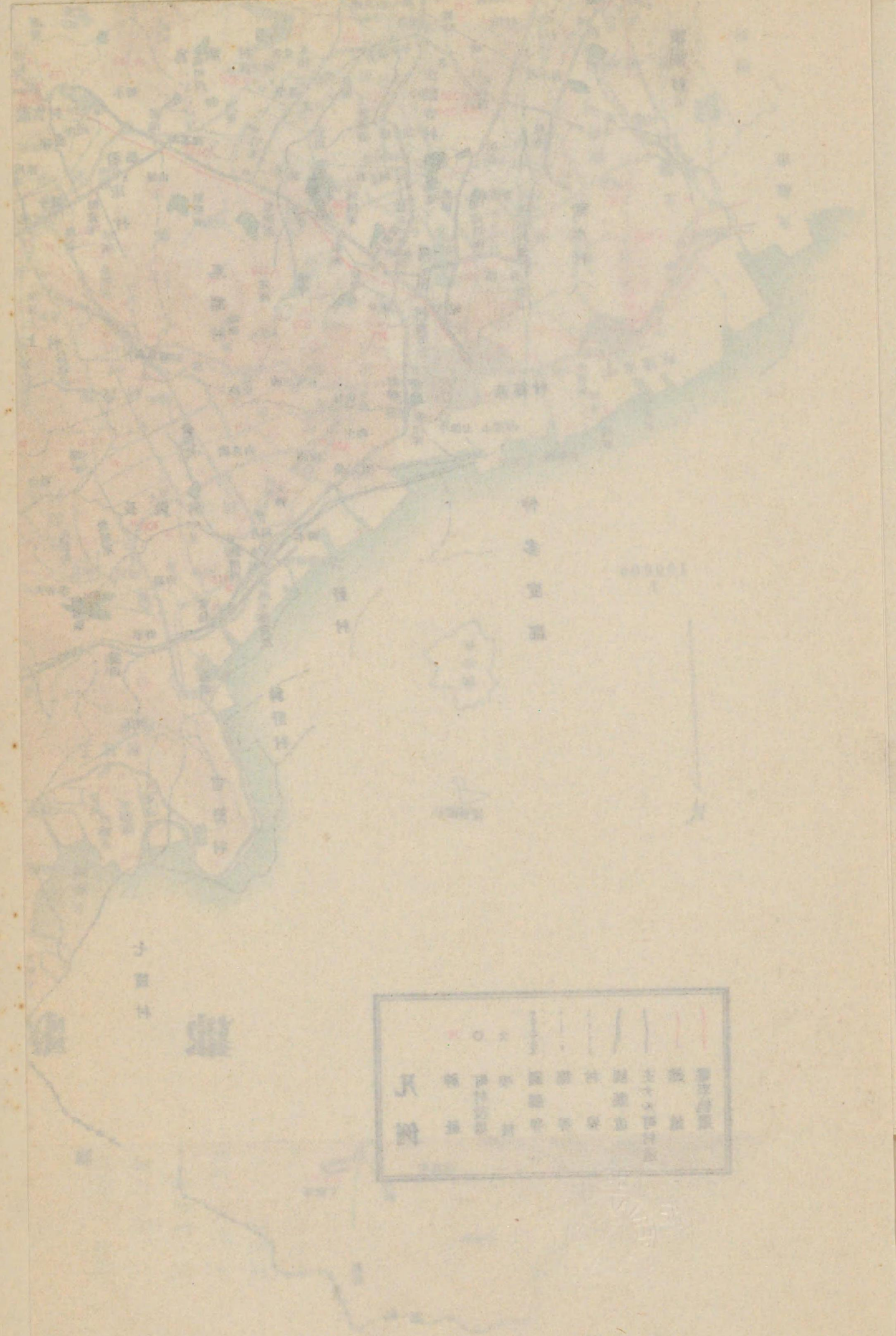
六、粟	島	村	三六
七、大	見	村	三〇
八、吉	津	村	三六
九、下	高	村	三九
一〇、上	高	村	四〇
一一、勝	間	村	四五
一二、笠	田	村	四九
一三、比	地	村	五四
一四、比	地	村	五四
一五、桑	山	村	五三
一六、本	山	村	五三
一七、上	高	村	五九
一八、二	宮	村	七二
一九、麻		村	六六
二〇、神	田	村	八〇
二一、財	田	村	八二
二二、財	田	村	八二
二三、高	室	村	九五

五

目次

一七、筆	岡	村	二四
一八、吉	原	村	一九
一九、四	方	村	二二
二〇、白	原	村	二七
二一、豐	島	村	七一
二二、與	島	村	七六
二三、本	島	村	七九
二四、廣	島	村	八五
二五、高	見	村	八九
二六、佐	柳	村	九〇
第九章 三 豐郡			
第一節	三 豐郡 概說		九一
第二節	三 豐郡 內神社		九四
一、觀音寺	町		九四
二、豐濱	町		〇三
三、仁尾	町		〇五
四、莊内	村		三二
五、詫間	村		三三

四



附 録

一、祭神名索引
 一、香川縣社誌年表
 編纂後記

三五、柞	野田	村	四三二
三四、大	野原	村	四三三
三三、和	田	村	四三〇
三二、五	郷	村	四三六
三一、萩	原	村	四三五
三〇、紀	伊	村	四三三
二九、粟	井	村	四九
二八、豐	田	村	四三五
二七、河	内	村	四三二
二六、辻	ノ	村	四三六
二五、一	磐	村	四三三
二四、常	谷	村	三九八

目次

六

終

綾歌郡



附 録

- 一、祭神
- 一、香川
- 三三、和
- 三四、大野
- 三五、柞



附 錄

一、祭神名索引
 一、香川縣社誌年表
 編纂後記

- 三三、和田村
- 三四、大野原村
- 三五、柞田村
- 三三、和田村
- 三四、大野原村
- 三五、柞田村

終

第七章 綾歌郡

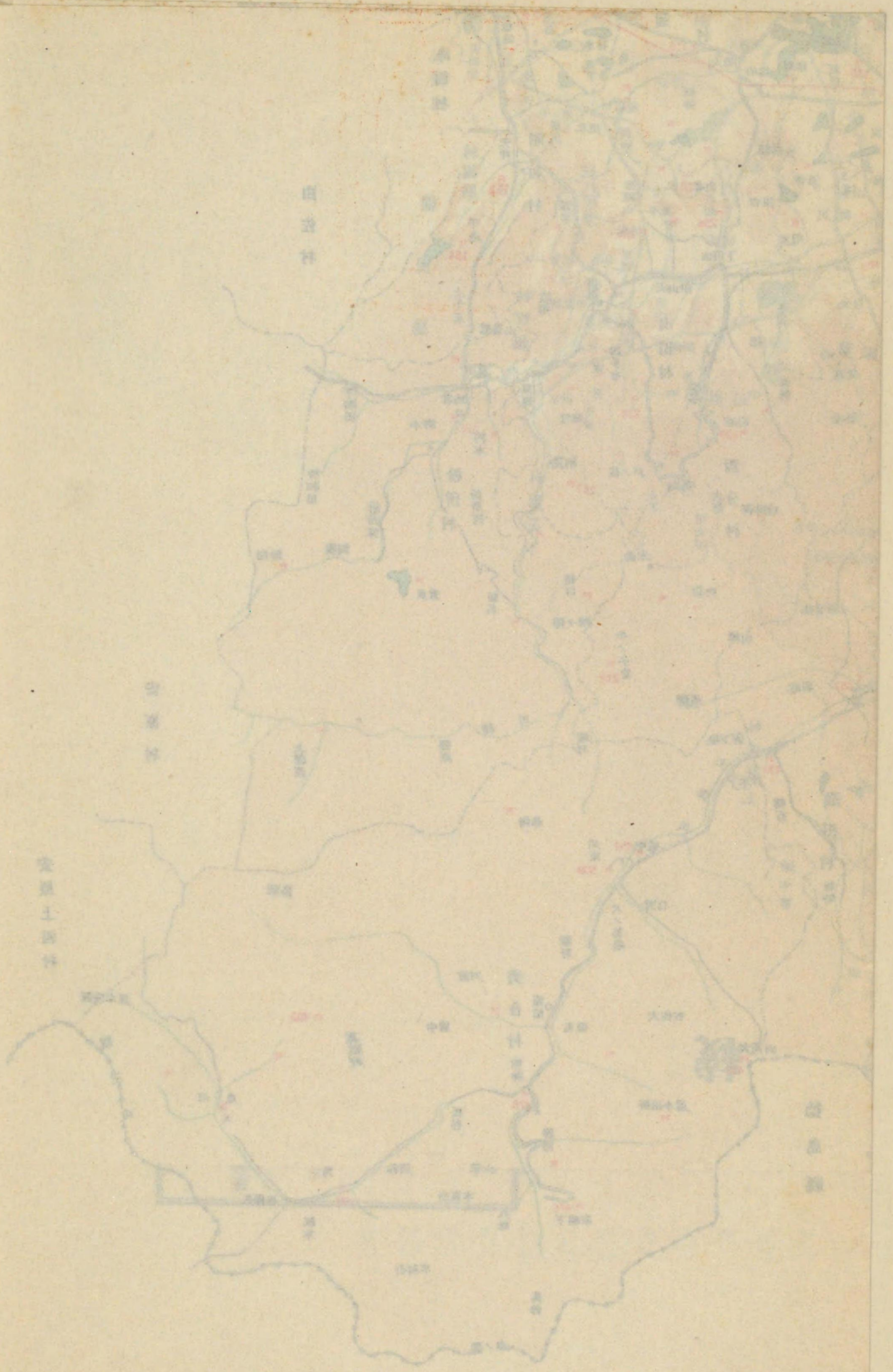
第一節 綾歌郡概説

東は香川郡に、西は仲多度郡に接し郡制實施以前は阿野、鶴足の二郡であつた。

阿野郡は倭名鈔に阿野綾とあつて安益、漢とも書かれてゐる。中古二郡に分れて綾南條、綾北條と云ひ、又阿野郡南、阿野郡北とも稱へられた。郡名は此の地綾を朝貢せしより起ると云ふ。所屬の郷名は倭名鈔に、新居爾比、山田也萬、羽床波以、甲知加久、鴨部加茂、氏部宇治、山本也萬、林田波以、松山多の九郷である。甲知は甲辰とも書かれたが、後府中と改め、鴨部は鴨、山本は西庄と改められた。各郷に所屬の村名を官社考證によつて示すと

山田郷 山田上・山田下・牛川・東分・西分・千疋・枋所東・枋所西・川東。
 羽床郷 上羽床・下羽床・小野・北村・瀧宮・萱原。
 府中郷 府中・陶・畑田。

綾歌郡



新居郷 新居・柏原・國分・新名・福家。

鴨郷 鴨。

氏部郷 氏部。

松山郷 高屋・神谷・青海。

林田郷 林田・乃生・木澤。

西庄郷 西庄・江尻・福江・坂出・御供所。

である。全讃史には牛川・西分・東分を羽床郷に、乃生・木澤を松山郷に、西庄・江尻を林田郷に屬してゐる。山田・羽床・府中・新居の四郷を阿野郡南とし、鴨・氏部・松山・林田・西庄の五郷を阿野郡北とする。現今の町村名は

坂出町 坂出・御供所・福江・江尻・西庄(福江・江尻は金山村、西庄は西庄村なりしを昭和十一年合併す)。林田村 林田。松山村 青海・高屋・神谷。王越村 乃生・木澤。加茂村 鴨・氏部。府中村 府中。端岡村 國分・新居。山内村 福家・新名・柏原。陶村 陶。昭和村 畑田・千疋。瀧宮村 瀧宮・北・萱原。羽床

上村||羽床上・牛川。羽床村||羽床下・小野。山田村||山田上・山田下・東分。西分村||西分。粉所村||粉所東・粉所西。
の一町十五村である。

鶺鴒うづた郡は倭名鈔に鶺鴒宇多とあつて鶺鴒垂とも書く。郡名の起源は、全讃史に栗熊村に酒部黒丸なる者ありて居所水なきを憂へしに、或時鶺鴒多あつまりて地を跑到に清水湧出し、この水を以て酒を造り允恭天皇に奉り、鶺鴒の郡名これより起ると云ひ、西讃府志には郡内勝浦村(美合村)に鶺鴒足明神(勝浦神社)といふありて篠目命を祀る、此の命に由あるかと云ふ。所屬の郷名は倭名鈔に、長尾奈加 小川乎加 井上井乃 栗隈久利 坂本佐加 川津加波 二村布多 津野乃 の八郷で栗隈は栗熊、坂本は坂元とも書かれた。後岡田郷を生じて九郷となつてゐる。官社考證による郷村名は
長尾郷||長尾・炭所東・炭所西・造田・中通・勝浦。
栗熊郷||栗熊東・栗熊西・富熊。
岡田郷||上岡田・下岡田・東岡田・西岡田。(全讃史は岡田郷を載せずして四村を井上郷に附く)
井上郷||上法軍寺・下法軍寺。
小川郷||東小川・西小川。

坂元郷||東坂元・西坂元・川原・眞時。
二村郷||東二村・西二村・西分。
川津郷||東川津・西川津。
津野郷||東分・宇多津・土器・土居。
で、津野郷土居は後丸龜市に編入せられた。現今の町村は
宇多津町||宇多津。川津村||川津。土器村||土器。
川西村||西二村・西小川。飯野村||東分・西分・東二村。
坂本村||東坂元・西坂元・川原・眞時。法勳寺村||上法軍寺・下法軍寺・東小川。富熊村||富熊。栗熊村||栗熊東・栗熊西。岡田村||岡田上・岡田下・岡田東・岡田西。長炭村||長尾・炭所東・炭所西。造田村||造田。美合村||中通・勝浦・川東。
の一町十二村で、美合村の川東は阿野郡山田郷の所屬である。本郡に於ける延喜式内神社は舊阿野郡に於て府中村縣社城山神社、松山村郷社神谷神社、加茂村村社鴨神社がある。鴨神社は二社あつて何れも式内と稱してゐる。舊鶺鴒郡に於ては飯野村縣社飯神社、岡田村郷社宇閑神社の二社が式内社とせられてゐる。栗熊村村社宇閑神社も式内宇閑神社と云はれ由緒深き神社である。
三代實錄に見えてゐる從五位上天河神は造田村郷社天川神

社、從五位下宇夫志奈神は宇多津町縣社宇夫階神社である。又從五位下梶州神は造田村村社梶州神社、從五位下高家神は松山村社高家神社であると云ひ、類聚符宣抄に見えてゐる從五位下天津高結は端岡村高結神社と云はれてゐる。官社考證追録に古社として擧げられてゐる神社は阿野郡内に於て

山田村村社松熊八幡社、村社長柄神社。西分村村社曲木神社、村社椎尾神社、椎尾神社の境内なる阿諏訪神社。粉所村郷社川上神社。美合村村社山熊神社。瀧宮村郷社御山八幡神社、村社瀧宮神社、縣社天滿神社、孔聖神社、松惠社。山内村村社日抱神社。端岡村郷社楠尾神社。加茂村村社松尾神社、村社八銚神社、菅原神社。府中村村社天滿神社、村社鼓岡神社。松山村村社青海神社、村社高家神社、村社嚴島神社。林田村郷社總社神社、村社總倉神社。王越村村社喜佐波神社、村社梅宮八幡神社。坂出町縣社白峰宮、國津神社、廣瀬神社、横瀬神社。
等、舊鶺鴒郡に於て

美合村郷社大川神社、村社勝浦神社、村社落合神社、城村神社。長炭村村社三島神社、曉神社。富熊村村社八幡神社。法勳寺村讚留靈王神社。坂本村村社三谷神社、村社下

坂神社、村社坂元神社、吳織神社。川西村村社春日神社。飯野村村社吉岡神社。
等である。この外尙多くの古社がある。

本郡の一部に於て百手祭が行はれてゐるが、百手祭は西讃地方に行はれる神事で、仲多度郡、三豊郡で専ら行はれてゐるので仲多度郡及び三豊郡の概説に於て述べる事とし、こゝには略して置く。

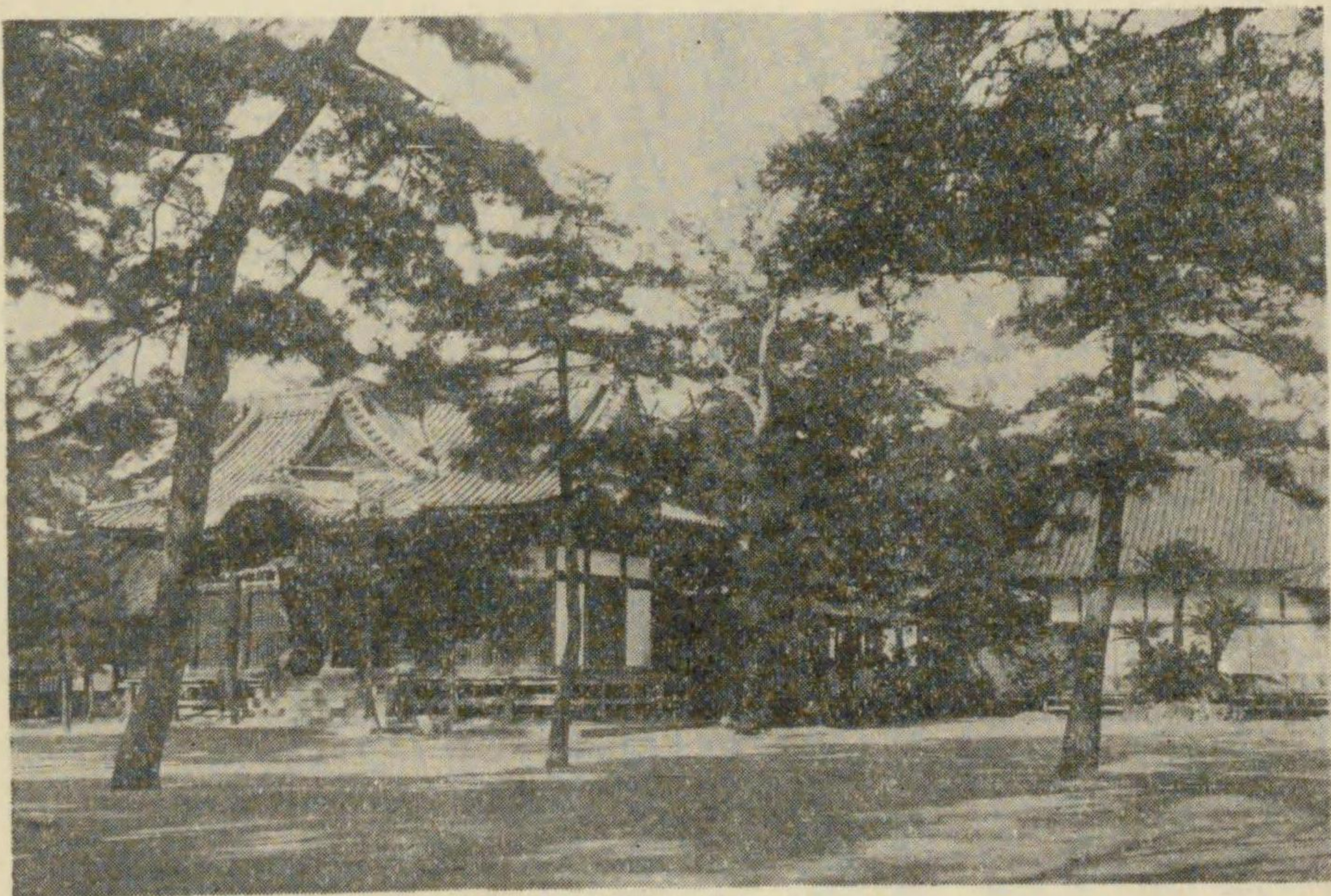
瀧宮村縣社天滿神社及び村社瀧宮神社には毎歲陰曆七月二十五日を以て瀧宮踊が行はれ、起源は仁和四年菅公が雨を城山に祈られた時に始まり、爾來一千餘年繼續し來つてゐる。菅公が筑紫に薨去の後その冥福を祈る爲め、踊に念佛を唱へたので念佛踊とも云ふ。南條組(北村組とも云ふ)、北條組、坂本組、七箇村組等の組があつて毎年輪番に之を行ひ、現今は坂本組、南條組、瀧宮組の三組が順年に行つてゐる。嘗て高松藩主松平頼重は由緒深き踊として制札を下して之を保護したが、制札は天滿神社の寶物として保存せられ今猶瀧宮にての踊の時には之を立てて行はれる。順番に當つた組では瀧宮踊終了の後その村の神社に於ても踊る。又雨乞等の爲め村々の神社にて踊ることがあり之を村踊と云ふ。尙委しくは縣社天滿神社の項に於て述べる事とする。(倭名類聚鈔 全讃史

第二節 綾歌郡内神社

一 坂出町

(一) 村八幡神社 坂出町字内濱

祭神 譽田天皇(一)に曰 配祀 天照皇大神 大物主神) 由緒 社記によれば、往古男山八幡宮を金山村なる角山麓に勧請、天正三年三月三日坂出村中濱に遷座すといひ、或は正平年間細川頼之、細川清氏と高屋城に戦ひし時、頼之神明の加護により大勝を得たりしかば、凱旋の途次、角山の麓に祠を建て八幡神を祀れるに始るともいふ。全讃史には『或云坂出瀨丁昔從播州赤穂來故迎赤穂八幡祭之』と見ゆ。寛文年間社人福家吉太夫と別當摩尼珠院との間に紛争を生じ、出訴の結果遂に社人吉太夫敗訴改易となり、依て寛文九年三月朔日摩尼珠院の境内に遷座せしが、



村八幡神社 此の地に大壑田をなさしめしより戸口俄衛門に命じて松藩主松平頼恕、久米榮左衛門に命じて改築あり。文政十二年高松藩主松平頼恕、久米榮左衛門に命じて改築し次で安政四年本殿

の改築を行ふ。 明治十二年八月村社に列せられ坂出一村の産土神となり、

同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。 明治二十年、同二十五年境内擴張、神輿庫新築、同三十一年社頭整備、大正十三年社務所を改築し、昭和五年更に境内を整理し參道を擴張せり。(全讃史 今名勝圖繪 讃州府志 綾北問尋抄)

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 釣殿 神輿庫 社務所

境内坪數 千九百七十二坪

氏子區域及戸數 坂出町の内舊坂出區域 四千五百戸

境内神社 鹽竈神社(大綿津見神) 幸神社(倉稻魂神)

(二) 鹽竈神社 坂出町字西新開

祭神 大綿津見神

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。 文政十一年(紀元二四八八)八月一日久米通賢、藩主松平頼恕の命により坂出開墾鹽田の安全繁榮を祈願せむ爲め中堪浦西北隅の地に奉齋す。天保三年九月十二日大祭執行鳥洲神社へ神輿渡御一泊の上翌朝還御ありたり。天保八年今の地に奉遷す。明治三十六年十月本殿を改築、昭和八年境内を整備し東南の



鹽竈神社

一隅に久米通賢の銅像を建設昭和九年十二月竣成す。當社は藩主松平家の崇敬厚く、明治二年までは社殿の造營其の他總て松平家に於て司り來れり。社號扁額は松平頼顯の筆になり其の原稿は當社に保存せり。又藩主頼恕獅子頭及び奴槍五振の奉納あり。其の由來書に『此御獅子之儀者當國ノ大守九代目御殿様鹽竈宮ニ御奉納被爲

在候ニ付右御獅子則十家之者永ク相預リ祭禮ノ度毎ニ取出シ物事正重ニ取行ヒ無龜略永世相續可仕様奥御用所江右十

人呼出之上被仰付候」と見ゆ。(古名勝圖繪)
境内に坂出神社あり。天保年間の創建にして、初め事代主神を奉祀せしが、後舊藩主松平頼恕及び藩士久米通賢を配祭す。兩祭神の功業は實に坂出發展の淵源をなすものにして、其の業蹟は當所字廣瀨鎮座菅原神社境内なる坂出墾田碑文に明かなり。

祭日 十月二十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 倉庫

境内坪數 千七百七十四坪 崇敬者人員 約二千五百人

(三) 鳥洲神社 坂出町字東濱

祭神 埴夜須毘賣神

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。文政十二年(紀元二四八九)六月二十六日久米通賢、藩主松平頼恕の命に依り東新開墾田の安全を祈らんが爲め里人をして社殿を營ましめ創祀せり。大正五年拜殿を改築す。昭和七年臨港道路開通に伴ひ境内各所を整理す。

祭日 六月二十六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四百〇一坪 崇敬者人員 約八百人

拓者久米通賢の事蹟を述べたるものなり。

祭日 十月二十六日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 社務所

境内坪數 三百八十二坪 崇敬者人員 約二千人

(五) 事比羅神社 坂出町字西濱

祭神 大物主神

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。當地に鹽田を開墾し沖漕浦開港するや、船舶輻輳するを以て海上安全の爲め、天保八年(紀元二四九七)六月八日沖漕浦西北隅の地に創祀す。安政元年十一月五日夜半大地震ありて社殿倒壊せしを以て、其の後現在地に社殿を營み奉遷せり。例祭日には海上船を以て神輿の渡御あり。

祭日 陰曆六月十日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 三百九十一坪 崇敬者人員 約二千人

(六) 地神社 坂出町字西新開

祭神 埴夜須毘賣神

(四) 菅原神社 坂出町字中筋(廣瀨)



菅原神社

祭神 菅原

道眞公

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。天保元年(紀元二四九〇)八月二十五日の創祀といふ。明治十三年社殿を改築、昭和九年十月幣殿、拜殿神饌殿及び

社務所を改築す。

境内に文政十二年の建設に係る坂出墾田の碑あり。當地開

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。文政十二年(紀元二四八九)八月六日、藩主松平頼恕の命により久米通賢の

創祀する所にして西新開墾田の守護神たり。明治二十四年社殿を修築す。

祭日 陰曆四月五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 八十五坪 崇敬者人員 一千人

(七) 幸神社 坂出町字横洲

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。昭和五年參道及び境内玉垣を新設す。

祭日 陰曆六月十一日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百二十二坪 崇敬者人員 約一千人

(八) 稻荷神社 坂出町字横洲

祭神 宇迦之御魂神

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。昭和五年社殿を改築、玉垣を建設す。

祭日 五月一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百十五坪 崇敬者人員 一千人

(九) 八幡神社 坂出町御供所字八幡

祭神 譽田天皇

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社。古くは御供所村一村の産土神にして、綾北問尋抄に『八幡宮 御供所村にあり是氏の神なり頗る古き宮地なり』と載せられたり。

祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二百一十一坪 崇敬者人員 千五百人

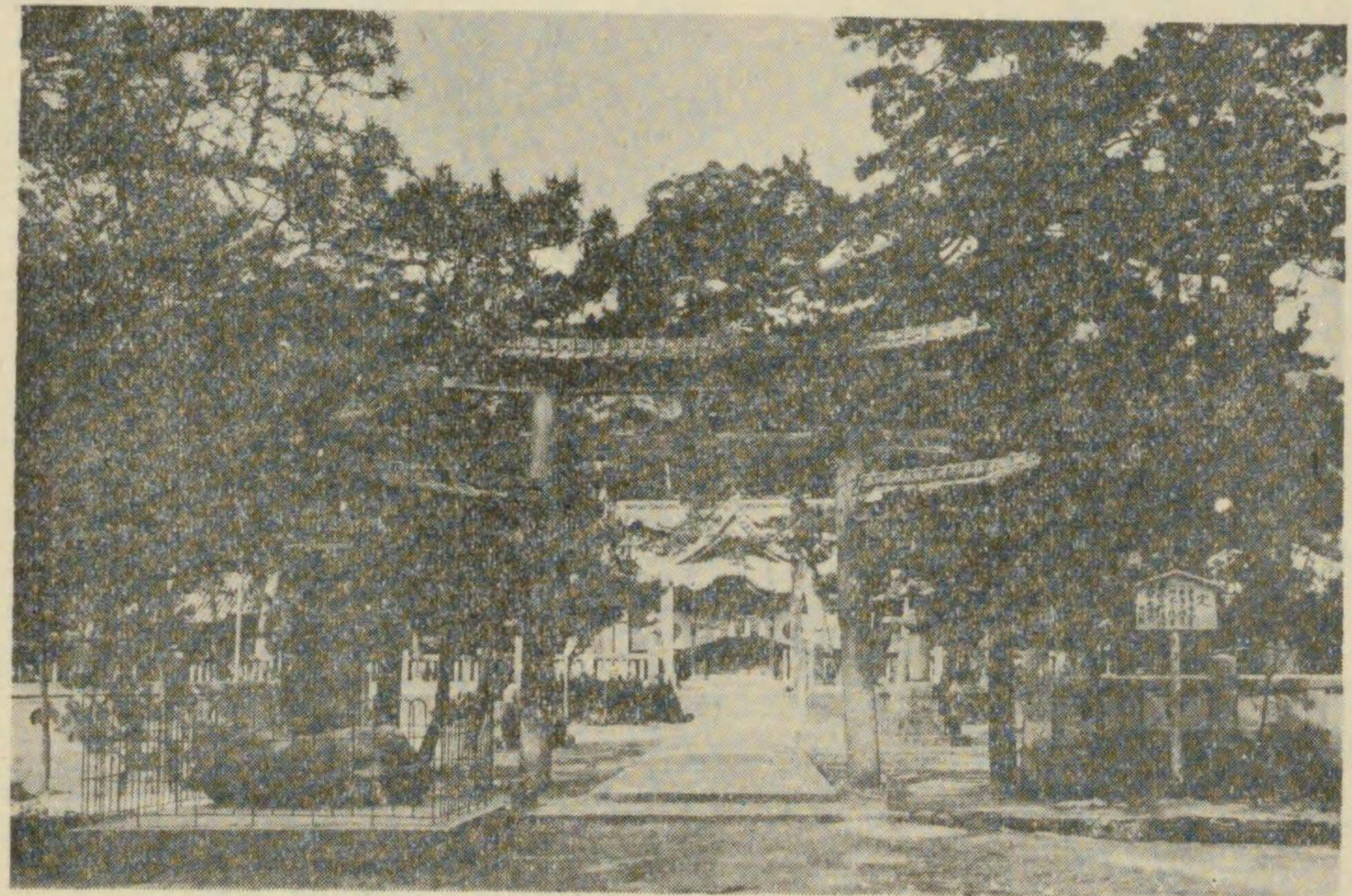
(一〇) 幸神社 坂出町御供所字宮本

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百二十五坪
崇敬者人員 五百人

りしが、高倉天皇の治承年中崇徳天皇と御道諡あらせられ、
官符を給ひて稻税千束を宛行はれたり。源頼朝幕府を創



白峰宮 縣社

め、建久四年八月舊例にまかせて稻税を宛行ひ、又下乗の榜を建つ今社前二町餘の地を下馬と稱するは蓋し榜の在りし所なるべし。土御門天皇深く當宮を尊く崇ましまして勅願所仰出され、後嵯峨天皇御宇社殿再建ありて御宸筆の御願文に御手形の朱印を加へ莊園を御寄附なし給ふ。即ち西の莊の

(一一) 縣白峰宮 坂出町大字西庄字天皇

祭神 崇徳天皇

由緒 長寛二年(紀元一八二四)二條天皇の宣下を以て社殿を造營し、同年十月十日御鎮座あらせらる。崇徳天皇は保元元年八月當國に御遷幸あらせられ、同二十三日林田郷綾高遠が館に着き給ひ、更に林田村長命寺に御移りあり。『こゝもまたあらぬ雲井となりにけりそらく月のかげにまかせて』と御詠ありしを以て其處を雲井御所と稱す。後香川郡直島に御遷幸ありしが、更に府中村誠岡に行宮を造營し、誠岡に坐すこと六年、長寛二年八月二十六日崩御し給ふ。こゝに於て崩御の趣京師に奏聞す。此の間玉體を西庄村野澤井の水の上に安置し奉れり。野澤井は一に彌蘇場の水と稱し靈泉なり。往昔景行天皇の皇子神櫛王(或は日本武尊の御子武甕王とも云ふ)南海の惡魚を征せし時、王及び從士皆惡魚の毒に中りしが此の水を飲みて蘇生せり。故に彌蘇場の水、八十蘇水と云ふ。同年九月十八日宣下に依りて玉體を白峰に葬り奉る。彌蘇場はかゝる靈蹤なるを以て、二條天皇宣下ありて社殿を造營し以て崇徳天皇の御靈を奉齋せしめられしなり。崇徳天皇初めは讚岐院と稱し奉

内免高二百五十石是なり。天正年間兵火に罹り社寶鳥有に歸す。元祿十四年五月朔、國守松平頼常神領四石五斗を寄進せり。慶應元年六月、孝明天皇より寶祚悠久、四海靜謐の御祈禱仰出され、御撫物を備へさせられ、明治天皇亦御撫物を備へさせらる。明治初年までは毎年禁裡御所より祭塗料として白銀五枚を下賜せられたり。崇徳天皇野澤井宮、又崇徳天皇明の宮等と奉稱せられ、川西五ヶ村の惣氏神たり。明治五年八月縣社に列せられ、明治四十年三月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(南海通記 保元物語 三代物語 全讀史 今名勝圖繪 讚州府志 玉藻集 崇徳院と讚岐)

例祭日 十月一日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 寶庫 釣殿 社務所

寶物 無量壽經 崇徳天皇宸筆 短冊同 普門品經 松平頼重筆並御寄附 短冊見 宮貞清親王御 劍三條宗木像五軀 其他二十二點 筆並御寄附 近作

境内坪數 九百五十一坪

氏子區域及戸數 大字西庄 大字江尻 大字福江 千戸

境内神社 幸神社(倉稻魂神) 合市杵島比賣神 譽田天皇(明治四十年字下々所櫻木神社・八幡神社を合祀す) 菅原神社(菅原道真公)

(一二) 國津神社 坂出町大字西庄字津田(莊)

祭神 手摩乳神 脚摩乳神

合祀祭神 大名持神 大地主神 倉稻魂神

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社。綾北問尋抄に、雄略

天皇御宇此處に垂迹し給ふとあり。(古名勝圖繪 讚州府志)

明治四十年^{字津}津田神社、^{字大}幸神社、^{屋敷}青木神社・幸神社、

^{字楠}幸神社・幸神社を合祀す。

祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 三百五十一坪 崇敬者人員 約百五十人

(一三) 八幡神社

坂出町大字西庄字岩下(別宮)

祭神 譽田天皇

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社。讚州府志に「別宮八

幡 細川家ノ願ニヨリテ石清尾ノ八幡ヲ勸請セント云フ」

と見ゆ。

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 四百四十三坪 崇敬者人員 約五百人

江尻村の氏宮となすに際し、廣濱の神號は神名式になしと

て廣瀨大明神と改稱せりといふ。(全讚史 古名勝圖繪

讚州府志 官社考證追録)

明治四十年末社金刀比羅神社を合祀、翌四十一年^{字金}金山

神社、^{字本}村幸神社を合祀す。合祀神社金山神社は僧行基の

祀る所にして金山鎮護の神なりといふ。(讚州府志)

祭日 九月一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四百三十五坪 崇敬者人員 千七百人

(一七) 事代主神社 坂出町大字江尻字江尻(新地)

祭神 事代主命

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社

祭日 陰曆正月九日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百四十五坪 崇敬者人員 五十人

(一八) 幸神社 坂出町大字江尻字切松

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社

(二四) 幸神社 坂出町大字西庄字醍醐

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社

祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 六百七十坪 崇敬者人員 約四百五十人

(二五) 幸神社 坂出町大字西庄字楠田(原)

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社

祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十五坪 崇敬者人員 約五百人

(二六) 廣瀨神社 坂出町大字江尻字本村

祭神 若宇迦迺賣神

合祀祭神 大國主神 金山彦神 金山比賣神 倉稻魂神

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社。初め廣濱大明神と稱

せられしが、藩主松平頼重一村一社の制を定め當社を以て

境内坪數 六十坪

(一九) 幸神社 坂出町大字江尻字高鍋

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町縣社白峰宮境外末社

境内坪數 十二坪

(二〇) 横潮神社 坂出町大字福江字金山

祭神 天照大御神(一に曰 日本武尊)

合祀祭神 日本武尊 若宮神

由緒 讚留靈記によれば、景行天皇二十三年西海に吞舟の

大魚あり 船舸の往還する所を覘ひ波濤を起し舟楫を覆へ

し人を喰ふ。天皇即ち小碓尊の子靈子に勅し之を討たし

む。二十五年靈子椎門に於て之を討ちしに戰士皆大魚の毒

氣に中りて醉臥せり。時に一童子瓶水を持ち來りて靈子に

飲ましめしに身心清明なり。靈子即ち童子に請ひて之を土

卒に飲ましむれば士卒皆蘇生す。依て其の水を號して八十

生水と云ふ。童子は即ち横潮明神なり。かくて靈子は讚岐

に止まり給ひしが故に讚留靈子と云ふ。又武明王と稱す。綾姓の始祖なり。とあり。乃ち横埴明神は讚留靈王に安庭水を教へ給ひ、白雲となりて此の所に止まり給ひし故祠を建て之を祀ると傳へらる。八十蘇水は長寛二年八月崇徳天皇崩御の砌二句に涉りて天皇の尊骸を浸し奉りて宣下の來るを待ちし所と傳へられ、靈水としてその名高く、一に野澤井の水とも云ひ、今西庄にあり。明治四十一年拜殿を改築す。(南海通記 全讚史 生駒記 玉藻集 綾北問尋抄 古名勝圖繪)

明治四十年 大字 福江 日本武神社、字本 村 若宮神社を合祀す。

祭日 八月九日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神饌所 神樂殿
境内坪數 五百七十坪 崇敬者人員 千五百人

(二二) 八幡神社 坂出町大字福江字角山

祭神 譽田天皇

合祀祭神 大名持命

由緒 坂出町横潮神社境外末社。一に西山八幡宮の稱あり。口碑によれば、初め日山内官林中に鎮座ありしを後此

(二四) 龍王神社 坂出町大字福江字笠山

祭神 大綿津見神

由緒 坂出町横潮神社境外末社。古名勝圖繪に『笄山又挿山 福江村にあり行基菩薩説法の時龍女姿を現し玉の笄を残り天に上れり後之を此山の嶺に埋め龍神を祀る故に笄山と號す夏旱の時此峰に祈雨すれば必ず驗ありと云ふ』と見ゆ。

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 七百三十六坪 崇敬者人員 百四人

(三五) 池宮神社 坂出町大字福江字本村

祭神 彌都波能賣命

由緒 坂出町横潮神社境外末社

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百二十坪 崇敬者人員 六十人

(三六) 三夫神社 坂出町大字福江字城山

祭神 日月神(天照大御神 月讀尊の意なるべし)

處に奉遷せりといふ。

明治四十年 字 浦 青木神社を合祀す。

祭日 陰曆八月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 六百九十四坪 崇敬者人員 百八十人

(三三) 若棟神社 坂出町大字福江字笠山

祭神 若虫神

由緒 坂出町横潮神社境外末社

祭日 陰曆九月十八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十六坪 崇敬者人員 百四人

(三三) 幸神社 坂出町大字福江字笠山

祭神 倉稻魂神

由緒 坂出町横潮神社境外末社

祭日 陰曆九月十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百八十一坪 崇敬者人員 二百五十人

由緒 不詳

祭日 陰曆三月十五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百二十九坪 崇敬者人員 五百人

二字多津町

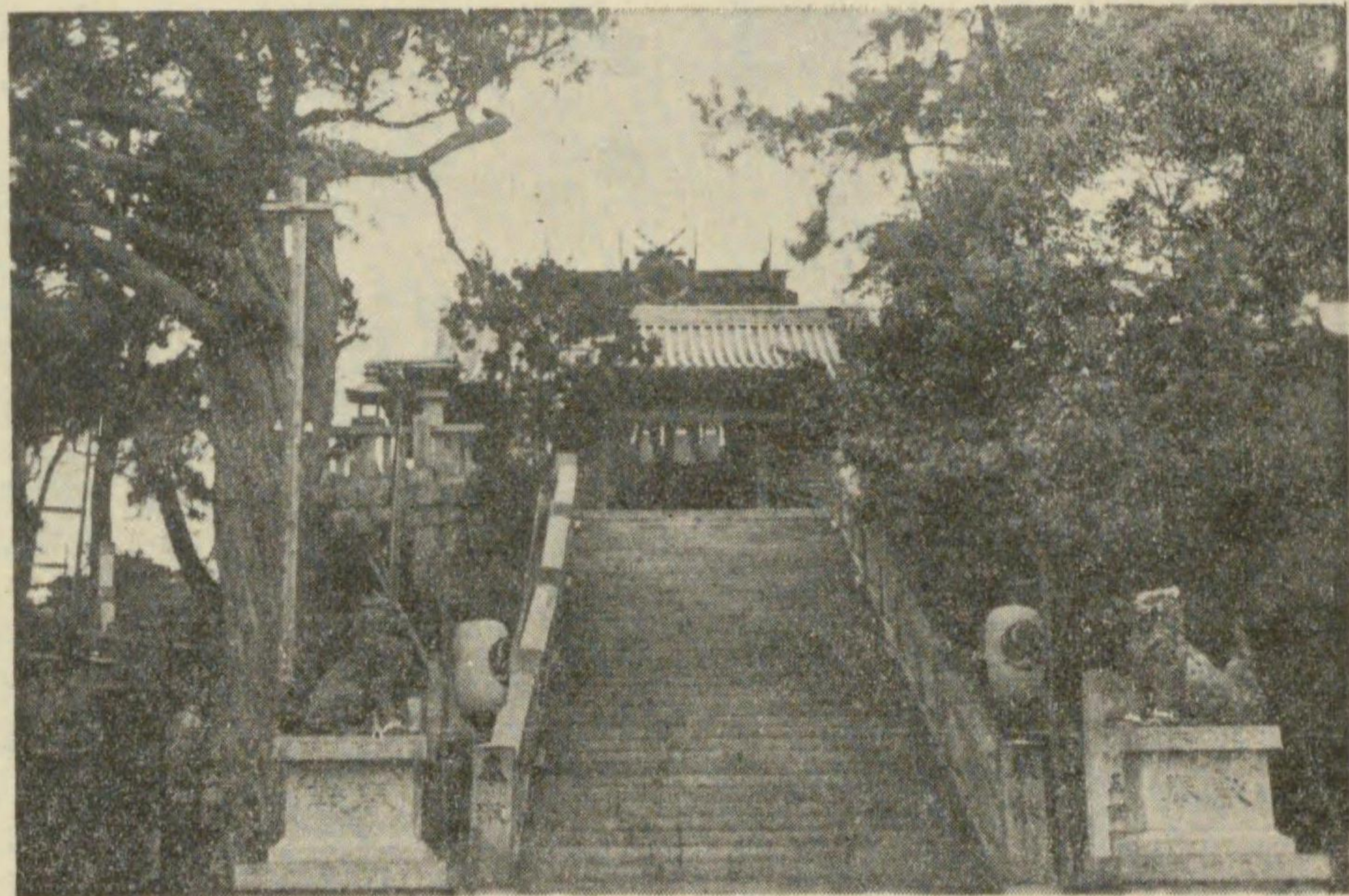
(二七) 宇夫階神社 宇多津町字西町

祭神 大己貴命

由緒 三代實錄に『貞觀六年冬十月十五日戊辰授讚岐國正六位上宇夫志奈神從五位下』とありて所謂國史現在社なり。社傳によれば、當社は神代より津野郷に鎮座ありて宇夫志奈大神と奉稱せらる。景行天皇の皇孫武甕槌王當國阿野鵜足二郡に封ぜられ、封内海岸を船にて巡視せられしに、暴風雨起りて御船漂搖す。宇夫志奈神を祈りしに忽ち小鳥飛び來りて御船を導き、遂に泊浦に着き危難を免れ給ふ。こゝを以て崇敬厚く小鳥神と稱し奉れりと云ふ。

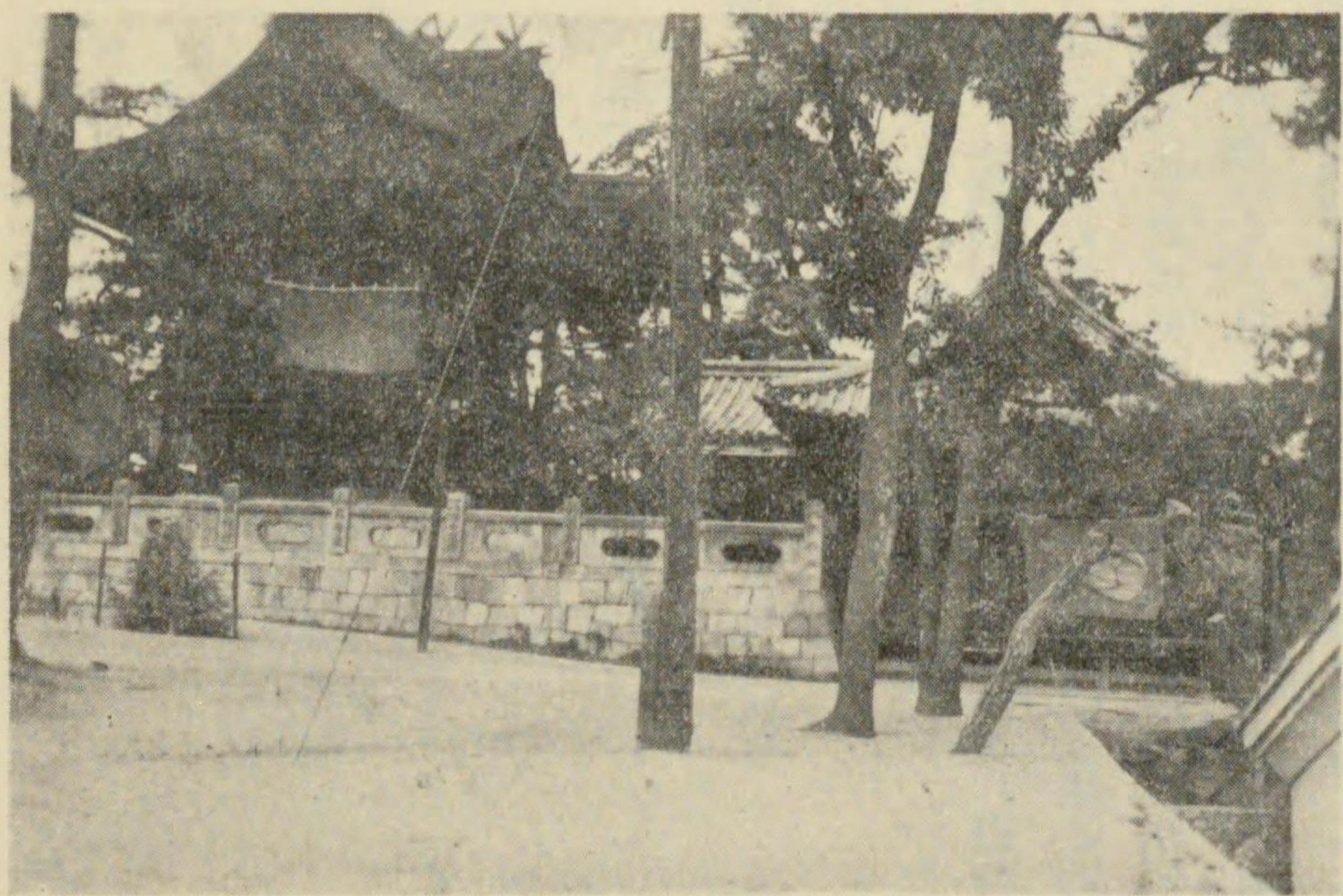
寶龜十年(紀元一四三九)社殿再興、大同二年八月神殿よ

り光明現れ
宇多津の海
岸なる小岡
を射る事屢
々なりしか
ば、朝廷に
奏聞し勅許
を得てその
岡に社殿を
造營し遷座
し奉る。今
の社地即ち
これなり。
貞觀六年從
五位下を授
けられ且位
田をも御寄附あり。文永二年には龜山天皇御祈願ありて宇
夫階大明神の扁額を奉納せられ、爾來社號を宇夫階と書く
ことゝなれり。こゝに於て神威愈盛なりしが、永祿十一年
閏七月地震ありて社頭破壊し漸く衰頽せり。天正年間國主



縣社宇夫階神社

生駒近規再營して社領を寄進し、藩主松平氏亦神領一石一
升九合を寄進せり。寛文八年氏子等社殿を再營し全く舊に
復せりと云ふ。
延寶八年當社巫子の書ける縁起に『宇夫階大明神ノ根元者
大山祇命也
三島明神此
處ニ垂跡座
ス也……
寶龜十己年
……鎮座
ヲ奉祠産砂
大明神也……
……所謂當
社三神ト申
事ハ中ハ大
山祇命左ハ
鹽土翁右ハ
神女龍女ト
申傳也』云
々とあり。



縣社宇夫階神社

粟島神社(少名毘古那神)

(二八) 神石神社 宇多津町字網ノ浦

祭神 大物主命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社。一説に、金刀

比羅大神海上より大龜に乗りて此の地に上陸し給ひ、象頭
山に鎮座し給ふ。而して其の大龜化して石と成る、當社の
石即ちそれなり。故に龜石大神と云ひ傳ふと云へり。

祭日 七月十七日 主要なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 七十三坪 崇敬者人員 百三十一人

(二九) 惣社神社 宇多津町字網ノ浦

祭神 天御中主大神

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 六月十六日 主要なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十四坪 崇敬者人員 七百三十人

一説には大同元年津野郷の長者末包和直なる者(藤原鎌足
四世の孫、左京大夫藤原の孫といふ)大己貴神の神託を蒙
りて創祀。同二年現今の地に遷座すとも云へり。
明治五年十月郷社に列せられ、同二十七年六月縣社に昇格
す。明治四十年三月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せ
らる。(三代物語 全讃史 古名勝圖繪 讚州府志 玉藻
集 官社考證附録 生駒分限帳)
例祭日 十月二十二日
主要なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫 社務所 祭器倉
庫 社宅 神馬舎
寶物 龜山天皇勅額、棟札、繪馬、戦利品等三十一點
境内坪數 二千百十七坪
氏子區域及戸數 宇多津町 千三百五十戸
境内神社 住吉神社(大己貴命)
山王神社(大山祇命) 金刀比羅宮(大物主命)
貴船神社(罔象女神) 北之宮神社(神直日神)
南之宮神社(大直日神) 春日神社(武甕槌命)
白鳥神社(日本武尊)
鹽竈神社(鹽土老翁大神 經津主大神 武甕槌大神)
合綿津見命 昭和九年宇鹽濱鹽
祀 籠祠社を合祀す。

(三〇) 荒神社 宇多津町字網ノ浦

祭神 大國主命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 六月十六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六十一坪 崇敬者人員 七百二十五人

(三一) 池之宮神社 宇多津町字網ノ浦

祭神 倉稻魂命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 六月十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 三十一坪 崇敬者人員 四百二十六人

(三二) 荒神社 宇多津町字網ノ浦

祭神 天兒屋根命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十八坪 崇敬者人員 九百七十二人

境内坪數 二十八坪 崇敬者人員 四百七十八人

(三六) 荒神社 宇多津町字大門

祭神 豊玉彦命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 九月二十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 八百二十八人

(三七) 春日神社 宇多津町字大門

祭神 天兒屋根命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 六月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二百〇三坪 崇敬者人員 二百四十五人

(三八) 八幡宮 宇多津町字網ノ浦

祭神 應神天皇

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

綾歌郡

(三三) 蛭子神社 宇多津町字網ノ浦

祭神 事代主命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 七月十日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 三十九坪 崇敬者人員 四百人

(三四) 荒神社 宇多津町字大門

祭神 猿田彦大神

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社。一に森神社と奉稱せらる。

祭日 九月十四日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四十三坪 崇敬者人員 二百十五人

(三五) 杉森神社 宇多津町字大門

祭神 豊玉彦命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 六月十四日 主なる建造物 本殿

祭日 八月十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十六坪 崇敬者人員 二百三十三人

(三九) 八幡宮 宇多津町字中村

祭神 應神天皇

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 九月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百〇三坪 崇敬者人員 百三十二人

(四〇) 平山神社 宇多津町字平山

祭神 木花佐久夜姫命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 五月二十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 八十四坪 崇敬者人員 六百十一人

(四一) 伊勢之宮神社 宇多津町字新町

祭神 天照大御神

合祀祭神 五十猛命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社。 大正四年宇岩横汐神社を合祀す。

祭日 九月一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六十一坪 崇敬者人員 四百三人

(四三) 蛭子神社 宇多津町字鹽濱

祭神 事代主命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 七月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二百十九坪 崇敬者人員 三百四十五人

三林田村

(四三) 郷總社神社 林田村字總社

祭神 伊弉諾尊 伊弉冉尊 國中大小神祇

合祀祭神 倉稻魂神

林田村ニアリ往昔神代ニ垂跡シ給フ由、其年歴ハ不知靈驗

新ニマシマシ故古來ヨリ村ノ氏神ニ崇メ惣社ト號ス……

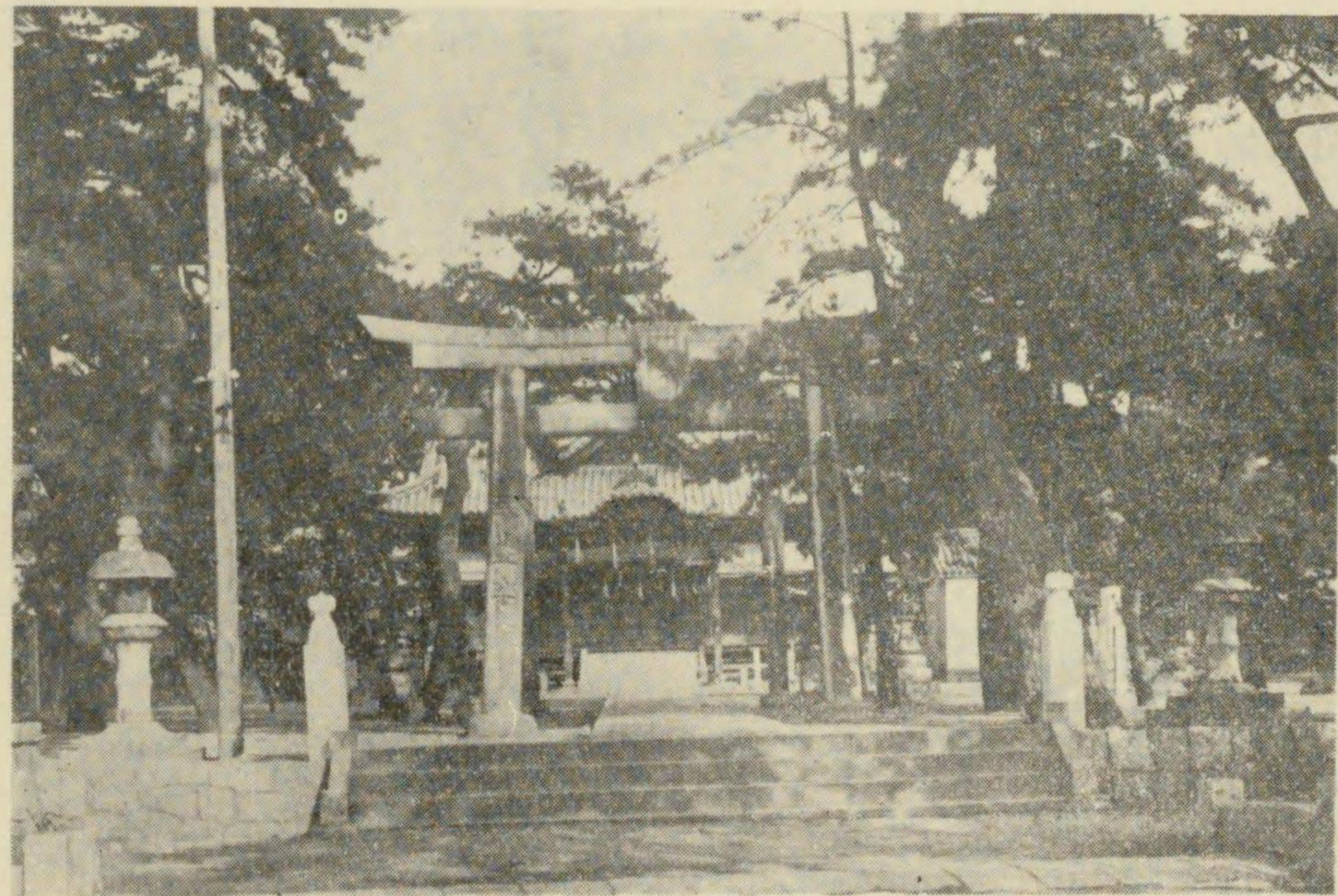
昔ハ大社ニテ伽藍モ美麗ナリシニ、嘉慶年中ノ兵亂ノ節
回録セシヨシ云々とあり。嘉慶年間社殿悉く焼失せしを
細川武藏守頼之明德元年再建す。天文二十年三好家の一族
によりて再興あり。以來復當國總社として繁榮ありしに、
天正年中兵火に罹り社殿烏有に歸す。慶長二年新殿を營み、
元祿十五年明治三十五年の改築を経て今日に及べり。

社傳によれば、崇徳上皇當村松ヶ浦倉敷川に御着船の時一
老翁上皇を迎へ綾高遠の館へ導き給ふ。これ當社社人なり
とも總社の神なりとも云へり。而して當社に上皇の勅額と
云ふがありて「惣社大明神」の書は上皇の宸筆にして御親ら
御奉納あらせられたりと傳ふ。高松藩祖松平頼重崇敬厚く
社號扁額及び紋章附太刀二口を寄進し、社家富家氏第二十
代刑部をして惣社大明神主たらしむ。富家氏其の先は藤
原頼長に出で、今に至る三十一代に及ぶといふ。

明治五年八月郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌
幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 古名勝圖繪 生
駒記 讃岐國舊事記 綾北問尋抄)

明治四十一年宇中川原神社を合祀す。

由緒 舊記によれば、天平九年(紀元一三九七)聖武天皇
勅して諸國に國分寺、法華寺、一宮、總社等を建立せしめ
給ふや、時の



當國々司從四位下大神朝臣
豐島詔を奉じ
當社に國中大
郷 小の神祇を配
社 祀して讃岐國
總社と定め、
社 爾來總社明神
社 と奉稱せられ
社 每歲國司の奉
幣ありたり。
蓋し當社は天
平以前既に大
社にして鎮座
地は府中を去

ること僅かに一里、國司奉幣の爲め參拜至便の地なりしを
以てなり。生駒記に『惣社林田村崇三氏神……右北條郡

例祭日 十月九日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神輿庫

寶物 勅額 崇徳天皇御宸筆並 神鏡一面

境内坪數 四千三百七十坪

氏子區域及戸數 林田村字上林田 中川原 港 總社 濱東

濱中 濱西 七百二十二戸

境内神社 御祖神社(天照皇大神)

豊受神社(豊受大神) 金刀比羅神社(大物主神)

松内神社(倉稻魂神 蛭子大神 合祀代主神) 初め境外にあ
十二年移轉して境内神社となす。祭神蛭子大神は古く瀬居島の
東北大瀬島に鎮座ありしが、享保年間當領と鹽飽領との間に漁
業境界に付き争論ありし節松内神社へ合祀せしものにして其の
後も漁民の崇敬厚し。明治四十三年宇州鼻前倉稻魂神社、宇番
屋前事代主神社、字濱事代主神社を合祀、
同四十四年宇上林田上林神社を合祀す。

(四四) 嚴島神社 林田村字馬場北

祭神 市杵島姫命

由緒 林田村郷社總社神社境外末社。 文永年間の創祀と

いふ。淵の中に社殿あり、初め辯才天と稱せらる。生駒記

總社の條に『末社トテ鳥居ノ外ニ一群ノ松林有り、辨在天

ト云フ……右松林ノ側ニ淵有之、水湛ヘタリ、若クハ岡

象女命ヲ崇メ奉ルヲ女躰ト水トニ心ヲ付ケ辨才天ト申傳フ
「ルニヤ」と見ゆ。

祭日 十月八日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百四十四坪 崇敬者人員 二千〇五十三人

(四五) 廣瀬神社 林田村字濱(西濱)

祭神 若宇加賣神

由緒 林田村郷社總社社境外末社

祭日 十一月十三日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 百四十五坪 崇敬者人員 二千〇五十三人

(四六) 八幡神社 林田村字中川

祭神 應神天皇

由緒 林田村郷社總社社境外末社。天正年中長曾我部

元親當國に侵入の節、當地の豪族猪熊某之に従はず、城を
構へて戦ひしが利あらずして敗死す。このこと現存の碑文
に残れり。當社は猪熊八幡と稱し、右猪熊氏の鎮守神たり
しと傳へられ、今に至るも同氏一族祭祀を司れり。

祭日 八月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 百五十人

(四七) 村總倉神社 林田村字西梶

祭神 須佐

之男命

合祀祭神

倉稻魂神

市杵島姫

命

由緒 傳ふ

る所によれ

ば、神代の

昔須佐之男

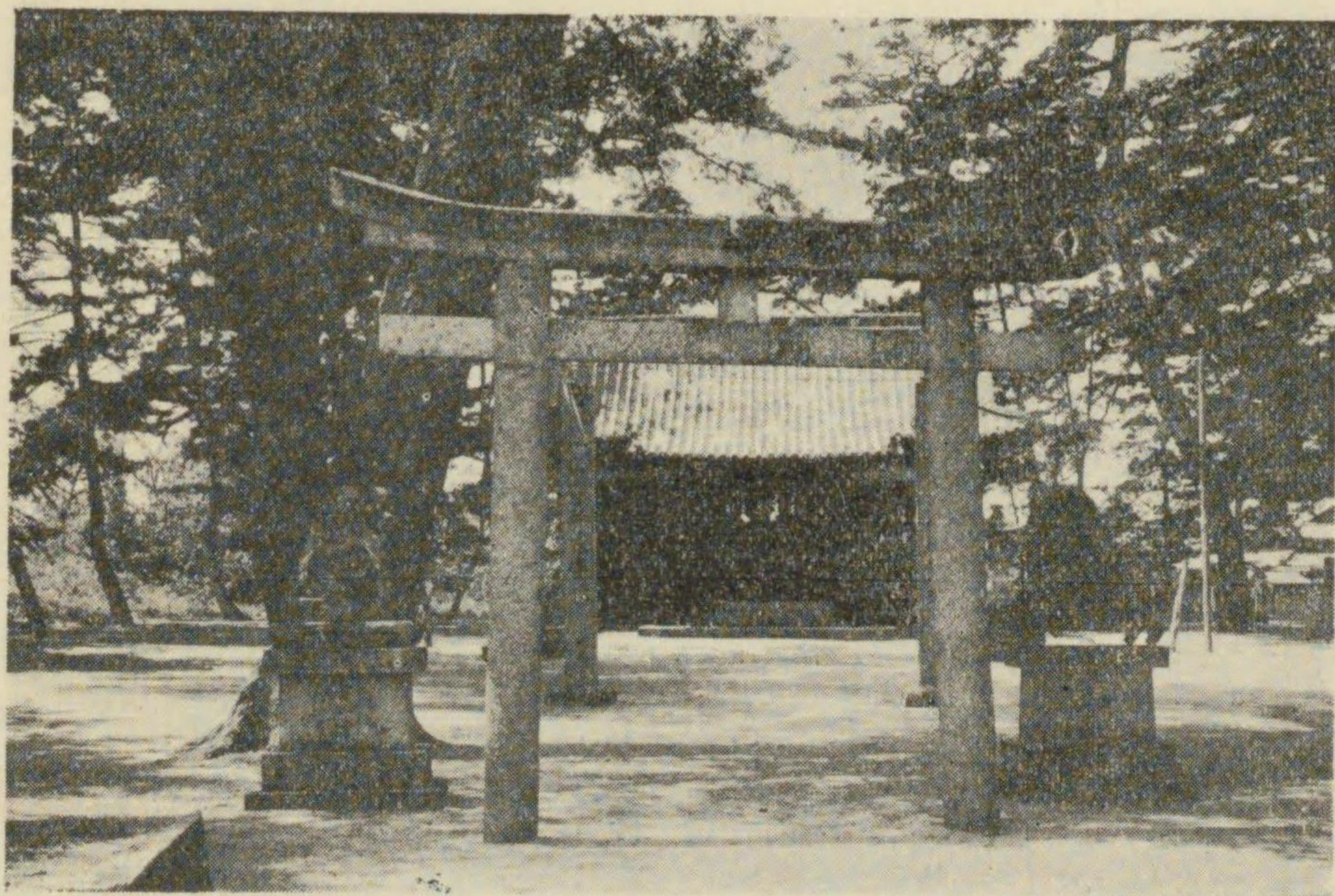
命御船に乗

らせ給ひ南

海道御巡狩

の時此の地

に泊らせ給



村總倉神社

境内坪數 七百六十四坪

氏子區域及戸數 林田村字西梶 東梶 新開 三百二十四戸

(四八) 八坂神社 林田村字新開

祭神 稻田姫命

由緒 林田村村社總倉神社境外末社。傳ふる所によれば

昔此の地に篤信の者あり、備後國鞆の祇園宮を崇敬して毎
歳參詣せり。老年に及び爾後參拜出來難きを憂へ神前の小
石を求め此の地に祠を立て其の石を御靈代として祀れり。
其の石靈異あり、日を経て次第に大となる。里人等畏敬し
相次ぎて崇敬すといふ。

祇園執行記に『文永年中……讚岐國林田郷潮入新開』と
あるは、縁故あるが如し。

祭日 六月十四日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 千百八十坪 崇敬者人員 千人

(四九) 西梶神社 林田村字西梶

祭神 倉稻魂神

由緒 林田村村社總倉神社境外末社

ひし舊跡なるを以て祠を建て奉祀すといふ。或は神功皇后

三韓御征伐の御途次颶風ありて此の地に御舟を繋がしめ給
ふ時、諸神御舟を守護し給ひし中に、揖取の明神は左揖に
立ち、牛頭天王は右に立ち給へり、左右を東西に准じて地
名を東揖・西揖と云ひ、西揖に牛頭天王を祀る、これ當社
なりとも云へり。後に國府廳定められ、當國の正税貢物の

諸品國府に聚るや、此の地は國府に近く海陸の利便良好な
るにより官倉を建て正税雜穀等總てを貯置す。故に官倉を
總倉と號し、當社を以て其の鎮守神となせり。總倉牛頭天
皇の稱は茲より起れりと。仁壽元年社人惣五太夫再興す。

或説に當地藥師院所藏の金口の銘に『明徳元年庚午十一月
日、讚岐國北條郡林田村梶取惣藏天皇』とあるより國史現
在社たる梶州神は當社に縁由あるべしといへり。明治五年
八月村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供
進神社に指定せらる。(讚州府志 今名勝圖繪 官社考證
附録)

明治四十三年 字野川向神社、字城東揖神社を合祀す。

例祭日 十月九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

寶物 鏡一點

主なる建造物 中殿 拜殿 境内坪數 三十九坪
崇敬者人員 六十人

四松山村

(五〇) 郷神谷神社 松山村大字神谷字川南

祭神 奥津彦命 奥津姫命(一に曰 奥津彦命 奥津姫命 須勢理姫命)

相殿 天兒屋根命 武甕槌命 齋主命 比賣神
合祀祭神 保食神 水波女神 大山祇神 倉稻魂神 素盞

鳴命

由緒 延喜神名式に『讃岐國阿野郡小神谷神社』とありて延喜式内當國二十四社の一なり。三代實錄に『貞觀七年冬十月九日丁巳讃岐國從五位下神谷神授從五位上』同十七年五月廿七日戊申授讃岐國從五位上神谷天神正五位下』と載せられたり。

祭神は上代に屬するを以て詳ならず。弘仁三年(紀元一四七二)阿刀宿禰大足社殿を造營せしよりいよく世に現れ

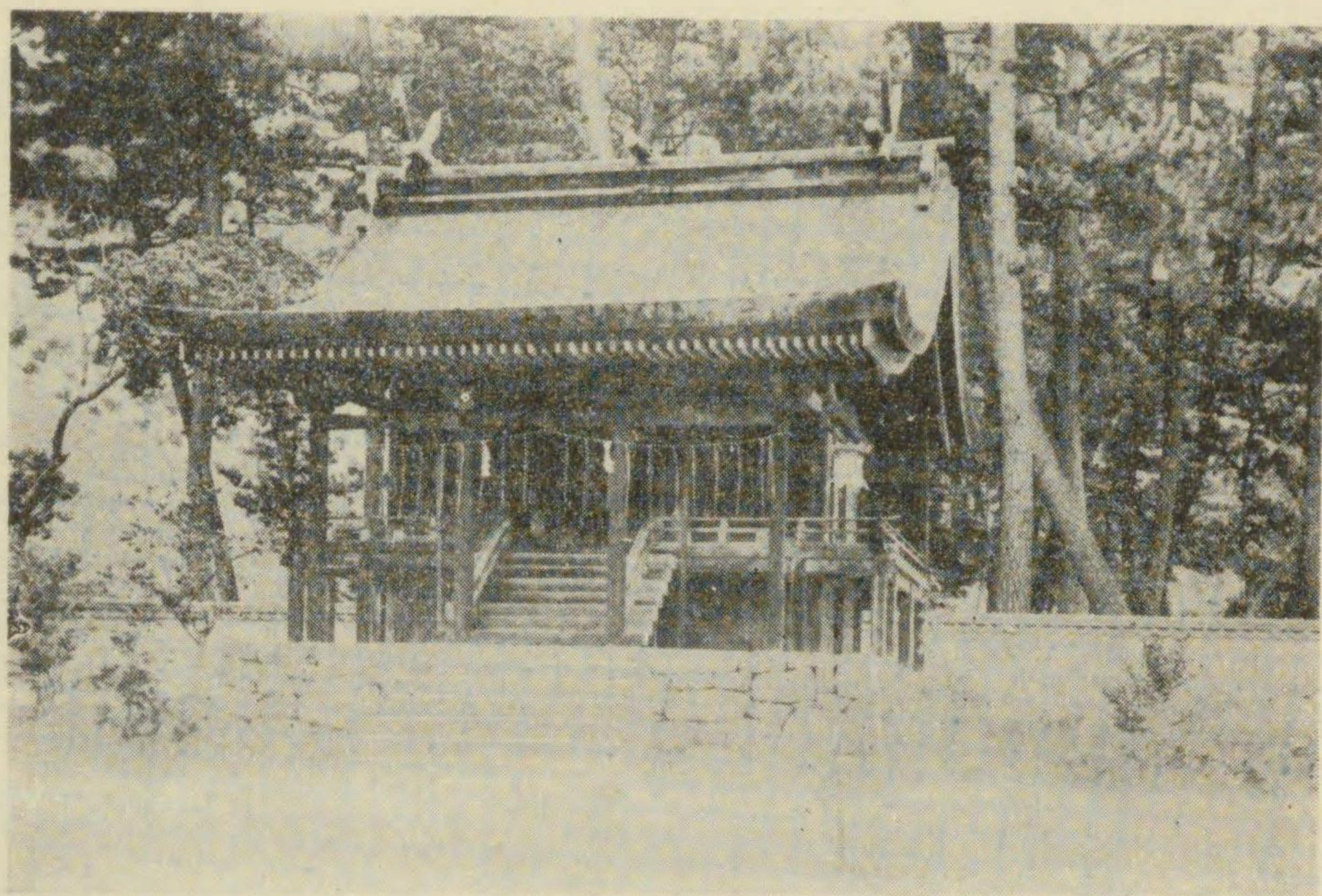
ものにして、大般若經六百卷は國家國土に關する祈願の節誦まれしものと云ふ。社地近傍又多くの石斧、石簇を出土せり。

武門武士の崇敬厚く、國主細川氏社殿を修し祭田をも寄進せりと傳へられ、細川清氏奉納の扁額今猶存す。明應五年二月廿二日「神谷社法樂」なる連歌一卷の奉納せられたるありて、連歌發生初期のものにして貴重なる參考資料たり。現今の本殿は、明治三十七年八月特別保護建造物と定められ、大正八年修理の際化粧棟に『建保七年二月十日始レ之』と記されたるを發見せり。實に今より約七百二十年前のものにして、様式は鎌倉時代にして足利時代修補せられたる箇所あり。以て兩時代の建築を比較し得べく、勾欄懸魚の彫刻亦後世の範たるべし。昭和四年三月拜殿、神饌所參集殿等を改築又は新築す。昭和九年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(生駒記 讚陽記 綾北問尋抄 全讚史 古名勝圖繪 官社考證 讚岐國二十四社考 特選神名牒)
大正九年南字川南山神社・池ノ宮社、字中田井神社、字東中原神社・北原神社を合祀す。

例祭日 十月二十二日

て官社に列せられ、神階亦度々の授位ありて永祿十一年の棟札には正一位神谷大明神と記されたり。後世に至り春日



大明神を相殿に奉齋せしに
より土人五社
大明神と稱へ
奉る。一説に
往古より清瀧
の社あり弘仁
年中春日四所
を勸請し合せ
て五社とすと
云ひ、往古よ
り大社にして
寶塔殿宇宏壯
なりしとい
ふ。高松藩家
老木村黙老の

開儘記に『神谷神社元大社也三ヶ庄惣氏神』とあり。社藏寶物中の古面、古鼓、瓊、銚、辛櫃等は國司班幣の節使用せし

特殊神事

北條念佛、早天の際之を行ふ。先づ當社に於て初めて念佛踊を爲し、後村内各社を廻りて瀧宮天満宮に至る。又百々の祭あり。

主なる建造物

本殿(特別保護建造物) 拜殿 神饌殿 參集殿 廻廊 祝門

寶物

縁起書一點 連歌卷物明應五年一點 棟札十一點 扁額 武器等六點

境内坪數 六百六十坪

氏子區域及戸數 大字神谷 百〇三戸

(五一) 御前神社

松山村大字神谷字川南

祭神

猿田彦神

由緒 松山村郷社神谷神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二十四坪

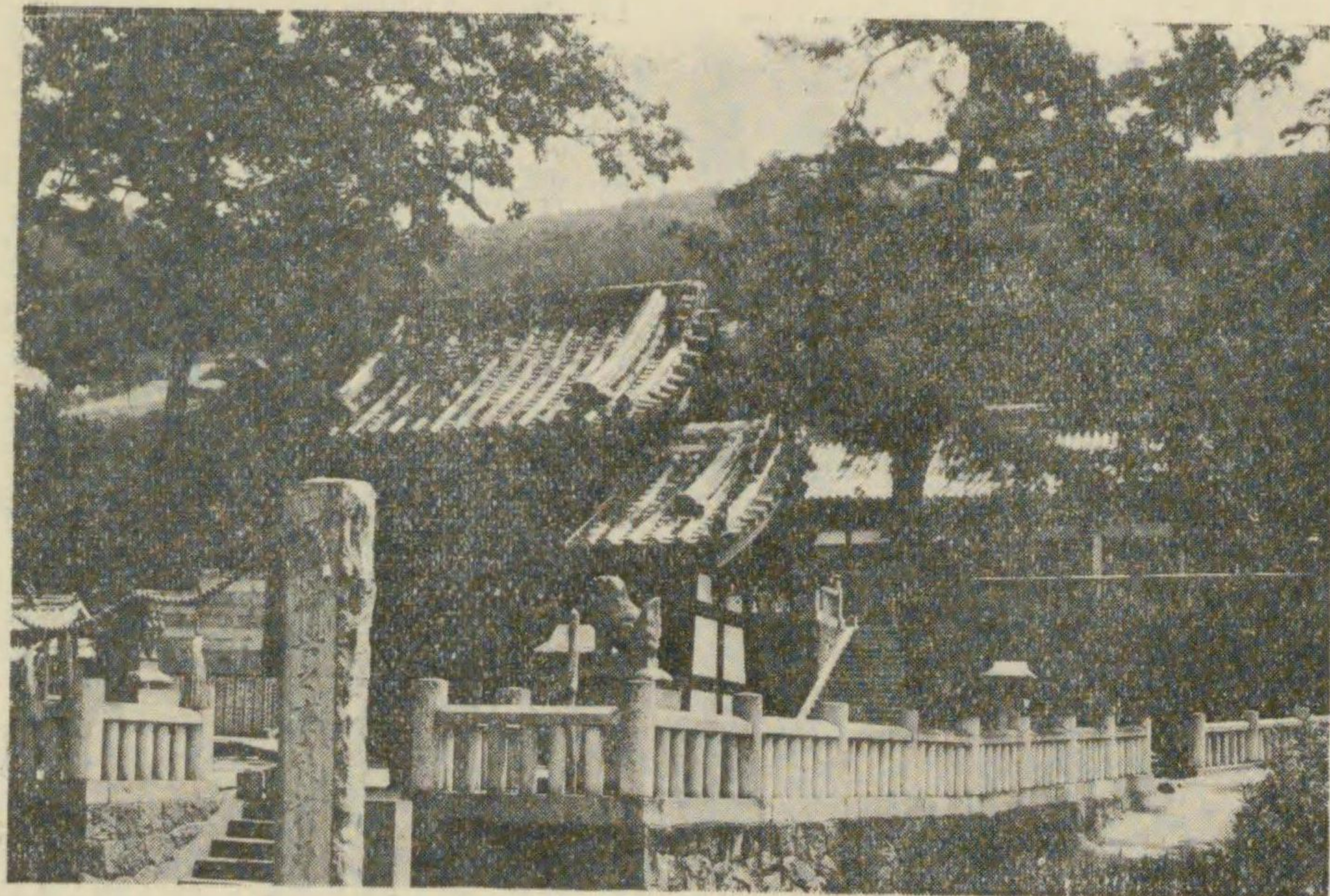
崇敬者人員 四百四十五人

(五二) 村高家神社

松山村大字高屋字揚北

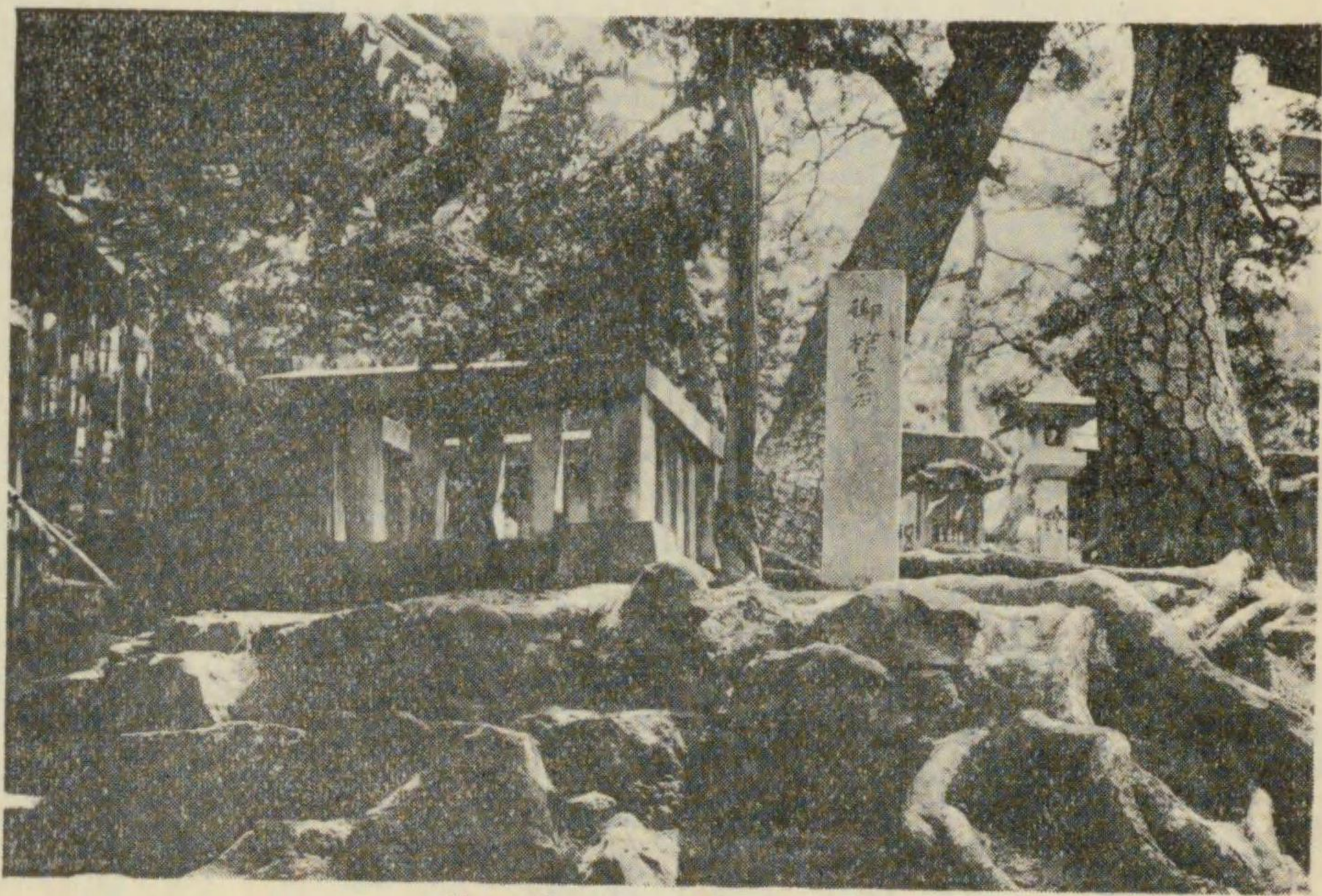
祭神 天道根神 崇徳天皇 待賢門院

合祀祭神 大鞆和氣尊 息長足姬尊 天照皇大神 大己貴神 埴山比賣神 少彦名神 倉稻魂神 大山祇神 木華咲屋姫命 伊弉那伎命 伊弉那美命 豐受大神 由緒 往古高家首の一族此の地に居住し、其の遠祖天道根



村高社家神

命を奉齋して氏神となせるものにして、一に森の宮とも奉稱せらる。三代實錄に『貞觀九年五月十七日乙卯授讚岐國正六位上高家神從五位下』とあるは當社なりと云ふ。又崇徳天皇は保元元年當國に御還幸あり



村高社家神

長寛二年八月二十六日鼓が岡にて崩御あらせられ、同年九月十六日白峰にて御葬祭奉仕の途次高屋村阿氣の地にその御棺を休め奉りしに、俄に風雨雷鳴あり、天晴れて御棺を擔ひ登せ奉れり。御葬祭の後村民畏みて天皇の神靈を當社合殿に奉齋し、又御棺を休め奉りし臺石をも社内に納めたり。爾來俗に崇徳天皇血の宮と稱へらる。又御馬の鞍骨は當社重寶として今に傳はれり。應仁年間管領細川勝元屢々戰勝を祈りて奉幣あり。天正十

(五三) 松井神社

松山村大字高屋字揚南

祭神 水波女神 健御加豆知神 伊波比主神 天兒屋根神 比賣大神

九年國主生駒雅樂頭近規亦厚く崇敬して高屋村一村の産土神と定めたり。長寛二年、天和二年、元祿八年、寶永三年、正徳三年、明和三年、寛政十二年、文政三年の棟札あり。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。大正十一年十一月二十日聖上陛下攝政宮にましまし、時白峰御陵に御參拜の御途次親しく當社に御參拜ありて、郷土踏念佛踊を台覽遊ばされたり。(三代物語 玉藻集 全讚史 官社考證附録 古名勝圖繪 讚州府志) 明治四十三年^{宇東}地神社・東山神社、^{宇雄}雄山八幡神社、^{宇揚}南稻荷神社・豊秋神社、^{宇原}山王神社を合祀す。例祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 隨神門 神輿庫 寶物 鞍骨^{崇徳天皇御用品}一點 棟札八點 神鏡一點 境内坪數 九百三十七坪 氏子區域及戸數 大字高屋 三百二十一戸 境内神社 親王社(重仁親王) 出雲社(大國主神)

祭日 五月十七日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神庫 寶物 棟札七點 神鏡一點 境内坪數 四百八十坪

崇敬者人員 千七百五十人

境内神社 福神社(大那牟遲神 事代主神)

(五四) 鹽竈神社 松山村大字高屋字濱東

祭神 鹽土神 阿遲須伎高彥根神 猿田彦神 奥津比古神

由緒 奥津比女神 齋火武主比神 大那牟遲神 少彥名神

松山村村社高家神社境外攝社。寛平四年(紀元一

五五二)九月松が浦鹽田守護の爲め奥州鹽竈神社の御分靈

を迎へて創祀せし所と傳ふ。延寶八年、元祿六年に鹽田増

設あり。良田となるに及びて築留の神を合殿に奉齋すと云

ふ。寛文八年、元祿十四年、享保七年、寛保四年、天保元

年の棟札あり。(古名勝圖繪 讚州府志)

祭日 十月十一日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神庫 神饌殿 神門

寶物 棟札五點 神鏡一點 境内坪數 三百五十三坪

崇敬者人員 三百七十二人

境内神社 多賀神社(大己貴神 少彥名神)

由加神社(倉稻魂神) 金刀比羅社(大物主神)

日毘神社(八十柱津日神)

云ひ、當社を大藪浦大明神と稱すと云ふ。松浦氏は當地開拓者と傳へられ、子孫今に神人と稱し祭典に關與せり。

大藪神社由來に『嚴島大明神奉勸請者淳和天皇天長六己酉年天下疫病波屋利天民死事不知數依然國君命奉請福家藤進少輔藤原安明初而勸請仕而當國病靜安明者……安清之一子也(春日神社の條參照) 嚴島大明神共又者市杵島姬命共又者美御前奉號神書抄曰痘瘡疹守神也依然美御前』云々とあり。

天正年中長曾我部氏の兵火に罹り社殿神寶烏有に歸す。文祿二年本殿を再建し、寛永八年社殿を再興すと云ふ。元祿七年の棟札あり。昭和八年工を起し、從來南面せし社殿を西面とし、幣殿、拜殿、社務所、其の他を再建新築し同十年竣工す。

大正十一年八月一日村社に列せられ、同年十月十日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 古名勝圖繪)

例祭日 十月十七日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 神輿庫 社務所

廻廊

寶物 棟札元祿七年一點

境内坪數 二千五百十二坪

(五五) 村 嚴島神社 松山村大字青海字谷奥

祭神 市杵

島姫神

由緒 傳ふ

る所によれ

ば、天長二

年(紀元一

四八五)の

創祀にして

里人産土神

として崇敬

し來りしが

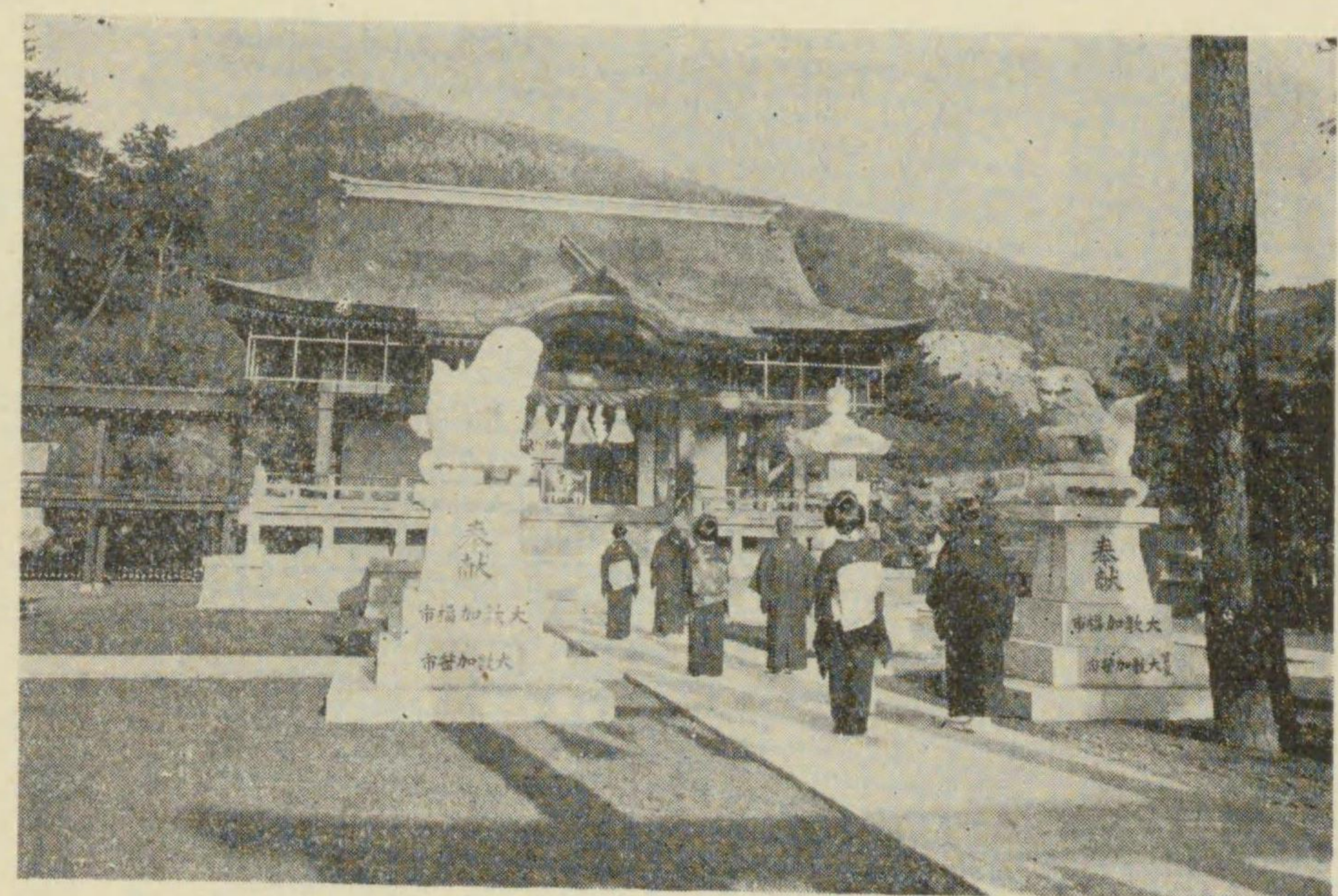
文永年中當

地早魃の際

當村松浦氏

の祖先藝州

嚴島の社頭



村 嚴島神社

より忌竹を持ち歸り雨を祈りしに忽ち豪雨あり。のみならずその竹根を下ろし年毎に繁茂せり。依てこの地を大藪と

氏子區域及戸數 大字青海字大藪 二百三十七戸

(五六) 村 青海神社 松山村大字青海字宮ノ下

祭神 顯仁尊(崇徳天皇) 藤原璋子命(待賢門院)

合祀祭神 田心比女神 大山祇神 水波女神 岐神 大己

貴神 天照大神 少彥名神 應神天皇

由緒 保元の亂後崇徳天皇當國に遷幸あらせられ、長寛二

年八月二十六日鼓が岡に崩御遊ばさる。同年九月十八日戊の刻玉體を白峰山上に茶毘し奉りしが、其の時當地(現社地)へ紫煙降りて、其の中に尊號の文字白く現れ暫時に消失せたる後に一靈玉残り。依て春日神社の祠官福家安明宮殿を造營し天皇の靈を奉齋すと云ふ。依て崇徳天皇煙の宮と奉稱し、里人氏神として崇敬せり。而して右靈玉は天皇御所持の品にして、今も殿内に奉藏せりと。延寶五年の棟札現存す。

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(古名勝圖繪 全讃史 讚陽記 讚州府志 三代物語) 明治四十三年曲字七田德神社、字七志良喜神社、字北喜多山神社、字北八幡神社、築止神社を合祀す。

例祭日 十月十九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿
寶物 木像四軀 棟札 外二點
境内坪數 二千八百六十五坪
氏子區域及戸數 大字青海 三百七十九戸

(五七) 春日神社 松山村大字青海字宮ノ下

祭神 健御賀豆知命 伊波比主命 天兒屋根命 比女大神
由緒 松山村社青海神社境外攝社。大同二年(紀元一四六七)福家安清の創祀と云ふ。當村村社嚴島神社由來記に『景行天皇皇子稻背入彦尊當國造成給御子七人御孫六十三人當遍滿久御子之内福家命子孫内記大輔藤原安清平城天皇御宇青海村春日大明神勸請仕給而當村社主元祖成給』とあり。初め當村字知口といふ所に鎮座ありて知口大明神と稱せられしが、長和四年現在地に遷座し春日大明神と稱す。而して青海神社創立以前までは青海村の氏神として崇敬せられたりと云ふ。(玉藻集 全讚史 今名勝圖繪 讚州府志)
祭日 十月十九日

境内坪數 九十坪 崇敬者人員 約二千人

(六〇) 大藪神社 松山村大字青海字谷

祭神 天照皇大神
由緒 松山村社青海神社境外攝社
祭日 一月十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百九十五坪 崇敬者人員 約千百人

(六一) 向井神社 松山村大字青海字向

祭神 倉稻魂命
由緒 松山村社青海神社境外攝社
祭日 五月十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百十七坪 崇敬者人員 約八百人

(六二) 船玉神社 松山村大字青海字川端

祭神 少童神 猿田彦神
由緒 不詳

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿
寶物 棟札^{大同二年}一點 木像六軀 外二點
境内坪數 千百〇三坪 崇敬者人員 約八百人

(五八) 一本神社 松山村大字青海字鼻

祭神 猿田彦命
由緒 松山村社青海神社境外末社
祭日 陰曆一月七日 四月一日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 二百十一坪
崇敬者人員 約五千人

(五九) 北峯神社 松山村大字青海字北峯(北山)

祭神 水分神
由緒 松山村社青海神社境外攝社。大同年中國內大旱の節、當村福家安清己が邸内に創立して雨を祈る。寛平年間又大旱あり、郡中の民現社地に遷座して祈雨せしに大に靈驗を蒙れり。爾來祭祀意なく當村祈雨の神社となれり。
祭日 陰曆六月一日 主なる建造物 本殿 拜殿

祭日 陰曆八月十二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 六十六坪 崇敬者人員 約千百人

(六三) 地神社 松山村大字青海字須加

祭神 天照皇大神 大己貴命 倉稻魂神 埴山姫神 少彦名神
由緒 昔當地方にオガ虫といふ害蟲蔓延作物を害す。耕民大いに憂へて此處に當社を祀り、虫除けを祈りしに忽ち靈驗あり。以來里人の崇敬篤しといふ。

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 約二千人

(六四) 原山神社 松山村大字神谷字東山

祭神 闇籠神
由緒 不詳
主なる建造物 本殿 境内坪數 四百十坪
崇敬者人員 四百四十五人

五 王越村

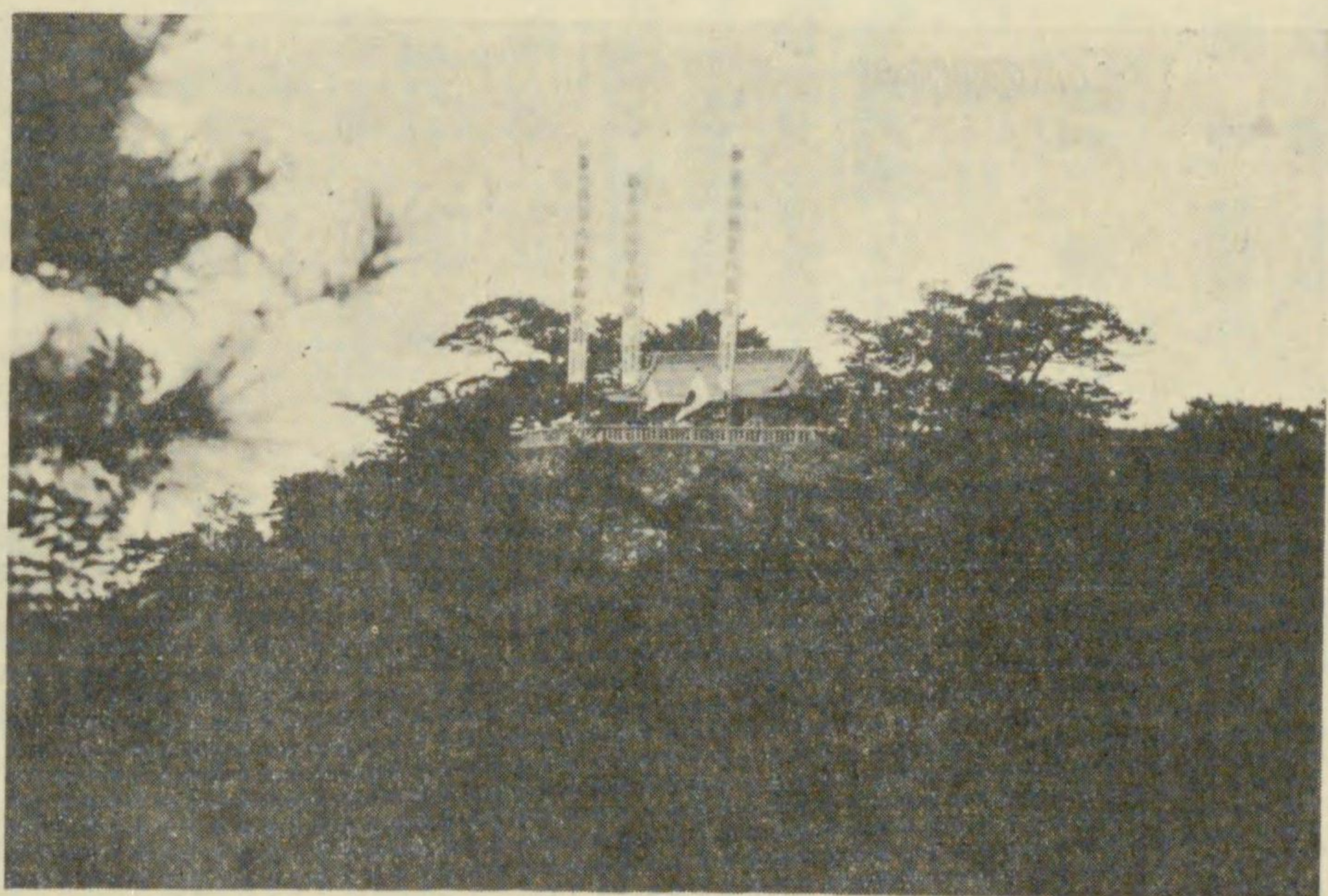
(六五) 社 梅宮八幡神社 王越村大字乃生字大越

祭神 市杵島姫命 足仲彦命 譽田別命 氣長足姫命 武内宿禰命(一に曰 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后 仲姫皇后 武内宿禰命)

由緒 傳ふる所によれば、神功皇后征韓の折、備前牛窓の海中にて牛鬼を討ち、追ひて王越村木澤に御上陸あり、王越山を越えて宮山に登り給ふ。王越の名之に依つて起れり。宮山の地にて天神地祇を祭り、平戎と御安胎を祈らせ給ふ。征韓の事終り、皇子御降誕ありて萬世の邦基を固む。後宮山山上白雲の中に八幡大神御示現ありしを以て祠を建て白雲梅宮八幡宮と稱す。梅宮の梅は産に通ずるを以て産宮を梅宮と申すなりと云へり。

一説に當社梅宮は海宮にて海神を祭れるならむと云ふ。官社考證宇閑神社の條下に、長寛勘文に正五位下海神云々とあるを、若し當國の神社なりとせば梅宮八幡宮の事ならむか、梅と海とよく似たる上に、社殿も海上へつき出たる山

上にあり、玉姫の石船といふもあり云々といへり。神社の東方に神功皇后御休憩の腰掛石と云ふあり。妊婦この石の苔を採りて飲めば必ず平産すと傳ふ。又西北方海岸に玉依姫石船といふもの大小二あり。



社神幡八宮梅社村

社殿の造営は文安六己巳三月願主藤原但馬守資重建立とある記録ありて、それ以前のもは發見せず。其の後延寶六年、元祿十一年、享保十三年の再建、天明八年の拜殿再營、享和三年の幣殿造營ありて、明治五年幣殿、拜

殿を再營す。古くより梅宮と奉稱せられ、産神として里人の崇敬厚く、又高松藩主松平頼常その臣菊池武雅をして縁起書を書かして奉納せられたるもの傳へて今に存す。

明治五年村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讚史 綾北問尋抄 玉藻集 古名勝圖繪 官社考證 讚州府志)

例祭日 十月二日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神庫 隨神門

寶物 縁起書一點 棟札六點 其他武器等二十餘點

境内坪數 一萬二千八百六十四坪

氏子區域及戸數 大字乃生 三百五戸

境内神社 玉依神社(玉依姫命) 白峰宮社(崇徳天皇)

産神社(神功皇后 木花咲屋姫命) 寛政九年三月香川郡園座村遠藤實宗の婦難産のとき梅宮八幡宮に祈りて平産せり。實宗大に喜び同年十二月十五日一祠を境内に建つ。即ち當社なり。此の祠始め正南に向けて建立せしが一夜の間に自ら東南に向きたり。東南は實宗が家に當る。依て神威を畏み今に社殿と基石と方位を異にせり。

(六六) 惠美須神社 王越村大字乃生字西脇

祭神 事代主命

由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外攝社。寛保二年(紀

綾歌郡

元二四〇二)の創祀に係る。享保十七年春鹽飽島と高松藩との間に阿野郡沖合に於て漁場境界の争ひあり。幕府の裁決を請ひしに遂に高松藩の勝訴となれり。依て同海面及び漁民の爲め寛保二年高松藩の臣間宮武右衛門之を監し福家安信等をして創立せしむといふ。(古名勝圖繪 香川縣史 補遺)

祭日 陰曆八月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二十一坪 崇敬者人員 約百十人

(六七) 八坂神社 王越村大字乃生字焼山

祭神 素盞鳴尊 櫛稻田姫命

由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社

祭日 陰曆六月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二百十坪 崇敬者人員 約千五百人

境内神社 愛宕神社(火産靈神) 倉稻神社(倉稻魂命)

(六八) 稻荷神社 王越村大字乃生字東分

祭神 倉稻魂命

由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社
祭日 陰曆八月八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五十三坪 崇敬者人員 約三百人

(六九) 船魂神社 王越村大字乃生字濱分

祭神 鹽筒翁命 上筒男命(一に曰 上筒男命 猿田彦命)
由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社
祭日 陰曆八月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十二坪 崇敬者人員 二十八人

(七〇) 龍王神社 王越村大字乃生字飛地(大戸)

祭神 水分神 高靈神 闇靈神
由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社
祭日 陰曆六月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約百五十人

(七一) 西分神社 王越村大字乃生字濱田

祭神 天御中主尊 武甕槌命 思兼命

由緒 口碑によれば、仲哀天皇、神功皇后と共に征西の途
此の木澤浦に軍船を泊し、現社地に至りて天神地祇を祭り、
殊に天照大神を招請し
賊徒征服海
上平安を祈
り給ふ。里
人その址を
繼ぎ日天大
明神と稱し
て奉齋し來
れりと傳へ
らる。天和
三年再建の
棟札あり。
天保年間社
殿炎上せし
を以て同九
年三月現幣殿及び拜殿を、同十二年五月本殿を造營す。古
くより木澤村の産土神たり。明治初年喜佐波神社と改稱



村社喜佐波神社

由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社
祭日 陰曆九月八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百十坪 崇敬者人員 約三百人

(七二) 山祇神社 王越村大字乃生字燒山

祭神 大山祇命
由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社
祭日 陰曆九月六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十八坪 崇敬者人員 約四百六十人

(七三) 大奎神社 王越村大字乃生字寺山

祭神 大己貴命 猿田彦命 大山祇命
由緒 王越村村社梅宮八幡神社境外末社
祭日 陰曆九月二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十七坪 崇敬者人員 約百人

(七四) 村喜佐波神社 王越村大字木澤字大越

祭神 天照皇大神 伊弉諾尊 伊弉册尊

し、同五年村社に列せられ、明治四十年十月二十四日神饌
幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 玉藻集 古名勝圖
繪 讃州府志 三代物語)

例祭日 十月九日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神庫 隨神門
寶物 棟札二點 縁起書一點 外六點
境内坪數 七百五十五坪
氏子區域及戸數 大字木澤 二百二十五戸
境内神社 八坂神社(素盞鳴尊 櫛稻田姫命)
山祇神社(大山祇命)

(七五) 鹽竈神社 王越村大字木澤字大越

祭神 鹽土老翁命 阿遲須伎高彥根命
由緒 王越村村社喜佐波神社境外攝社。寶曆八年(紀元
二四一八)九月當地鎮護の爲め、藩主松平氏の命により神
官福家安貴創祀す。時に奉行飯野左兵衛許謀、郷吟味人眞
部嘉兵衛忠勝、同柴野彌右衛門方叔、普請奉行國方市郎右
衛門宣武奉仕せり。文化二年九月拜殿造營、同十年幣殿建
立、明治二十五年舊五月現在の本殿を造營す。

祭日 十月十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百六十一坪 崇敬者人員 百人

(七六) 稻荷神社 王越村大字木澤字神木

祭神 倉稻魂命

由緒 王越村村社喜佐波神社境外末社

祭日 八月八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 八坪 崇敬者人員 六十五人

(七七) 山祇神社 王越村大字木澤字大越

祭神 大山祇命

由緒 王越村村社喜佐波神社境外末社

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四坪 崇敬者人員 五十人

(七八) 身崎神社 王越村大字木澤字仁尾

祭神 天御中主尊

由緒 王越村村社喜佐波神社境外末社

祭日 陰曆九月十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百二十坪 崇敬者人員 六十五人

六加茂村

(八二) 村八銚神社 加茂村大字氏部字松縁

祭神 須佐之男命

由緒 傳ふる所によれば、往昔此の地に傳法院といふ佛寺あり。大同二年二月中旬、住僧出で、月を眺めしに、虚空より庭前の樹木に白幣一本銚一振(一説八振)天降れり。即ち祭りて鎮守神となす。其の後度々の兵亂に回録し寺は退轉せしかど、鎮守の宮は残り郷人敬ひて氏神とすと云ふ。全讃史に『里人云菅氏部里人與加茂里人爭、席是以奪、加茂大明神銚而歸立祠奉之、以爲社因曰銚宮也』とあり。銚大明神と奉稱せられたり。

明治十二年八月村社に列せらる。(綾北間尋抄 三代物語 全讃史 今名勝圖繪)

綾歌郡

由緒 王越村村社喜佐波神社境外末社
祭日 陰曆九月十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十三坪 崇敬者人員 約二百人

(七九) 天満神社 王越村大字木澤字岩之内

祭神 菅原道真公

由緒 王越村村社喜佐波神社境外末社

祭日 陰曆八月二十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約千百人

(八〇) 倉稻神社 王越村大字木澤字番屋

祭神 倉稻魂命

由緒 王越村村社喜佐波神社境外末社

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二百三十八坪 崇敬者人員 約百人

(八一) 青木神社 王越村大字木澤字玉川

祭神 素盞鳴尊 五十猛命

例祭日 十月二十四日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神輿庫

境内坪數 三

百六十三坪

氏子區域及戸

數 大字氏部

百二十戸

境内神社

春日神社

(天兒屋根

命 武甕

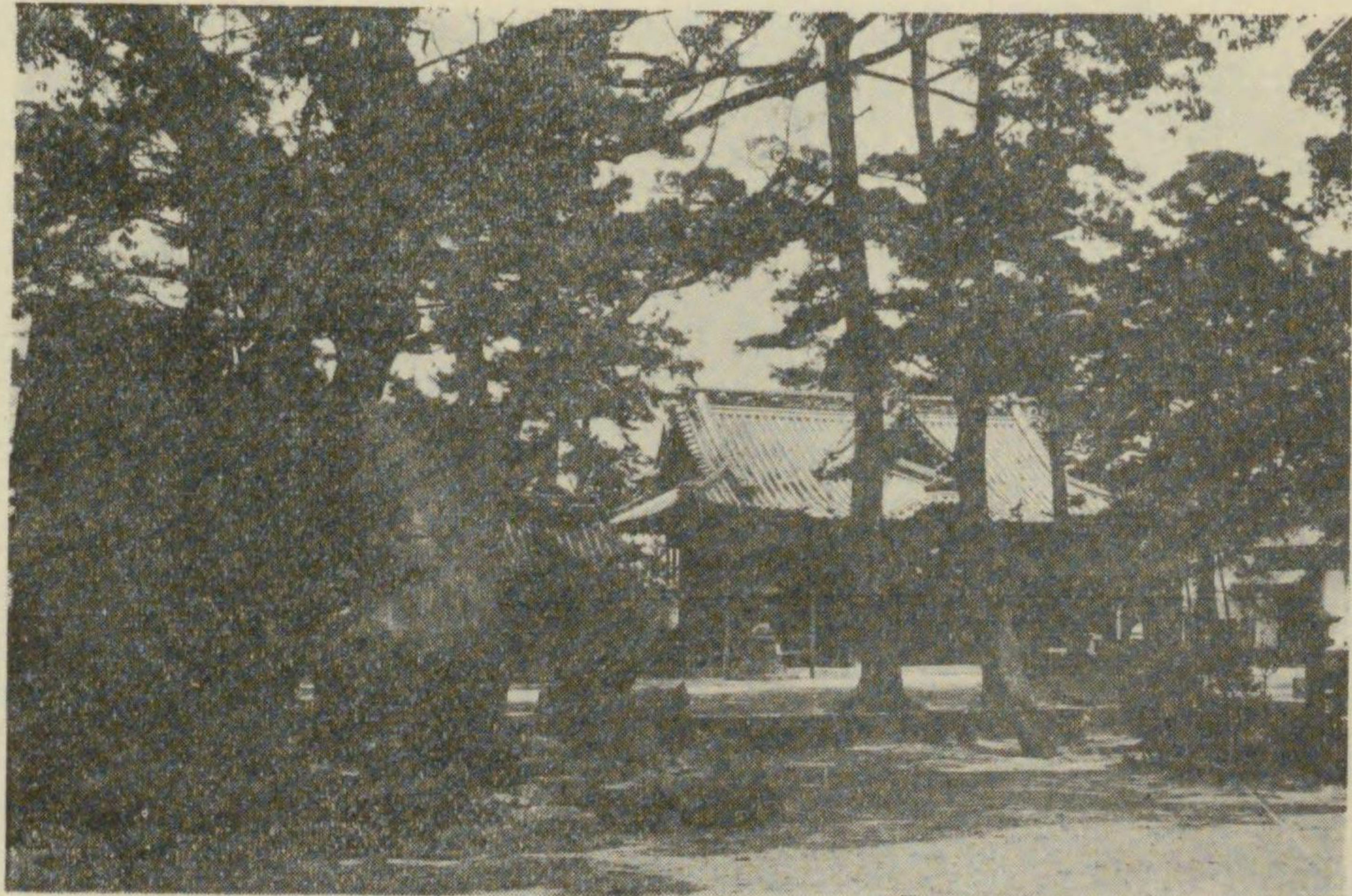
槌命 齋

主命 比

賣命 合

倉稻魂命)

明治四十一年字志
福寺荒神
社、字松
縁幸神社
を合祀す



村八銚神社

富部神社(大國主命) 明治十四年創立。
幸神社(大國主命)



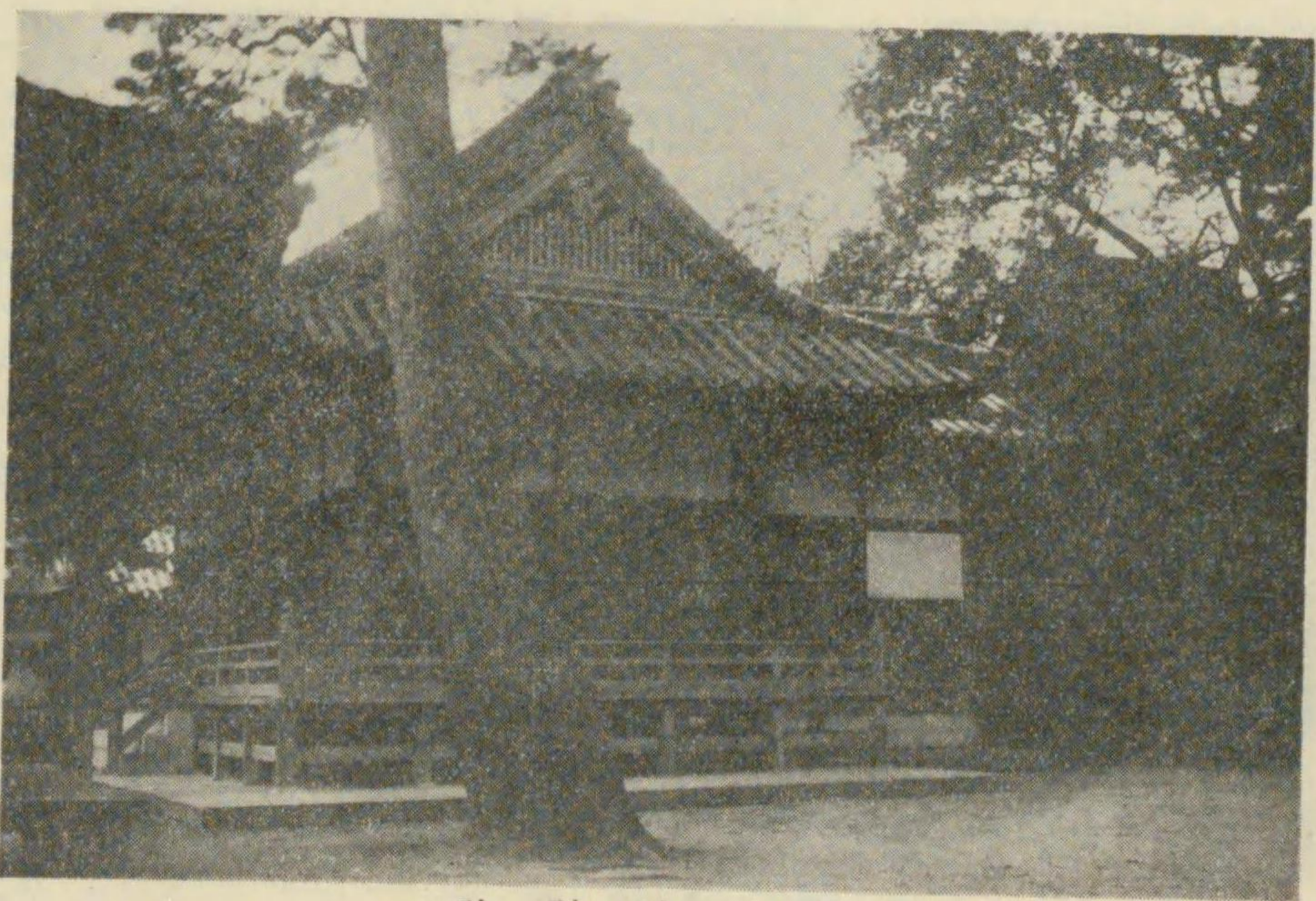
(八三) 村鴨神社 加茂村大字鴨字井手西

祭神 別雷命

由緒 當村字井手東鎮座村社鴨神社に於けると同じく延喜式内社なりと稱せらる。(延喜神名式に讃岐國阿野部小鴨神社とあり)三代實錄に『貞觀七年冬十月九日丁巳讃岐國從五位下賀茂神授從五位上、同十七年五月廿七日戊申授讃岐國從五位上賀茂天神正五位下』と載せられたるは當社なりと云ふ。三代物語、全讃史、生駒記等當社を以て式内とす。

天平四年(紀元一三九二)八月二十五日の肇祀にして當時僧行基、聖武天皇の勅を奉じ、國分寺、甲智寺、法華寺を建立の爲め當地に來る。當時この地雷雨洪水頻年にして里民甚だ苦しめり。行基即ち時の國司藤原景隆に勸めて賀茂別雷神を祀らしむ。景隆即ち帝都に奏し官許を得て之を祀る。而して景隆奉幣使の宣下を蒙り、已來鴨村に居住して代々當社に奉仕し來れりと傳ふ。林田村の豪家たりし宮武氏はその裔孫にして、同家舊記によれば、景隆當社を勸請して奉幣使の宣下を蒙り、以來子孫鴨郷に居り姓を入江と稱し、後宮脇と改め、更に又宮武と改む。代々當社に奉仕

し寛文年間には官家と稱せられたり。社殿造營は概ね同家の營む所にして長曆三年景隆の裔入江民部景輝京師に奏し



村鴨神社

て社殿を再興し、天正年間兵火に燼せしを以て同十二年藤原景安再營し、慶長六年、同十二年の修築を経て元祿五年宮武景秀の再建あり。爾來社頭の營繕は宮武氏之を行へり。當社は創立當時より鴨氏部二郷の總鎮守たりしを以て俗に鴨の大守の稱あり。國司里人の崇敬厚く、年中五度祭の神事は國司任國の際の遺風なりと。又

像を作りて鴨神社境内に社を建て奉齋すと云ふ。

境内祖靈社(入江大炊助景隆之靈) 宮武氏の祖なり。

(八四) 村松尾神社

加茂村大字鴨字杉尾

祭神

大山咋命

合祀祭神

倉稻魂神

由緒 貞享

三年再興の

棟札あり。

口碑の傳ふ

る所によれ

ば、往古當

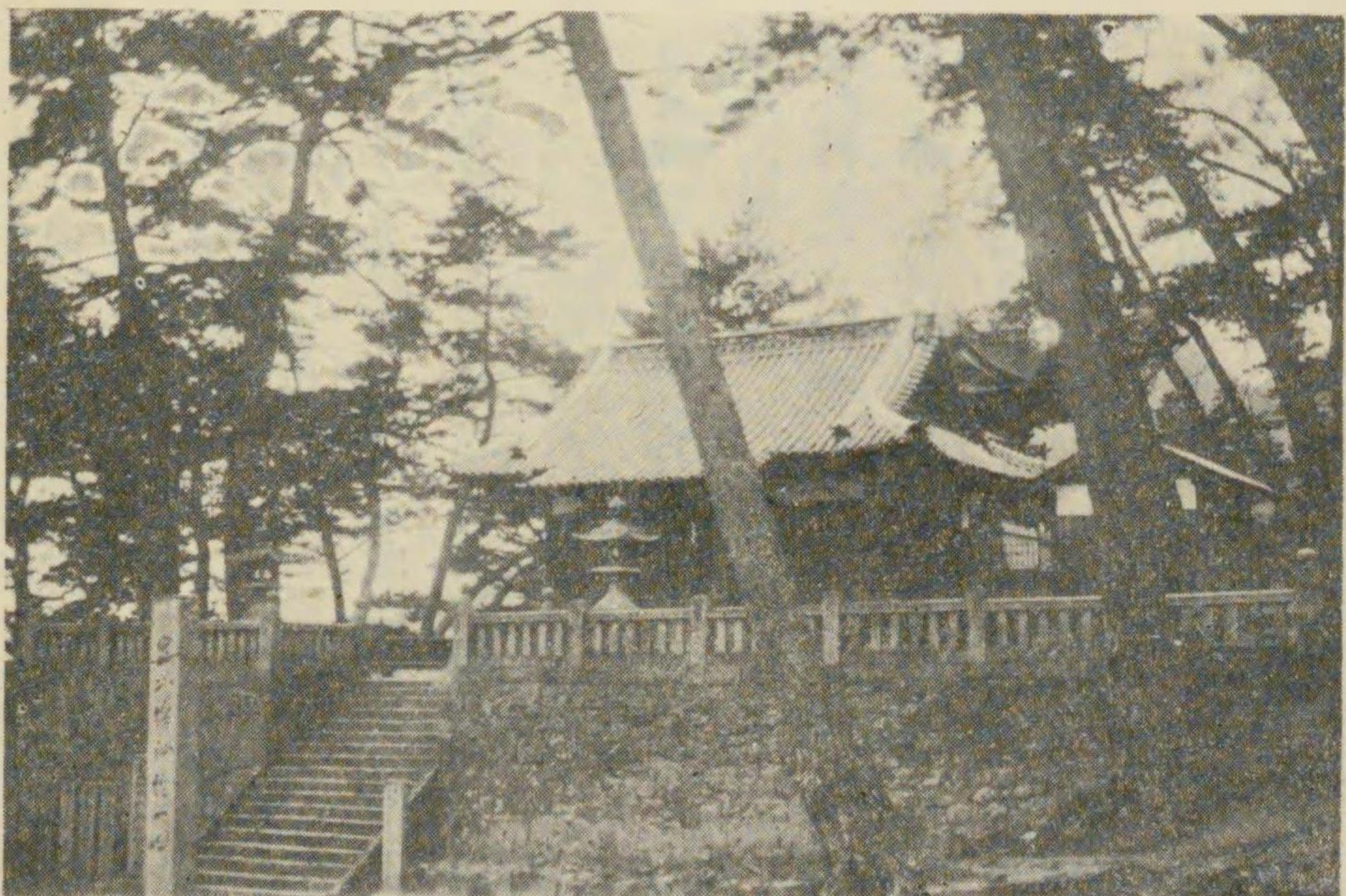
地未開の原

野なりし時

現社地の西

北包末とい

ふ地に半四



村松尾神社

別當甲智寺及び供僧十ヶ寺ありしが、應永以降衰退して供僧鴨箭院のみ残りて別當となり明治維新に至れり。

明治五年八月村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讃史 生駒記 今名勝圖繪 讃州府志 官社考證)

例祭日 十月二十四日

特殊神事 年中五度祭

往昔國司赴任の際國中の官社を當社に合祭して神供三十七膳(古くは七十五膳)を供す。五度祭はその遺風なり。神供は神人入江氏之を整へ、他の者に與るを得ず。祭日は毎歲一月一日、一月八日、二月二十四日、六月二十四日、十月二十四日にして、神饌を傳供する者は木葉を口に含み一膳を授受する毎に二拍手するを例とす。

主なる建造物

本殿 中殿 拜殿 神饌所 社務所 神輿庫

寶物 棟札(長曆三年) 外四點 遷宮桶外一點

境内坪數 二千六百二十六坪

氏子區域及戸數 字本鴨 田井 安藤 百五十戸

境内神社 貴布禰神社(閻魔命) 稻荷神社(倉稻魂神)

若宮神社(和久産巢日神) 地神社(大地主神)

小野神社(菅原道真公) 菅公國司となりて府中に居り屢々鴨神社に參拜あり。公薨去の後村民尊

郎、又四郎、助四郎なる者あり。協力して當地を開墾す。時に盛夏なりしかば近傍の谷に來り溪水を掬飲して午睡せしに、夢中衣冠の老翁來りて此の溪流を汲みて酒を醸さば其の味美にして飲むもの長壽を得む。我は都邊に住みて酒を幸ふ神なりと云ふ。三人覺めて相語るに同夢なり。依て一祠を立て松尾大明神を崇め、その溪水を以て酒を造れり。依つてその谷を都谷と云ふ。三人の子孫村中に蕃延せりと云へり。地名杉尾は松尾の誤れるものなりと。

明治五年八月村社に列せらる。(讃州府志 全讃史 古名勝 圖繪)

明治四十二年宇杉幸神社を合祀す。

例祭日 十月十三日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神輿庫 寶物 棟札外一點

境内坪數 二千七百二十六坪

氏子區域及戸數 宇東杉尾 西杉尾 佛願 六十戸

境内神社 幸神社(倉稻魂神)

古史成文の文と圖らず符合するは甚だ奇しく妙なる事なりと云ひて當社を式の鴨神社なりと云へり。當社祭祀は弘仁

四年(紀元 一四七三)

僧空海の伯父阿刀宿禰

大足が大和

國より勸請

する所と云

ひ、又大足

の再建する

所なりとも

云ふ。往古

は大明神原

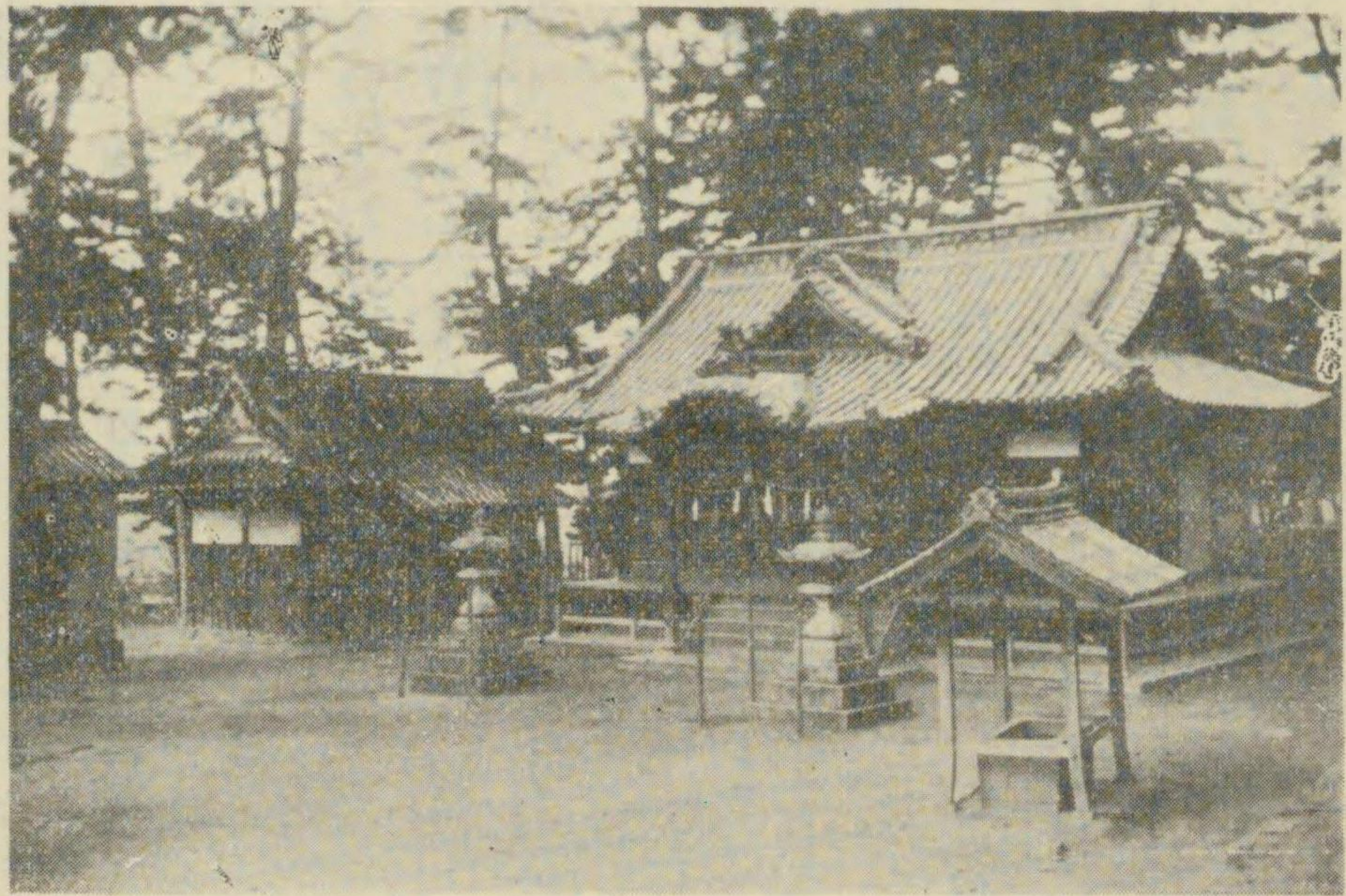
といふ所に

鎮座ありて

大社なりし

が天正年間

長曾我部氏の兵火に罹り社殿焼失せしを以て現地に奉遷し爾來往古の佛を失ふに至れり。大明神原の名は當社の鎮座



村鴨神社

(八五) 松井神社 加茂村大字鴨字杉尾

祭神 猿田彦命

由緒 加茂村社松尾神社境外末社

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十六坪 崇敬者人員 約百五十人

(八六) 村鴨神社 加茂村大字鴨字井手東

祭神 一言主命 玉依姫命

由緒 當村字井手西鎮座村社鴨神社に於けると同じく延喜式内社なりと稱せらる。(延喜神名式に讚岐國阿野郡小鴨神社とあり)三代實錄に『貞觀七年冬十月九日丁巳讚岐國從五位下賀茂神授從五位上』同十七年五月廿七日戊申授讚岐國從五位上賀茂天神正五位下』とあるは當社なりと云ひ、官社考證、特選神名牒等は當社を以て式内社となせり。

鴨莊大明神、葛城大明神等奉稱せられ、社記に『抑葛城社一言主命此神事代主所、變高彥根命分身也此神幼武天皇登幸葛城山時』云々とありて、官社考證に、この古き社傳とありしによつて起る。天文二十一年鳥居建立、弘治三年本殿柱替、寛永十四年玉殿改築、元文二年、明和三年、天明八年御屋根替の棟札あり。現今の本殿は文化元年七月、幣殿、拜殿は明治三十六年九月の改築とす。明治初年村社に列せられ鴨葛城神社と稱せしが、後ち鴨神社と改稱す。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(官社考證 特選神名牒 全讃史)

例祭日 十月二十日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神饌殿 神輿庫 神庫

寶物 菅公奉納扁額、社記及び棟札七點

境内坪數 二千四百九十四坪

氏子區域及戸數 宇山神 樋本 鴨庄 北山 下所 百八十戸

境内神社 藤木神社(須佐之男命) 全讃史に『藤木大明神在加茂庄社内一蓋此神則上古之社也後世加茂庄一言主祠盛而此祠衰矣遂爲攝祠也上古棟札云奉造藤木大明神祠一字弘仁四年巳歲二月廿一日願主上尾某(字減不知)出火節御正體向背退去。出以下十字記其靈二と見ゆ。

(八七) 齋汲天満神社 加茂村大字鴨字杉尾 (井手東)

祭神 菅原道真公

由緒 加茂村字井手東村社鴨神社境外末社

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十四坪 崇敬者人員 約二百五十人

(八八) 八幡神社 加茂村大字鴨字井手東

祭神 譽田天皇

由緒 加茂村字井手東村社鴨神社境外末社

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四百六十一坪 崇敬者人員 約百五十人

(八九) 菅原神社 加茂村大字鴨字牛ノ子

祭神 菅原道真公

由緒 加茂村字井手東村社鴨神社境外末社。牛子山天神、

轅山天満宮と稱せらる。菅公國司たりし時此の地の風光を

賞せられ館を置かる。松山館址これにして、後人祠を營み

て公を祀れるなり。(全讃史 古名勝圖繪 官社考證追録)

祭日 陰曆八月二十五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 千百八十七坪 崇敬者人員 約三百人

祭日 九月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三坪 崇敬者人員 約三百人

(九二) 幸神社 加茂村大字鴨字井手東

祭神 市杵島姫命

由緒 加茂村字井手東村社鴨神社境外末社

祭日 陰曆九月二十八日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 百八十六坪

崇敬者人員 約二百五十人

七府中村

(九三) 縣城山神社 府中村字西山

祭神 神櫛別命

由緒 延喜神名式に『讚岐國阿野郡城山神社名神大』とあり

て延喜式内讚岐國名神大社三社の一なり。三代實錄に『貞觀

元年十一月七日戊午授讚岐國正六位上城山神從五位下』同

(九〇) 杵築神社 加茂村大字鴨字大明神原

祭神 大國主命

由緒 加茂村字井手東村社鴨神社境外末社。嘉永六年頃

此の地に害蟲發生稻の被害甚しく、數年凶作相次ぎ農家の

困窮其の極に達す。依て郡中大小の政所相議りて藩主へ懇

願、竟に許可を得て出雲國杵築宮へ除蝗の祈禱を乞ふ。安

政四年三月小政所二名大社に於て祈禱を受け別靈を拜受、

歸國後直ちに大政所へ假に奉齋せしに蟲害頓に止むとい

ふ。これ當社の創祀なり。農民大いに喜び郡中の總鎮守と

なし、現鎮座地を卜し社殿を營み、文久二年十二月二日神

職福家安教大政所より新殿に奉遷す。爾來毎年四月二日當

社に於て郡中除蝗祭を執行し來る。

祭日 五月十四日 主なる建造物 本殿

境内坪數 百五十坪 崇敬者人員 百七十人

(九一) 高靈神社 加茂村大字鴨字大明神原

祭神 高靈神

由緒 加茂村字井手東村社鴨神社境外末社

七年十月九日丁巳授讚岐國從五位下城山神從五位上』と

見ゆ。社傳によれば、神櫛別命は景行天皇の皇子に座し、

南海の大魚を誅討し給ひし功によりて讚岐國に封ぜられ、

館舎を城山に造營して居給ひしが、仲哀天皇の八年九月十

五日御壽百二十にして薨じ給ふ。こゝに於て祠を城山に建

て、其の神靈を祭祀せり。後國府を城山の麓に定めらるゝ

や、府内鎮護の神と爲し、爾來代々の國司崇敬甚だ厚く、

官より神位を授け奉り、且つ名神の列に預からせ給ふ。仁

和四年國內大旱の時、時の國司菅原道真雨を此の神に祈り

しに忽ち大雨ありて、萬民歡喜せり。これより宮殿も追々

廣大となりしが、貞治元年細川頼之の細川清氏と戦ふに當

り、社殿兵火に罹り悉く焼失し、漸く御神體を印鑰といふ

地に移し奉り、小祠を建て、祭祀し來りしが、後又今の社

地に移し奉る云々と云へり。日本書紀景行天皇の條に『次

妃五十河媛生神櫛皇子稻背入彦皇子其兄神櫛皇子是讚岐

國造之始祖也』とあり。城山神社記(正徳五年藤原廣野書)

に『讚岐國有名山焉曰城山最峻且靈能出雲興雨其邑

曰府中屬綾郡有神櫛王廟一號城山大明神傍小祠者

合祀其弟稻背入彦皇子從子武敏王斯社之肇也莫知自

何時然載諸延喜式其來久矣讚之名神二十四社之一也』云

々と云へり。菅家文章祭文部に『祭城山神』文爲_二讚岐_一維時仁和四年歲次戊申五月癸巳朔六日戊戌守正五位下菅原朝臣某以酒果香幣之奠敬祭于城山神。四月以降涉旬少雨吏民之困苗種不_レ田……伏惟境内多_レ山茲山獨峻域中數社茲社尤靈是用吉日良辰禱請昭告誠之至矣神其察_レ之……若甘澍不_レ饒旱雲如_レ結神之靈無_レ所_レ見人之望遂不_レ從斯乃俾_二神無_レ光俾_二人有_レ怨神人共失禮祭或踈神其裁_レ之勿_レ惜_二冥祐_一尙饗』と見ゆ。

當社古くは城山の山上に鎮座ありしを、兵火にかゝりて印鑰の地に移し、より土人印鑰大明神と奉稱せり。又城山の麓北谷に鎮座の故を以て北谷天神とも云ふ。當國の人は大川郡白鳥神社を東の明神と稱し、當社を西の明神といへり。蓋し白鳥神社祭神日本武尊は神櫛王の御兄に當らせ給ふ故なり。

明治初年郷社に列せられ、同三十六年四月九日縣社に昇格、同四十年三月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(讚留靈記 城山神社記 全讚史 三代物語 讚州府志 生駒記 古名勝圖繪 神社考 西讚府志 官社考證)
例祭日 十月九日
特殊神事 雨乞踊 豊年踊 仁和四年國內大旱の時、國守

(九五) 金刀比羅宮

府中村字城山

祭神 大物主命
由緒 府中村縣社城山神社境外末社
祭日 陰曆三月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 八百七十九坪 崇敬者人員 七百人

(九六) 福宮神社

府中村字西福寺

祭神 伊弉諾命 伊弉册命
由緒 府中村縣社城山神社境外末社
祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 千三百〇七坪 崇敬者人員 三百人

(九七) 市杵島社

府中村字西福寺

祭神 市杵島姬命
由緒 府中村縣社城山神社境外末社
祭日 陰曆六月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 三百人

菅原道真雨を當社に祈りしに忽ち應驗ありて百穀豊饒せり。國民歡喜して社前に於て大いに踊をなせり。これこの踊の起源なりといふ。

主なる建造物 本殿 釣殿 中殿 上拜殿 下拜殿 社務所 神庫
寶物 城山神社記_{藤原廣} 古瓦_{城山山頂鎮座} 外二十點
境内坪數 三千八百七十二坪
氏子區域及戸數 字北谷 弘法寺 本坊 綾坂 百十戸
境内神社 天満宮(菅原道真公) 雨請天満宮と稱せらる。
社に祈り給ひしに忽ち大雨ありて里人公の徳に服す。依て之を祀ると云ふ。全讚史に「雨請天神在_二府中舊鼓岡之東_一近移_二之城山神社傍_一」とあり。

(九四) 御靈神社

府中村字北谷

祭神 須佐之男命
由緒 府中村縣社城山神社境外末社
祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 四百二十四坪 崇敬者人員 四百人

(九八) 村西山神社

府中村字南谷

祭神 大己貴命
由緒 文龜元年の棟札あり。明治五年村社に列せらる。
例祭日 十月二十一日
主なる建造物 本殿 釣殿 中殿 拜殿 神庫
寶物 棟札一點
境内坪數 六百二十四坪
氏子區域及戸數 字南谷 西山 岡 六十五戸
境内神社 須佐之男社(須佐之男命) 元當村字本村上所に鎮座ありしを昭和二年五月此處に遷座せり。

(九九) 松尾神社

府中村字南谷

祭神 大山咋命
由緒 府中村村社西山神社境外末社
祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百二十一坪 崇敬者人員 百二十人

(100) 山神社 府中村字西山

祭神 大山祇命

由緒 府中村村社西山神社境外末社

祭日 九月七日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 三百九十八坪 崇敬者人員 七十人

(101) 村鼓岡神社 府中村字本村上所

祭神 崇徳天皇

合祀祭神 神倭伊波禮彥神

由緒 當社地は崇徳天皇行宮蹟にして、後此所に祠を建て、天皇の神靈を奉齋し奉りしものなり。傳ふる所によれば、保元元年八月二十三日崇徳上皇阿野郡林田村野大夫高遠が館に御遷幸あらせられ、後摩尼珠院に御遷りあり。更に林田村長命寺に入らせらる。國司藤原秀頼行宮を鼓岡に營造し奉りて遂に此の所を御仙居と定め給ふ。里人之を木丸殿又は車返御所と云ふ。「命ありてかやが軒端の月もみししらぬは人の行末の空」「鳴けば聞きさけば都の戀しきにこの里すぎよ山時鳥」と御製あり。爾來時鳥この里に鳴

大正六年^{宇松岡}神武天皇社を合祀す。

例祭日 十月二十六日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 釣殿 神庫 社務所
寶物 十一面觀世音木像一軀
境内坪數 九百四十四坪
崇敬者人員 三千〇五十人

(101) 村天満神社 府中村字石井

祭神 菅原道真公

由緒 菅公讃岐守となり甲智郷府中村なる國司廳に在任せらる。廳の正面に南山と稱する山ありて最も風光に富めり。菅公屢々こゝに遊ぶ。(菅家文章に南山に遊ぶの詩あり)公在任中よく意を民政に用ゐる衆皆悦服せり。當社は中納言家成、公の古跡なる南山に祠を建て、その靈を祀りしものにして爾來代々藤原氏の崇敬する所なりと云ふ。(一説に萬壽年間の創祀といふ)寶永四年、元祿三年の棟札あり。明治五年八月村社に列せられ、同四十二年十一月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全譜史 古名勝圖繪)

例祭日 十月二十五日

かすと傳へ、里人此所を郭公不鳴里と云ふ。御寂寥やる方なく御躬ら五部の大乘經を書寫し給ひ、凡そ三年にして成る、これを邊鄙の地に置かむよりはと、書を仁和寺法親王に遣はし大乘經に次の御製を添へて京師におくり給ふ。「濱千鳥跡は都にかよへども身はまつ山に音をのみぞなく」かくて京師にては少納言信西建言して、當今の御身を以て書を京師に入るゝことその包藏する所知るべからすと云ひければ、受け給はずして還されたり。上皇の御憤いよいよ甚しく、御指の血を以て誓辭を書かせ給ひ、大乘經と共に筐に入れ、敢て大龍王に遣すとて樋の門の海中に沈め給へり。これより樋の門の島を経ケ島と謂ふ。遂に御爪をもさらせ給はず御髪をもすかせ給はず、御聲は鋭く、御容貌甚だ異となり給ふ。鼓岡に在ますこと始より六年、不測の事ありて長寛二年八月二十六日此の處に崩御あらせられたり。超えて九月十八日白峰山上に葬り奉る。この不測の事の由によりて、駿馬紫衣の者白峰に上ることを得ず、又此の里柳を生ぜずと云ひ傳ふ。

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 玉藻集 南海通記 古名勝圖繪 崇徳院と讃岐 讃州府志 西讃府志)

主なる建造物 本殿 釣殿 中殿 拜殿 神庫 隨神門
寶物 棟札二點
境内坪數 六百五十五坪
氏子區域及戸數 宇石井 逃田 額 横山 百九十二戸

(102) 神掛神社 府中村字大坪谷

祭神 須佐之男命 櫛名田姬命

由緒 府中村村社天満神社境外末社。元祿十三年及び寛

政八年の棟札あり。

祭日 十月七日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 釣殿
寶物 棟札二點 境内坪數 三千百十七坪
崇敬者人員 三百五十人

(103) 黒岡住吉神社 府中村字原

祭神 底筒男命 中筒男命 上筒男命

由緒 府中村村社天満神社境外末社。

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 五百六十坪 崇敬者人員 五百人

(105) 池宮神社 府中村字額

祭神 彌都波之賣神

由緒 府中村村社天滿神社境外末社

祭日 六月七日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 四百九十一坪 崇敬者人員 一千三百人

(106) 八幡神社 府中村字綾坂

祭神 足仲彦天皇 息長足姬命 譽田天皇

由緒 寛仁年中の創建と云ふ。一説には藤中納言家成之を

創建すと云へり。城山神社を以て本宮と云ひ、當社を新宮

と云ふ。故に此の地を新宮と稱せり。依て新宮八幡宮と奉

稱せらる。文化四年の棟札あり。

明治五年八月村社に列せられ、同四十二年七月神饌幣帛料

供進神社に指定せらる。(玉藻集 全讚史 古名勝圖繪)

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 釣殿 社務所

癸卯長月蒙靈夢謹捧玉幣崇魂願吾祖清和天皇赤澤大明神及

東照大權現奉仰降臨鎮坐而地神宮天照皇大神大名持尊埴山

姫命少彦名尊倉稻魂尊奉勸請爲一天靜謐四海泰平御武運長

久百穀成就萬民快樂自今務永世祭祀之定例仍後世之子孫莫

於此神祭意乎是爲後榮之基者也行信記』

祭日 十一月三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百五十坪 崇敬者人員 三百人

八端岡村

(107) 八幡神社 端岡村大字國分字中西

祭神 譽田天皇(一に曰 配祀 足仲彦尊 息長足姬尊

神日本磐余彦火々出見尊)

由緒 天平勝寶年間の創祀といふ。是より先諸國に國分

寺建立せられ、當社は當國國分寺鎮護並に阿野七郷の産

土神として參議石川朝臣年足、侍從藤原魚名の創祀する

ところといふ。僧空海當國巡錫の節、國分寺及び當社を

修補あり。以來國分寺歴世の崇敬厚く社殿も亦壯麗結構

綾歌郡

寶物 棟札文化 四年一點

境内坪數 千四百五十四坪八合六勺

氏子區域及戸數 字新居 前谷 百十戸

(108) 猿田彦社 府中村字前谷上所

祭神 猿田彦命

由緒 府中村村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 五十九坪

崇敬者人員 百人

(109) 地神社 府中村字前谷上所

祭神 天照皇大神 少彦名命 倉稻魂命 大己貴命 埴安

姫命 罔象賣命

由緒 府中村村社八幡神社境外末社。天保十四年赤澤行

信の創建する所なり。行信自ら記す所の社記にいふ。

『天保十四年卯九月奇哉赤澤行信夢中蒙大明神託而謹捧玉

幣奉仰降臨鎮坐而始永世祭祀之定例後世之子孫莫於此神祭

意乎是則爲後榮之基乎生年六拾歳赤澤行信記 天保十四年

を極めたりと。其の後讚岐國司中御門中納言家成の裔孫新

居城主藤太夫資村(香西左近將監資村)毎歳奉幣祈願あり。

世々藤家一族武門の守護神として崇敬せり。天正年間兵火

に罹り社殿寶物等焼失、慶長二年國主生駒親正之を再興

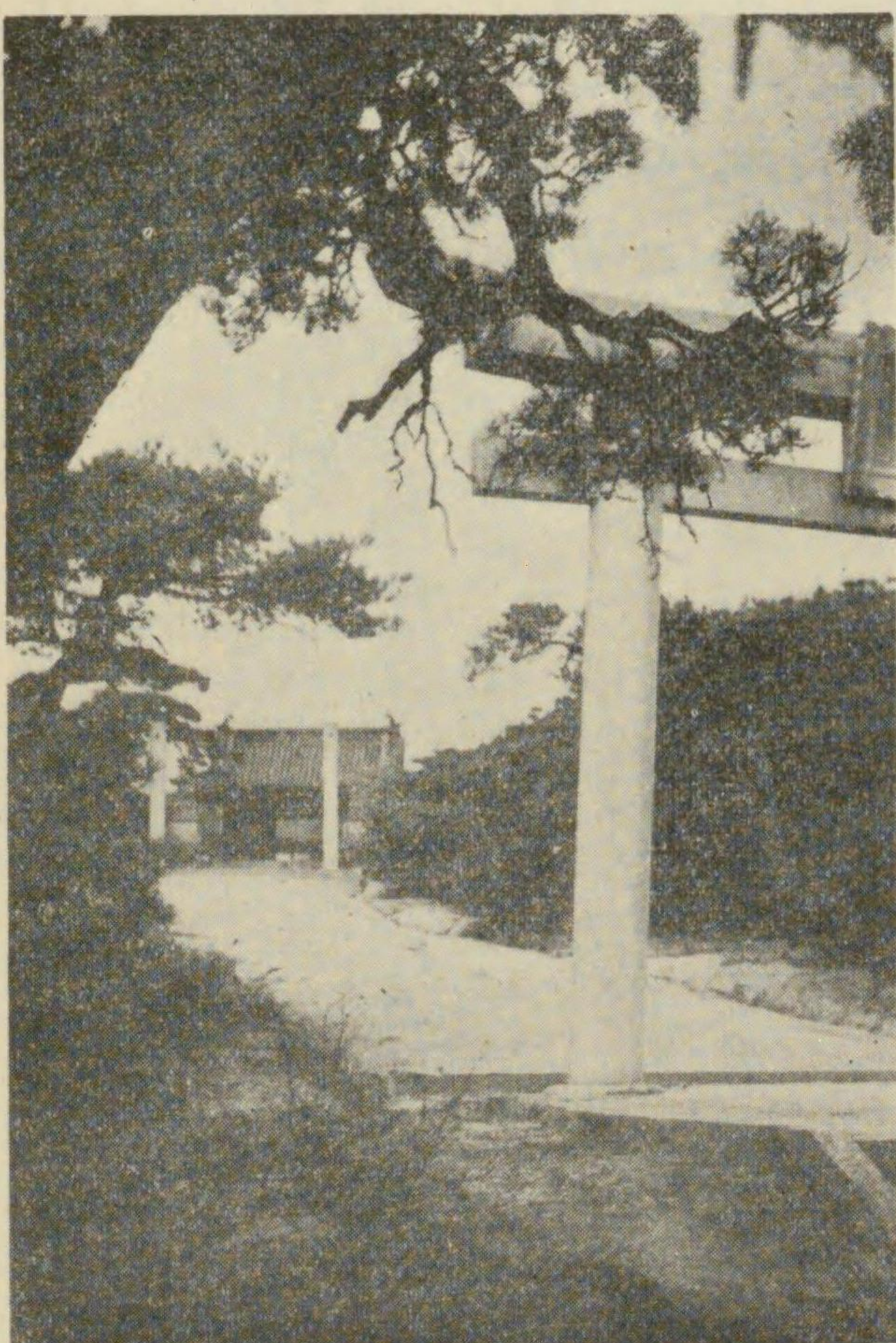
し、毎年吉例として武術試合を奉納せり。親正の子一正亦

鳥居を奉納す。寛永二年大地震の爲め本殿壞頽せしを以て

造營、翌年三月正遷宮に際し生駒高俊の奉幣あり。高松藩

祖松平頼重亦崇敬淺からず、長刀を寄進し屢々參拜せり。

其の巨横倉久右衛門亦弓一張、鞍一具を寄進す。萬治年間



郷社八幡神社

炎上、祠官森口左近神慮に因り岩川山上に新殿を造營して奉遷す。現今の社殿之なり。爾來岩河八幡宮と稱へられ、又國分八幡宮とも奉稱せらる。明治初年村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定、昭和十年十月五日郷社に昇格し、同月九日改めて神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

當社南方舊馬場なりし地を國分八幡宮馬場大門といひ田宮坊太郎の古蹟といふ。寛永元年當社馬場に於て坊太郎の父民谷源八、堀源太左衛門に討たれしが、同十七年坊太郎十七歳の時、父の討たれし地にて仇を報じたりといひ、このこと金毘羅利生記なる著書ありて人口に膾炙せり。今に境内山麓に坊太郎の塚あり、石燈籠、手水鉢等古色蒼然として四時の賽客絶えず。

(王藻集 金毘羅參詣名所圖繪 全讃史)

例祭日 十月十六日

主なる建造物 本殿 幣殿 中殿 拜殿 神門 御守納所

社務所

寶物 棟札正徳四年 神鏡

境内坪數 六千〇八十四坪

氏子區域及戸數 大字國分 四百五十四戸

とあり、官社考證附録に『全讃史に……と云るは國分村に此社あるを知らず且符宣抄をも見ざるものなり然れども廢社と思ひて如此數きたる城山が心根は殊勝と云べし』と見ゆ。(全讃史 古名勝圖繪 官社考證附録)

祭日 十月九日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 千七百五十三坪 崇敬者人員 四百人

(三) 御先神社

端岡村大字國分字中西

祭神 猿田彦命

由緒 端岡村郷社八幡神社境外末社。當社は本社八幡神社と同じく天平勝寶年間の創祀にして本社御前の守護神として其の正面に奉齋せられたりしが、萬治年間本社岩川山上に奉遷の節、今の地に遷座せられたり。初め猿田彦神社と稱せられしを明治二十五年今の社號に改む。

古來地祭、方除けの神として、遠近に崇敬者多し。

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十一坪 崇敬者人員 百人

(二〇) 天津神社 端岡村大字國分字中西(里)

祭神 天御中主命

由緒 端岡村郷社八幡神社境外末社。傳ふる所によれば仁和年間菅原道眞の創祀にして、昔は著名の大社なりしも兵火に罹り衰へたりといふ。古來祈雨所として庶民崇敬す。

祭日 十月四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 三百五十人

(二一) 高結神社 端岡村大字國分字三條瀧

祭神 高皇產靈命

由緒 端岡村郷社八幡神社境外末社。符宣抄に『太政官符神祇官正六位上天津高結坐讚岐國今奉授從五位下延喜廿年二月十五日下』とありて國史現在社たり。往古より高結大明神と奉稱せられ鎮座地を高結山といふ。全讃史に『高結峯在松山西南神谷村東南蓋昔祠高皇產靈尊故曰高結夫高皇產靈尊者本邦造化之神也……未聞邦内有其祠獨此山存其名而其祠廢悲夫有心者誰不歎息乎』

(二二) 矢矧神社 端岡村大字國分字木落

祭神 水象女神

由緒 端岡村郷社八幡神社境外末社。口碑によれば、正平十七年(紀元二〇二〇)細川清氏の創祀といふ。清氏吉野朝の爲め軍を率來り此處に陳せしが、溪水の缺乏せるを憂へ當社を祀りて靈驗を得といひ、清氏此の地に於て矢を矧ぎしを以て社號となすといふ。今猶ほ社邊に矢竹を生ず。

祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百九十二坪 崇敬者人員 百五十人

(二四) 高靄神社 端岡村大字國分字且ヶ原

祭神 高靄神

由緒 端岡村郷社八幡神社境外末社。傳ふる所によれば、寛永十九年(紀元二三〇二)大旱ありし節里人の創祀せし所といふ。

祭日 七月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三百坪 崇敬者人員 三百五十人

(二五) 郷 楠尾神社 端岡村大字新居字西谷

祭神 玉依姫命 足仲彦天皇 譽田天皇 氣長足姫命

由緒 社傳によれば、上古忌部日下大人なる人玉依姫命を祀りて楠尾大神と崇む。當時社地に樟の大樹ありしを以て社號となせり。欽明天皇の御宇靈異のことありて以來楠尾八幡宮と稱へ新居郷の産土神となせしといふ。新居郷は古名を甲辰郷と稱せられしを以て當社は甲辰社とも呼ばれたり。一説に仁徳天皇の御祈願により武内宿禰社殿を再建し、下乗下馬の榜を建て官物並種々の寶物等を納めらるといへり。全讃史には『今按新居則植松備後之采地必是備後祠之也』と見ゆ。

傳ふる所によれば、當社元社殿東面し東馬場なりしが、天正年間兵燹に罹り、其の後再建の節今の如く南面南馬場となしたりと、舊馬場と云へる地には下乗の石標存し其の書は後小松天皇の宸筆なりといふ。古へは大社にして全讃史にも『土人云昔爲大社神領百石有下乗下馬之石一中古衰矣英公欲復之不能復舊是以止云』とあり。近傍の地名に倉内、寶庫、散樂田、アセヂ等ありて大社たりし當時の遺址といふ。

三神社 (高御産巢日神 神御産巢日神 天御中主神)

上古當社神體當村字西川西に光輝を放ちて天降りり。依て落神と稱し祀りしが、寛文年中境内に移轉す。

龍田神社 (水分神 志那那都美神)

畝尾神社 (泣澤女神 少彦名神)

(二六) 春日神社 端岡村大字新居字東川西

祭神 天津兒屋根命

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社。社傳によれば、中納言藤原家成當國々司たりし時(保安年間)創建せしものにして、元龜年間新居大隅守資教社頭を再興し社領をも寄附せしといへり。玉藻集に『春日大明神 新居村社人治部兼帯』と見ゆ。

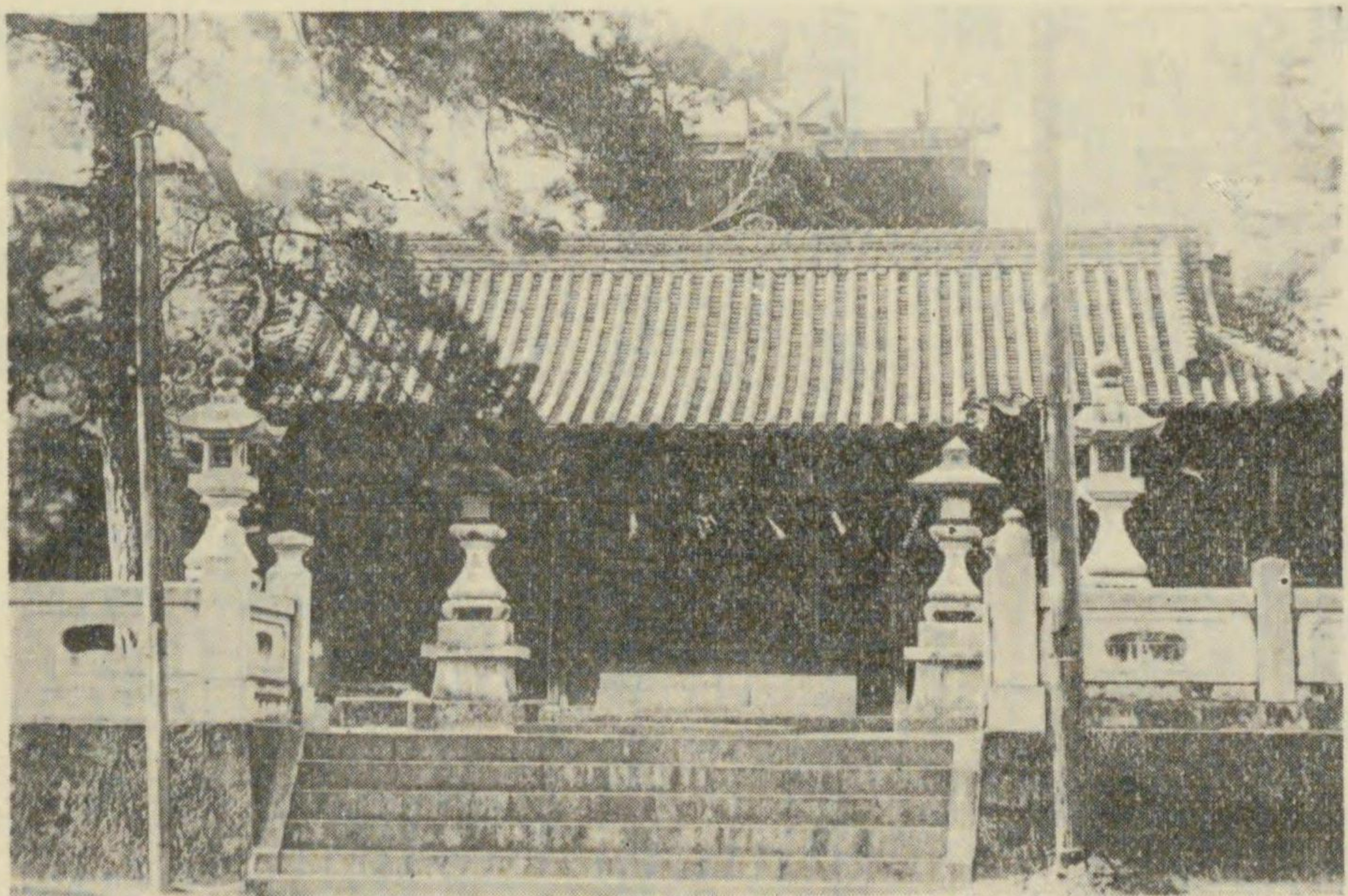
祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 二百四十九坪 崇敬者人員 約四百人

(二七) 奥谷神社 端岡村大字新居字奥谷

祭神 菅原道真公

大正六年十月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集全讃史 今名勝圖繪)



例祭日 十月十五日
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神饌 殿 釣殿
境内坪數 四千四百九十九坪
郷社 楠尾神社
氏子區域及戸數 字東大谷 西大谷 東下所 西下所 東坂川 西坂川 上向田 下向

田橋岡 西川西 東川西 中筋 奥谷 四百三十一戸
境内神社 田村神社(辰田彦命) 惠比須神社(事代主命)

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社。口碑によれば、菅

公國守たりし時屢此の地に遊ばれ縁由深き地なるを以て薨去の後祠を立て祀れりといふ。

祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 八百九十二坪 崇敬者人員 約四百六十人

(二八) 大谷神社 端岡村大字新居字東大谷

祭神 天御中主命 大名持命 少彦名命

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社。元暦年間當國國司橋公業、新居城主新太夫能員に命じて祀らしめ社領をも附せりといふ。

祭日 十月二十八日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 釣殿

境内坪數 三百六十坪 崇敬者人員 約八百二十人

(二九) 城山神社 端岡村大字新居字岡

祭神 多迦淤加美命

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社

祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四十八坪 崇敬者人員 約千〇七十人

(110) 落神神社

端岡村大字新居字西川

祭神 大山祇命

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社。郷社楠尾神社境内

神社三神社の由緒によれば、昔此の地に光輝ある物天より降りしにより地名を落神といひ、降り物を神體として落神と稱し奉祀せしが、寛文中楠尾神社境内に遷座せり。而して當社は後其の社地に大山祇命を祀れるものなりと云ふ。

祭日 十月二十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 約百十人

(111) 稻荷神社

端岡村大字新居字坂川

祭神 倉稻魂命

拜殿 末

社荒神

と見ゆ。

例祭日 十月二十日

主なる建造物 本殿

中殿 拜殿

境内坪數 千四百六

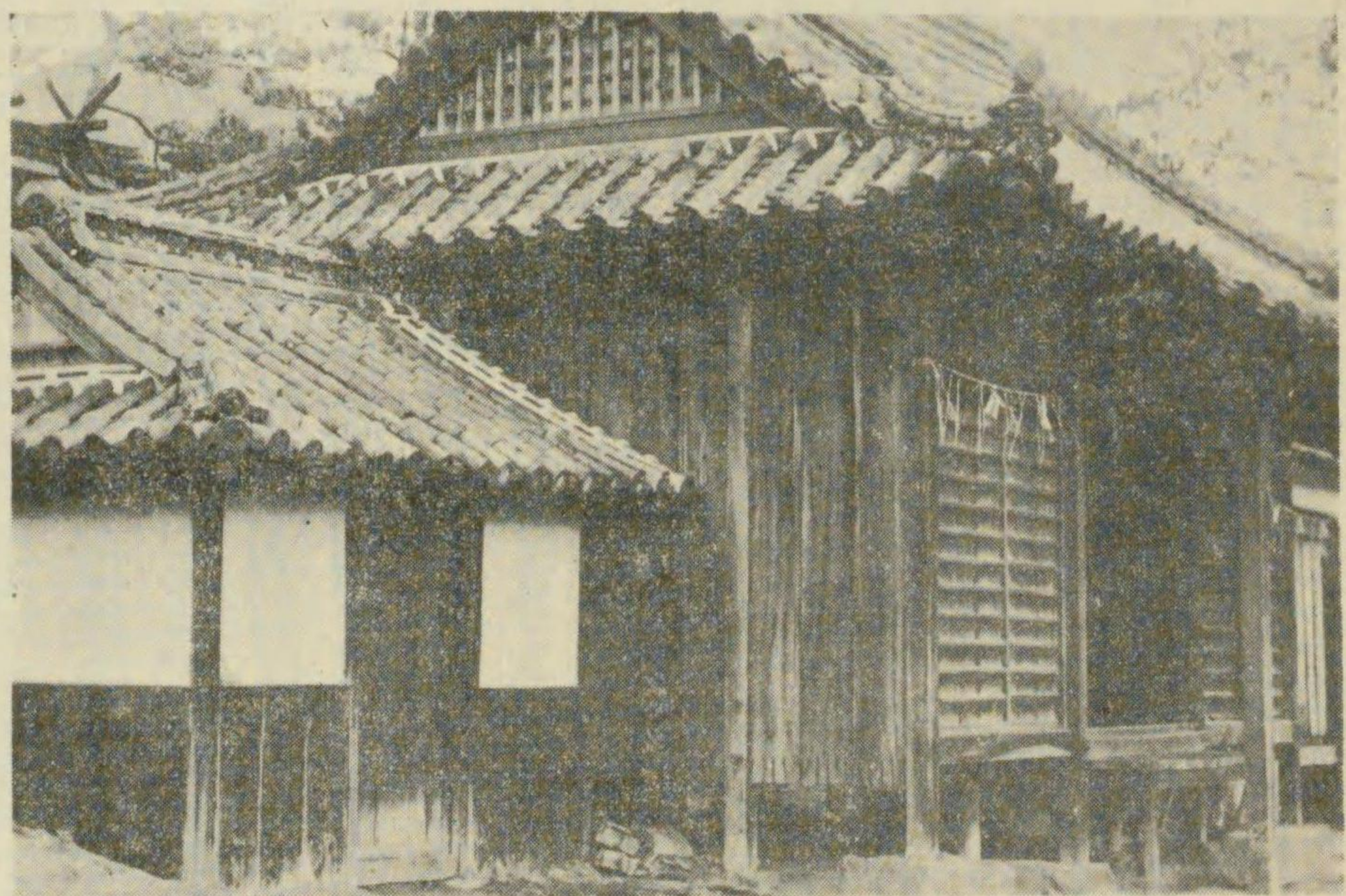
十二坪

氏子區域及

戸數 字萬

燈 六十

九戸



村社萬燈神社

(112) 祈雨神社

端岡村大字新居字万燈

祭神 多迦於加美神

綾歌郡

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社

祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十四坪 崇敬者人員 約二百七十人

(113) 橋岡神社

端岡村大字新居字橋岡

祭神 多加於加美神

由緒 端岡村郷社楠尾神社境外末社。口碑によれば、

天正三年(紀元二二三五)植松備後の創祀といふ。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百三十五坪 崇敬者人員 約四百三十人

(114) 村萬燈神社

端岡村大字新居字万燈

祭神 火迦具土命

由緒 口碑によれば、當國々造爲目愾命(此名不詳俟後考)

國內火災鎮護の爲め奉祀せりと傳ふ。今名勝圖繪に『氏宮

大明神 萬堂にあり、社人豊島氏、祭禮九月七日 本社

由緒 端岡村社萬燈神社境外末社。

祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪 崇敬者人員 約三百四十人

九山内村

(115) 村日抱神社

山内村大字福家字中代

祭神 手力雄命 兒屋根命 太玉命 鈿女命 石凝姥命 玉屋命

由緒 延享四年舊藩主の神社調に對する上書に、『福家村氏神伊賀幾之宮日抱大明神右初而建立之時代舊記等無御座并ニ何時代勸請ニ而御座候哉相知レ不申』と見ゆ。傳ふる所によれば、天安年間福家村中福家を流るゝ本津川に、當社の御靈代となりし靈體及び三叉の鉾流れ來りしを、里人筑を以て搦ひ上げ宮殿といふ地に一祠を建て伊賀幾大明神と號して祀りしを、後今の地に遷せりといふ。今に於ても當社氏子は筑を火にて焼くことを大いに忌むはこれに因るといへり。當村の舊家福家氏家譜には『日抱神社ハ阿波國逢坂

ニ勸請シテ有タルモノヲ寛永八年九月廿日福家七郎右衛門高宣當村伏猪谷ニ始メテ祭タルモノ」とあり。伏猪谷は現在の桶井谷にして即ち宮殿なるべしといふ。又同系譜に『福家資季享保五庚子年産土神社殿ヲ伏猪谷ヨリ土高山端江奉遷ス』とあり、土高山は現鎮座地なる堂山なるべしといふ。福家氏は戦國時代當村に福家城を築きて覇を稱へし郷士にして當社と同家とは特別の縁由あり。文化四年福家資正神燈並に燈明料として白銀五兩を寄附す。文化八年九月に同苗資景神鏡を寄進のこと同家系譜に見ゆ。現存の棟札によれば、正保三年、明曆三年、貞享五年其の他九度の改築修營あり。現社殿は明治四十年再營せり。昭和御大典記念事業として本殿兩側及び拜殿前方に玉垣を建設、昭和七年寶庫を新築す。

明治五年八月村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 福家氏家系譜 全讚史 今名勝圖繪 讃州府志)

例祭日 十月十八日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿 神饌殿 寶庫

旅所 社務所

寶物 槍保曆五年寄附 三叉劍 棟札十二點 其他五點

神の御神體とし、一を北宮明神の御神體として罔象女神を祀れりといへり。寛政四年の記録に『大字桶井谷ニ清水アリテ其傍ニ楠ノ木ノ大株アリ……其所ニ罔象女神ヲ勸請シ北宮明神ト崇メ奉ル』と見ゆ。

祭日 十月十九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六百六十二坪 崇敬者人員 約千九百人

(二六) 春日神社 山内村大字新名字南原

祭神 武甕槌命 齋主命 兒屋根命 姫大神

由緒 弘仁年間の創祀と云ふ。延享四年舊藩主の神社調査に對する上書に『新名村氏宮春日四社大明神右人皇五十二代嵯峨天皇弘仁年中勸請也祭禮九月十日毎歲執行候事』とあり。傳ふる所によれば、當社は元現社地の西北六七町字野搖に鎮座ありしが、天正十一年兵火に罹り社殿、舊記等燒失せしを以て其の後現在地に奉遷せりと。今舊地近傍に燒宮、神庭等の地名残り。古來新名村の氏神にして春日四所大明神又は春日四社大明神と稱へられ、全讚史に『春日大明神……天兒屋根命爲主新名一村之社也』とあり。

境内坪數 四千三百七十五坪
氏子區域及戸數 大字福家 三百七十四戸

(二七) 五郎神社 山内村大字福家字石ヶ鼻

祭神 大己貴命 少彦名命

由緒 山内村村社日抱神社境外末社。文祿元年(紀元二二五二)當村の舊家福家氏の祖先の創祀といふ。同氏家譜に『福家七郎右衛門祖父父文祿元年三月五郎大權現ト稱シ奉リ武運長久ノ爲メ之レヲ丸山之峯ニ南向ニ勸請ス。福家資章延寶七巳年九月丸山之峯ヨリ同山東麓へ奉遷ス其時社地五畝歩御充行之地ニ被下置候』と見ゆ。

祭日 陰曆八月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 約八十人

(二八) 北ノ宮神社 山内村大字福家字桶井

祭神 罔象女神 手力雄命

由緒 山内村村社日抱神社境外末社。口碑に、天安年間本津川の上流に於て策を以て靈體を掬ひ上げ一を日抱大明

現存の棟札にも『寛文十一年九月吉日奉建立春日四所大明神一字』、『安永三甲午歲奉建立春日四社大明神幣殿拜殿』等見えたり。文祿二年再興ありて以來、寛永六年、元祿八年、延享四年、貞享四年、文化二年、同七年、天保十五年等の棟札現存せり。大正十一年玉垣及び石段を修築、同時に境内模様替を行ひ、昭和四年舊旅殿を境内に移して神饌殿兼神輿庫に改築す。

明治四年七月村社に列せられ、同四十二年九月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讚史 玉藻集 今名勝圖繪)

例祭日 十月十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿兼神輿庫

寶物 棟札十一點 其他樂器等

境内坪數 三千百四十坪

氏子區域及戸數 大字新名 二百三十七戸

(二九) 菅原神社 山内村大字新名字石舟

祭神 菅原道眞公

由緒 山内村村社春日神社境外末社。傳ふる所によれば、菅公當國在任の砌此の地に遊ばれし縁由によりて正曆

年間里人公を祀れりといふ。社地傍に舟型をなせる大石あり、石船と呼び俗に菅公之に乗りて來られしといへり。地名亦之に因むと。

祭日 陰曆八月二十四日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十九坪七合 崇敬者人員 約二百三十人

(二〇) 猿田彦神社 山内村大字新名字南川向

祭神 猿田彦神

由緒 山内村村社春日神社境外末社。初め新名村庄屋綾田家邸内の鎮守として奉齋されしといふ。

祭日 九月二十六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四坪 崇敬者人員 約七十人

(二一) 石槌神社 山内村大字新名字鷺之山

祭神 石凝姥命 金山彦神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 七月一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 八十九坪 崇敬者人員 約百二十人

祭日 九月二十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十六坪 崇敬者人員 約八十人

(二二) 太神宮神社 山内村大字新名字橋

祭神 天照皇大神 大己貴神 少彦命 倉稻魂神 埴安姫神 水波女命

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 春秋社日 主なる建造物 石神座 境内坪數 二十六坪
崇敬者人員 約六十人

(二三) 菅原神社 山内村大字新名字松原池

祭神 菅原道真公

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 二月二十五日 八月二十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十六坪 崇敬者人員 約九十人

(二四) 太神宮神社 山内村大字新名字鷺之山

祭神 天照皇大神 大己貴命 少彦命 倉稻魂神 埴安姫命 水波女命

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十四坪 崇敬者人員 約二百三十人

(二五) 高竈神社 山内村大字新名字鷺之山

祭神 高竈神 闇竈神

由緒 山内村村社春日神社境外末社。新名、柏原兩大字の祈雨社といふ。

祭日 七月十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百〇四坪 崇敬者人員 約千六百人

(二六) 天御中主神社 山内村大字新名字南新名

祭神 天御中主神 國底立神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

(二七) 倉稻魂神社 山内村大字新名字中新名

祭神 倉稻魂神

由緒 山内村村社春日神社境外末社
祭日 三月二十八日 十月二十八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 約五十人

(二八) 倉稻魂神社 山内村大字新名字上所

祭神 倉稻魂神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四坪 崇敬者人員 約九十人

(二九) 八衢彦神社 山内村大字新名字下所

祭神 八衢彦神 八衢姫神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 九月一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 一坪 崇敬者人員 五人

(一四) 須佐男神社 山内村大字新名字下新名

祭神 須佐男神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 十月四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十九坪 崇敬者人員 約二百人

(一五) 金刀比羅神社 山内村大字新名字吹越

祭神 大物主命 崇徳天皇 地神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十坪 崇敬者人員 約百九十人

(一六) 須佐男神社 山内村大字新名字空路

祭神 須佐男神

由緒 山内村村社春日神社境外末社

祭日 十月二十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 百十八坪 崇敬者人員 約五十人

寶物 神鏡一面 棟札六點

境内坪數 三千九百四十六坪

氏子區域及戸數 大字柏原 九十三戸

(一七) 北宮神社 山内村大字柏原字北側

祭神 天御中主神 哭澤女命

由緒 山内村村社宇佐八幡神社境外末社。寛政四年二月

の記録に『人皇十二代景行天皇十四男讚留靈公讚岐ヲ巡見
シ給フ時此郷ニ古帝ノ御開キ給シ樞原ノ都ニナゾラヘテ柏
原ト號ケ鷲尾山ニ城ヲ築キ城主ニハ内膳大夫ヲ指置キ古帝
往古ノ守護神タル天御中主命泣澤女命ヲ勸請シテ北宮大明
神ト崇メ奉ル』と見ゆ。

祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 百六十七坪 崇敬者人員 約四百六十人

(一八) 武内神社 山内村大字柏原字奥

祭神 武内宿禰

由緒 山内村村社宇佐八幡神社境外末社

綾歌郡

(一九) 村宇佐八幡神社 山内村大字柏原字奥

祭神 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后 玉依姬命

由緒 天安年間豊前國宇佐八幡宮の分靈を迎へて柏原村の
産土神とせり。依て社號を宇佐八幡宮と稱ふ。初め鷲峯山
に鎮座ありしが、寛文年間高松藩祖松平頼重當社地内へ鷲
峯寺を再建し、延寶四年に至り諸堂造營成り、同年八月一日
を以て寺領五十石及び近隣の林等寄進の證書下賜あり、爲
めに鷲峯寺は頗る隆盛となり、當社は殆ど同寺の鎮守神同
様となりたり。是に於て氏子等藩の寺社方に願出で、寺社
係役人及び氏子立會の上中尾主馬之丞所有林内へ遷座す。
これ現社地なり。現存の棟札に『奉再興柏原八幡宮一宇 正
徳四年十二月十七日 神主中尾主馬之丞』とあり、又天明
六年、文化十三年、天保九年改修の棟札を存す。明治三十
三年十二月本殿再建、幣殿修築。昭和四年幣殿、拜殿を改
築、同五年神輿庫新築。

明治四年七月村社に列せられ、昭和七年一月二十二日神饌
幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 古名勝圖繪)

例祭日 十月十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十坪 崇敬者人員 十五人

(二〇) 大綾津神社 山内村大字柏原字白池

祭神 大綾津日神

由緒 山内村村社宇佐八幡神社境外末社

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三坪 崇敬者人員 約六十人

(二一) 大直日神社 山内村大字柏原字白池

祭神 大直日神

由緒 山内村村社宇佐八幡神社境外末社

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五坪 崇敬者人員 約六十人

(二二) 神直日神社 山内村大字柏原字南側

祭神 神直日神

由緒 山内村社宇佐八幡神社境外末社
祭日 九月三十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十二坪 崇敬者人員 約八十人

(一四) 菅原神社 山内村大字柏原字柏原池

祭神 菅原道真公
由緒 山内村社宇佐八幡神社境外末社
祭日 九月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三坪 崇敬者人員 約六十人

(一五) 太神宮神社 山内村大字柏原字鷺之山

祭神 天照皇大神 大汝命 少彦名命 倉稻魂神 埴山姫命 (一に曰 埴安姫神) 水波女命
由緒 山内村社宇佐八幡神社境外末社
祭日 春秋社日 主なる建造物 石神座
境内坪數 八坪 崇敬者人員 約四百六十人

稱する小祠あり。當社兵火に罹り焼失せし際、御神體を奉安したる地にして、社殿再興成りて復遷せし後も里人尙奉齋し來るなりと云ふ。

延寶八年、寶永五年、安永二年、天明元年、文化九年、天保三年、弘化四年等の改築修造を経て、明治十二年本殿、幣殿、上拜殿を再建、大正四年に拜殿を再建し、舊拜殿を改築して御旅所となし、同時に社務所を新築す。明治四年七月郷社に列せらる、(全讚史 古名勝圖繪) 大正十一年^{字山}原 金刀比羅神社を合祀す。

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿 社務所 御旅所

寶物 棟札^{萬治二}拾點 鏡

境内坪數 二千七百四十六坪

氏子區域及戸數 大字畑田 三百七十五戸

境内神社 若宮社(句々迺馳神) 傳へ云ふ、寶曆年中當村にして大なる櫛の木を伐らしめしに其の木より血流れ出で柚人は即死せり。傳造大に怖れて小社を建て句々迺馳神を祭りて若宮大明神と云ふと。

(一六) 鎌田神社 山内村大字柏原字鷺之山

祭神 天御中主神 國底立神
由緒 山内村社宇佐八幡神社境外末社
祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五十六坪 崇敬者人員 八人

一〇 昭和村

(一七) 郷八幡神社 昭和村大字畑田字本村

祭神 應神天皇 仲哀天皇 仁德天皇 神功皇后
合祀祭神 大物主神
由緒 仁和年中の創祀にして、天正年中兵火に罹り、元和中再興すと云ふ。萬治二年社殿修造の棟札あり。傳ふる所によれば、仁和年中陶村八幡宮勸請の時、此の地叢林中に毎夜光氣あり。里人に、吾は男山八幡なり、此の地に鎮りて里民を護らむと神託あり。依て里民相謀りて祠を立て氏神と崇むと云へり。當社西一丁ばかりの叢林中に假舎神社と

(一八) 社村春日神社 昭和村大字千疋字藏下

祭神 天兒屋根命
由緒 創祀詳ならざるも天正十八年以降千疋下村の産土神と定む。全讚史に「春日大明神在千疋下村之社也松熊寺主之」と見ゆ。(全讚史 古名勝圖繪)

例祭日 十月十三日

主なる建造物 本殿 釣殿 幣殿 拜殿

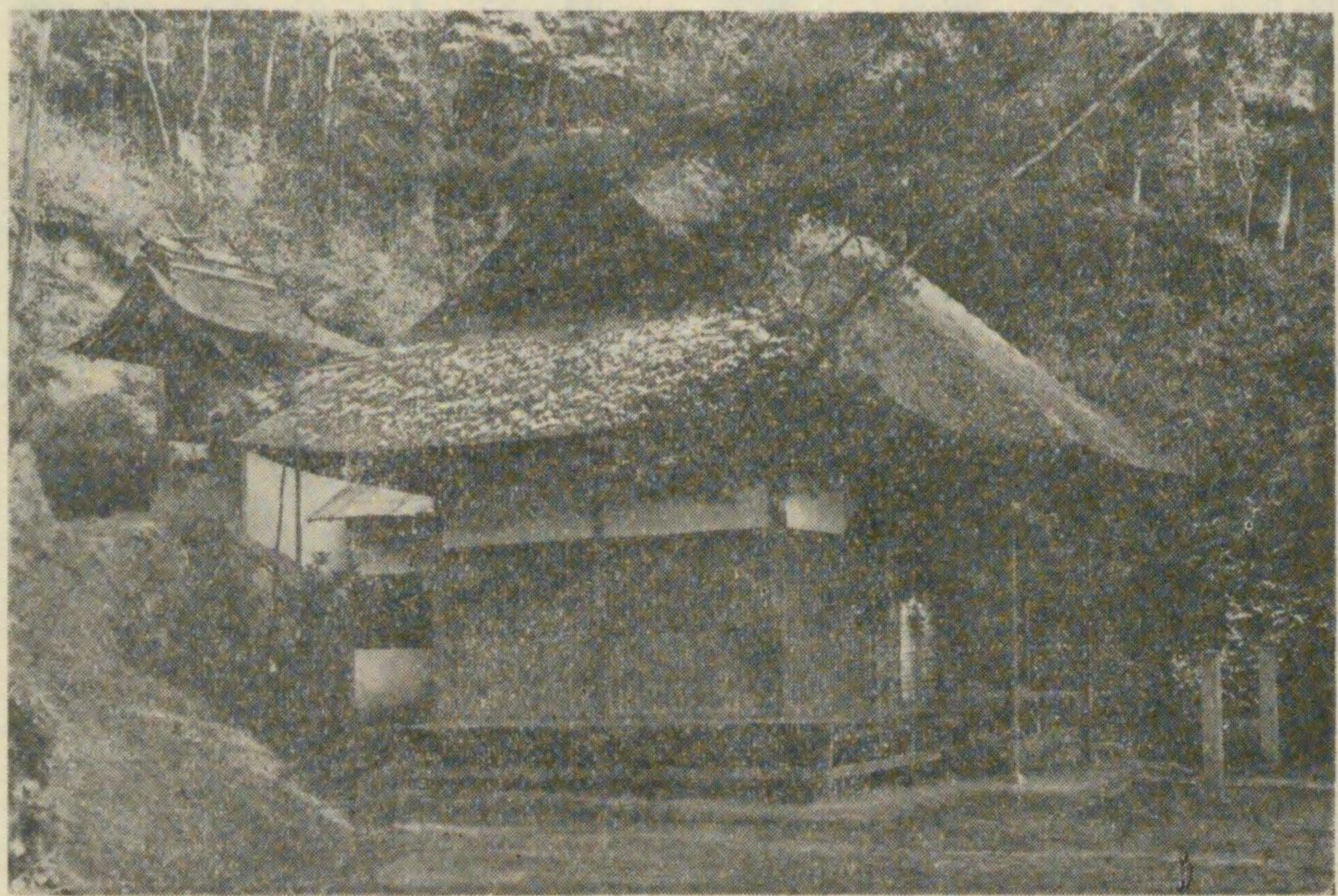
境内坪數 二千三百七十三坪

氏子區域及戸數 大字千疋の内矢坪 大谷 本谷 百三十戸

(一九) 社村八幡神社 昭和村大字千疋字上千疋東原

祭神 神功皇后 應神天皇
由緒 養老年中唐土より來朝せる賢文子、介子國と云ふ兩名に囑して、神像二軀を彫刻せしめ、之を祀り世々尊崇し來れりと傳ふ。天正十二年八月以降上千疋村の氏神となせりと。全讚史に「正八幡宮在三千疋上村之社也松熊寺主之」と見ゆ。(全讚史 古名勝圖繪)

例祭日 十月十四日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿



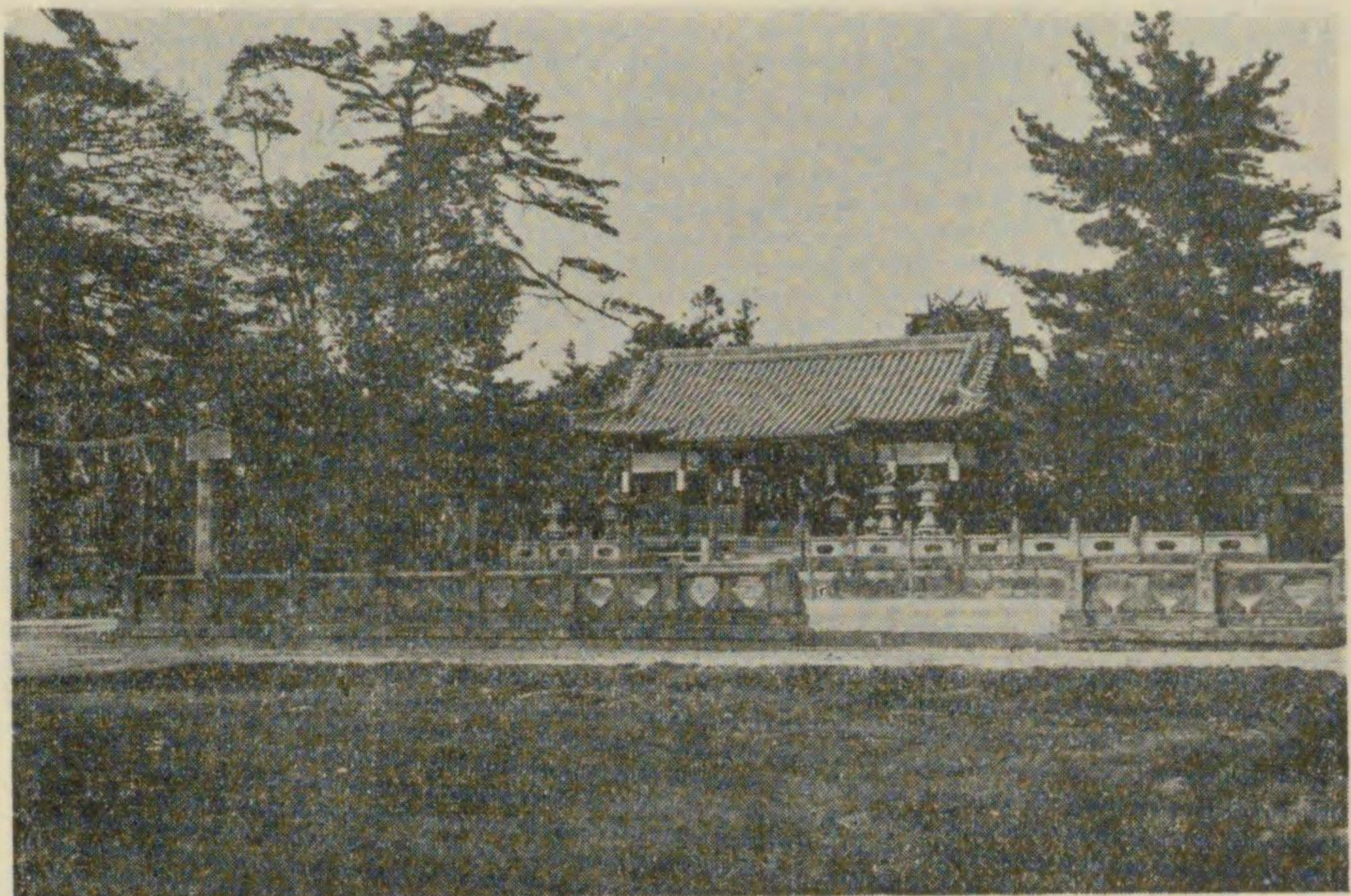
村社八幡神社

境内坪數 二千四百六十六坪
氏子區域及戸數 大字千疋の内上千疋 四十八戸

即死其株至「安永中猶存焉」と見ゆ。

寛文元年本殿再建、享保十五年拜殿建立、天保五年及び明治三十年本

殿再建あり
境内に古き
石玉垣の殘
存せるあり
て讚留靈王
の御廟跡な
りと云ふ。
明治五年八
月郷社に列
せられ、同
四十年九月
二十一日神
饗幣帛料供
進神社に指
定せらる。



郷社八幡宮

例祭日 十月十三日
(全讚史 今名勝圖繪)

一一 陶村

(一五) 郷社 八幡宮 陶村字宮前

祭神 譽田天皇

由緒 傳ふる所によれば、景行天皇の御宇、日本武尊の御子武甕王當國に來り綾の曠野に居らせらる。當國に留り給ふ意を以て讚留靈王と號す。陶村北原の地に御下屋敷あり。依つて其の地を讚留王と云ふ。後轉じて猿尾と唱ふ。武甕王南海の惡魚を征し給ひし時其の部將に田宇治なる者あり。其の家富めりしを以て福家と改め甲地郷南原に住して土豪となりしが、靈王の廟を建て、之を祀り、一郷亦之を鎮守神として崇敬し來れり。仁和年間福家氏某八幡神を勸請して合祭し、天文年間福家七郎現今の地に遷座せり。天正年中兵火に罹り、後福家新太夫等之を再興すと云へり。全讚史に「大宮八幡宮在陶村」記云舊在猿尾讚留靈王之靈爲主矣天文時福家七郎移之于此以應神帝配之遂八幡名顯而靈王名隱矣父老云此地元靈地古有大樹其大隱牛矣文祿中修祠所其樹從刀變紅血迸出而工匠

主なる建造物 本殿 上幣殿 下幣殿 拜殿

寶物 扁額 廣幡權大納 棟札四點 神鏡一點

境内坪數 三千七百十三坪

氏子區域及戸數 字西村北 定兼 萱境 下大橋 澁市 向

原北 向原上 有信上 有信下 西飼野 井上 上ノ原

大坪 團子出 下向原 東飼野 田所 平松 南森末 北

森末 寄町 重清 國吉 新開 辰巳 南馬醉木 宮前

上ノ坊 原田 三百八十三戸

境内神社 天満宮(菅原道真公)

天神地祇社(天神地祇) 村内小社を合祀せしものと云ふ。

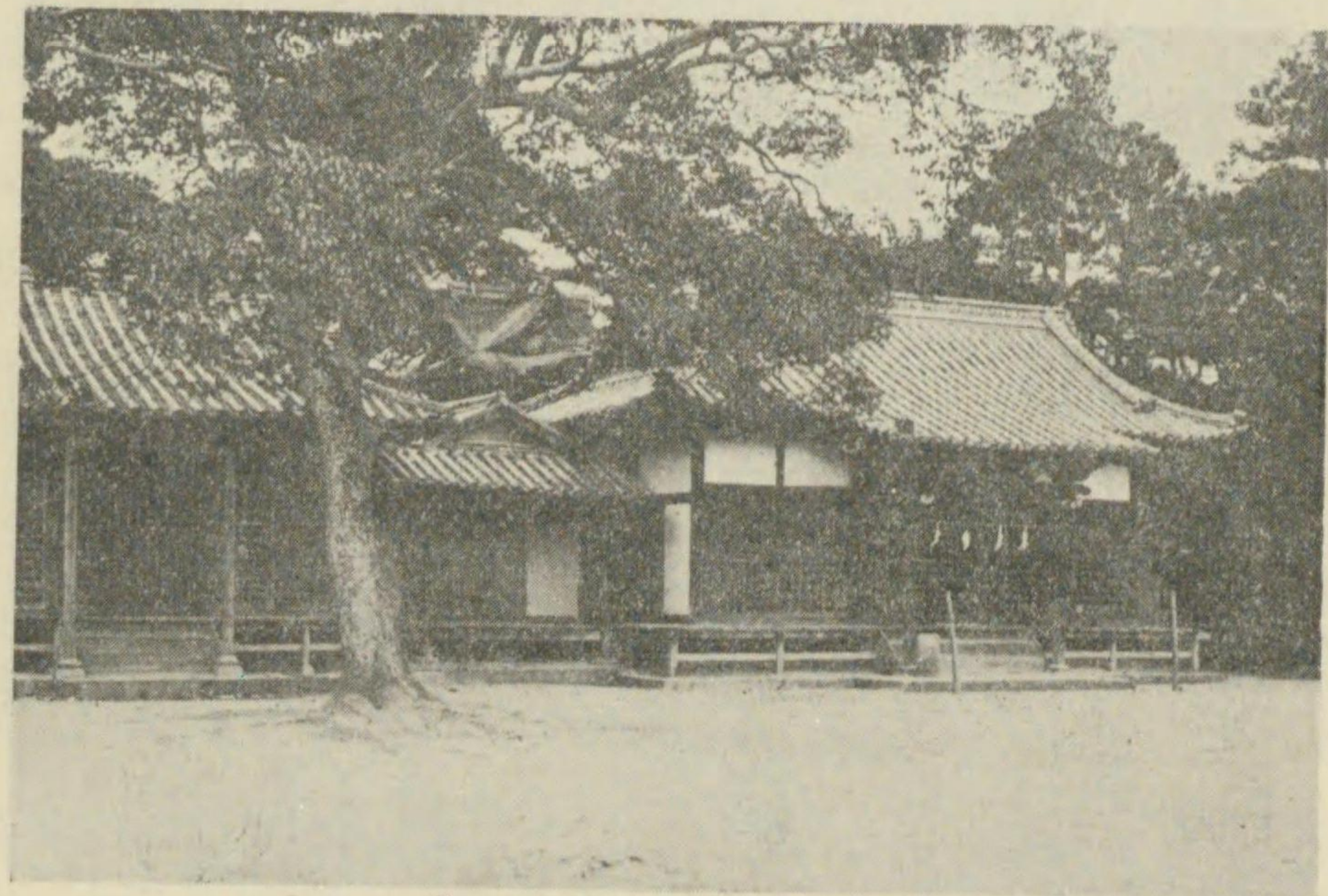
(一六) 村社 五社八幡神社 陶村字猿王東

祭神 天照皇大神 譽田天皇 軻遇突智命 底筒男命

熊野樟日命

由緒 往古より天照皇大神、譽田天皇の二神を奉齋し來りしが、仁和年中國司菅原道真瀧宮の別業より當社に參拜ありてその種破せるを見里人に勸めて再興せり。後二年にして當地火災ありて民家十三戸を焼き田園焦土となる。道真深く憐み、里人に諭して火神軻遇突智命を祀らむことを勸

む。依りて軻遇突智命、底筒男命を合祭して祭神五座となる。當時八幡神の尊崇最も著しく依て五社八幡宮と奉稱するに至れりと云ふ。

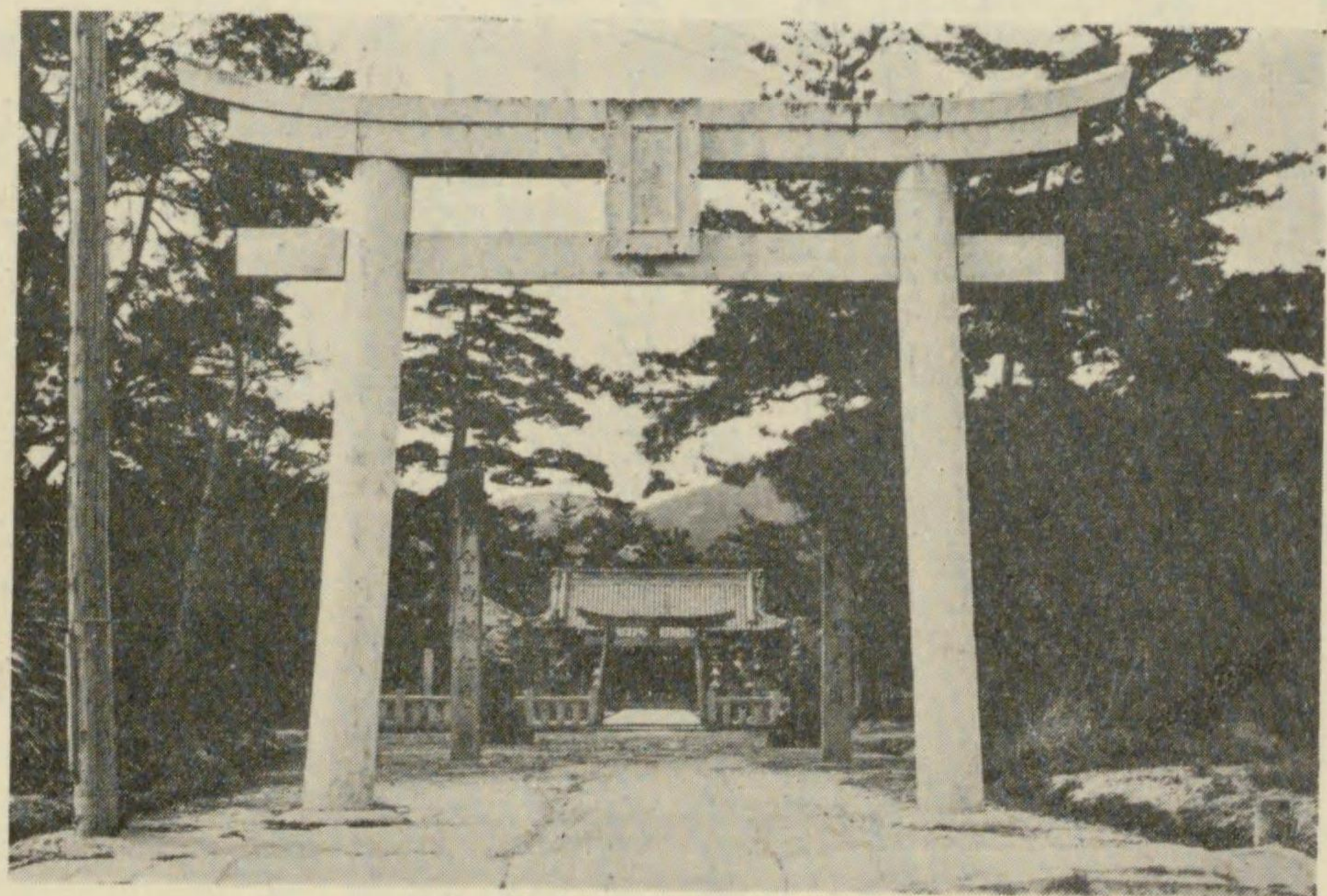


村五社八幡神社

一説に、仁和中菅原道真此の地に來る。偶ま叢中光氣あり。神童現れて道真に告げて曰く、吾は熊野神なり、此の地に鎮座して國人を守護らむと。道真即ち祠を建て、之を祀る。此の地往古より天照大御神の祠あり。故に合祭す。應仁年中此の地に大火ありしにより更に

ち祠を建て、之を祀る。此の地往古より天照大御神の祠あり。故に合祭す。應仁年中此の地に大火ありしにより更に

ふ。中御門中納言藤原家成の裔にして新居城主たりし新居藤太夫資村(香西左近將監資村)及び其の兄福家城主福家藤太夫資幸等



村北宮八幡神社

藤氏一門厚く崇敬して其の出陣毎に必ず當社に戦勝を祈願せりと傳へ、承久年間資村居を香西に移すに當り、神恩報謝の爲め鳥居一基を奉納せり此の鳥居現存す。資村香西に移住の後専ら福家氏の崇敬する所となり、嘉祿年中資幸の子福家美作守資俊百手の神事を創め、社殿の造

底筒男命、軻遇突智命、譽田天皇を合祭す。當時各地に八幡宮の社甚だ多し。故に里民五社八幡宮と云ふと云へり。而して猿王の地は景行天皇の皇孫讚留王の宮地なりしと傳へ、猿は讚留の轉なりと云ふ。

天明年間社殿再建の事ありて現今の拜殿はその當時の建築なり。大正四年本殿及び幣殿を改築す。

明治四十三年三月村社に列せられ、同年五月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史)

例祭日 十月二十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神樂殿 神庫 隨神門 御旅所

寶物 神鏡外二點

境内坪數 二千〇八十四坪

氏子區域及戸數 字猿王東 猿王西 庄屋 内間 丸山 九十原 北山田西 百六十二戸

(二五) 村北宮八幡神社

陶村字日原

祭神 譽田天皇

由緒 元暦二年(紀元一八四五)源義經の創祀する所と傳

營其の他代々力を致せり。かく當社は讃州武門の棟梁たる藤氏一門の崇敬厚く、又藩主松平頼重寛永十九年、慶安元年、承應二年、萬治三年、寛文三年等屢々参拜し、代々の藩主金毘羅参詣の節参拜ありて供物等を献備せられたり。

寛政十年本殿造營、寛文年間拜殿造營ありて、明治十五年拜殿、幣殿を改築、大正五年本殿の再建あり。

昭和六年十月一日村社に列せられ、同月八日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(古名勝圖繪)

例祭日 十月十二日

主なる建造物 本殿 上幣殿 下幣殿 上拜殿 下拜殿

境内坪數 四千八百九十六坪

氏子區域及戸數 字東原 中原 日原 北内 七陶 宮藪 川北西 川北東 北山田 十瓶 山原 道南 道端 田池 實光 二百三十八戸

(二六) 林神社

陶村字上ノ坊(宮前)

祭神 猿田彦命

由緒 不詳

祭日 陰曆九月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十一坪 崇敬者人員 六十七人

(一五) 田村神社 陶村字内間

祭神 猿田彦命

由緒 傳ふる所によれば、武鼓王その王子一人を當村庄屋内間に封じ、此の地に當國田村神社の御分靈を迎へて奉祀せりと云ふ。享和年間大庄屋岡坂又四郎長喬之を改築し、大正五年本殿、幣殿を改築す。境内に若宮神社ありて王の靈を祀ると傳へられ、それに接して小塚あり。王に殉死せし者の塚と云ふ。近く社地より銅鐸一箇を出土せり。又此の地田村を氏となす者多く、王子の隨臣の末葉と稱す。

祭日 十月十六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百十四坪 崇敬者人員 約三百人

(一六) 代池神社 陶村字代池

祭神 保食命

由緒 不詳
祭日 九月一日 主なる建造物 本殿

崇敬者人員 二百五十人

(一七) 田所神社 陶村字田所

祭神 倉稻魂命

由緒 不詳
祭日 陰曆六月十九日 九月七日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百十一坪
崇敬者人員 百八十人

(一八) 月見神社 陶村字東飼野

祭神 大物主命 金山彦命

由緒 文政八年(紀元二四八五)七月二十六日の創祀と傳ふ。
祭日 陰曆七月二十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十五坪 崇敬者人員 百五十人

(一九) 國津神社 陶村字下大橋

祭神 事代主命(一に曰 事代主神 水分神)

綾歌郡

境内坪數 三十五坪 崇敬者人員 百五十人

(二〇) 上坊神社 陶村字上ノ坊

祭神 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

由緒 創祀詳ならず。寛延元年(紀元二四〇八)十一月二日社殿を再建す。昔時王子權現と稱せしが、明治初年現社號に改めたり。

祭日 陰曆九月八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十坪 崇敬者人員 五百人

(二一) 澁市神社 陶村字澁市

祭神 大山祇命 高靈神(一に曰 大山祇神 高靈神 闇靈神)

由緒 傳ふる所によれば、昔時此の地は山林中の原野なりしが、屢々山靈現はれて靈異を示す、里民恐懼して當社を創祀す。時に文龜三年(紀元二一六三)九月十二日なりと云ふ。
祭日 陰曆三月十二日 九月十二日
主なる建造物 本殿 境内坪數 十四坪

由緒 不詳

祭日 陰曆六月十日 九月十日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百〇五坪
崇敬者人員 二百四十人

(二二) 赤天満神社 陶村字仲尾

祭神 菅原道真公

由緒 此の地菅原公の遺跡と傳へらる。依て平田屋久兵衛なる人當社を創祀せしが、其の後文化四年八月久兵衛の子二代目平田屋久之亟再興すと云ふ。

祭日 陰曆六月十九日 八月十九日
主なる建造物 本殿 境内坪數 四百五十七坪
崇敬者人員 百六十五人

(二三) 東原神社 陶村字東原

祭神 句々廻馳命(一に曰 句々廻知命 大山祇神)

由緒 昭和八年十月社殿を再建す。
祭日 陰曆九月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五十二坪 崇敬者人員 百十四人

(二六) 春日神社 陶村字日原

祭神 武甕槌命 經津主命 兒屋根命 比賣神
由緒 不詳

祭日 十月八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百八十坪 崇敬者人員 七十五人

(二九) 荒神社 陶村字森末

祭神 素戔鳴尊

由緒 世に森末神社と稱す。昭和三年社殿を再建す。

祭日 陰曆七月二十九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 八十六人

(三〇) 三吉神社 陶村字向原上

祭神 大己貴命

由緒 不詳

合記 武甕槌命 猿田比古命 少彦名命 野見宿禰命 島田忠臣命 渡會春彦命

由緒 天曆二年(紀元一六〇八)二月二十五日の創建なり。

仁和二年正月十六日菅公讃岐の國司に任せられ、同年四月着任、南條郡瀧宮の官舎に住み給ふ。當社境内はその官舎址なり。在任五年、國中を巡視し具に民の疾苦を問ひ、國中を綏撫し、大に仁政を施し教育勸業其の他治績甚だ顯著にして衆皆悦服せり。當社社記、讃岐舊事記、三代物語、生駒記、讃岐大日記、菅家定録、全讃史等によれば、公この地に聖廟を建て、孔子像を祀り子弟を教養せられ、(當村字大喜來孔聖神社はその遺跡なり) 仁和四年大旱に際しては、齋戒斷食七日、身を捧げて雨を城山神社に祈りて民の困苦を濟ひ給ふ。國民拊舞して公の徳を欣慕せり。(その有様は今瀧宮跡となりて千有餘年の佛を存す) 寛平元年國內悪疫流行の際は、自ら般若心經を手寫し、國內の僧を龍燈院に請じて護摩を修せしめ効驗著しく民皆懼悦せり。任滿ちて京師に歸らるゝや、國民咸その父母に別るゝが如く泣涕して川西の地に奉送す。(今その地を伏拜と云ふ) 延喜元年讒に逢ひて太宰府に貶謫せらるゝの時御船讃岐沖にて風波に遭ひ、香川郡香西浦に假泊せらるゝこと三日、平雅

祭日 陰曆六月十三日 九月十三日
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十坪
崇敬者人員 百二十八人

(三七) 讚留王神社 陶村字猿王

祭神 武鼓王

由緒 武鼓王南海の惡魚を退治し當國綾曠野に留り給ひ終に此の地に於て薨去あり。こゝに葬り奉るといふ。武鼓王は讚留王と稱せられ、地名猿王は讚留王の轉なりと。

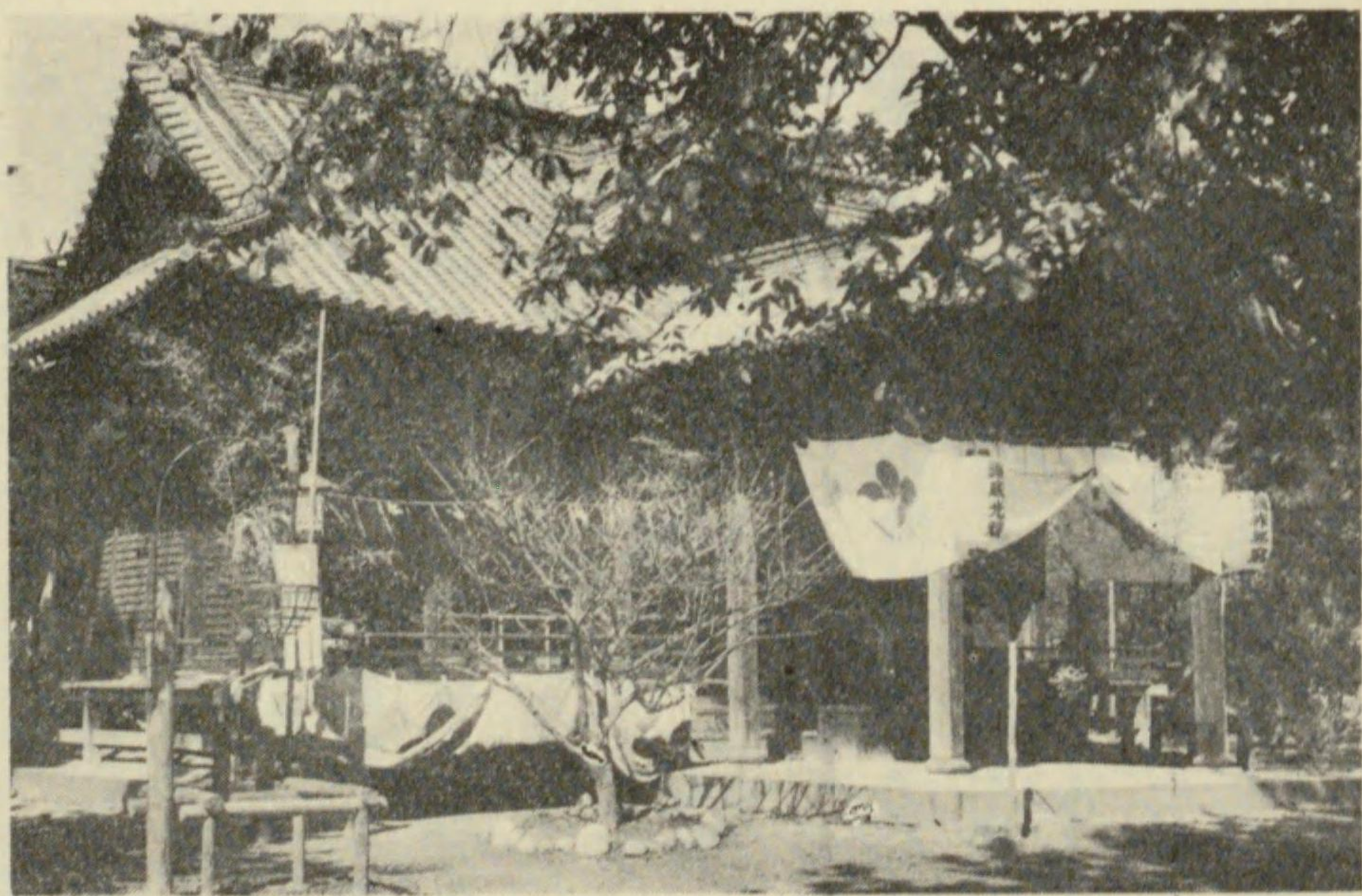
祭日 十月二日 主なる建造物 神座のみにて社殿無し
境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 四百人

一一 瀧宮村

(三三) 縣天滿神社 瀧宮村大字瀧宮

祭神 菅原道真公 野見宿禰命 島田忠臣命 渡會春彦命
(一)に曰 菅原道真公 相殿 吉祥姫 御子等

具、秦久利、龍燈院空澄等知遇を辱うせしもの到りて謁す。別離に臨みて公射ら裝束の上衣を脱し、自畫の像を添へて空澄に賜ひ、且つ囑するに身後の事を以てせらる。延喜三年二月二十五日公筑紫に於て薨せらる。その報一度傳はるや國民痛悼措く能はず、龍燈院空澄等主唱し、天曆二年二月二十五日御任國中の官舎跡に祠



を建て、龕に賜ふ所の御裝束及び尊像を奉安して祭祀を嚴修せり。これ當社の起原なり。

康曆年中細川頼之社頭を再建修補し、毎歳米二百石を献じて當社及び瀧宮神社の祭祀料となす。天正年中兵火に罹りて炎上、同十五年國守生駒近規、由緒を調査して再建し、米四十石を寄進す。松平頼重國守となるや先規に倣ひ社領の寄進ありて代々藩主亦之に倣ひ明治初年に及べり。元文六年羽床郷の田岡治郎兵衛社殿を修補し、文政五年國中の崇敬者並に大阪講中よりの寄進により本殿、拜殿、玉垣を始め諸般の増改築ありて輪煥の美稀に見る所といはれしが、明治六年西讃の暴民所々の役館に放火せし際、西隣龍燈院の一部を役場に使用せし爲め同年六月二十八日放火され、可惜類焼の災にかゝれり。依て再び四方崇敬者により明治二十一年一月七日を以て新築落成せり。明治九年二月十四日縣社に列せられ、同四十年三月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 玉藻集 全讚史 生駒記 古今勝圖繪 神社考)

例祭日 四月二十五日

特殊神事 瀧宮踊神事 瀧宮踊は一に念佛踊と稱へられ毎歳陰曆七月二十五日を以て當社及び村社瀧宮神社に於て行はる。踊の起源は仁和四年大旱の節國守菅原道眞公雨を城山に祈ること七日にして、甘雨大いに至り三日三夜に及ぶ。

國民大に歡びて國司邸に集り歡喜舞踏せしに始まるといふ。これより毎歳村社瀧宮神社前に於て謝徳會を爲し踊を行ひしが、菅公筑紫に薨するに及びて公の冥福を祈る爲に念佛を唱へたるにより俗に念佛踊と云ふ。往古は國中より行はれしが、後阿野、鵜足、那珂の三郡より行はれ、南條組(北村組)、北條組、坂本組、七箇村組等ありて毎年輪番に之を行へり。那珂郡の七箇村組は明治中期以後行はれずして、現今は坂本組、南條組、瀧宮組が順年之に當る。踊の手振は建久年間僧源空(法然上人)の附けしものと傳へ、各組によりて少しく相違あれども、一組二百名内外とし、當日組員は境外に勢揃ひし、騎馬、甲冑、帶刀、拔刀、棒突、長刀の者之を警護し列を整へて社前に到る。下知役(錦の袴、梅鉢紋入の陣羽織を着る)中踊(袴を着、菅笠の縁に青赤の紙片を房の如く垂らす)小踊(袴をはき襪をかかけ花笠を被る、十二三歳の小童)願成就所役等ありて社前に大なる輪扇を作り、修祓の後下知役頭は貝の調子によりて大なる團扇を擧ぐることを數回、これに續いて願成就所役は「なつばいどうや」と發聲す。周圍に輪形を作れる諸員之に和して太鼓、笛、鉦、法螺貝等の囃子につれ一整に踊る。踊の一仕切(一庭といふ)を終らむとする時下知は聲高らかに

(七三) 三穗神社 瀧宮村大字瀧宮字大喜來

祭神 大歲神

由緒 瀧宮村縣社天滿神社境外末社。口碑の傳ふる所によれば、往昔孔聖廟と同一境内に奉齋せられたるが、何れの頃にか現在の地に遷座せるものなりといふ。

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三百〇七坪 崇敬者人員 百五十人

(七四) 孔聖神社 瀧宮村大字瀧宮字大喜來

祭神 孔子

由緒 瀧宮村縣社天滿神社境外末社。仁和年間菅原道眞國司として在任中、國司廳の傍にありし國學内の聖堂に安置ありし孔子像を此の地に遷し、聖廟を建て、春秋釋奠を行ひ、且つ子弟を教養せし所なりと云ふ。世俗久正權現と稱へて崇敬厚し。全讚史に「久正大權現祠 在瀧宮北松崎」土人云上古大社也遇天正兵火而廢今尙其地有沈灰一問其主則不知何神城山逸民曾讀菅家文章有州廟釋奠有感詩……以此觀之州中有聖廟明矣然今無

に「願成就なりや」と云ふ。願成就所役之を受けて「願成就なり」と云ふ。之を以て一庭を終る。慶安元年高松藩主松平頼重、この踊を重要神事として制札を下し保護を加ふ。この制札今猶社寶として存し、今も踊の時は之を建て、踊を行ふ。

鬻換神事 三月二十五日 參拜の群衆手に手に木製の鬻換を持ち互に交換して福運に當りたるを吉とす。この行事によりて今までの凶を吉にとりかへる(鳥換、取換)の意なり。之を「うそかへ」といふ。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 奉幣殿 齋館
寶物 緣起書 龍燈院 寫經 菅公 畫 松平頼重 瀧宮踊制札 松平頼重

制 菅公文庫 其他十一點

境内坪數 千三百一十一坪

崇敬者區域及戸數 瀧宮村 七百〇三戸

境内神社 大池神社(大久保大學) 往古より瀧宮、陶、萱原しが、元祿年間久保太郎右衛門萬難を排して山田上村より三里十八町の水路を開き、原野悉く良田となる。村民久保太郎右衛門の恩頼を感謝して瀧宮村南原免と萱原村中島免とに祠を建て池宮と稱し奉齋す。祭神是なり。大正三年此の所に遷座して境内神社となす。

知_二其地_一者因_レ之考_レ之孔吳音久書記孔舍衛訓久左惠聖與_レ正同音訓然則久正者孔聖之訛也權現二字後人加之也蓋菅公屢來瀧宮則爲拜_二此祠_一也嗚乎千載寥寥無_レ檢_二此事_一者矣若有力者復_二此祠_一乎國家亦與_二此祠_一昌哉』とあり。即ち往古は社殿壯大なりしも天正の兵火にかゝり、其の跡に石造の祠を建て祀りしが、後に社殿を造營し改築修補今日に至る。(全讚史)

祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 五百三十五坪 崇敬者人員 五百五十人

(一五) 村瀧宮神社

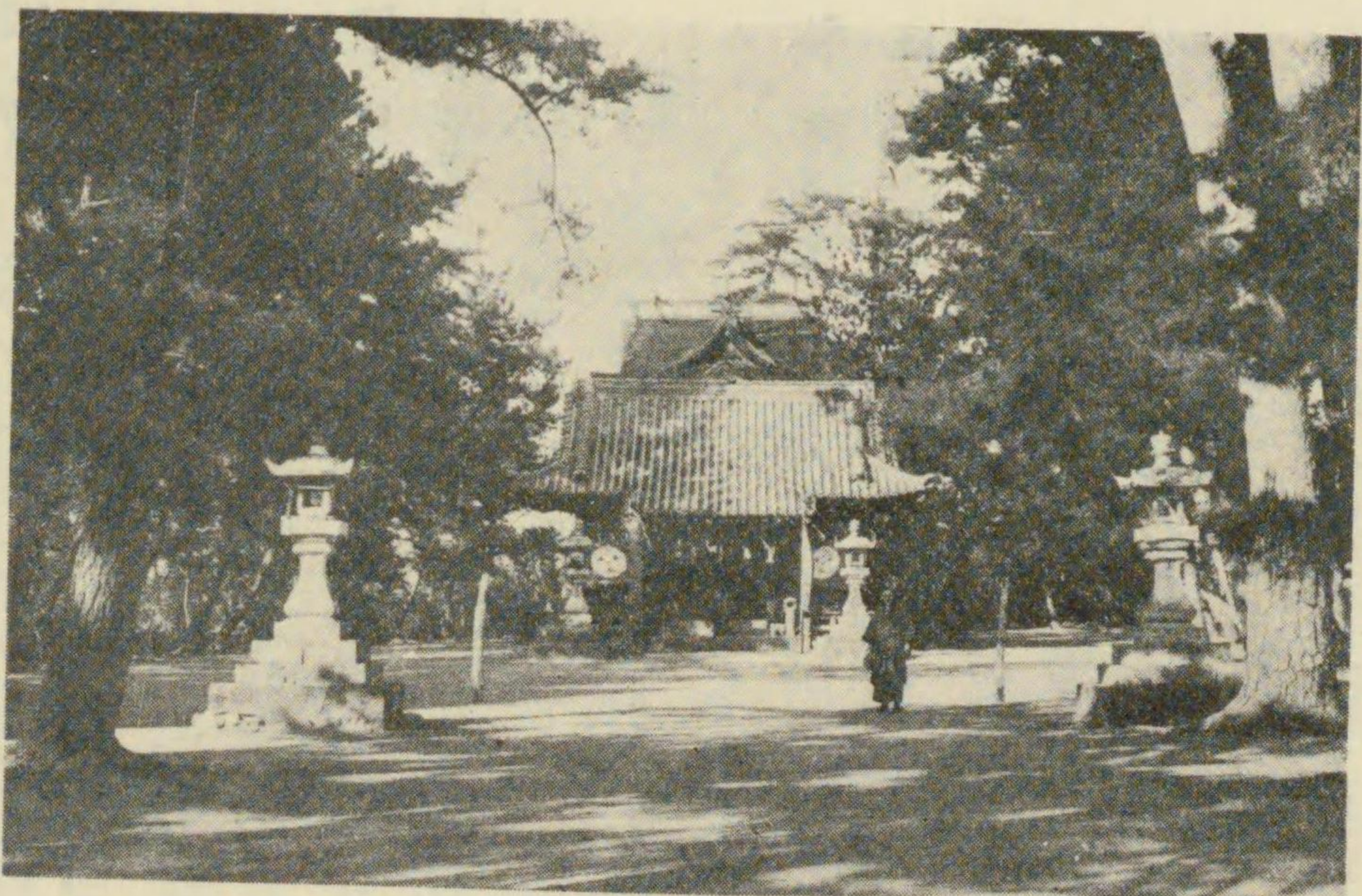
瀧宮村大字瀧宮字瀧宮 (瀧)

祭神 須佐之男命 (一に曰 相殿 櫛稻田姫命 八將之王子)

由緒 和銅二年(紀元一三六九)六月八日の創建と傳ふ。

元明天皇の朝僧行基瀧宮に來り駐錫のとき、綾川の巖窟の靈妙なるを見て、河中中島の巖上に經を誦し居たるに、巖下の淵より應現し給ふ。依て神託のまゝに川の邊に地を相し、和銅二年六月八日祠を建て、瀧宮牛頭天王と崇む。即

ち當社の起源なりと云傳ふ。當社別當北山龍燈院緣起其の他によれば、大同二年冬僧空海龍燈院に來りて當社の社殿傾廢せるを修



手寫して當社に祈願せり。康曆年中細川賴之社殿を再建し每歲二百石を寄進して當社及び天滿宮の祭祀料となせり。

村瀧宮神社 仁和中菅原道眞國司となりて瀧宮の官舎に居り、特に當社を尊崇ありて之が興隆を圖り、殊に寛平元年七月國內疫病流行するや、自ら般若心經を

天正年間兵火に罹り灰燼せしが、生駒近規國守となり、天正十五年その由緒を調査して社殿を再興し、牛馬安全の祈願社として米四十石を寄進し且つ社頭を修補す。松平頼重國守となるに及び先規に従ひて社領を寄進す。寛永二十一年

隨神門を建設、萬治三年本殿其の他を再建修補す。現今の拜殿、隨神門、神樂殿は其の時のものなり。爾來藩主松平家代々の寄進あり。明曆より文化に至る間は御高に貳厘宛掛け定米八十石麥三十石と定むべき旨代官所より指定あり。又藩主より指囑ありて屢々祈雨疫癘退除の祈禱を修す。藩

主の金毘羅參詣に際しては別當龍燈院に立寄り、必ず當社に參拜するを例とせり。古くより瀧宮村の産土神として里人の崇敬厚きは素より、往古より牛馬の守護神として國中は勿論岡山、徳島縣下に崇敬者多く賽者絶ゆる事なし。明治初年瀧宮神社と改稱し、同四年村社に列せらる。同年三月本殿を改築、十六年九月幣殿を改築す。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讚史 玉藻集 今名勝圖繪 讚州府志 神社考)

例祭日 十月八日

特殊神事 瀧宮踊神事 陰曆七月二十五日、起源、様式等

縣社天滿神社の項に於て述べたれば略す。菅公の祈雨によ

る報恩の謝徳會を其の當時の氏神たる當社に於て行ひ舞踊せしに始まり、天曆二年縣社天滿神社創立以來は兩社に於て行はる。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神樂殿 神饌殿 隨神門 神庫

寶物 牛頭天皇木像鎌倉時代の作と云ふ 外六點

境内坪數 三千八百五十一坪

氏子區域及戸數 大字瀧宮 四百四十一戸

(一六) 村八坂神社

瀧宮村大字萱原字北

祭神 須佐之男命

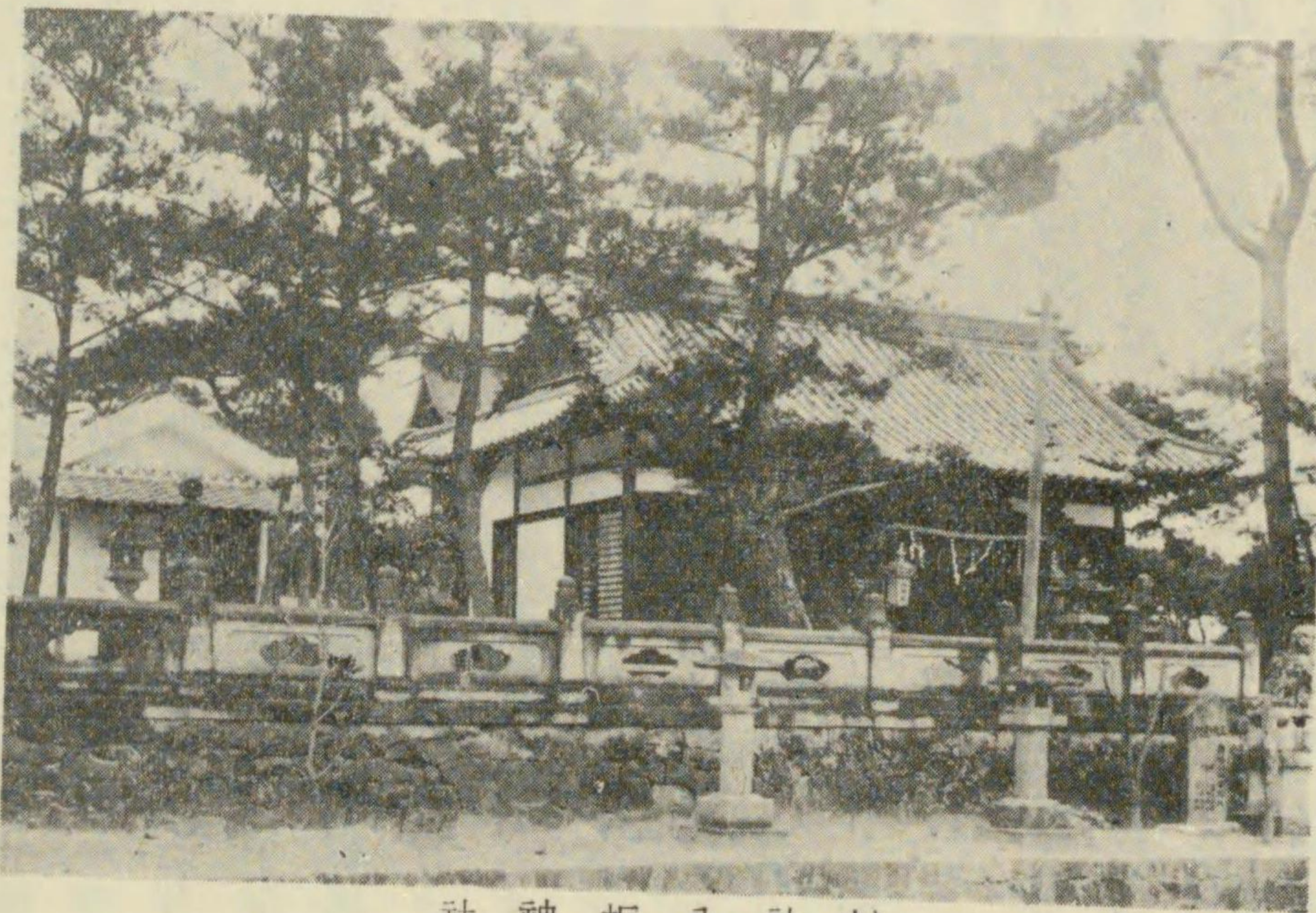
合祀祭神 水久麻理神

由緒 延曆年間讚留靈王の後裔にて阿野の人正六位上綾公菅鷹が、瀧宮牛頭天皇の御分靈を奉齋し、履脱宮と稱へ萱原村の鎮守となせしに始る。仁和年間菅公國司として瀧宮に居り、厚く尊崇して屢々境内に於て射御會を催されたりと傳へられ、この故事によりて明治初年の頃までは毎歲百々手神事とて齋庭に於て弓を奉射する儀式ありしが今中絶す。瀧宮柵木城主豊後守安資社殿を修理せしが、天正年

間兵火にかゝり焼失し、其の後氏子等之を再建す。寶永六年改築、弘化四年大修理、明治四十一年本殿、幣殿、拜殿を改築す。

明治四年村社に列せられ、大正十三年九月二十五日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

明治四十二年南大久保神社を合祀す。大久保神社は傳ふる所によれば高松藩の家老大久保主計、當村の士久保太郎右衛門を祀ると云ふ。太郎右衛門は延寶四年當村に生れ、性聰敏二十歳にして里



村社八坂神社

正となる。當時當村は灌漑水乏しく殆ど毎年旱害を蒙れり。太郎右衛門之を憂へ水利の策を樹て、綾川の上流山田村より萱原村大羽毛池に至る三里十八町の水路を設置せんとし高松藩に請願せしが許されず、僅に三千間のみ許可されたり。然れども水散逸して達せず。茲に於て意を決し一身を犠牲にして藩主松平頼常に直訴す。故を以て縲紲固圀の身となりしが、獄中尙ほ村民の飢餓を歎き工事の許可を哀願して止むことなし。藩主之を憐みて假出獄を許し、更に掘鑿地を踏査せしめしが、巖石多く開鑿の見込なしとて詮議せられざるのみか再び投獄されたり。茲に村民相携へて藩の大老大久保主計に出獄を哀願し、太郎右衛門の妻は毎朝夙に起き乳兒を懷にし六歳の兒をつれ、三里の道を金毘羅に詣で夫の出獄と工事の許可を祈願して烈風強風の日も缺くることなし。寶永六年正月出獄を許され且つ掘鑿を許可せらる。太郎右衛門喜悅喩ふるにもなく、身を堵して之が成就を誓ひ、私財を投じて同年四月十一日遂に萱原、瀧宮、陶三村に亙り五百餘町歩の灌漑水路を完成せり。而してこの業の成るや己の力に非ず、神明の加護と大久保大老の恩恵による所とし、寶永六年大羽毛池の邊に淨地を相し祠を建て、大久保主計の英靈を祀りて厚く尊崇せり。これ大久

保神社の名ある所以なり。正徳元年七月二十二日大久保太郎右衛門歿す。村民慟哭して息まず、即ちその靈を大久保神社に合祀して永く報恩謝徳の祭典を行ひ來れりと。

例祭日 十月十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 御供殿 神庫

境内坪數 五千九百三十三坪

氏子區域及戸數 大字萱原 百七十六戸

(一七) 池宮神社

瀧宮村大字萱原字北

祭神 住吉大神

由緒 往古羽床上村に溜池ありて北條郡八ヶ村(加茂村、神谷部、松山村、高屋、林田村、坂出町、西庄、金山、坂出)に灌漑せり。當社はその池の宮として奉齋せられしものなりしが、其の池廢池となりて當社も亦廢社となり、神靈は綾北大政所に遷座せられ、假宮として祭られしが、綾北各村を灌漑する北條池の築造せらるゝに至り、嘉永六年六月十日北條池畔に社殿を建て池宮住吉大神と稱へ、前記八ヶ村民の崇敬する所となりて現在に至る。毎年の例祭は水利關係町村の神職



交々齋主となりて之を奉祀し、又關係各村より毎年二組輪番にて獅子舞を奉納する例なり。

祭日 五月十日

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四百六十六坪

崇敬者 坂出町 林田 加茂 松山各村の住民

(一八) 郷社 御山八幡神社

瀧宮村大字北字大山

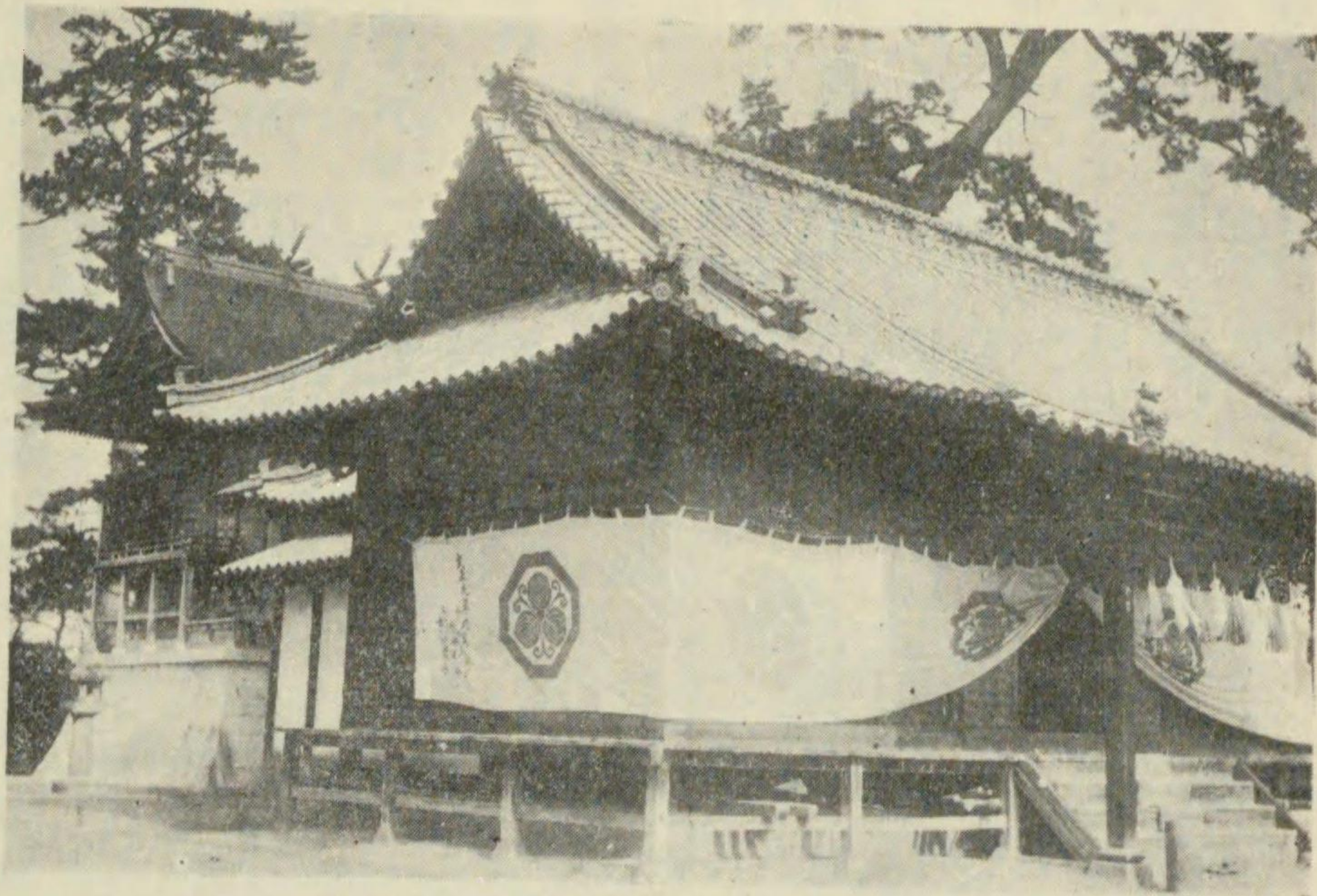
祭神 譽田天皇(一に曰 相殿 大己貴命 少彦名命)

由緒 貞觀年中山城國男山八幡宮を此處に勧請し、其の後領主羽床伊豆守社殿を造營し神領を寄進して羽床郷の氏神として奉齋す。當地は羽床の北に當るを以て北村と稱し、山を御山と號す。天正年間長會我部氏の兵火に罹り社殿悉皆燒失せしが後之を再興せりと傳ふ。全讚史には『雄山八幡宮 在北村傳云祠羽床伊豆守先祖也後以應神帝配之羽床上下小野有岡北村五村之社也』とあり。大正四年二月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(全讚史 古名勝圖繪)

例祭日 九月二十九日

主なる建造物 本殿 上幣殿 幣殿 拜殿 假殿 神門
境内坪數 一萬二千四百三十四坪



郷社御山八幡神社

氏子區域及戸數 瀧宮村大字北 羽床上村大字羽床上 羽床村(大字小野字西ノ山、) 八百戸
(内間、福向を除く)

て公屢々來遊せらる。當社はその館址なり。羽床城主羽床伊豆守の臣に有岡牡丹と云ふ者あり。羽床七人衆の一人なり。代々有岡に住し當社を祭り來れり。世に有岡天神と稱す。(全讚史 今名勝圖繪 讃州府志)

祭日 二月二十三日 九月二十三日
主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百八十四坪 崇敬者人員 四十九人

一三 羽床村

(一八) 村松谷神社 羽床村大字小野字松谷

祭神 天常立尊 (二に曰 國常立尊)
由緒 社傳に、仁和年間菅公當國々守となりて瀧宮に居り北辰の祠を横山南谷に建つ、これ當社にして爾來小野村の産土神として之を奉崇し妙見宮と奉稱せり。領主羽床氏代々崇敬厚かりしが、應仁、天正の間戰亂相次ぎ頽破せしを、寛永年中津村某郷民と共に再興すといふ。玉藻集に「妙見

(一九) 倭百社 瀧宮村大字北字倭百

祭神 大國主命
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 十月二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四坪 崇敬者人員 七十人

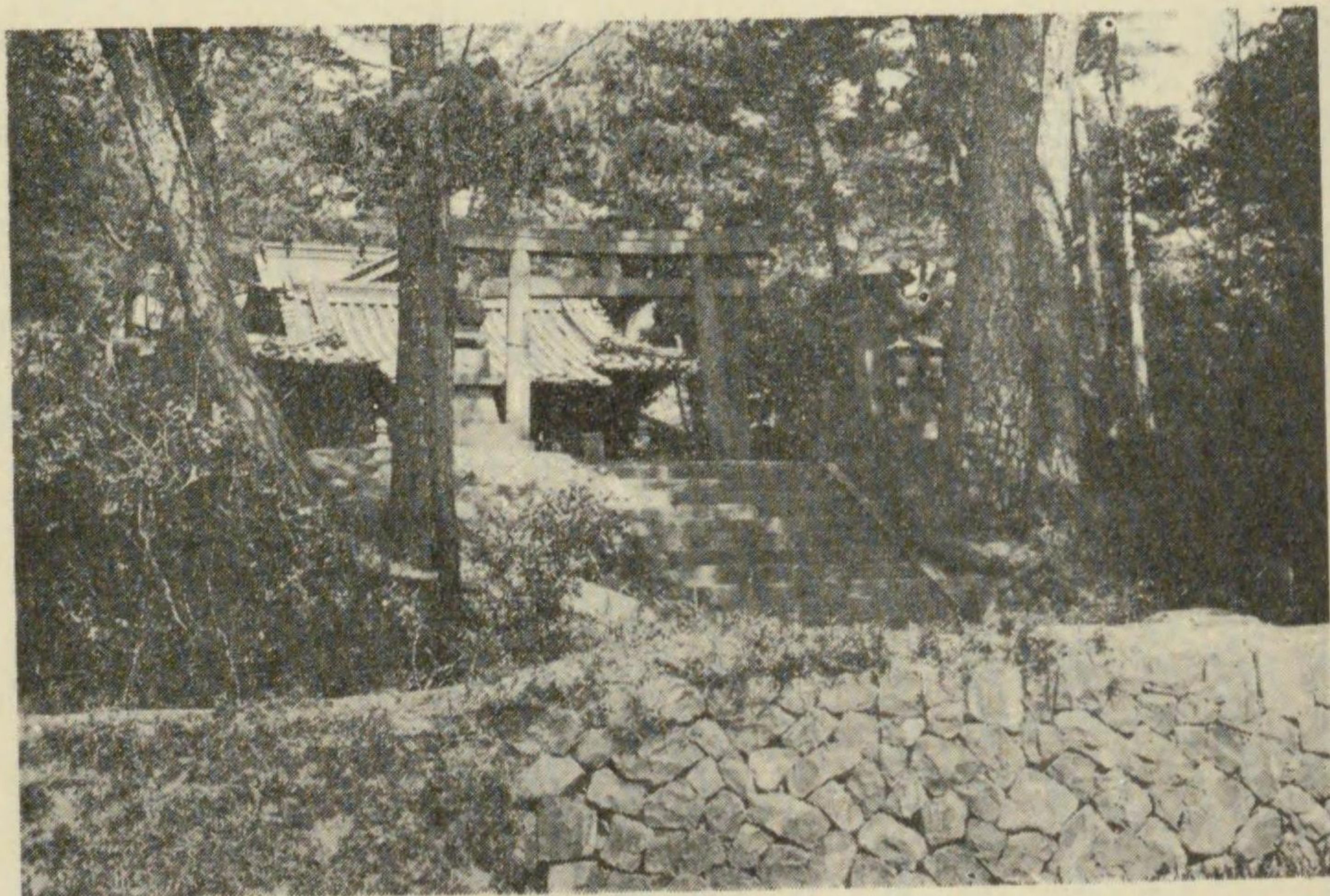
(二〇) 白石社 瀧宮村大字北字北川西

祭神 石凝姥命
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 二月十日 十月十日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二坪七合五勺 崇敬者人員 十八人

(二一) 松惠社 瀧宮村大字北字北川東 (有岡)

祭神 菅原道真公 (一に曰 相殿 大己貴神 少彦名神)
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社。仁和年中菅公讚岐守となり來りて瀧宮にあり。當時有岡の地に別館あり

大明神小野村社人千之太夫」と見ゆ。大正十年社殿を改築す。明治初年松谷神社と改稱。同十二年七月村社に列せられ、大正五年九月二十



村松谷神社

八日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讚史 今名勝圖繪)
例祭日 十月十三日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿 庫

境内坪數 千〇七十一坪
氏子區域及戸數 字内間 西ノ山 福向 二百五十五戸

(一三) 脇神社 羽床村大字小野字浦山

祭神 大己貴命

由緒 社傳によれば、延喜年間出雲國より當地に來住せる者あり、常に杵築大神を崇め祠を建て氏神となし地名に因みて和氣大明神と奉稱し、又己が姓をも脇と稱せりと。其の裔孫脇糸目羽床伊豆守の長吏となり當社を崇敬す。糸目は羽床七人衆の一人にして豪勇の聞えあり、天正年中仙石氏に従ひ九州に歿す。三代物語に『脇宮 在羽床小野脇 脇糸目立之』と見ゆ。寛永年中糸目の子孫再興す。(三代物語 全讃史 羽床村誌)

祭日 四月七日 十月七日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百五十坪 崇敬者人員 百二十人

(一四) 白梅神社 羽床村大字小野字白梅

祭神 菅原道真公

由緒 口碑に、菅公瀧宮に在住の頃此處に白梅ありて遊覽せらる。公薨去の後一祠を建て公を祀れりといふ。

祭日 九月二十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九坪 崇敬者人員 二十五人

(一五) 奥谷神社 羽床村大字羽床下字奥谷

祭神 日本武尊

由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外攝社。社傳に、羽床庄司資高の創祀する所にして御靈大明神と奉稱し、羽床氏代々之を尊崇せしが、天正年中羽床氏没落の後頽破せしを寛永年間再興すといへり。全讃史に『古傳云桓武御宇早良太子井上内親王之靈爲邪崇僧正最澄奏帝造祠祭之是御靈之初也其後有八所之御靈也土人云是則大林氏之祖也今按大林氏之祖有邪崇者祠之乎』と見ゆ。元祿元年轡奉獻の事羽床村誌に載せたり。

祭日 十月九日 (玉藻集 全讃史 古名勝圖繪 羽床村誌)

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫

境内坪數 千九百四十四坪 崇敬者人員 二百九十人

(一八) 山神社 羽床上村大字牛川字室田上

祭神 大山祇神

由緒 山田村社松熊八幡社境外末社。口碑に依れば、曆應年間の創祀にして、其の後現在の社殿まで三度改築せりと傳ふ。

祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十六坪 崇敬者人員 約百五十人

(一九) 大塚神社 羽床上村大字牛川字大塚

祭神 大己貴神

由緒 山田村社松熊八幡社境外末社。口碑に、初め郡内西分村字常清宮ノ谷の地に一祠ありしが、貞治年間洪水の爲め流されて當村に到れり。依て村内鎮守神として祀るといひ、一説に洪水のありしは天文九年なりとも云へり。而して今常清に大塚林といふ林ありて當社と縁由ありといふ。現存の棟札に『寛文九年施主山田兵左衛門』とあり。兵左衛門は當村水原氏の祖なり。

祭日 十月八日九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

(一六) 高見峯神社 羽床村大字羽床下字湯谷

祭神 國常立尊

由緒 瀧宮村郷社御山八幡社境外末社。寛永年中高見峯に於て雨請せしに、靈驗ありしを以て祠を建て祀るといふ。(古名勝圖繪 羽床村誌)

祭日 六月十四日十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十四坪 崇敬者人員 二百八十人

一四 羽床上村

(一七) 物見岡神社 羽床上村大字牛川字苑尾

祭神 大物主神

由緒 山田村社松熊八幡社境外末社。古老の口碑によれば、寛永年中祈雨所として祠を立て奉齋せしが、寛文年間焼失、其の後再建せしといふ。

祭日 陰曆六月十四日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十九坪 崇敬者人員 約五十人

境内坪數 三百〇三坪 崇敬者人員 約五百人

(一五) 阿佐川神社

祭神 崇徳天皇
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 十月一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五坪 崇敬者人員 三十八人

(一六) 城山神社

祭神 少童命 (二に曰 水分神)
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 七月十五日 九月十五日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 千百十一坪
崇敬者人員 二百八十人

(一七) 田村神社

祭神 大己貴命 少彦名命 保食神 (一に曰 天明玉命)

祭日 陰曆六月七日 九月十八日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二千二百二十六坪 崇敬者人員 八十五人

(一八) 池谷神社

祭神 正哉吾勝々速日天忍穗耳命 天穗日命 天津彦根命 活津彦根命 熊野櫛樟日命
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社。社傳に、羽床庄司資高の妻懷妊の時天神地祇に祈りて賢兒を得んことを乞ふ。時に神告あり、資高神告に従ひ祠を建て王子大權現と稱して之を祀る。羽床氏代々崇敬厚かりしが、天正年間同氏没落の後里人安産の神として祭祀すといふ。全讃史に『王子權現在羽床上村此祠主天照大神五男神乙武河内主之』と見ゆ。(玉藻集 古名勝圖繪)
祭日 七月十九日 十月二十日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 九百九十一坪 崇敬者人員 百二十人

大己貴神 少彦名神

由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 一月十八日 十月十八日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 四坪
崇敬者人員 十人

(一九) 横關神社

祭神 天香語山命 (一に曰 天道根命)
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 一月二十五日 九月二十五日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 七坪
崇敬者人員 十人

(二〇) 八坂神社

祭神 素戔鳴命
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社。全讃史に『今瀧氏始祠之故曰今瀧與瀧宮同軌之神也』と載せられたり。
羽床上村大字羽床上字梅木(今瀧)

(二一) 長谷神社

祭神 天太玉命 天道根命
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 一月十四日 十月十四日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 五坪
崇敬者人員 三十八人

(二二) 葛巻神社

祭神 大山祇命
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社
祭日 陰曆一月十日 六月十日 十月十日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二坪
崇敬者人員 五人

(二三) 兜神社

祭神 譽田天皇 (一に曰 相殿 仲哀天皇 神功皇后)
由緒 瀧宮村郷社御山八幡神社境外末社

祭日 七月二日 九月二十五日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 四坪

一五 西分村

(一九) 村 椎尾八幡神社 西分村字大行

祭神 應神天皇

由緒 天正年間兵火により古記録焼失せしかば、夫以前の由緒詳ならず。傳ふる所によれば、菅原是善讚岐守たりし時（嘉祥二年菅原是善兼讚岐權介となる）其の臣に青井對馬なる者あり。是善歸京の後當村に住し官許を得て貞觀二年山城國石清水八幡宮の分靈を椎尾山に迎へ椎尾八幡と稱し此の地の産土神となせりといふ。長尾大隅守社殿造營ありしが天正年間兵火に焼失、時に東分村福宮八幡亦災火に罹りしかば當社に合祀し、爾來天和三年福宮八幡東分村に遷御までは東分西分兩村の産土神として崇敬せられたり。現存の棟札によれば明曆二年、寛文十年、元祿四年、享保七年社殿を再建ありたり。

となり慈雨沛然としていたる。依て其の山を高鉢山といひ其の嶺に當社を祀れりと云ふ。古來當村の祈雨所なり。

祭日 七月七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二千七百八十五坪

崇敬者人員 約千四百五十人

(二〇) 大相神社 西分村字大相

祭神 太玉命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四坪 崇敬者人員 約五十人

(二〇) 浦河社 西分村字大相

祭神 太玉命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。寛保年間當村

の川西五郎なる人創祀せりといふ。

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十四坪 崇敬者人員 約百六十人

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。（古名勝圖繪 香川縣史 玉藻集）

例祭日 十月八日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神庫

寶物 扁額、棟札、神鏡等六點

境内坪數 千七百八十六坪

氏子區域及戸數 字堂谷 大相 浦田 楠 境場 梶羽 二百三十六戸

境内神社 阿諏訪神社（天忍穗耳命） 長元二年（紀元一六八

幡宮に於て百手祭を行ひし折、一老翁來り小箱に矢を添へ置きと記せる神鏡一面あり急ぎ本社に祀り、嘉吉三年社殿を營みて本社境内に祀り、元和二年再建あり。天正年中本社に合祀、享保年中又社殿を造りて祀りしが、慶應元年八月八日洪水の爲め破壊せられ爾來本社相殿に祀れり。（古名勝圖繪 官社考證追録）

(二〇) 高鉢神社 西分村字高八（大相）

祭神 早佐須良姬命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。傳説に、弘仁

年間僧空海四國巡錫の際當郡粉所西村檉原に滞在せしが、當時同地は數ヶ月雨なく困窮の極にありしを以て祈雨を空海に乞ふ。空海乃ち雨を祈りしに忽ちにして低き丘陵高嶺

(二〇) 吉森神社 西分村字大相

祭神 埴山姫命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。當村に岡田丹

後守吉森なる人ありて、當社を創祀し産土神として崇敬せしが、長曾我部元親の爲めに滅亡し當社のみ残存せりと傳へらる。

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七坪 崇敬者人員 約三十人

(二〇) 大崩神社 西分村字大崩（大相）

祭神 太玉命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約二十人

(二〇) 福大社 西分村字堂谷

祭神 大國主命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。初め森の本といふ所にありて行洲五郎太夫なる人の創祀といふ。正保四年春三原七郎右衛門貞政に靈夢ありて森の本より現地に遷せり。大晦日の夜當社産子は戸を開きて徹夜する風あり。傳ふる所によれば當夜社内より異人出で乗馬にて産子の戸毎に巡視す。これ福神にして産子に福を授くるなりと。

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 五十二坪 崇敬者人員 約三百五十人

(108) 山 神 社 西分村字山角(堂谷)

祭神 大山祇命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪 崇敬者人員 約百十人

(109) 宮 谷 社 西分村字常清

祭神 天神七代地神五代

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。傳ふる所によ

れば昔當地の大相七郎兵衛常清が天神七代地神五代の神々を祭神として一社を創祀して氏神とせしが、天文九年洪水の爲め流れて牛川村に至る。乃ち同地に於て之を祀れるも羽床上村大字牛川字大塚大塚神社なり。當社は其の後元の位置に再興せしものなりと云ふ。

祭日 九月三十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 約三十人

(110) 常 清 神 社 西分村字常清

祭神 大山祇命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。口碑によれば當村の平山五郎光房の創祀といふ。

祭日 九月三十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約二十人

(111) 平 山 神 社 西分村字常清

祭神 瀧姫命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。當村大相七郎

崇敬者人員 約百三十人

(112) 大 將 軍 神 社 西分村字浦田

祭神 經津主命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。文祿年間鐘山林伐木中一口の劔を得たり。里人相議りて之を御靈代として一祠を立てたるもの即ち當社なりと傳ふ。

祭日 十月五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十坪 崇敬者人員 約百五十人

(113) 楠 神 社 西分村字楠西谷(楠木)

祭神 少彦名命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。應永の頃當村善福寺の住僧了西の弟分家して楠太郎兵衛正賢と云ひ、己が家の乾に當社を創祀して鎮守神となせりといふ。同家斷絶の後も善福寺の住職代々崇敬せり。(讃州府志)

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪 崇敬者人員 約二百人

兵衛常清の創祀にして當初は其の邸内鎮守なりしといふ。

主なる建造物 本殿 境内坪數 六坪

崇敬者人員 約二十人

(114) 大 西 神 社 西分村字浦田

祭神 稚産靈命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。天正年間阿波國大西の城主大西頼久、長曾我部元親に追はれて當國山田郷長柄に來りしが、其の末男頼俊當村に移り當社を創祀せりといふ。頼俊の後昆今猶存す。

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約百二十人

(115) 山 神 社 西分村字浦田

祭神 大山祇命

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。當郡陶村土肥三郎の創祀と傳へらる。

主なる建造物 本殿 境内坪數 十二坪

(三四) 岩角神社 西分村字岩角

祭神 大山祇命
由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社
祭日 九月二十六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十五坪 崇敬者人員 約十人

(三五) 松本神社 西分村字松本(梶羽)

祭神 天神七代地神五代
由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。傳ふる所によれば永祿年間當村浦田の松本源之進なる人、所々に鎮座せる小祠を此の地に奉遷し、天七地五の神と稱し崇敬、後人源之進の姓をとりて社號となし松本神社と稱すといふ。

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十五坪 崇敬者人員 百〇四人

(三六) 高尾神社 西分村字高尾

祭神 大己貴命

越え、川東村を経て當社前に到りしに、社前に曲り木多く繁茂して進むこと能はず、これ神慮なるべしとて當社に祈りしに、赤毛の犢一頭走り出で義經を導き、かくて遂に平氏を討伐す。是れ當社の加護に依るものとなし戰勝の後七堂伽藍を建立して教清寺と號し別當となす。社號を牛ノ子堂社と云ひ、社領八十石を寄進ありたりと傳ふ。このこと境内の碑文に見ゆ。細川頼之亦戰勝を祈願せりと。天正年間土佐勢の兵火に罹り教清寺と共に焼失、其の後再建して牛ノ子堂大明神と稱へしを、明治初年曲木神社と改稱す。

(玉藻集 古名勝圖繪)

例祭日 十月十七日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 隨神門

境内坪數 千二百〇七坪

氏子區域及戸數 字曲木 猪尾 炭ヶ内 閉 百數十戸

(三九) 栗地賀原神社 西分村字猪尾(曲木)

祭神 大山祇命

由緒 西分村村社曲木神社境外末社

祭日 十月二十六日 主なる建造物 本殿

綾歌郡

由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社
祭日 十月十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四坪 崇敬者人員 約五十人

(三七) 牟禮神社 西分村字山角(牟禮)

祭神 天兒屋根命
由緒 西分村村社椎尾八幡神社境外末社。明和年間當村の谷金作之を創祀すと傳ふ。

祭日 九月二十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九坪 崇敬者 創祀者谷金作の後裔

(三八) 村曲木神社 西分村字宮前(曲木)

祭神 天照皇大神 天太玉命 天兒屋根命
由緒 嘉保三年(紀元一七五六)の創祀といふ。青淵六郎兵衛政高なる富者あり、嘉保三年秋九月十七日夜靈夢に感じ、三峯山の西方山腹に社殿を營みて三神を祀り曲木免の産土神となせりといふ。
元暦二年源九郎義經平氏を追ひて阿波國より當國勝浦山を

境内坪數 二十坪 崇敬者人員 約五十人

(三九) 炭ヶ内神社 西分村字炭ヶ内

祭神 大山祇命
由緒 西分村村社曲木神社境外末社
祭日 十月二十六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十三坪 崇敬者人員 約四十人

(四〇) 藤川神社 西分村字藤川

祭神 大己貴命
由緒 西分村村社曲木神社境外末社
祭日 九月十二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九十坪 崇敬者人員 約三十人

(四一) 上岡神社 西分村字曲木

祭神 天鈿女命
由緒 西分村村社曲木神社境外末社。永長年間當村青淵

八七

六郎兵衛の邸内鎮守神として奉齋せられたるも、同家滅亡の後里人によりて祭祀し來れりと傳へらる。今は新名家一門に於て主として崇敬す。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五坪 崇敬者 主として新名家一門

(三三) 落合社 西分村字東平木(開)

祭神 猿田彦大神

由緒 西分村村社曲木神社境外末社。此の地山間にして谿谷多く、道に迷ふ者甚だ多し。青淵六郎兵衛の裔平九郎政久之を憂へ道しるべの神として當社を創祀せりと傳ふ。

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四坪 崇敬者人員 約六十人

(三四) 平見社 西分村字西谷(曲木)

祭神 金山彦命

由緒 西分村村社曲木神社境外末社。天正の始當國鶴足郡造田村に造田備中守なる城主あり。當社は造田氏居城の

鎮守神たりしが、天正の兵亂に落城の後城内に残存せしを、里人等神威を恐れ當地に奉遷せしものにして、大刀の鏑を御靈體とすと傳ふ。

祭日 十月二十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 八坪 崇敬者人員 約五十人

(三五) 猪尾神社 西分村字猪尾

祭神 大山祇命

由緒 西分村村社曲木神社境外末社。傳ふる所によれば天正年間當國鶴足郡造田村造田城主造田備中守正景の臣に猪尾五郎左衛門なる者あり、當地に居住す。其の母八十餘歳にして生ながら猫魔となり所々を歩行す。一日阿波國貞光の獵人小清友右衛門といふ者鶴足郡大川山に獵せし所、右の猫魔に會す。直ちに之を討ちしが血のみ落ちて姿見えす。訝しみて血を追ひゆけるに五郎左衛門の邸内に入る。依て其の狀を窺へば猫魔老母と變じ苦惱して遂に落命す。然るに其の邪氣同所の淵に沈み大蛇となり友右衛門を吞まんとす。友右衛門剛の者なればひるます遂にこれを退治たり。而して是れ全く山神の加護なりとて一祠を建つ。即ち

當社なりといふ。

祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 約八十人

一六 山田村

(三六) 村松熊八幡社 山田村大字山田下字松熊

祭神 譽田天皇

合殿 仲哀天皇 神功皇后 (一)に曰 仲哀天皇 神功皇后 姫大神)

由緒 天平神護元年の創祀と云ふも、天正年間長曾我部氏の兵火に罹り社殿並記録烏有に歸せしを以て往昔の由緒詳ならず。天平年間僧行基此の地に松熊寺を創建せし頃の創祀ともいふ。國守生駒氏の崇敬厚く社領九斗の寄進ありて松平氏に至りて猶繼續せしが、廢藩の時このこと罷みたり。全讚史に『松隈八幡宮 在山田上村 山田彌七以爲弓矢神三神領九斗松隈寺主其祭』とあり、玉藻集には『天平十一年行基菩薩建立元和年中再興』と見ゆ。古來山田郷

の大神にして山田八幡と奉稱せられ、翁媪夜話にも『山田八幡一郷社』と載せたり。

明治五年八月村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 翁媪夜話 古名勝 圖繪 生駒分限帳)

例祭日 十月五日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 寶庫 隨神門 社務所
境内坪數 五千七百七十四坪
氏子區域及戸數 山田村大字山田上 大字山田下 大字東分の大部分 羽床上村大字牛川 昭和村大字千疋の内字遠田 北原 富川 九百二十六戸

(三七) 杵築神社 山田村大字山田下字松熊

祭神 大己貴命

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社
祭日 陰曆四月十五日 九月十五日
主なる建造物 本殿 境内坪數 四坪
崇敬者人員 約二百人

(三八) 天満神社 山田村大字山田下字北代

祭神 菅原道真公

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社。天正年間の創祀といふ。世に北の臺天神と稱せらる。翁嫗夜話に『十河十郎吉保第三子池内孫五郎高教五代之孫主殿之助高晴世々居山田郡三谷村。天正十年秋土州元親將長曾我部五郎親政將五千餘人圍二十河城。是時城主存保有阿州。使三好軍人守之。池内高晴成城門。有力焉。……十一年五月元親又攻之。城中力屈糧盡棄城而去。於是高晴喪其封邑。退去南條郡山田村。其先高教曆應中屬細川頼春。與金谷修理太夫經氏。戰於豫効千町原。高教先進破之高教家世々有菅神自造小像。臨戰必懷此像。今出萬死。得一破堅陳。有功者實賴其靈也。既版立祠而奉之。至高晴退去亦奉神像。徙此立祠于北臺地。奉之附田若干畝。充祭祀。今稱曰北臺天神。池内五太夫高堯者其後也』と見ゆ。(全讃史)
祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約三百五十人

(三九) 餅宮神社 山田村大字山田下字末則

祭神 天神魂命

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社
祭日 三月十八日 十月十八日
主なる建造物 本殿 境内坪數 九十坪
崇敬者人員 約百三十人

(四〇) 山王神社 山田村大字山田下字山王

祭神 大己貴命

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社
祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 七十二坪 崇敬者人員 約三百十人

(四一) 藤木神社 山田村大字山田下字北山

祭神 素戔鳴尊

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社
祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四十九坪 崇敬者人員 約九十人

(四二) 武内神社 山田村大字山田下字末則

祭神 武内宿禰命

由緒 十月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 六十八坪 崇敬者人員 約百七十人

(四三) 櫻本神社 山田村大字山田下字櫻木

祭神 天活玉命

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社
祭日 一月九日 五月九日 九月九日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三十六坪
崇敬者人員 約三百五十人

(四四) 城山太神宮 山田村大字山田下字城山

祭神 天照皇大神

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社。寛政十二年(紀綾歌郡

元二四四九)十二月火災に罹り社殿記録等焼失せしを以て由緒不明瞭なれども、傳ふる所によれば、今の社地は伊賀城の城跡にして、庄屋芋坂家の鎮守神とも、或は千疋村伊賀氏の鎮守神なりきとも云へり。(古名勝圖繪)

(四五) 王子神社 山田村大字山田下字正司

祭神 正哉吾勝々速日天忍穗耳命

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社。
祭日 三月十六日 十月十六日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 四百九十七坪
崇敬者人員 約二百十人

(四六) 鞍掛神社 山田村大字山田下字北山

祭神 天水分神

由緒 山田村村社松熊八幡社境外末社

祭日 陰曆六月十五日 主なる建造物 本殿

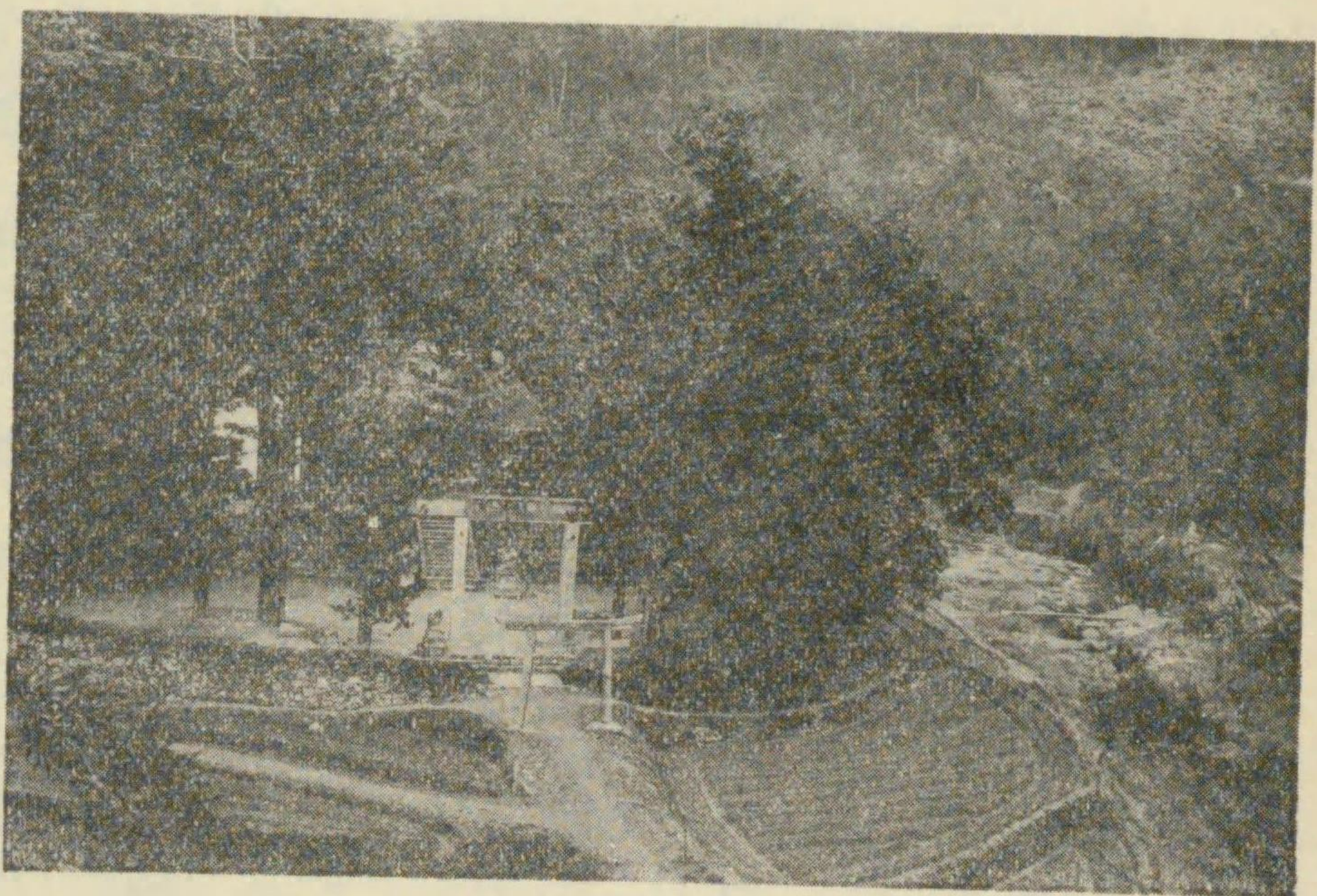
境内坪數 二百五十坪 崇敬者人員 約千六百人

(三三) 村長柄神社 山田村大字東分字西長柄

祭神 國常立命

合祀祭神 天津兒屋根命 大山祇命 猿田彦命 御歳神

由緒 傳ふる所によれば、元正天皇の御宇此の地の里人等綾川の上流中川原の西岸を開きて一祠を立て、山田郷内の氏神と爲し、仁和年間妙見大明神と改稱せり。天正年間兵火に罹り焼失、時に現社地に若宮と稱する一小社ありて其の境内なる杉の枝より毎夜光氣あり、氏子等之を異とし尋ぬるに妙見宮の御神體なりしかば、急ぎ其の地に祠を建てて祀るといへり。明治四年村社に列せられ、同十一年秋氏子の寄進により社殿を改築す。今の社殿これなり。初め當社は東分村一圓の産土神なりしが、明治十二年福ノ宮神社村社に加列と共に氏子區域變更せられたり。(古名勝圖繪) 明治四十一年境内若宮神社、山ノ山神社、字西長柄落合社、清水社、字九山神社、字大峯上ノ山神社を合祀す。合祀神社若宮神社は本社中川原より現地に移轉以前より鎮座ありて舊社なり



村長柄神社

例祭日 十月十日

主なる建造物 本殿

幣殿 拜殿 寶庫

境内坪數 千〇九十

四坪

氏子區域及

戸數 大字

東分の一

部 二百

十戸

(三六) 村福ノ宮神社 山田村大字東分字末國

祭神 應神天皇

(三九) 萩ノ戸社 山田村大字東分字角尾

祭神 國常立命

由緒 不詳

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 八十一坪

崇敬者人員 約百二十人

(四〇) 光道神社 山田村大字東分字高山

祭神 伊弉册命

合祀祭神 猿田彦命 國常立命

由緒 明治四十二年^{字友}尾崎神社、^{字宮}宮地神社を合祀す。

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 五十七坪 崇敬者人員 約百十人

(四二) 祐久神社 山田村大字東分字末國

祭神 大山祇命

合祀祭神 天種子命

由緒 明治四十二年^{字祐}石神社を合祀す。

由緒 文治年間の創祀といふ。傳ふる所によれば、平氏一ノ谷に敗れ當國屋島に籠城するや、源義經之を追討の爲め軍を進め、其の進路に當れる當地に留り四歩一といふ地に於て紙旗に「八幡大神」と書きて戦勝を祈りし後、此の旗に佩用の小柄を添へ里人に與ふ。次いで屋島落城の報傳はるや、里人篋に與へられし旗及び小柄を神體とし祠を建て之を奉じ福ノ宮社と稱せりといふ。寶治二年秋右神祿盜難に罹りしが、神體二軀のうち旗は残りて舊の如く社殿に鎮め奉れり。天正年間兵燹に罹り社殿焼失せしを以て西分村椎尾八幡社へ合併し、金幣を以て神體とせしが、天和三年舊社地に新殿を營みて遷遷せりといふ。

明治十二年七月二十九日村社に列せられ、同二十二年社殿を改築す。(古名勝圖繪)

例祭日 十月四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 寶庫

境内坪數 二百二十二坪

氏子區域及戸數 大字東分の一部 百五十三戸

境内神社 諏訪神社(建御名方神) 往古當村に壽樂寺といふ精舎ありて當社は同寺の鎮守神たりしが、壽樂寺廢寺の後字友行に奉祀せられたりしを天和三年本社福ノ宮神社再興の際境内に移轉せりといふ。

祭日 九月二十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四百九十八坪 崇敬者人員 約百九十八人

(三三) 山神 社 山田村大字東分字國弘中所

祭神 大山祇命
由緒 不詳
祭日 四月九日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百十坪 崇敬者人員 約百人

(三四) 黒谷 社 山田村大字東分字國弘下所

祭神 天御中主命
合祀祭神 大國主命 譽田天皇 田心姫命
由緒 明治四十三年 井上杵神社、字國弘、字土榎ノ下、
明神を合祀す。
祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百二十坪 崇敬者人員 約百人

(三五) 切山神社 山田村大字東分字國弘下所

祭神 天御中主命
由緒 口碑によれば、天明六年(紀元二四四六)八月切山
國弘なる人の創祀といふ。明治六年西讃の民暴動の際、當
社記録は村役人の手許に保管せられありしが、此の暴動に
より悉く烏有に歸したるを以て由緒詳ならず。

祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 約八十人

(三六) 地神 社 山田村大字東分字菖蒲

祭神 大己貴命
由緒 不詳
祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約二百人

(三七) 住吉 社 山田村大字東分字菖蒲

祭神 綿津見神

(三八) 地神 社 山田村大字東分字石原

祭神 大己貴命(一に曰 天照大神 大食津姫神 少彦名
神 大己貴神 埴安姫神)
由緒 不詳
主なる建造物 本殿 境内坪數 三十四坪
崇敬者人員 約七百五十人

(三九) 地神 社 山田村大字東分字奥谷下所

祭神 大己貴命
由緒 不詳
祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九十坪 崇敬者人員 約二百人

(四〇) 俊則神 社 山田村大字山田上字俊則

祭神 日本武尊
合祀祭神 大物主神 大己貴命 天照皇大神
由緒 元暦年間の創祀といふ。口碑によれば源平二氏屋島

祭日 九月二十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四百九十八坪 崇敬者人員 約百九十八人

(三三) 山神 社 山田村大字東分字國弘中所

祭神 大山祇命
由緒 不詳
祭日 四月九日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百十坪 崇敬者人員 約百人

(三四) 黒谷 社 山田村大字東分字國弘下所

祭神 天御中主命
合祀祭神 大國主命 譽田天皇 田心姫命
由緒 明治四十三年 井上杵神社、字國弘、字土榎ノ下、
明神を合祀す。
祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百二十坪 崇敬者人員 約百人

由緒 天明年中の創祀なりといふ。

祭日 四月十八日 十月十八日

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二十八坪
崇敬者人員 約百人

(三七) 住吉 社 山田村大字東分字大山田

祭神 表筒男命
由緒 不詳
祭日 四月十九日 十月十九日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三十一坪
崇敬者人員 約百人

(三八) 四步市 社 山田村大字東分字末國

祭神 伊弉册命
合祀祭神 少彦名命
由緒 明治四十二年 字四步市 藤森社を合祀せり。
祭日 九月二十一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十四坪 崇敬者人員 約百十人

に戦ひ平氏遂に敗るゝや、高位の一官女當郡粉所東村字前山の深林中に匿る。時に衛士政季なる者官女の後を追ひて當村まで來り人馬ともに疲れ死す。因て其の地を政季といふ、今正末といふは訛なり。政季死に際し徑五寸の花鏡を抱けり。裏に皇子と刻字ありしを以て村民神鏡なりとし一祠を立て政季の大小の劍を添へて祀り皇子權現と稱せり。天正年間兵燹に罹り鏡劍共に失ひしを以て村民復神鏡を摸造して奉祀す。後當村に花房五郎入道俊則といふ者あり、社殿を再建して産土神と崇敬せりといへり。明治初年皇子權現を改めて俊則神社と稱す。
大正二年^{宇一}山田神社、^{家田}城山神社、^{字俊}地神社を合祀す。

祭日 四月三日 十月十日
主なる建造物 本殿 拜殿 社務所
境内坪數 二百二十九坪八合五勺
崇敬者人員 約千三百人

(三五) 日吉神社 山田村大字山田上字市谷

祭神 軻遇突智命

由緒 不詳
祭日 陰曆六月十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十一坪 崇敬者人員 約百二十人

(三六) 遠郷神社 山田村大字山田上字清成

祭神 正哉吾勝々速日天忍穗耳命
由緒 不詳
祭日 九月十六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十三坪 崇敬者人員 約六十人

(三七) 山上神社 山田村大字山田上字鎌手

祭神 大己貴命
由緒 不詳
祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三坪 崇敬者人員 約百十人

由緒 不詳
祭日 十月二十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 七坪 崇敬者人員 約八十人

(三八) 正末神社 山田村大字山田上字正末

祭神 須佐之男命
由緒 不詳
祭日 陰曆九月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十坪 崇敬者人員 約八十人

(三九) 栗原神社 山田村大字山田上字栗原上

祭神 多義利姫命
由緒 不詳
祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十三坪 崇敬者人員 百七十人

(四〇) 耳賀飛神社 山田村大字山田上字遠郷

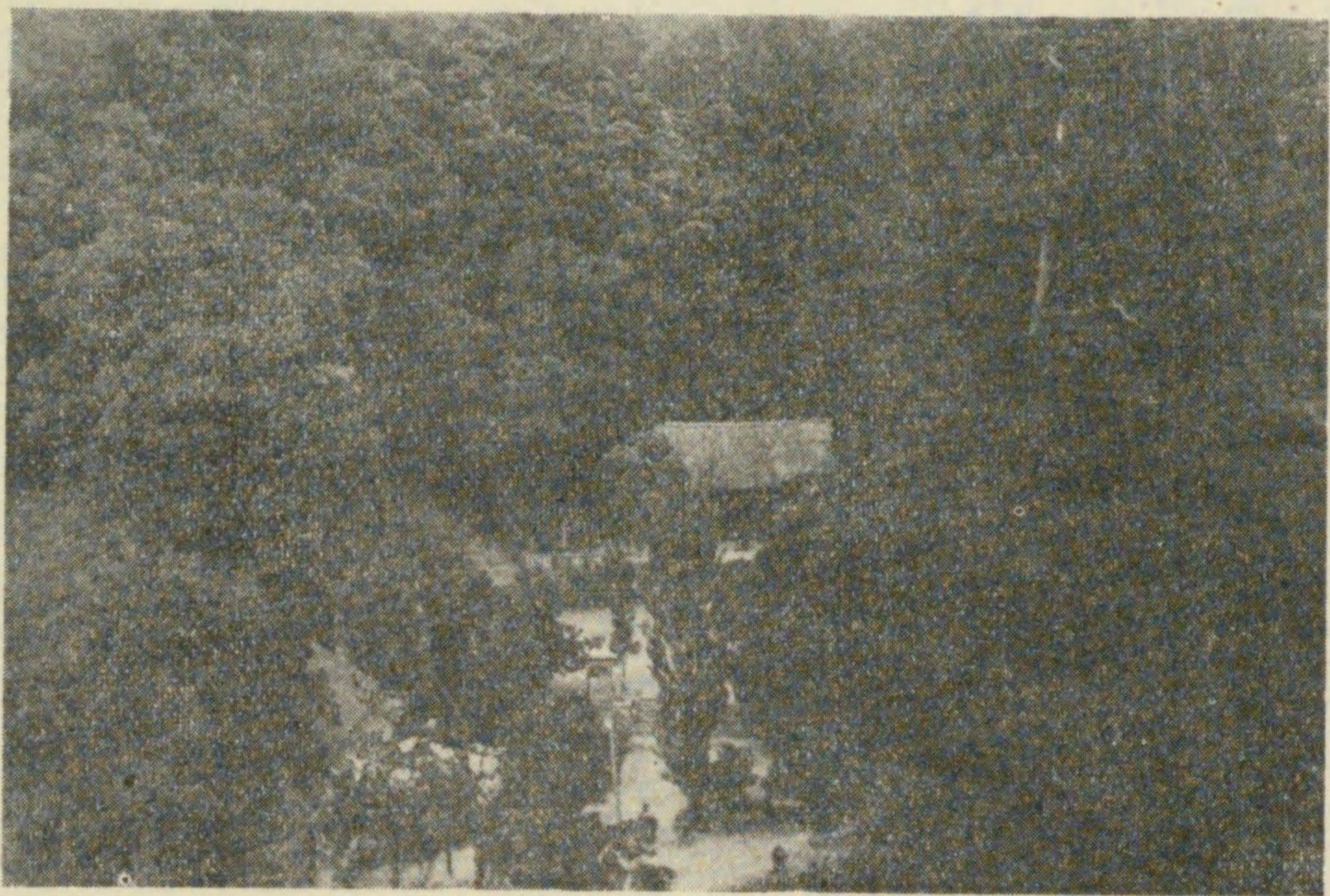
祭神 天水分神

一七粉所村

(四一) 郷川上神社 粉所村大字粉所東字宮地

祭神 水速賣命
由緒 創祀の年月詳ならず。往古より玉川の川上に鎮座ありて河上大明神と稱へられ、綾の日向王當郡の大領となりし以來其の裔代々崇敬せりといふ。天平年間僧行基社殿を修し、又巫子を置きて祭祀に與らしめたりと。又讃岐藤氏の崇敬厚く、當時は社僧松熊寺奉仕の三十五社中大社として祭祀も嚴重に行はれしが、細川氏末期に至り、松熊寺と共に荒廢して舊記等も失ふに至れり。元和年間政所岡安成當社及び松熊寺を再建す。寛永二十年夏大旱あり、庶民當社に祈りて驗ありしを以て、翌二十一年安成の孫政所岡四郎右衛門及び藤左衛門等社殿を改築す。この棟札現存せり。萬治三年九月再び岡四郎右衛門、並に藤左衛門寶殿を建立せり。寛文二年より八年に亘りて天災頻にありしも氏子等其の都度靈驗を蒙り、殊に同八年の大旱には慈雨大いに到り百萬石の名残れり。翌九年九月社殿を改築、爾來社僧を

廢して神主祭祀を司れり。元祿三年九月の棟札に『再建河上大明神社殿一字……本願高尾金兵衛同與衛門岡九兵衛同市右衛門當社神主 豊島刑部輔 吉成惣氏子 中』と見ゆ。 明治六年十月西の平地より今の地に遷座し幣殿、拜殿を改築、以來枋所東西二村の氏神となれりといふ。文化十三年洪水の被害あり、同年七月二十六日社殿改築、天保十三年本殿を改築して今日に至る。全讃史に『河上大明神 在田萬一



郷社川上神社

由緒 正平三年(紀元二〇〇八)細川頼之の創祀といふ。頼之正平二年阿波國猿養より此處に來り、上和田なる地名を改めて猿養と稱し、又多數の木を削失して枋を作り之を地上に竝立し以て敵の襲撃に備ふ。これ枋所の名の起源といふ。翌三年木戸浦山の南面に祠を建て妙見大明神と稱へ自ら祭祀せり。頼之後徙りて由佐村岡の館に居住せしが、屢從者をして代參せしめしと云ふ。明治三十年十月二十一日炎上、同三十二年新殿を造營遷座せり。明治初年猿養神社と改稱す。(古名勝圖繪)

例祭日 五月五日 十月五日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二千四百七十七坪
氏子區域及戸數 字木戸浦 猿養 百五十戸

(一三二) 和田神社 枋所村大字枋所東字中和田

祭神 天御中主神
由緒 枋所村社猿養神社境外攝社
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 千六百三十五坪 崇敬者人員 三十二人
綾歌郡

主丹生明神一村之社也清谷千本主之」と見ゆ。 明治五年郷社に列せらる。(古名勝圖繪 官社考證追録)

例祭日 十月九日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 寶藏 祓殿
境内坪數 二千七百五十三坪
氏子區域及戸數 枋所村 四百戸

(一三三) 新名神社 枋所村大字枋所西字上新名

祭神 高靈龍神
由緒 枋所村郷社川上神社境外攝社。山田村松熊寺寺領の水神として奉齋せられしといふ。俗に善女龍王とも稱せられ里人の崇敬厚し。

祭日 十月十二日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 六百七十七坪 崇敬者人員 二十二二人

(一三四) 村猿養神社 枋所村大字枋所東字木戸浦

祭神 天御中主命

(一三五) 相津神社 枋所村大字枋所東字日吉

祭神 天御中主神
由緒 枋所村社猿養神社境外攝社
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 九百七十九坪 崇敬者人員 二十一人

(一三六) 上王子神社 枋所村大字枋所東字上王地

祭神 素盞鳴尊
由緒 不詳
祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十七坪 崇敬者人員 十六人

(一三七) 大空神社 枋所村大字枋所東字永富

祭神 大山祇命
由緒 不詳
祭日 十月五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 一坪 崇敬者人員 十七人
九九

(三五) 貞重神社 粉所村大字粉所東字貞重

祭神 素盞男尊(一に曰 大國主神)

由緒 承久の亂に杵田貞重なる者封を奪はれて當地に來り住す。當社は其の邸の鎮護神なりしを後人社殿を造營して奉祭すといふ。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十坪 崇敬者人員 十七人

(三六) 永富神社 粉所村大字粉所東字貞重

祭神 罔象女神

由緒 俗に池ノ宮と稱ふ。天保二年(紀元二四九二)十一月永富池竣工の際、同池の鎮守神として奉祀せり。高松藩記天保二年の條に『十一月阿野南郡粉所西村鑄田池塘再築告成更號「永富池」とあり。永富池は初め鑄田池と稱し明和年中郡正高尾知用の創築する所なりしが、安永元年隄防決潰せり。是に於て高松藩、執政算政典等に命じて再築を計らしめ、文政十二年十二月工を起し十萬の人夫と二ヶ年の日子を費して天保二年十月工を竣る。永富池隄防告成

之碑に「於是官改鑄田一曰永富池置神祠於隄南山上使司祝歲時祭祀永鎮此池」と見ゆ。

祭日 十一月五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九十三坪 崇敬者人員 千〇五十人

(三七) 川上神社 粉所村大字粉所東字孫浦

祭神 瀬織津姬神(一に曰 瀬織津姬命 大山祇命)

由緒 延暦の頃僧空海此の地に來り一寺を建立せんとして大神を祀りて地を占ひたるも果さず。後人其の遺跡に當社を奉齋せりといふ。

祭日 九月十一日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十坪 崇敬者人員 三十七人

(三八) 竹本神社 粉所村大字粉所東字竹本

祭神 大己貴命

由緒 不詳

祭日 十月四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六十一坪 崇敬者人員 二十五人

境内坪數 九十一坪 崇敬者人員 約二百人

(三九) 白鬚神社 粉所村大字粉所西字宮谷

祭神 須佐之男命

合祀祭神 大山祇命

由緒 傳ふる所によれば、天正年間神餘彈正といふ士敗戦して當村陳ヶ峯に逃れ來る。時に白鬚の老翁現れて彈正を導く。彈正之に従ひゆきしに當社地にて忽然と消えたり。依て此の地に社殿を造營して奉齋し、己も亦此處に居住せりといふ。

大正二年^{字下}地頭^{西宮神社}を合祀す。

祭日 十月十六日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六百八十三坪 崇敬者人員 十九人

(四〇) 小野西神社 粉所村大字粉所西字南小野

祭神 大山祇命

由緒 不詳

祭神 猿田彦命

合祀祭神

伊邪那岐

命 大山

祇命 大

己貴命

由緒 世俗

川上神社と

奉稱す。

明治四十年

字堂 荒神社、

字山 山神社、

字横 横谷山

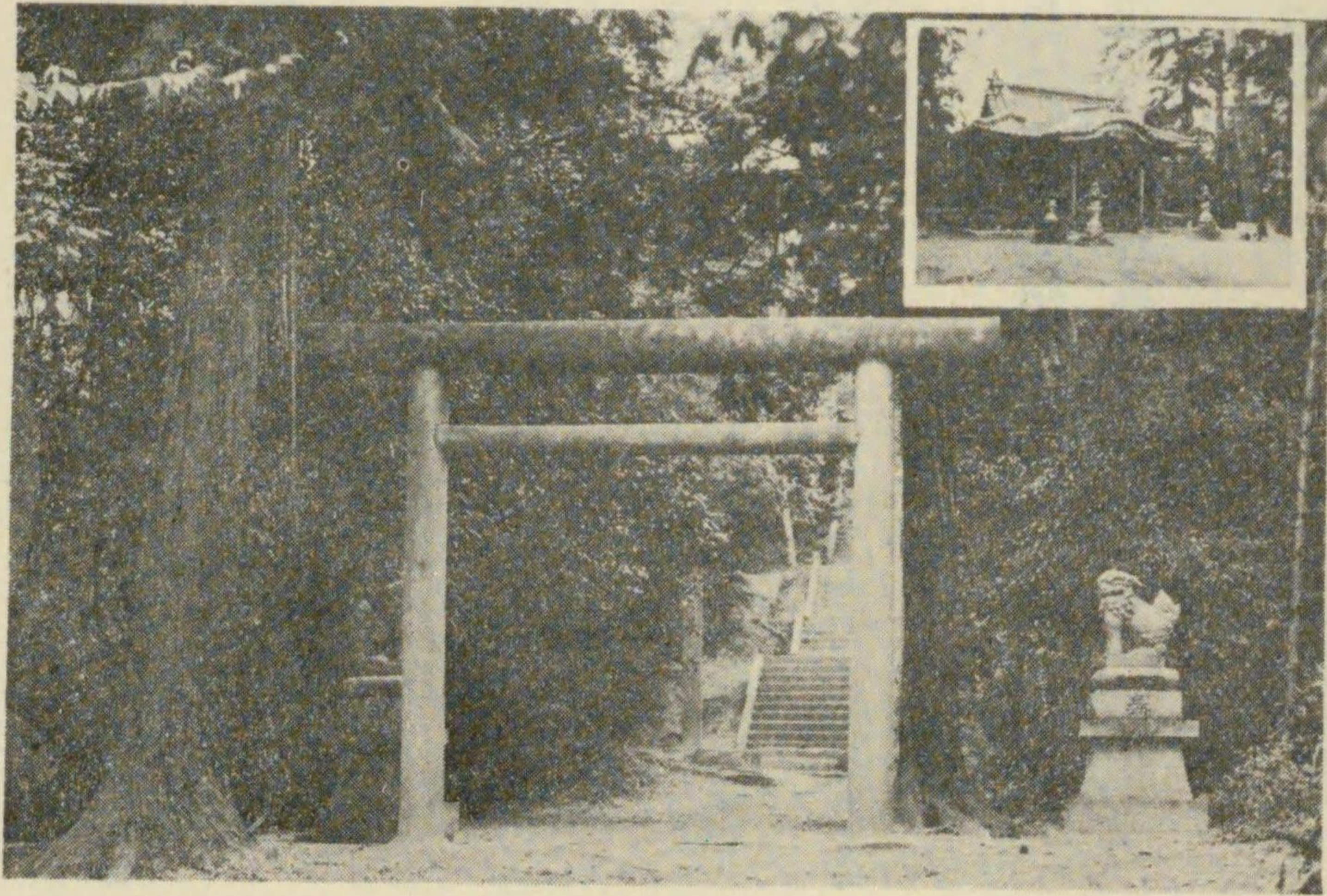
神社を合祀

大正元年

字北 横谷神社を合祀。

祭日 十月一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿



本谷神社

(四一) 本谷神社 粉所村大字粉所東字西本谷

祭日 十月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 六坪 崇敬者人員 八人

(三七) 小野東神社 粉所村大字粉所西字東小野

祭神 大山祇命
由緒 不詳
祭日 十月二十八日 主なる建造物 本殿
境内坪数 十五坪 崇敬者人員 八人

(三三) 北山神社 粉所村大字粉所西字北山

祭神 須佐之男命
由緒 不詳
祭日 八月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 四坪 崇敬者人員 十一人

(三七四) 西宮神社 粉所村大字粉所西字田万

祭神 天御中主神

(三七七) 相口神社 粉所村大字粉所西字萱ノ道上

祭神 宇受賣神
由緒 不詳
祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 五十四坪 崇敬者人員 十人

(三七八) 八幡神社 粉所村大字粉所西字朽木

祭神 應神天皇
由緒 はじめ松熊寺の鎮守神として奉齋せられたりといふ。もと上田の八幡と稱へられしが、今は俗に狀田の八幡と稱す。

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 五十二坪 崇敬者人員 十二人

(三七九) 赤羽神社 粉所村大字粉所西字赤羽

祭神 手力男神
由緒 赤羽は赤埴にして陶器の神として奉齋せしなりと傳

由緒 享保年間高尾金兵衛なる人此の地に金藏庵を創建の際同庵の鎮守神として奉齋せし所と傳ふ。

祭日 八月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 三十六坪 崇敬者人員 三十七人

(三七五) 峯内神社 粉所村大字粉所西字西峯

祭神 猿田彦命
由緒 不詳
祭日 九月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 九十四坪 崇敬者人員 十人

(三七六) 赤松神社 粉所村大字粉所西字一ツ橋

祭神 天御中主神
由緒 不詳
祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 八十一坪 崇敬者人員 七人

へらる。

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 五十九坪 崇敬者人員 九人

(三七〇) 船頭神社 粉所村大字粉所西字新名

祭神 大國主命
由緒 不詳
祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 十坪 崇敬者人員 四十二人

(三七二) 朽木神社 粉所村大字粉所西字東朽木

祭神 天思兼命
由緒 近江二郎左衛門尉高信五世の孫朽木守清なる人の創祀に係るといふ。守清法術に巧にして此の地に於て蛇をすくめたりとの傳説ありて守清屋敷、蛇卷岩、鏡岩等残り。

祭日 十月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 四十三坪 崇敬者人員 十六人

一八川津村

(三三) 郷春日神社 川津村字春日

祭神 天兒屋根命 武甕槌命 經津主神 日女大神
由緒 古くより川津村の産土神と崇敬せられ、三代物語に

『春日大明神東川津一郷社祀之』と見え、社家傳説聞書に『當村は藤原氏所領なる故大和の春日明神を勧請して在住藤氏の氏神と尊崇したり就中九條關白殿家とは因縁最も深かりければ神鏡奉納あり又御簾は數度奉納あり』と見え、道家關白處分記に『讚岐國河津莊春日社領』とありて、此の地は古く大和國春日神社の社領なりき。傳ふる所によれば景行天皇の御宇日本武尊の子建貝兒王南海の惡魚を征し給ひ、此處に鹿島、香取の二軍神を祀りて其の靈威を謝し給ひしかば、後人其の跡に祠を建て二神を奉祀せりといひ、讚陽記に『春日大明神鶴足郡川津東山にあり祭る所の神武雷命也景行之皇孫讚留靈王大魚御退治之時御利連之爲に件の神を此所に勧請す惡魔御退治の神威に依而氏神とす』と

あり。建長二年神託ありて、當村中塚の春日明神を遷座合祭し社殿を新築して大いに祀典を修む。(中塚の春日明神は貞觀元年の創建といへり)崇徳天皇御崇敬ありて侍臣をして奉幣せしめ給ひしと傳へられ、九條關白家亦厚く尊崇せり。天正十四年九月長尾大隅守元高の臣寺島六郎左衛門信豊なる者村民を督し再興せしが、後火災ありて殿宇、寶物、記録等烏有に歸し漸く衰頽せしを、寛文十年村民相謀り社殿を造營して舊に復し、文久元年修造を加ふ。即ち現在の本殿にして、幣殿、拜殿は大正初年の改築とす。

明治五年八月郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讚史 讚陽記 古名勝圖繪 寺島家古文書 川津村史稿)
境内に國榮神社、栗島神社、稻荷神社、若宮神社あり。國榮神社は國史現在社國榮神ならむかと云ふ。

例祭日 十月十七日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 神輿庫
寶物 木像二軀 棟札二點 外一點
境内坪數 三千〇五十五坪
氏子區域及戸數 字折居 鑄物師屋 峠 東山 春日 六反
地 中原 下川津 四百五十戸

境内神社

幸神社 (大己貴命) 大正三年字井手ノ上より境内年字井手ノ上明尾荒神社を合祀す。

(三三) 金山神社 川津村字鑄物師屋

祭神 金山彦命

合祀祭神 天香山命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。明治四十三年坂本

村大字東坂元谷^{字北}金神社を合祀す。

祭日 陰曆九月二十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 約六十人

(三四) 天皇神社 川津村字東山

祭神 崇徳天皇

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。社傳によれば、此

の地崇徳天皇御巡遊の地なるを以て祠を建て祭祀す。後廣

濱紀伊なる者社殿を改造すといへり。

祭日 陰曆八月二十六日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 八十五坪

綾歌郡

崇敬者人員 約二千二百人

(三五) 龍王神社 川津村字東山

祭神 龍神

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 陰曆二月初午日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 約四百二十人

(三六) 東荒神社 川津村字東山

祭神 大物主命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 陰曆二月初午日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十一坪 崇敬者人員 約百四十人

(三七) 池ノ神社 川津村字峠

祭神 罔象女命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 陰曆六月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五十七坪 崇敬者人員 約六百五十人

(二八八) 岡宮神社 川津村字山田(下川津)

祭神 大己貴命(一に曰 大物主命 大山咋命)

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。世俗當社を下の岡宮と云ひ、坂本村川原なる日吉神社を上の岡宮と云ふ。社傳によれば、紀夏井、近江國日吉神を坂本村川原に勸請せんとし、其の御靈代を近江より迎へて此の地に御休憩あり、依て其の跡に祠を建て奉祀すといふ。古名勝圖繪川津村安養寺の條に『鎮守社岡の宮大明神、本社拜殿』と見ゆ。

祭日 陰曆九月十四日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 百三十四坪
崇敬者人員 約四百六十人

(二八九) 浦神社 川津村字城ヶ鼻

祭神 大己貴命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約百四十人

(二九〇) 大荒神社 川津村字六反地

祭神 大己貴命 少彦名命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 陰曆八月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百十坪 崇敬者人員 約二百九十人

(二九一) 黒岩天満神社 川津村字折居

祭神 菅原道真公

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。世に黒岩天神と稱し、十國天神の一といふ。傳ふる所によれば、菅公當國々守たりし時雨を城山に祈り給ひ、靈驗ありて慈雨沛然として到る。公大いに悦び城山の西麓なる當地に下り天神地祇に報賽の詞を奏し給ふ。爾來此の地を祈雨所とし祠を建て、公を祀り請雨天神と奉稱すといへり。菅公城山より下山の砌、衆庶踊躍舞踏して之を迎ふ。この舞踏即ち瀧宮神事

(二九二) 田井荒魂神社 川津村字井手ノ上

祭神 大物主命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。當地佐藤家の傳ふる所によれば、當社は初め同家の崇敬神にして同家累代の祖靈をも合祭し次郎五郎荒神と稱し來れりといふ。

祭日 陰曆三月二十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 約百七十人

(二九三) 田井荒神社 川津村字井手ノ上

祭神 大物主命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約四百人

(二九五) 中ノ荒神社 川津村字井手ノ上

祭神 大己貴命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 陰曆六月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五十七坪 崇敬者人員 約六百五十人

(二八八) 岡宮神社 川津村字山田(下川津)

祭神 大己貴命(一に曰 大物主命 大山咋命)

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。世俗當社を下の岡宮と云ひ、坂本村川原なる日吉神社を上の岡宮と云ふ。社傳によれば、紀夏井、近江國日吉神を坂本村川原に勸請せんとし、其の御靈代を近江より迎へて此の地に御休憩あり、依て其の跡に祠を建て奉祀すといふ。古名勝圖繪川津村安養寺の條に『鎮守社岡の宮大明神、本社拜殿』と見ゆ。

祭日 陰曆九月十四日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 百三十四坪
崇敬者人員 約四百六十人

(二八九) 浦神社 川津村字城ヶ鼻

祭神 大己貴命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

(二九二) 田井荒魂神社 川津村字井手ノ上

祭神 大物主命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社。當地佐藤家の傳ふる所によれば、當社は初め同家の崇敬神にして同家累代の祖靈をも合祭し次郎五郎荒神と稱し來れりといふ。

祭日 陰曆三月二十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 約百七十人

(二九三) 田井荒神社 川津村字井手ノ上

祭神 大物主命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約四百人

(二九五) 中ノ荒神社 川津村字井手ノ上

祭神 大己貴命

由緒 川津村郷社春日神社境外末社

祭日 九月十日

主なる建造物 本殿

境内坪數 二十六坪

崇敬者人員 約百六十人

(三六) 郷八幡神社

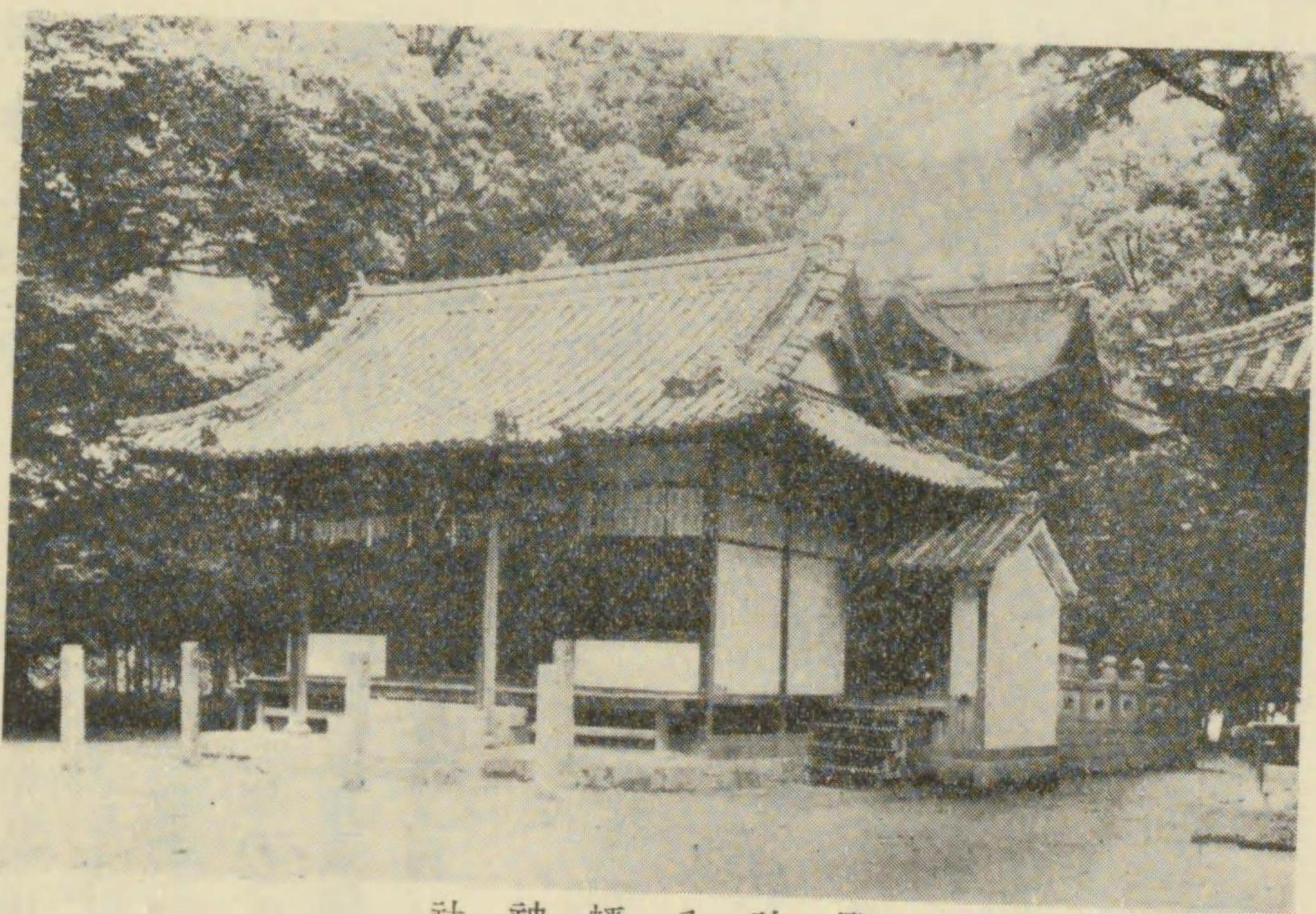
川津村字万町

祭神 品陀和氣命 息長帯比賣命 武内宿禰命

相殿 罔龍神 櫛磐間戸命 豊磐間戸命

由緒 天平八年(紀元一三九六)十一月川津郷の戸主布師首宮麻呂なる人己が祖武内宿禰を奉祀して川津の神と稱へ爾來其の裔孫崇敬し來りしが、貞觀元年三月字佐八幡宮の別靈を山城國男山に遷座の砌、當國飯山に對へる海上に紅白の八流の幡暫く留り飯山の麓に影向あり。村民敬祭して川津之宮に配祀し、以後八幡宮と稱へられ一郷の産土神として崇敬せらるといへり。初め鎮座の地は飯山の麓小山といふ所なりしを故ありて明應二年今の地に遷し諸殿舎莊麗を極めたり。依て時の人川津の大宮と稱し其の稱今に残れり。永祿十一年正月兵火に罹りて社殿、古記、寶物等烏有に歸したりしを後郷民再興す。全讚史に「大宮八幡在河津村」是蓋此近村之舊社是以稱「大宮」近村八幡祠多從「此社」分也祭田租一石四斗寶珠院主「其祭」と見ゆ。元和二年九月

及び元文五年改築あり。明治十一年村民協力して新築、同三十五年修築せり。



郷八幡神社

明治五年六月村社に列せられ、同十八年九月郷社に昇格同四十二年十月十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(古名勝今名勝) 例祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿 幣殿

氏子區域及戸數 字西又 西原 元結木 中塚 弘光 蓮尺 上西原 二百七十五戸

(三七) 菅原神社

川津村字弘光

祭神 菅原道眞公

由緒 川津村郷社八幡神社境外末社。社記によれば、天文二年(紀元二二一三)靈異のことあり、且つ學びの祖神なる故を以て奉齋せりといふ。享保三年十月社殿を再建、

現在の社殿は明治三十四年六月の改築に係る。

祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九十九坪 崇敬者人員 七十二人

(三八) 馬鋏神社

川津村字弘光

祭神 伊斯許理度賣神

由緒 川津村郷社八幡神社境外末社。寛平八年(紀元一五五六)四月當地小林氏の祖某の創祀といふ。文政十二年

九月社殿を再建、昭和二年九月拜殿を改築せり。

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百三十坪 崇敬者人員 三十八人

(三九) 千五百神社

川津村字中塚

祭神 天照大神

由緒 川津村郷社八幡神社境外末社。文龜年間靈驗を被りしにより創祀せし所といふ。安政二年社殿を再建、昭和十年二月本殿屋根を銅葺となす。

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百七十四坪 崇敬者人員 八十二人

(四〇) 荒神社

川津村字蓮尺

祭神 須佐之男命

由緒 川津村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 三百五十五坪 崇敬者人員 三十二人

(四一) 荒魂神社

川津村字蓮尺

祭神 大物主神

由緒 川津村郷社八幡神社境外末社。 應仁元年（紀元二二七）の創祀といふ。元文四年五月社殿を再建、大正五年六月拜殿を改築す。

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 二百四十六坪 崇敬者人員 三十九人

一九 土器村

(三〇四) 郷社 田潮八幡神社 土器村字山下

祭神 譽田別命

由緒 往古より津野郷の大社にして土器八幡宮と奉稱せられ武門の崇敬厚かりき。傳ふる所によれば、細川頼之、細川清氏を攻むるに當り當青野山に陣せしに、西長尾に在りし中院源少將頼之の陣を夜襲し頼之敗走す。少將の軍之を追ふこと甚だ急なり。時に頼之土器八幡宮に祈願しけるに、頼之の逃ぐる後より海潮満來りて田野を没し、敵遂に逐ふこと能はず。爲に頼之は無事なるを得たり。爾來田潮八幡と稱へらる。全讃史に『細川管領頼之攻三雄山陣之時所祈

也時源少將在西長尾以偏師襲管領營管領遁之敵即欲逐之潮隨管領迹漲田野是以敵竟不能逐矣」と見ゆ。一説に、頼之宇多津浦を發して軍に出でんとし青野山麓に來りしに山北海潮満々たり。時に頼之當社に祈りしに山上忽ちに光を放ち海水干瀉となれり。則ち進みて戦勝を得たりしかば、社領三十石を寄進せりと。頼之報賽して松樹を手栽せしが、後枝葉繁茂して數十歩にひろがり、これ則ち頼之掛引の松と稱さるゝものにして其の名高く今に至りて猶翠色翳鬱たり。慶長七年生駒一正高松城に移りし時當社を一時高松に移せりと傳説あり。其の後夫人養福院之を再興せりといふ。

明治四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 玉藻集 全讃史 古名勝圖繪)

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 神輿庫 神馬舎 遙拜所

境内坪數 三千三百三十八坪

氏子區域及戸數 土器村字高津 中原 西新 東西新 下新 駒ヶ林 産砂 二軒茶屋 山邊 中組 丸龜市渡場町 土居町ノ一部 五百二十戸

境内神社 稻荷神社(倉稻魂神)

天満宮神社(菅原道眞公) 山之神社(大山津見神)

荒神社(大直比神) 高良社(武内宿禰命)

和靈神社(不詳なるも山家公頼靈なるべし) 菴之森神社(不詳なるも素盞鳴命なるべし)

(三〇五) 拾二社 土器村字宮ノ浦

祭神 天御中主神

由緒 土器村郷社田潮八幡神社境外末社。 寶曆十三年の社記によれば、朱鳥元年五月奇異の傳染病流行せしかば國中の人民夫々産土神に詣で、悪病消除の祈禱をなせり。然るに香古村(此の地の古名)は人家六七戸にして未だ産土神なかりしかば、皇老文六なる人森里公といふ者に依頼して十二面の神鏡を受け十二社宮と稱し香古村の産土神として祀れりといへり。元祿五年神鏡難にかゝりたる爲め、金幣を以て神牀とす。寶曆十一年冬炎上、翌年九月本殿を造營せり。時に秋山上總介神號の白幣を奉納せりと。

祭日 十月十日 字北原 妙見神社を合祀す。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門

綾歌郡

境内坪數 千二百八十五坪 崇敬者人員 四百五十人

境内神社 地神社(地神大神) 山王宮(山王大神)

(三〇六) 荒神社 土器村字南三浦

祭神 大歳神

由緒 土器村郷社田潮八幡神社境外末社

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七十一坪 崇敬者人員 十七人

(三〇七) 妙見神社 土器村字川田

祭神 天御中主神

由緒 土器村郷社田潮八幡神社境外末社

祭日 陰曆八月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十七坪 崇敬者人員 約二百十人

(三〇八) 妙見神社 土器村字高津

祭神 天御中主神

合祀祭神 大山津見神 大歳神

由緒 土器村郷社田潮八幡神社境外末社。大正十二年
津高山ノ神社、字中荒神社を合祀す。

祭日 陰曆八月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九十六坪 崇敬者人員 約四百二十人

(三〇七) 荒神社 土器村字西村

祭神 大年神

合祀祭神 天御中主神 若宇迦咩命

由緒 飯野村社吉岡神社境外末社。明治四十五年

妙見神社、字新大川神社、字下土公神社を合祀す。

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二百十四坪 崇敬者人員 九十人

(三〇八) 荒神社 土器村字上分

祭神 大歳神

由緒 飯野村社吉岡神社境外末社

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七十一坪 崇敬者人員 二十人

二〇川西村

(三〇九) 村春日神社 川西村大字西二字宮西

祭神 天兒屋根命

合祀祭神 大年神 天御中主神 大山祇神 高籠神 天照

大御神

由緒 康保元年(紀元一六二四)龍王村地頭職菅原某軍神として創祀せりといふ。龍王村は西二村の古名なり。天正年間長曾我部元親當國に亂入の節兵火に罹り社宇悉く焼失す。時に別當某神像一軀を火炎の中より救出し奉り、寛永十四年新に本殿を營みて奉齋す。元祿七年九月十七日拜殿を新築、延享三年三月十六日本殿、拜殿を改築し、幣殿を新築せり。以上の棟札は元當社別當法樂寺の住職の裔西分村飯岡氏これを所藏すといふ。昭和四年五月本殿を改築す。明治五年八月村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌

氏子區域及戸數 大字西二 二百九十五戸

(三一〇) 二子山神社 川西村大字西二字山ノ側

祭神 大山祇神(一に曰 大山積神)

由緒 川西村村春日神社境外末社。初め丸龜城山に鎮座ありしが、慶長七年生駒一正同山に築城の際今の地に遷座せりと傳ふ。全讃史に「主人云寒川郡鶴羽海中、有島名丸龜、今此二子山昔從丸龜山、拔出來因其神曰龜山大明神、造丸龜城、時迎此神爲鎮守、故存舊名、曰丸龜、今則小祠也法樂寺主之」と見ゆ。明治初年までは丸龜地方よりの崇敬者も頗る多かりしといふ。(全讃史)

祭日 九月二十七日二十八日

主なる建造物 本殿 境内坪數 七十一坪

崇敬者人員 二百五十人

(三一) 齋神社 川西村大字西小川字岸ノ上

祭神 倭姫命(一に曰 合殿 日本武尊)

由緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社。社記によれば建

幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 古名勝圖繪) 今名勝圖繪) 明治四十一年條 荒神社、字土井荒神社、字西荒神社、山ノ神社。

荒神社、
字荒神社
庄龍 鍛冶
王 屋神社、
龍王神社
及び 境内
荒神社を
合祀す。

例祭日 十

月十六日

十七日

主なる建造

物 本殿

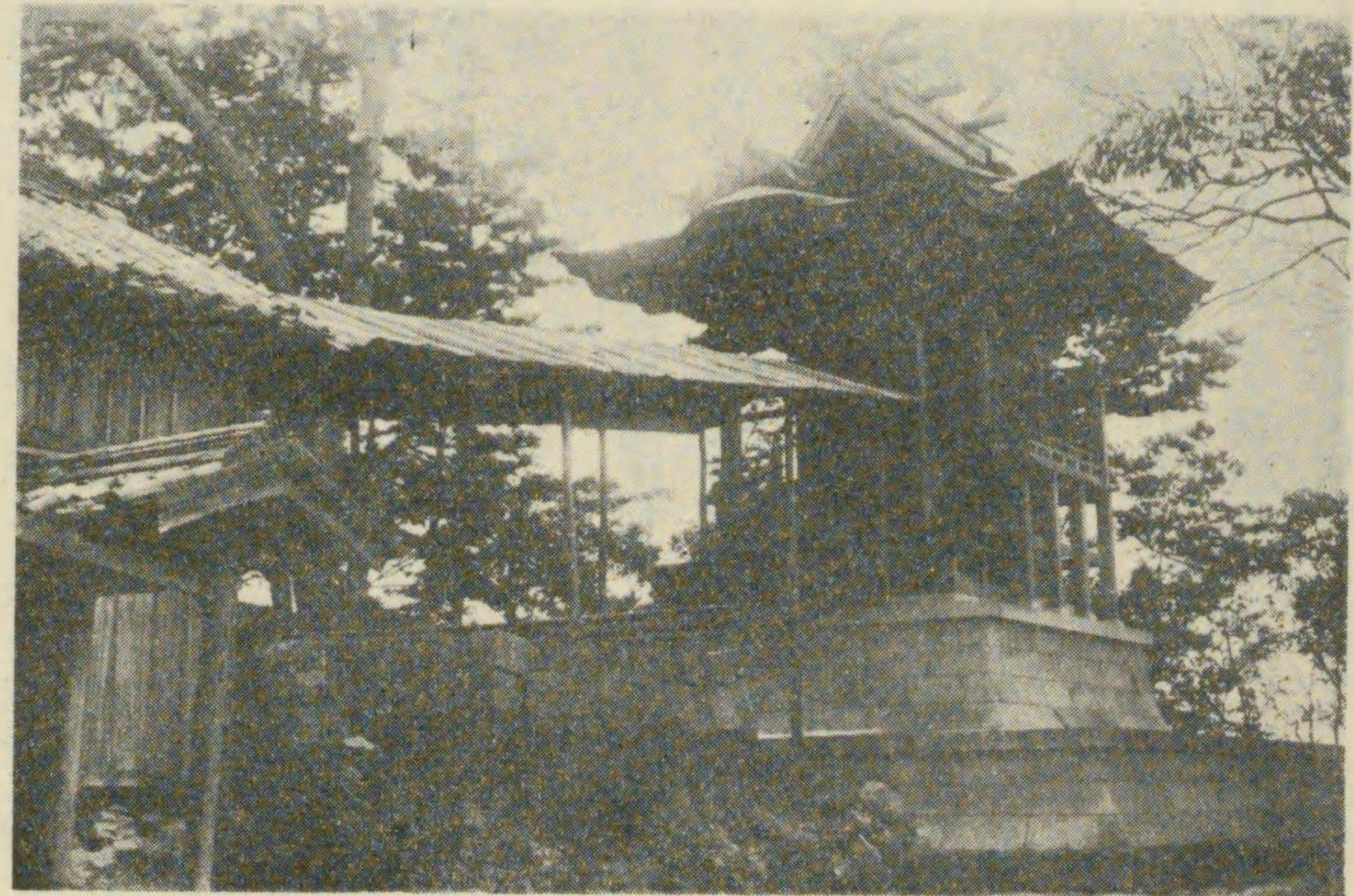
幣殿 拜

殿 社務

所 隨神門

境内坪數 二千四百七十九坪

綾歌郡



村春日神社

久年間、此の地の人三宅某に靈夢あり、「余は倭姫なり此の地に日本武尊及び余を齋奉れ、神靈たる神劍は日ならずして小川に流れ来るべし」と。依て里人と謀り靈夢に隨ひ祠を立て、二神を祀るといへり。當村字劍來に劍來神社ありて神劍流れ来るの傳説あり。天正年間兵火に罹り、寛永十四年社殿新築成り、同年九月遷宮式を行ひ、又元祿十一年屋根葺替あり。此の兩度の棟札現存せり。社地近傍に神子池、寺屋敷の地名ありて、往古神子及び別當西光寺奉仕の遺址なりといふ。

祭 日 十月九日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百二十六坪 崇敬者人員 三十八人

(三三) 木村神社 川西村大字西小川字木村

祭 神 五十猛命
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社
祭 日 十月八日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百五十二坪 崇敬者人員 三十八人

其の歸途高篠村羽間に休息中假睡す。時に一族人傍を通りて瑞雲棚引けるを見其の刀を奪はんとす。某驚き逃れしが追はれて竟に土器川に身を投ず。後其の刀流れて當村川端の岩石に突立ちるたるを里人等神劍と崇め祠を立て祀り、又劍の來りしに因り地名を劍來と稱せしなりといふ。當村字岸ノ上齋神社に建久年間神劍小川を流れ来るべしと靈夢ありし由の傳説あり。當社と同神社とは縁由深きものあるべしといへり。(齋神社の條参照)

祭 日 十月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百四十坪 崇敬者人員 二十一人

(三二) 稻荷神社 川西村大字西小山字劍來

祭 神 倉稻魂命
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社。口碑によれば、天正年間多度郡天霧山城主香川氏、長曾我部の軍に攻略せられ一族四散す。時に一族中の某逃れて此の地に來りしが疲勞して起つ能はざるに至れり。依て所持の守護神像を土中に埋めたりしを後發掘して祭るといへり。此の神體は稻束を荷へる神像なりしもいつのほどか亡はれて別に御靈代

(三三) 荒神 川西村大字西小川字木村

祭 神 大國主命
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社
祭 日 陰曆七月三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十二坪 崇敬者人員 三十八人

(三四) 天神 川西村大字西小川字香方

祭 神 菅原道真公
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社
祭 日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九十六坪 崇敬者人員 六十五人

(三五) 劍來神社 川西村大字西小川字劍來

祭 神 素戔鳴尊
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社。傳説によれば、昔那珂郡三條に刀匠あり。山村の某いたく其の刀匠の刀を得んと欲し、一日一束の薪を千束贈りて遂に一刀を受く。

を納められたりといふ。

祭 日 十月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九十二坪 崇敬者人員 百六十人

(三七) 池上神社 川西村大字西小川字劍來

祭 神 少彦名神
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社
祭 日 十月四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二十二坪 崇敬者人員 三十六人

(三八) 荒神 川西村大字西小川字中方

祭 神 素戔鳴尊
由 緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社
祭 日 十月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十三坪

(三九) 荒神 川西村大字西小川字中方

祭 神 素戔鳴尊

由緒 法勤寺村神社八幡神社境外末社

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 八十四坪

(三〇) 荒神社 川西村大字西小川字中方

祭神 素戔鳴尊

由緒 法勤寺村神社八幡神社境外末社

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十七坪

二二 飯野村

(三一) 社 飯神社 飯野村大字東二字山根

祭神 飯依比古命 少彦名命

合祀祭神 倉稻魂神 大年神

由緒 延喜神名式に『讚岐國鶴足郡小飯神社』とありて當國式内二十四社の一なり。創建年代古くして定かならねど

も、古事記の、伊邪那岐伊邪那美の二神國土を生みませる條に「次生伊豫之二名島此島者身一而有四面四……讚岐國謂飯依比古」。又播磨風土記揖保郡飯盛山の條に「讚岐國宇達郡飯神之妾名曰飯盛大刀自此神度來占此山而居之故名飯盛山」とありて、祭神飯依比古命は讚岐國魂神なり。當國に於て飯依比古命を祀れる神社は當國のみにして、夙に延喜の制官社に列せられ、祈年國幣にも預らせ給ふ。又仁和四年に神階を授け奉られしこと日本紀略に「仁和四年十二月十五日戊寅奉授讚岐國從五位下飯天神從五位上」と見ゆ。社傳によれば、代々の國司崇敬厚く、紀夏井國司たりし時數次奉幣あり。菅原道真常に參拜し歸任に際しては自作の木像を獻納せりと云ひ、現在境内神社菅原社には此の像を祀るといへり。神社は飯の山の山麓に鎮座す。大日本史神祇志に「飯神社今在東二村飯山下稱飯天神蓋祀飯依比古命即本國國魂神也」。全讚史に「飯神社在東二村飯山南邊古傳云此祠以飯依彦命爲主也以有以此神此山名飯山延喜時列于官社」と見え、飯山は其の山容富士山に類似せるを以て讚岐富士とも稱せらる。往古は山上に鎮座せしと傳へられ、今も不入山と稱する地域ありて或は大和國大神神社の如く山岳を以て神體と

氏子區域及戸數 飯野村大字東二字山根 下代 坂本村大字

西坂元字袖村 二百十三戸

境内神社 菅原社(菅原道真公) 菅公國守たりし時飯神社を

の木像を獻納せられたり。後人此の像を以て神體となし公を奉祀す。全讚史に「飯天神在飯神社境内故曰飯天神」也傳云菅公自作也正德時阿州之人盜此像去唯祠存焉文政九年從阿送此像來且云其地屢有妖筮之此像爲祟故復之矣」と見ゆ。

荒神社(大年神) 荒神社(五十猛命)

伊勢社(天照皇大神)

(三二) 板屋神社 飯野村大字東二字中宮(板屋)

祭神 草野比賣神

由緒 飯野村縣社飯神社境外攝社。社傳によれば、往古

當地へ來住せし者板を以て家を造りしかばこの地を板屋と稱す。子孫相續で當地に住し、南に分れしものを上板屋と云ふ。今の袖村これなり。時に飯山の峰に飯依彦命、草野姬命、天兒屋根命を祀りて祖神として奉齋せしが、後子孫四邊を開拓して、飯山の東は川津村、南は坂元村、北は東分村となり、板屋の地は西にありて二村と稱す。然るに祖神の鎮座地は川津村分となれるを以て、板屋の者其の祖神の村外にあるを苦みて三神を二村に遷座せり。當社はその中央

なせしに非ずやといへり。中古に至り山腹に遷座し、更に後年山麓に奉遷す。山腹には嘉永安政年間まで鳥居の礎石及び柱の一部残存しありしといふ。玉藻國神社考なる書に

『二村郷隔川而一村如兩村故號飯神社社在東二村二所祭飯依比古命今所祭二座其一未詳何神或曰少彦名命或曰鷲住王按山上有祠稱藥師拜之者曰一藥師如來一神農像蓋本所祭少名彦命而後世或移之于此代以此二像二と見ゆ。天正年間兵火に罹り社宇悉皆燒失、別當某僅かに神體二軀を奉じて火中より逃れ、元和八年九月社殿再興成りて遷宮を行へり。當時の記録は別當法樂寺の裔なる西分村飯岡氏之を藏すと云へり。寛文元年本殿を再建す。明治

初年村社に列せられ、大正十年二月一日縣社に昇格、同年同月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(三代物語 全讚史生駒記 讚岐國二十四社考 官社考證

神社叢錄 古名勝圖繪)

明治四十四年^{宇高}柳荒神社、^{宇山}荒神社を合祀す。

例祭日 十月十六日

主なる建造物 本殿 中殿 幣殿 拜殿 隨身門 神饌殿

祓殿 齋館 社務所

境内坪數 千七百二十四坪

綾歌郡

にあるを以て中宮と稱せらる。その後二村分れて東西となる。然れども板屋免は素より西二村なる龍王、鍛冶免の人々は當社に屬し氏神として奉齋せり。寛文中神社取調の際當社は西二村なる春日神社に寄宮となりしも、氏子の人々前叙の由緒を申立て、許可を得て元の板屋免に復遷し、三ヶ免の者氏子となること舊の如く、以て崇敬し來れりと云ふ。

又當社社頭に於て三ヶ年毎に陰曆七月二十六日坂本念佛踊あり。早魃時は里人大川山に登りて念佛踊を行ひて祈雨し、報賽の節は當社に於て踊を行ふを慣行とす。(今名勝圖繪)

祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 七百九十九坪 崇敬者人員 二百八十人
境内神社 荒神社(大年神) 水神社(高竈神)

(三五) 荒神社

祭神 大年神
由緒 飯野村縣社飯神社境外末社
祭日 陰曆九月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三千九百六十一坪

氏子區域及戸數 飯野村大字東二字中川原 大字東分字池ノ下 大字西分字西分 土器村字上分 西村 三百三十九戸

(三五) 青山神社

祭神 水波女命
由緒 飯野村村社吉岡神社境外攝社。由緒詳ならず。大正六年社殿を改築す。全讚史に『池宮大明神在吉岡村吉岡之村社也法樂寺主之』とあり。今名勝圖繪、若一王子大權現(村社吉岡神社)の條に『……我は善女龍王にて熊野の神若王子權現を海中守護し來る所の龍也……我を信仰せば必國中を守護し安穩ならしむべしと云了て夢覺たり。……吉岡の山の麓に少し池ありける所へ社を建て池の宮と云』と見ゆ。當社にはあらざるか。
祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 八百四十九坪 崇敬者人員 百七十七人

境内坪數 七十坪 崇敬者人員 約百七十人

(三四) 村吉岡神社

祭神 行方親王
由緒 古くは若王子宮と稱へられたり。口碑の傳ふる所によれば、往昔伊豫女と云ふ后、妊娠して流人となり網の浦に着き、其所にて王子御誕生あり。故に其の地を産砂と云ふ。後一祠を建て、王子を祀り若王子宮産神と稱し奉れり。安政四年四月十三日より社内鳴動すること三日、同月十九日神像出現し、その木像の背面に敏達二胤行方親王作の文字あり。今王領地と云へる地は當社舊鎮座地なりとも王子の御領地なりとも云へり。一説に當社は細川定禪の創祀と云ひ、又源頼朝讃州の刺吏に命じて之を祀らしめしところにして、祭神は熊野權現なりとも云ふ。明治維新の際吉岡神社と改稱し、同五年八月十二日村社に列せらる。明治四十二年本殿、幣殿、拜殿を改築す。(全讚史 三代物語 今名勝圖繪 讚陽記)
例祭日 十月十四日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門

(三六) 伊勢神社

祭神 天照大御神
由緒 飯野村村社吉岡神社境外末社。古來日天大明神と稱せられたり。大正五年社殿を改築す。
全讚史に『日天大明神 在東分妙見之端天照大神爲主矣 法樂寺主之』と見ゆ。
祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三百四十坪 崇敬者人員 三十四人

(三七) 稻荷神社

祭神 倉稻魂神
由緒 飯野村村社吉岡神社境外末社
祭日 陰曆九月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 約二百七十人

(三八) 九頭神社

祭神 天御中主命

由緒 飯野村社吉岡神社境外末社
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 百九坪
崇敬者人員 二百八十六人

(三九) 三寶荒神社 飯野村大字東分字鍋谷

祭神 大歳神

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社。大正十四年
字鍋谷 野郷神社を合祀す。

祭日 十月七日

主なる建造物 本殿

境内坪數 百三十二坪

崇敬者人員 二百二十五人

(四〇) 木佛荒神社

飯野村大字東分字山下

祭神 大歳神

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社。大正十五年

字西 山田 荒神社を合祀す。

祭日 十月十四日

主なる建造物 本殿

境内坪數 四十八坪

崇敬者人員 五十人

(三一) 荒神社 飯野村大字東分字壹里塚

祭神 大歳神

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 十月十四日

主なる建造物 本殿

境内坪數 六十坪

崇敬者人員 百二十五人

(三二) 地神社 飯野村大字東分字池ノ下

祭神 大歳神

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社

祭日 六月十日

主なる建造物 本殿

境内坪數 二十七坪

崇敬者人員 五十九人

(三三) 九頭神社 飯野村大字東分字本村東

祭神 天御中主命

由緒 宇多津町縣社宇夫階神社境外末社。今名勝園繪に

「九頭大明神社東分村にあり……當社は萬治元年九月勸請也傳云當社記に傳はらざる故去文化年中迄は勸請年月及

一一一 坂本村

(三四) 社三谷神社 坂本村大字東坂元字三谷



社三谷村

祭神 神櫛

王 五十

河姫命

(一)に曰

景行天皇

合殿

神櫛王

五十河姫

(命)

由緒 生駒

記に『城山

神社今社地

ヲ失フ、因

テ神號ヲ會

テ不知也。

祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二百十坪 崇敬者人員 三百七十人
境内神社 稻荷神社(倉稻魂命)

び祭日も宇夫階社と同様に毎年十月に祭來れり。當村侍末包元右衛門の祖職を奉納ありて祭日には必建來れり。文化年中彼職大破に及びしかば元右衛門修覆し且勸請年月記し度、宇夫階社と同く大同元年十月と草稿し西讚丸龜眞光寺隆道法印は大徳の聞えあり且書を能せしかば揮毫を願置しに或日老翁一人彼所に行きて九頭神の職は此通り認めくればよと書付を持來す。隆道法印開みれば萬治元年九月吉祥日と在りしかば其通り認め其書付も一所に歸せしが元右衛門職を見且驚き其由を聞て添書を見れど無かりし故色々老翁の事を聞て當所にはさる人なし彌怪み神の誤を示し給ふ事を恐れて是迄の祭日も改めんと思ひし所氏子繁造なる者此神の祭日往古九月十九日なる由粗聞たる事ありと云へり、且社僧も思はく祭日ありて……神慮に任すべしとて御園を引しに九月十九日とるべしと再三御園下りける故社僧始め皆々神徳の有難さに感じ夫より毎年九月十九日を以て祭日とす此神は深く蝮を嫌ひ玉ふが故津の郷に昔より蝮居らす云々とあり。

一摩尼珠院境内小宮、一府中村印鑰大明神、一東坂本村三谷宮、此三所各勸請ノ由ヲ云フ。何レゾ是ナラン」云々とあり。讚岐式社考に『城山神社ハ城山ノ東西ニアリ即チ東ハ阿野郡府中村印鑰大明神西ハ鶴足郡東坂元村三谷宮ナリ』と云へり。

傳ふる所によれば、正平十七年細川清氏兵を起して吉野朝に盡し、鶴足、阿野の諸山に壘を築く。城山亦その時の要所たり。細川頼之來つて清氏を攻む。清氏城山の神體を奉じ南麓割古に移す。今此の地を八幡尾と云ふ。天正の初年再び荒神林に移し、寛永十九年再建あり。元祿十三年又北山に遷座す。即ち現今の鎮座地なり。祠後に一大封土を設け神櫛王の古像を埋む。當社に城山神社の古額一面ありて往古より傳はれり。三谷八幡宮の稱は荒神林に遷座以後の名稱なりと云へり。

寶曆十一年本殿改築、天明八年拜殿改築、明治十一年本殿改築、同二十一年幣殿、拜殿改築。明治五年八月十二日村社に列せられ、大正五年三月九日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(生駒記 今名勝圖繪 讚州府志 香川縣史)

例祭日 十月五日
主なる建造物 本殿 幣殿 中殿 拜殿 神饌殿 御輿庫

明治五年八月二十二日村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(今名勝圖繪 讚州府志)

明治四十三年 宇久米氏
皇子神社
を合祀す
例祭日 十月五日
主なる建造物 本殿
中殿 拜殿 隨神門
寶物棟
札三點



村社 龜山神社

境内坪數 二千八百五十二坪
氏子區域及戸數 宇久米氏 鑄物師原 三之池 久保 二百

綾歌郡

隨神門

境内坪數 二千五百六十四坪
氏子區域及戸數 宇三谷 九十七戸

(三五) 村龜山神社

坂本村大字東坂元字明見

祭神 息長帶比賣尊 武内宿禰命 (一に曰 息長帶比賣命 品陀和氣命 武内宿禰命)

合祀祭神 讚留靈王之王子

由緒 社傳によれば、武内宿禰の裔坂本公此の地に住し、和銅年間國造の命をうけて宇佐八幡宮を坂元村西分の地に勸請せりと云ふ。而して今も猶その地を八幡原と稱せり。郷名坂本は坂本公の采地なりしに起因す。讚州府志には眞時村より迎へて祭ると云へり。

その後村老に夢告あり、吾れ龜山に鎮座して郷内を守らむと。村民畏みて坂本東分龜山の地に遷座し奉る。龜山は菅原道真雨を城山に祈りし時、庶民此の地に參集して伏拜せし地なり。當社記録の存するものなけれども、元和四年八月改築、寛永十五年九月造營、延寶五年十月改築、嘉永五年十一月改造の棟札あり。

八十七戸

(三六) 讚王神社

坂本村大字東坂元字本谷

祭神 讚留靈王

由緒 坂本村村龜山神社境外攝社。一に龜山神社と云ふ。傳ふる所によれば、建貝兒命勅を奉じて南海の賊を征し留つて讚岐國を守る。故に讚留靈王と稱し奉る。當社は王の嫡妻にして其の鏡を以て廟主となす。依て地名を姿見と云ふ。今姿谷と云ふは訛なり。戰國の世官民廟を訪ふ者なく廢亡し、後再建すと云へり。正徳五年十一月の棟札あり。(今名勝圖繪)

祭日 十月十日十一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千三百九十九坪 崇敬者人員 約八十人

(三七) 一王子神社

坂本村大字東坂元字秋常

祭神 秋津根王

由緒 坂本村村龜山神社境外末社。 鷲住王阿波國脚咋

邑にて一男を生む。野根氏その裔なり。讃岐に遷りて又一男を生む。その裔を高木氏と云ふ。當社は讃岐にて生れ給ひし一男秋津根王を祭る。飯山朝日向面岡を秋津根原と云ひ、山下の田園に宇穗常といふありて秋津根王の領邑なりしといふ。大正十五年二月社殿を改築す。

祭日 十月八日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百十九坪 崇敬者人員 三十四人

(三八) 金神社 坂本村大字東坂元字青石

祭神 天香山命

由緒 坂本村社龜山神社境外末社。坂本氏の所祭なりと傳ふ。續日本紀神護景雲二年の條に「讃岐國寒川郡人外正八位下韓鐵師部牛養等百二十人賜姓坂本臣」此等諸郷坂本氏之所居」とあり、當地亦坂本氏の居所にして當社は坂本氏が祭る所なりといへり。古くより金宮と稱せらる。此の地又鑄物師原とも云ひ、今猶田園の地下に鐵屑を多く藏す。昭和五年五月社殿を改築す。

祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百十四坪 崇敬者人員 七十八人

明應五年社殿再興の棟札あり。又年號不詳なれども寛永年間と目せらる、棟札に『此度三箇年中當國無守護一家光將軍御分領ノ時當郡御預り松平美作守其別當社及二破損二氏子以三書附一材木申請建立仕者也』と見ゆ。



村社吉日神社

嘉永五年郡内庄屋一統より石造高麗狗一對の奉納あり。世俗岡の宮と奉稱す。

明治五年村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(古名勝圖繪)

(三九) 荒神社 坂本村大字東坂元字三ノ池

祭神 保食命

由緒 坂本村社龜山神社境外末社。傳ふる所によれば、社地三ノ池は坂本郷の最高地に位するを以て村民祠を立て、保食神を祀りしなりと。

主なる建造物 本殿 境内坪數 十二坪
崇敬者人員 百五十人

(四〇) 村日吉神社 坂本村大字川原字日ノ本

祭神 大物主神 大山咋神

由緒 讃岐守紀夏井の創祀する所と云へども年月詳ならず。天安二年(紀元一五一八)十一月、夏井讃岐守に任せられ治績大に擧り國土豊饒なり。然れども國內水利未だ全からず。夏井自ら國中を巡歴して民事に勞す。一日此の地に來りて西南の山麓に清水の湧出するを見、里人をして之を掘らしめしに淵を得たり。夏井大に喜び、近江國より日吉神を勸請して祭れりと云ふ。

例祭日 十月十四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二千三百四十五坪

氏子區域及戸數 字下川原 坊 北岸 土居 百〇六戸

境内神社 地神社(天照皇大神 大己貴命 少彥名命)

壇安姬命 岡家女命 倉稻魂命 安政二年里正宮井房吉里人と共に創立す。房吉里事に勞すること多年なりしが、耕地に虫害の多きを憂へ當社を創立して災害を免れむことを祈れりと傳ふ。

(四一) 須賀神社 坂本村大字川原字南岸(岸ノ上)

祭神 須佐之男命

由緒 傳ふる所によれば、往古此の地大川あり。後移りて飯山の西を流るゝに至る。川原村といふはこれによる地名なり。當時田園いまだ藪く草木繁殖せり。大水の時大蛇あり出で、人を害す、里人これを患へ相謀りて祠を立て須佐之男命を祭る。これ當社なりと云ふ。

祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 六十八坪 崇敬者人員 約二百五十人

(三三) 池ノ神社 坂本村大字川原字山崎

祭神 彌都波能賣神

由緒 古老の傳ふる所によれば、高松藩士矢延平六捕見池を改築す。もと南北二つの池ありしを、改築に當りて合せて一池となす。當社はその北池の堤に鎮座ありしを此の時今の地に遷座すと云ふ。一に矢延氏始て之を建つとも云へり。矢延氏は延寶、天和の頃の人なり。

祭日 四月八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 八十九坪 崇敬者人員 約千五百人

(三四) 吳織神社

坂本村大字川原字法師原(楠見)

祭神 天萬擗幡千々比賣命

由緒 傳ふる所によれば當社は織工の祀りし所にして、古くは吳織大明神と稱せられたりと云ふ。應神天皇の御代吳より織女を召され、後これを四方に傳へらる。綾歌郡はもと阿野、鶺鴒の二郡にして、阿野は漢の轉にして綾織の産地たりしより起れる地名なりと云ひ、加茂村、川津村等にも猶漢織吳織の織女の塚あり。(讃岐通史)

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 千四百七十七坪 崇敬者人員 約五百人

(三五) 楠神社 坂本村大字川原字砂子

祭神 熊野久須毘命

由緒 履中天皇の御宇鷲住王阿波國脚咋より來りて綾歌郡富熊村に住し給ひ、こゝに薨せらる。一王子あり。父王に似て強力輕捷、武事を好み土人を集めて舩戲を爲す。當社はその王子の祭り給ひしところなりと傳へらる。
明治三十四年九月社殿を改造す。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 九十四坪
崇敬者人員 四十二人

(三六) 村下坂神社 坂本村大字川原字南岸

祭神 大氣都比賣神(一に曰 合祀 天照大御神 天兒屋根命)

由緒 景行天皇の御宇武勢王勅を奉じて南海の賊を討ち、後留つて讃岐國に居給ふ。その臣に坂本公と云ふあり。當

開眼施主連道姓子女と見ゆ」とあり。

明治五年村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(古名勝圖繪)

例祭日 十月二十日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫
寶物 古面二箇(應永二十一年觀世音木像 木彫高麗狗二頭)
境内坪數 千百六十一坪
氏子區域及戸數 大字眞時 大字西坂元字上高柳 大字川原字岸ノ上 楠見 二百六十八戸

(三七) 湯殿社 坂本村大字眞時字ガラク

祭神 木花佐久屋比賣神

由緒 坂本村村社下坂神社境外末社。弘安年間の創祀と傳ふ。當時此の地の人難産する者多かりしを憂へ里人等相謀りて祠を建て、爾來此の里人難産するものなしと傳へらる。

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 九十五坪 崇敬者人員 約三百五十人

郷を賜はりて食地とす。東坂元、西坂元、川原、眞時の四村是なり。坂本公の子孫世々本郷の酋長となり、稼穡の故を以て大氣都比賣命を

祭り祠を建つと云ふ。古くは下阪位大明神と稱へられ前記四ヶ村の氏神たり。古名勝圖繪に『當社肇祀未詳相傳河内國金剛山より勸請と云本地堂再興棟札慶



社神坂下社村

長十八年已後數々あり、社内に古き隨神の像三舩獅子二つあり、面思の内に文字あり、應永二十六年巳十二月十五日

(三三七) 荒神社 坂本村大字西坂元字高柳

祭神 大國御魂神
由緒 坂本村村社下坂神社境外末社
祭日 十月二十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百三十七坪 崇敬者人員 約二百五十人

(三三八) 坂元神社 坂本村大字西坂元字山之越

祭神 鷲住王
合祀祭神 大國御魂神 大直日神 倉稻魂命 譽田天皇
由緒 飯山權現、力山大明神と稱へらる。祭神鷲住王は御魚磯別王の子にして、日本書紀履中天皇六年の條に「二月癸丑朔喚御魚磯別王之女太姬即女高鶴郎女納于后宮並爲嬪於是二嬪恒歎曰悲哉吾兄王何處去耶天皇聞其歎而問之曰汝何歎息也對曰妾兄鷲住王爲人強力輕捷由是獨馳越八尋屋而遊行既經多日不得面言故歎耳天皇悅其強力以喚之不參來亦重使而召猶不參來恒居於住吉邑自是以後廢以不求是讚岐國造阿波脚咩別凡二族之始祖也」とありて、鷲住王天皇の召を逃れて攝津國住吉より阿波國脚咩邑に匿れ、後讚岐國に移り鶴足郡富熊村（一説那珂郡）に居り二姫の願に依り國造となる。阿波國野根氏、讚岐國高木氏は王の裔なりと云ふ。王勇力を好み常に強力の者を集めて之と交遊す。王薨去の後馴致の豪友等之を飯山に葬り社を建つ。子孫相續で當國にあり。其の邑に喬木あるを以て高木を氏とし、大力の者を出す。高木右馬之助、僧宥遍等皆その裔にして勇力を以て天下に聞ゆ。故に當社を力山と云ふ。當國多くの力士を出すは此の神あるを以てなりと云へり。創祀詳ならざるも康保元年菅某社殿を修して軍神と仰ぐ。
明治五年八月村社に列せらる。（三代物語 全讚史 南海治亂記 讚陽記）
明治四十一年^{字國持}荒神社・荒神社・荒神社・稻荷神社を合祀
大正七年^{字西沖}若宮社を合祀す。
例祭日 十月十日
特殊神事 坂本念佛踊 三ヶ年毎に陰曆七月二十五日を以て之を行ふ。
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫
境内坪數 千〇七十七坪
氏子區域及戸數 字國持 山之越 西沖 六十二戸

境内神社 大國主神社（大國主尊）

(三三九) 王子社 坂本村大字西坂元字袖村

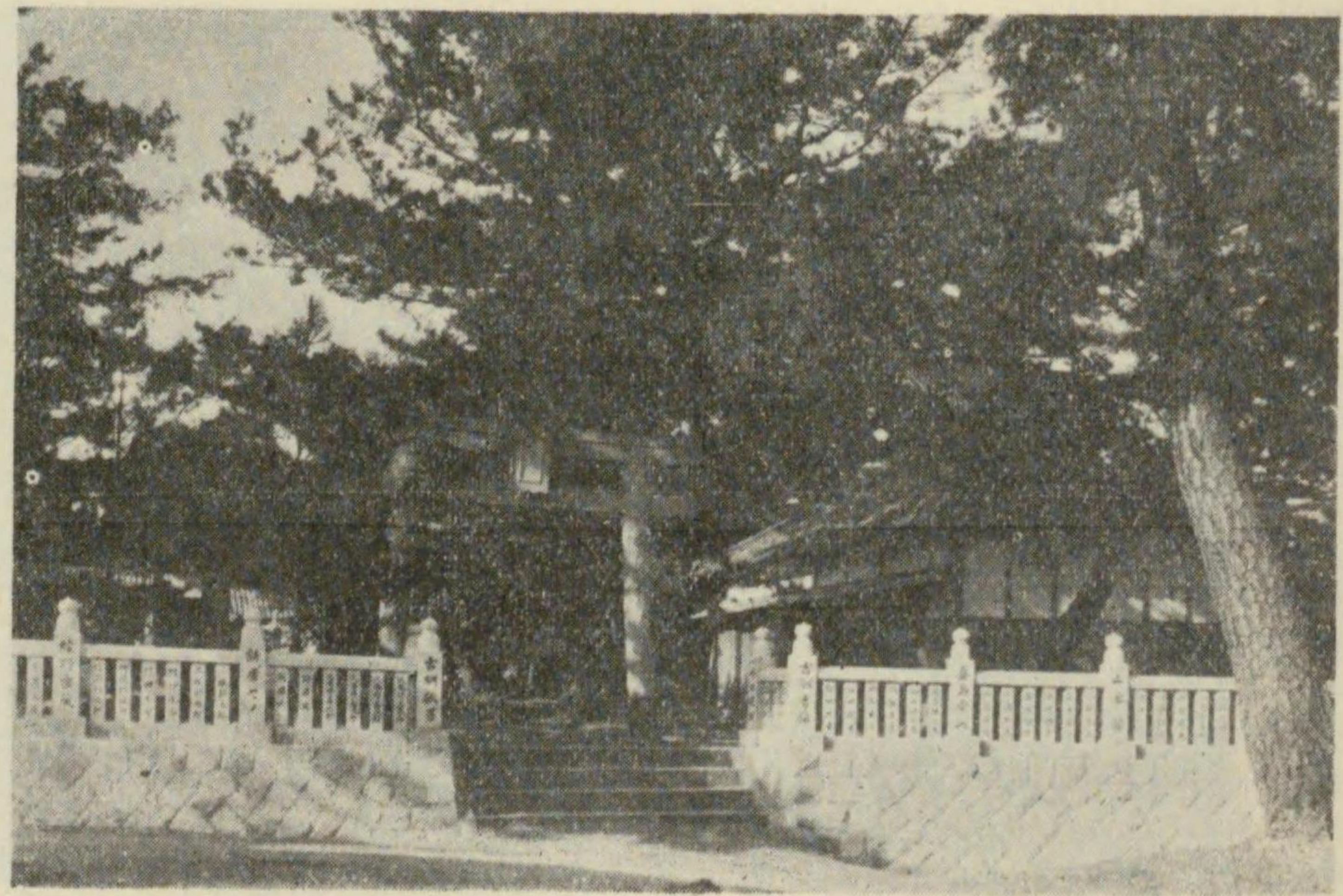
祭神 大直日神
合祀祭神 天兒屋根命 五十猛命 月讀命
由緒 飯野村縣社飯神社境外末社。明治四十二年^{字高柳}燒神、^{字袖村}生竹神・實國社を合祀す。
祭日 陰曆九月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百六十二坪 崇敬者人員 約百五十人

二三三 法勳寺村

(三四〇) 八坂神社 法勳寺村大字下法軍寺字西尾

祭神 素戔雄尊 稻田姬命 脚摩乳神 手摩乳神
合祀祭神 道反大神 保食神 稚産靈神 岐大神
由緒 往古より井上郷の産土神たり。社傳に據れば、神代綾歌郡

の昔素盞鳴尊南海遊御の御來りて暫く此の地に留り給ふ。尊此の地に安く居りたりと仰せられしにより地名を安居原と云ふと。景行天皇の皇子武貝兒王勅を奉じて南海の惡魚を征し給ひ、後讚岐國郷造に任せらる。其の時王は當地が素盞鳴尊有縁の地なるを以て出雲須賀の神を迎へて奉齋し給ふ。天平勝寶二年（紀元一四一〇）社殿を再營し當地守護の氏神となせりと云ふ。一説には天平勝寶二年の創祀とも云へり。天正年間兵火にかゝり、元祿



法勳寺村大字下法軍寺字西尾

六年再營あり、其の棟札現存す。寶曆四年、同十二年修築し、萬延元年再建す。

明治五年八月郷社に列せられ、昭和九年九月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 古名勝圖繪)

明治四十三年名若宮神社・稻荷神社、字西尾塞神社を合祀す。例祭日 十月十九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 神輿庫 祭具庫 寶物 棟札三點元禄六年、寶曆四年、寶曆十二年

境内坪數 千三百十坪

氏子區域及戸數 大字下法軍寺 上法軍寺 五百七十戸

(三五) 王子神社 法勤寺村大字上法軍寺字岡

祭神 大雀尊

合祀祭神 宇遲能和紀郎子王 靈神 猿田彦神 大物主神 鹿屋野比賣命

由緒 法勤寺村郷社八坂神社境外末社。仁年中菅原道

眞讚岐守たりしとき此處に祀ると云ふ。明治四十三年字野

榎神社、字岡佐太神社・遠田神社・荒魂社・若宮神社、字安高

尾神社を合祀す。

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 古名勝圖繪)

明治四十四年字東原一本杉神社、字下葛城神社を合祀す。

例祭日 十月十五日

特殊神事 三ヶ年毎に陰曆七月二十六日を以て坂本念佛踊を執行す。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六百九十六坪

氏子區域及戸數 法勤寺村大字東小川 川西村大字西小川

四百三十四戸

境内神社 西征神社(氣長足姫尊)

(三三) 志賀神社 法勤寺村大字東小川 字樋ノ口

祭神 大國主神(一に曰 表筒男命 中筒男命 底筒男命)

由緒 法勤寺村村社八幡神社境外末社

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十四坪 崇敬者人員 七十六人

祭日 十月九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百五十三坪 崇敬者人員 約千五百三十人

(三五) 村八幡神社 法勤寺村大字下法軍寺 字西尾

祭神 足仲彦天皇 氣長足姫尊 譽田天皇

合祀祭神 少彦名神 一言主神

由緒 社記によれば、往古小川郷開拓の時神恩報謝の爲め之を祀りて郷民厚く尊崇し、延久年間譽田天皇、足仲彦天皇、氣長足姫尊を合祭して郷内の氏神となし、和氣宅成五代の裔宅秀姓を稻毛と改め、代々小川郷に住し郷民と共に社殿を再築せりと云ふ。天正年間長曾我部氏の兵火にかゝり殿宇寶物等焼失し、慶長七年七月稻毛秀元郷民と共に之を再興せり。安政四年三谷嘉兵太等御屋根替を爲す。當社社殿改築又は神職代がはりの節は必ず湯立神樂を執行するを例とせしに、安政四年御屋根替の節は經費の都合にて之を爲さざりしが忽ち嘉兵太に神示あり、極月二十八日に至り遽に之を執行せりと。

(三四) 讚留靈王神社 法勤寺村大字下法軍寺 字西尾

祭神 建貝兒王

由緒 創祀

詳ならず。

或は城山長

者酒部黒丸

の創祀とも

云ふ。傳ふ

る所によれ

ば、祭神建

貝兒王(武

鼓王、武鼓

王、武卵王

とも書く)

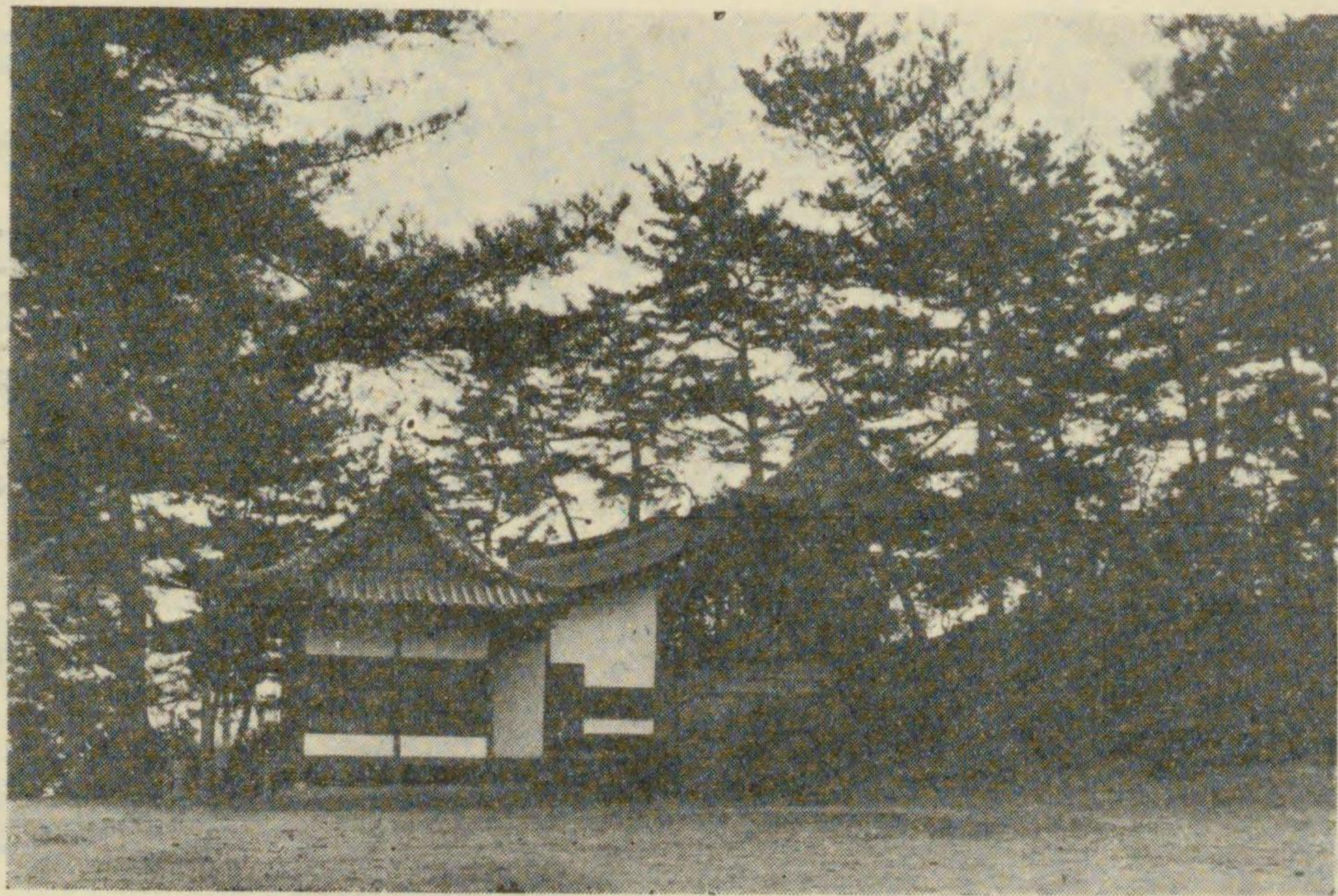
は日本武尊

の王子にし

て、讚岐綾

君の始祖な

り。(古事記、日本書記) 景行天皇の二十三年勅を奉じて



讚留靈王神社

南海の悪魚を征し給ひ、留つて讃岐國を守り給ふ。國人稱して讚留靈王と云ふ。仲哀天皇の八年御壽百二十五を以て薨ぜらる。南海の民之を玉井の里に葬り祠を建て、歳時之を祭り、號して讚留靈王神社と云ふと云へり。一説には王の裔孫綾氏和氣氏の人人々神祠を營むと云ふ。當社は即ち王の御墓地に祠を建て、その御靈を祭りしものなり。其の後悪魚の怨念しきりに里人を苦しめしかば、僧行基來りて阿蘇郡福江に魚の御堂を建て、又一寺を營みて法勤寺と云ふ。延暦十二年僧空海この寺を讚留靈王の墳地に移し、又島田寺を營みて法勤寺の寺務を攝せしむ。後法勤寺廢せられ什寶等皆島田寺に移りしが、天正年間兵火に罹り、爾來王の墳墓社殿も荒廢せしが、享保十二年和氣氏の裔稻毛秀政郡中に募財して、寛保二年造營せりといふ。延享四年の棟札現存す。

(讚留靈公胤記 南海通記 三代物語 生駒記 讚州府志 全讚史 今名勝圖繪 官社考證 西讚府志 神社考) 祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 寶物 棟札一點 境内坪數 三百十二坪 崇敬者人員 約八百五十人

左衛門義重 江州叡山ノ八王子權現ヲ勸請ス。慶長六年、與惣左衛門嫡子與三兵衛正義ト共ニ小祠ヲ建立シ崇ニ氏神ノ



村社富隈神社

家内ニ疫病ヲ病ム事無ク靈驗著明ナル故、今ハ邑中ノ氏神ト尊崇ス……元和二辰年玉殿建立ス……凡世上ニ尊ム八王子ハ素盞鳴尊ノ皇子ナリ。是ハ比叡山ノ八王子成ルガ故ニ國狹植尊ナリ世ニ變ハリシニ依テ記シ置ク』と見ゆ。文中愚とあるは生駒記の著者内海彌惣右衛門のことにして内

二四 富熊村

(三五) 村富隈神社 富熊村字本村

祭神 國狹土命 由緒 傳ふる所によれば、履仲天皇の后兄鷲住王の後胤高木某當村に在住し、其の始祖鷲住王を奉齋して同族一統の守護神とせしに始るといへり。文明十二年(紀元二二四〇)高木隼人なる者祠宇を再造し祭儀漸く備はるに至りしが後兵火に罹り衰頽せり。天正年間足利氏の臣に従五位下對馬守山本與三左衛門義篤なる者あり、近江の人なり。其の子與惣左衛門義重故ありて讚岐に來り居を當村に定め、故郷江州より八王子大明神を迎へて當社に合祭し、社殿を再興して産土神となせり。時に文祿二年(紀元二二五四)九月なりといふ。爾來八王子大明神と奉稱せらる。全讚史に「八王子大明神 在富熊村……是法華守護之神也 序品」文祿中山本與左衛門義重從江州來迎叡山下八王子祠之」とあり。眞讚岐生駒記に「八王子大明神 鷲足郡富熊村ニアリ 所祭一座 國狹植尊 文祿年中愚曾祖父山本與惣

海氏靈神由來記に「靈神姓源以山本一爲氏謹義篤家世任足利將軍家……以與明智光秀有舊好往歸矣天正十年壬午六月十三日與羽柴秀吉戰於城州山崎敗沒同族從臣戰死者七十餘人男與惣左衛門尉義重有故逃來於讚州一寓居那珂郡金倉寺後移鷲足郡富熊以江州八王子大明神爲靈神之氏神一建祠祭之後又爲靈神一建祠於其傍其子與惣兵衛正義有故改氏内海子孫並稱内海……安永八辛丑年六月十三日 正直記(以下十五名同族連署)とあるによりて明かなり。明治八年火災に罹り改築す。現今の社殿即ち之なり。明治初年富隈神社と改稱村社に列せらる。(全讚史 今名勝圖繪 生駒記 讚州府志)

例祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 三千〇〇四坪 氏子區域及戸數 字本村 西沖 東沖 百七十戸

(三六) 飛渡神社 富熊村字仲

祭神 大名持神 由緒 富熊村村社富隈神社境外末社。元祿十年の創祀に

係る。一説に矢延平六叶次を祭るといふ。碑あり、その文に曰く、『飛渡神社ハ矢延平六叶次ヲ祀ル叶次高松藩主松平頼重ニ仕ヘ水利ニ功アリ民之ヲ徳トシ此ノ祠ヲ建ツ……寛永十九年頼重此ノ地ニ移封セラル、ヤ大池溝ノ役ヲ興シ叶次ヲ擧ケテ任ニ當ラシム叶次拮据經營四十餘年東ハ大内郡ヨリ西ハ那珂郡ニ至リ工事ヲ起スコト一百餘所ニ上ル仁池ハ其最モ著シキモノニシテ慶安元年六月二十八日着手シ翌二年三月二十五日功ヲ竣リ其利ノ及ブ所上法軍寺村富熊村ヨリ宇多津村ニ至ルマデ實ニ十村一千町歩ニ達セリ人或ハ仁池工事ノ過大ナルヲ譏ス叶次之ニヨリテ罪ヲ獲テ退ケラレシガ幾クモナクシテ復タ任用セラル叶次心ヲ池溝ニ專ニシ老ニ及ブモ娶ラズ弟父次ヲ養テ嗣トナス其後始メテ妻ヲ迎ヘ子太郎右衛門ヲ生ム七十四歳ニ至リ病ヲ以テ致任シ富熊村ニ隠棲ス後二年ニシテ歿ス時ニ貞享二年七月朔日ナリ村人叶次ノ徳ヲ慕ヒ厚ク之ヲ葬リ元祿十年地ヲ小宇飛渡ニ相シテ祠ヲ建ツ爾來祭祀怠ラズ今ニ至ルマテ二百三十四年早ニ雨ヲ祈レバ必ズ驗アリ頃者村人相謀リ祠ノ由來ヲ碑ニ刻セントシ余ガ其後裔ナルノ故ヲ以テ之ヲ余ニ需ム乃チ古記ヲ採リテ其ノ大略ヲ録スト云爾 昭和五年十一月學習院教授正六位勳五等 古川喜九郎撰』

納めて祈願せられ、平定の後當國に留り給ひ隈玉卿を以て神供田に充て給ふ。允恭天皇の御宇讚留靈公(武毅王)四世の胤綾益甲の子宇隅麻呂隈玉郷を司り神殿を造營して八幡大神、神功皇后、日本武尊を奉齋せり。宇隅屋敷といふもの今猶地名として残存す。其の後北條二位禪尼の時社殿新に造營あり。正平年間神主庄宗一郎西長尾なる吉野朝軍の爲め屢々戦勝を祈禱し、自らは西長尾に戦歿せり。長尾祐國高屋の役に戦勝を祈願し、後長尾城主となりて宮前の地一町餘を除地とし社殿を造營す。天正年間長曾我部氏の兵火に罹り社殿寶物等焼失せしが、尾藤甚右衛門國主となりて宮前免一圓の地を寄進し、次で國主生駒氏社殿を再興して社領一石四斗三升を寄進せりと云ふ。生駒分限帳に『一石四斗三升 奥河津八幡』と見え、全讚史に『正八幡宮在岡田村一是亦古祠祭田稅一石四斗三升土屋惣大夫主』とあり。岡田村は富熊村の誤なり。高松藩主松平頼重親しく参拜ありて社領亦先規に従ひて寄進し爾來歴代の藩主の寄進あり。蟲除の神として藩主の崇敬厚く、明和年中蟲除祈禱所一棟改築に際しては先例により領分中より普請料を寄進し、其の他寛政六年の祈禱所修覆には領分中より修覆料四十石、藩主松平頼儀より銀子十枚の寄進あり。文化元年、天保十

明治三十年社殿を改築す。

祭 日 九月十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 十三坪 崇敬者人員 約九十人

(三五) 八頭神社 富熊村字本村

祭 神 八咫鳥神

由 緒 富熊村村社富隈神社境外末社。口碑に人皇十八代の頃鷲住王阿波國より讃岐に移り此の地に居給ひしが、王武事を好み此の神を祭りて軍神となし給ふといふ。

祭 日 十月五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約三百人

(三六) 村八幡神社 富熊村字宮前

祭 神 品田天皇 神功皇后 日本武尊

由 緒 社家記録其の他によれば、當社は往古より隈玉郷に鎮座ありて初め大己貴命、少彦名命二神を奉齋して庄宮と奉稱し、一國の崇敬厚き神なりしが、景行天皇の御宇日本武尊の御子武甕玉南海の大魚を御征討の勲當社に神璽の玉を

三年等祈禱所改修の際にも亦先例によりて寄進ありたり。

明治五年八月二十二日村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 全讚史 今名勝圖繪 社家記録)

境内に若宮社、稻荷社、地神社あり。若宮社には、國主、神主、氏子の累代の靈をも祀るといふ。又地神社は松平頼重領分中二百四十六ヶ村の清土を社壇に納めて虫除の祈禱を修し、享和三年山下彌一右衛門をして代參せしめてより代參者参拜するを例とせりといふ。

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 社務所

境内坪數 千八百七十八坪

氏子區域及戸數 字奥河内 油山 寺 北岡 庄 田井 次

見 二百五十戸

(三五) 北岡社 富熊村字奥河内(北岡)

祭 神 須佐能男神

由 緒 富熊村村社八幡神社境外末社。古老の傳ふるところは、昔、此の地疫病の時出雲國須賀の神を勸請せるなり

といふ。

祭日 六月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十二坪 崇敬者人員 約百五十人

(三〇) 横山神社 富熊村字大原

祭神 大山祇神

由緒 富熊村村社八幡神社境外末社。此の地上古は田園未だ少く竹木繁茂し狼狸虫蛇の害多し、酋長酒部黒丸之を憂へ、しばしば狩すれども其の被害を減ずること能はず。遂に人をして伊勢朝熊神社に詣でしめ、御鏡に神靈を勸請し歸りて、これを里人に祀らしめしと傳ふ。後大原の人々之を尊崇して産土神となすと。

祭日 十月四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所
寶物 鏡、琴各一點 境内坪數 二百三十坪
崇敬者人員 約二百三十人

(三一) 新宮社 富熊村字大原

祭神 須佐能男命

由緒 富熊村村社八幡神社境外末社。文永年中庄入道奥河内なる人創祀すと傳ふ。其の裔現に當地に住すと。

祭日 陰曆八月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十六坪 崇敬者人員 約二百人

二五 栗熊村

(三四) 住吉神社 栗熊村大字栗熊東字高丸(渡池)

祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命

合祀祭神 須佐之男命

由緒 傳ふる所によれば、貞觀年中の創祀にして、當時こゝに大なる池ありて大樹繁茂せる下に小祠として鎮座ありしが、應永年間洪水横流して綾川の水道流し、堤防崩れて民家悉く漂へり。衆人この小祠を遙拜して危難を免れむことを祈願せしに、忽ち一群の野鳥白鷺飛び出で東を指して水面を渡り飛び去れば、満々と溢れし水瞬時に流れ去りてやう／＼死を免れたり。依て里人等社殿を造營して氏神と仰ぎ、白鷺の渡りし地を渡池と稱す。爾來社頭隆昌なりし

由緒 富熊村村社八幡神社境外末社。口碑によれば、昔此の地に疫病流行せし際、出雲に詣で須賀の大神を勸請して歸る。此の地にムクデの大木ありてその下に祭りたり。而して今にその地をムクデの内と云ふと。

主なる建造物 本殿 境内坪數 六十四坪

(三二) 次見社 富熊村字次見

祭神 猿田彦神

由緒 富熊村村社八幡神社境外末社。社家記録に『次見荒神寶殿瓦葺……祭神倉稻魂神 神跡石 右者次見免へ歸座勸請仕候境内一反斗候……延寶年間勸請の由』と見え、一説に建貝兒王の裔日向王の子孫世々此の地に住し承安年中この祠を建つともいふ。

祭日 陰曆六月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九坪 崇敬者人員 約二百人

(三三) 八柱社 富熊村字奥河内

祭神 五男神 三女神

も天正年間の兵火に昔日の狀を失ふに至れりと云ふ。享保八年藩主松平家より社領二十一石三斗を寄進せらる。三代物語に『住吉大明神一郷社祀之別當圓福寺社領二十一石三斗在東栗隈』と見え、古名勝圖繪に『住吉神社栗熊東村にあり……當社は貞觀年中造營也其後本藩故老臣後藤主膳久明再興せり。鶴足郡栗熊村住吉大明神之社領於同郡同邑高二一石三斗餘之事今度以開發之地新令寄附之訖全可爲收納者行法祭禮彌以不可有怠慢之狀如件 享保八年四月廿八日 中將御判 圓福寺(宛)』と載せたり。

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 古名勝圖繪) 今名勝圖繪) 明治四十四年^{字水}木山神社を合祀す。

例祭日 十月十九日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三千三百六十二坪
氏子區域及戸數 大字栗熊東 四百戸

(三五) 靄神社 栗熊村大字栗熊東字南原(貝野)

祭神 高麗神

由緒 栗熊村村社住吉神社境外末社
祭日 六月十五日 九月十五日
主なる建造物 本殿 境内坪數 千二百十三坪
崇敬者人員 七十五人

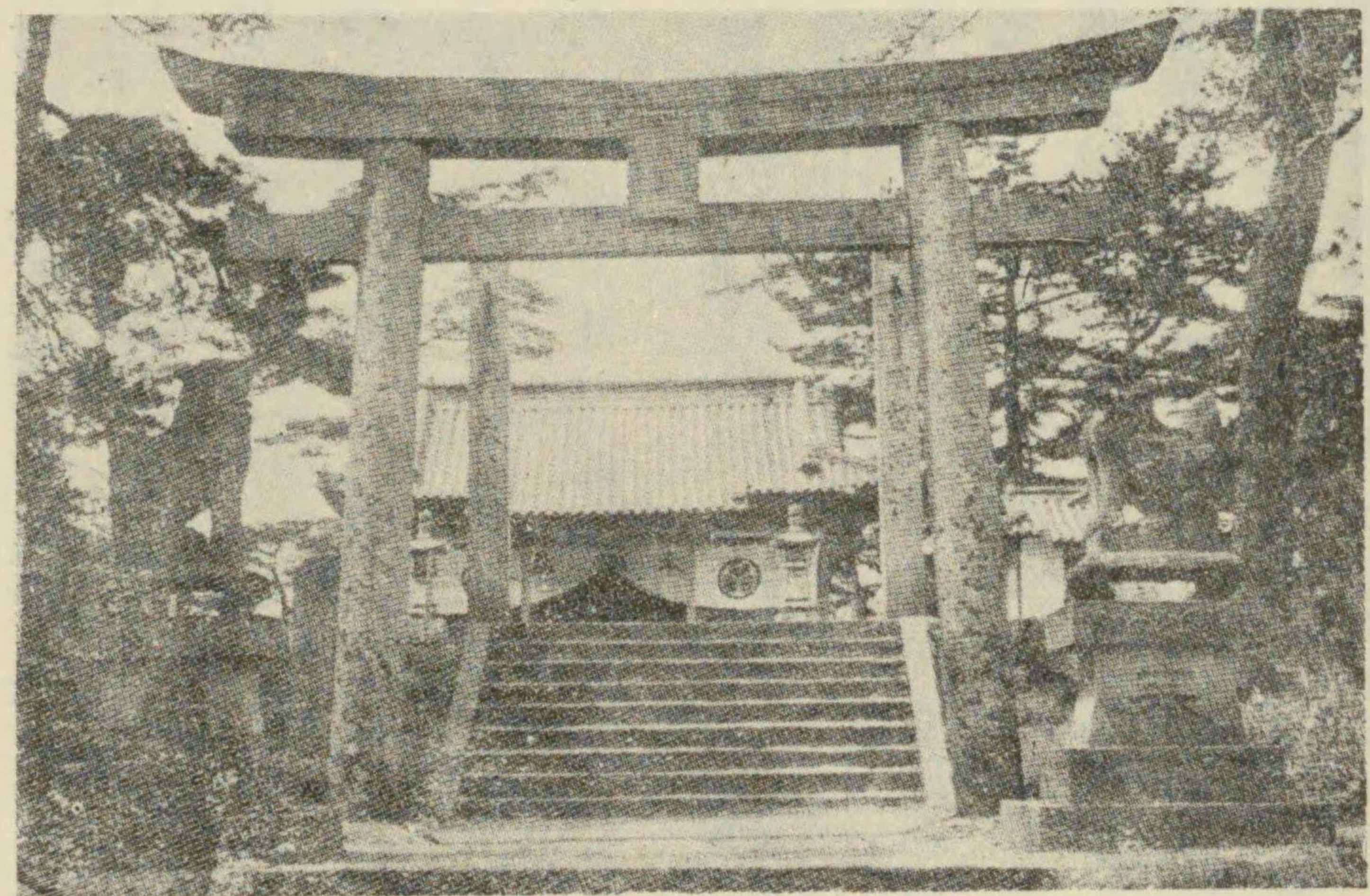
(三六) 鎮主神社 栗熊村大字栗熊東字吹越(寺川)

祭神 天津彦火瓊杵命
由緒 栗熊村村社住吉神社境外末社
祭日 九月二十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 六十一坪 崇敬者人員 百十五人

(三七) 四十三神社 栗熊村大字栗熊東字大谷(木山)

祭神 神櫛王及其臣四十二柱神
由緒 栗熊村村社住吉神社境外末社
祭日 十月十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 千〇十三坪 崇敬者人員 百人

又は玉隈と云ふ。この水の至る所五穀豊熟せり。依つて其の地を富隈と云ふ。黒丸この水を以て酒を醸ししにその色



村社宇閉神社

黒く澄みて味甚だ甘美なり。以て允恭天皇に奉る。天皇之を嘉し給ひて姓酒部を賜ふ。其の酒を稱して黒丸酒と云へり。黒丸一祠を井のほとりに建つ、即ち當社なりと云へり。後

綾歌郡

(三八) 久斯神社 栗熊村大字栗熊東字大谷(木山)

祭神 少彦名命
由緒 栗熊村村社住吉神社境外末社
祭日 十月十三日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 千三百六十四坪 崇敬者人員 百五十人

(三九) 村宇閉神社 栗熊村大字栗熊西字宇ノ井(宮ノ浦)

祭神 鵜羽葺不合尊
由緒 酒部益甲黒丸の創祀と傳へられ、延喜神名式に『讚岐國鵜足郡小宇閉神社』とあるは當社なりとも云へり。三代物語、全讚史、生駒記等は此の説なり。傳ふる所によれば、酒部益甲黒丸は武卯王の裔にして當地に住し酒を醸す。城山長者と稱せられ其の家甚だ富む。常に家に井泉なきを憂へしが、邸内に栗の樹あり、鵜樹上に集へるが、或る朝鵜群足を以て地を跑きしに其の處より清水湧出して流を爲せり。夜は星影この水に映じて玉の如くなりしより玉の井と稱す。郡名鵜足はこれによつて起る。又郷の名を栗隈

誤れり。又玉井大明神と云ふ祠あり。栗樹の跡を栗野と云ひ、當社地を鵜之井免と云ふ。

明治初年宇閉神社と改稱し村社に列せられ、大正七年八月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(三代物語 全讚史 生駒記 讚岐二十四社考 古名勝 圖繪 玉藻集 官社考證 特選神名牒)

例祭日 十月十八日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三千三百六十二坪
氏子區域及戸數 大字栗熊西 百九十八戸
境内神社 八幡神社(譽田天皇)

(四〇) 諏訪神社 栗熊村大字栗熊西字荒

祭神 健御名方命
由緒 栗熊村村社宇閉神社境外末社。傳ふる所によれば、往昔栗熊西村の南方猫山より怪猫出で、村民を害し幼童を喰ふ。又當社三町程東に大橋あり。鳴橋と唱へ怪猫こゝに出でて盛に行人を惱ます。里人酒部黒鷹に請ひ荒の地に黒鷹自作の神像を以て神社を建立し、武神健御名方命を

勸請せしに猫侍これによりて止みたり。天正年中兵火に罹り後再建すと云へり。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 千百七十五坪 崇敬者人員 三百五十人

二六 岡田村

(三二) 郷宇閑神社 岡田村大字岡田下字天神

祭神 武内宿禰神

相殿 品陀和氣命 菅原道真公

合祀祭神 金山彦命

由緒 延喜神名式に『讃岐國鷯足郡小宇閑神社』とあるは當社にして式内讃岐國二十四社の一なりと云ふ。御祭神武内宿禰神は履中天皇の御宇因幡國法美郡宇倍に現れ給ひ、宇倍の神として奉祀せらる。當時大和國葛城郡、美濃國不破郡及び讃岐國鷯足郡に各奉祀して宇閑神社と稱す。仁壽、貞觀の頃神階並に神田八町歩を賜ひしが、應仁亂後細川氏の没收する所となり、社頭亦衰微せり。永正年間西長尾城主

長尾大隅守高勝崇敬して社殿を再興し祭祀を復舊す。高勝三世の孫高晴亦厚く尊崇し、祠官をして當社傳來の墓目の射術を行はしめ武運長久を祈りしが、爾來武威大に開け、三野、豊田、那珂、多度、阿野、鷯足の諸郡に於て六萬五千石を領するに至る。こゝを以て社領を寄進し崇敬益々加はれり。生駒氏、松平氏に及びても社領相傳へて二石六斗四升あり。相殿に座す品陀和氣命は文祿年間（或は大治年間とも云ふ）奉齋せられしものにして爾來上野八幡宮、又岡田八幡とも稱へらる。又菅原道真公の社はもと岡田郷宇天神なる俗稱廻池に鎮座ありしが、池を築くに際し移して相殿に奉齋せしものと云ふ。世俗岡田の天神と稱へその名近郷に高し。寛永二年、延寶六年の改築ありて、寛永二年の棟札に『奉再興宇閑神社一字』云々とあり。明治四年郷社に列せられ、大正三年九月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。（三代物語 讃岐大日記 全讃史 讃岐二十四社考 讃岐國古社名帳 古名勝圖繪 官社考證 特選神名牒 生駒分限帳 香川縣史 同補遺）
明治四十三年^{宇國}吉小口神社を合祀す。
例祭日 九月三十日十月一日
特殊神事 墓目祈禱祭 陰曆二月十六日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 神輿庫 祭具

庫 隨神門

寶物 棟札二點 扁額、武器等九點

境内坪數 四千三百五十八坪八合

氏子區域及戸數 大字岡田上 岡田下 岡田東 三百戸

境内神社 五柱神社（天照皇大神 大己貴命 少彦名命 倉稻魂命 埴安媛神）

稻荷神社（倉稻魂神 天照大神 大己貴神 少彦名神 埴安媛神 水分神 大山祇神 大年神 御年神）^{昭和十一年}
宇椎尾地神宮、大字岡田上字國吉山神社、大字岡田下字天神御年神社、大年神社を合祀して境内神社となし、稻荷神社と改稱す。

(三三) 惠美須神社 岡田村大字岡田下字天神

祭神 大山祇神 事代主神

由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 二十八人

(三七) 開耶神社 岡田村大字岡田下字咲屋

祭神 大年神 御年神

由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社。長祿元年（紀元二

一一七）當國大旱あり、社家奉行安富山城守盛長の命により當社を創祀し五穀豊饒を祈る。

祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十三坪 崇敬者人員 二十六人

(三五) 植野神社 岡田村大字岡田下字東新田

祭神 猿田彦命

由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二坪 崇敬者人員 二十六人

(三五) 池宮神社 岡田村大字岡田上字西打越

祭神 高靈神 天之水分神

由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社。打越池の池邊に鎮

座あり。昔此の池水少く旱魃の節大いに困難す、依て當社を創祀して灌漑水の潤澤を祈るといふ。

祭日 九月二十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五坪 崇敬者人員 三百人

(三六) 幸神社 岡田村大字岡田上字赤坂

祭神 八衢比古神 八衢比賣神
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十九坪
崇敬者人員 八人

(三七) 美古神社 岡田村大字岡田上字重永

祭神 市杵島媛命
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社。昔安藝國嚴島社より其の分靈を奉遷して祀れりと云ふ。
祭日 陰曆九月三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十六坪 崇敬者人員 二十八人

(三八) 大山祇神社 岡田村大字岡田上字國吉

祭神 大山祇神 金山毘古神 金山毘女神
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 四百二十七坪
崇敬者人員 十九人

(三九) 本谷神社 岡田村大字岡田上字東打越

祭神 彌都波乃賣神
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十坪
崇敬者人員 二十人

(四〇) 八坂神社 岡田村大字岡田上字平尾

祭神 素戔鳴命

綾歌郡

(四一) 新田神社 岡田村大字岡田上字古新田

祭神 大己貴命
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社
祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 一坪

(四二) 皇子神社 岡田村大字岡田上字原村

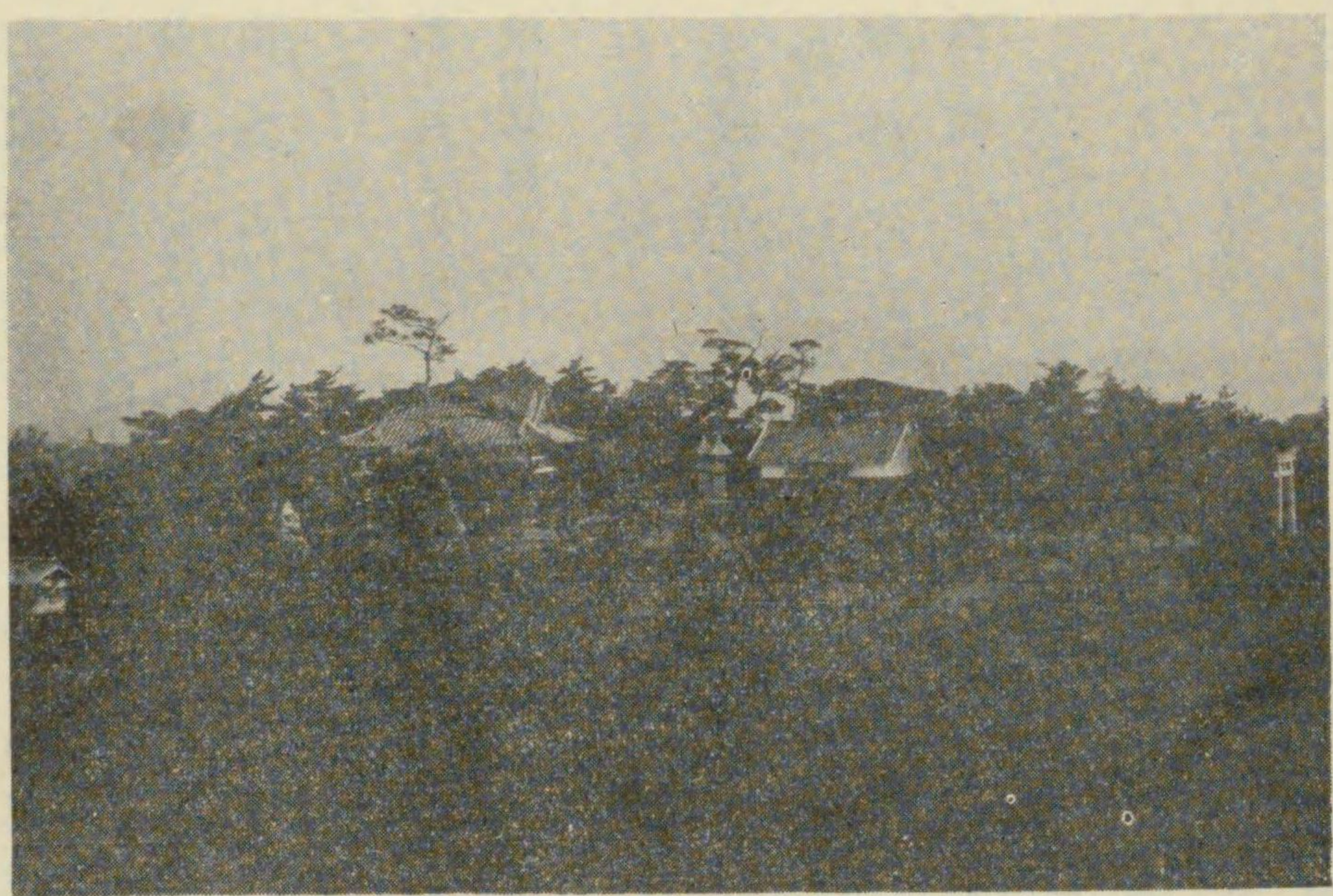
祭神 神櫛玉命
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社。祭神は景行天皇の皇子にして當國國造の始祖たるを以て里人其の徳を慕ひて奉祀すといふ。
祭日 十月二十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百七十坪 崇敬者人員 三十人

(四三) 御魂神社 岡田村大字岡田上字市地

祭神 高皇產靈神
由緒 岡田村郷社宇閑神社境外末社

合祀祭神 大己貴命 五十猛命

由緒 傳ふる所によれば、武國凝別皇子の第二王子津守王



此の地に來住し長者原の地を墾く。王の居住地を津守の王屋敷といへり。當時當地山麓にして野獸出で、農作物を害する事甚し、依つて當社を創祀すと云ふ。一説に承元年中の肇祀なりとも云へり。應安年中長尾大隅守の臣某王屋敷に在りて津森、平尾、宿母、小津守、小椎尾、三田及び栗熊村の一部なる天満、長者原、西谷、定連

の地を領し、厚く當社を崇敬せしを以て、以上の里人當社を産土神として尊崇するに至れりと云ふ。古來牛頭天皇、又津守の宮と稱へられしを、明治初年八坂神社と改稱し村社に列せらる。(古名勝圖繪)

明治四十三年^{宇津森}櫻神社を、昭和二年^{宇津森}鎮守神社を合祀す。

例祭日 十月七日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千五百〇五坪

氏子區域及戸數 宇平尾 宇津森 五十戸

境内神社 具爾伎神(大年神) 天正年間國吉甚左衛門の創祀りしを後此處に移し境内神社とす。

水分神社(天水分神 國水分神) 應永二十七年夏大旱あり、雨を祈れり。爾來同所に鎮座ありし國吉山上に當社を奉齋してを明治二十六年境内に遷座せり。

(三六四) 山 廻 神 社 岡田村大字岡田上宇平尾

祭 神 大山祇命

由 緒 岡田村村社八坂神社境外末社

祭 日 九月七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 八坪 崇敬者人員 三十人

(三八五) 天 滿 神 社 岡田村大字岡田上宇津守

祭 神 菅原道真公

由 緒 岡田村村社八坂神社境外末社。初め當郡栗熊村天

萬に鎮座ありしを後此の地に奉遷せりと傳ふ。

祭 日 九月二十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十八坪 崇敬者人員 三十人

(三八六) 村 椎 尾 神 社 岡田村大字岡田東字椎尾

祭 神 天之御中主神

由 緒 社傳によれば、崇神天皇の御宇の創祀に係り、往古社地の近傍は廣大なる原野にして、一大椎樹の幹に鎮座ありきと云ふ。永享年中長尾大隅守厚く崇敬して社殿を再建し、又所屬の武將毎歳射術を奉納せり。現今の射術神事はその時の古例によるものなりと。古來明見大明神と奉稱せられ、官社考證に『今岡田東村に在妙見神社若しくは宇間神社ならむも亦知るべからず』とあり。明治初年椎尾神社と

由 緒 岡田村村社椎尾神社境外末社。天明年中の創祀といふ。

祭 日 陰曆九月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十一坪 崇敬者人員 百八十人

(三八九) 大 坪 神 社 岡田村大字岡田東字大坪

祭 神 大山祇神

由 緒 岡田村村社椎尾神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 十六坪

崇敬者人員 五十六人

(三九〇) 村 岡 田 神 社 岡田村大字岡田西字東原

祭 神 天津彦根瓊々杵命 經津主命 萬幡姫命 武甕槌命

天兒屋根命

合祀祭神 大物主命

由 緒 社傳によれば、景行天皇の御宇武卯王南海の惡魚を征し留つて當地を治め給ひ、當地鎮護の神として創立し給ふと云へり。一説に大治年中の創建とも云ふ。

改稱村社に列せらる。明治四十二年社殿を改築す。(官社考證 古名勝圖繪)

例祭日 十月十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 神輿庫 祭具庫

境内坪數 三千四百二十四坪五合

氏子區域及戸數 大字岡田東 二百〇八戸

境内神社 地神社(天照大神 大己貴神 少彦名神 埴安媛神 倉稻魂神 水水分神) 慶應三年九月十五日里人相謀りて創立す。

(三七七) 下 土 居 神 社 岡田村大字岡田東字大坪

祭 神 天照皇大神

由 緒 岡田村村社椎尾神社境外末社

祭 日 陰曆九月四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百四十九坪 崇敬者人員 六十人

(三八八) 尾 崎 神 社 岡田村大字岡田東字椎尾

祭 神 事代主神

古くより大宮と稱へられ、往古は大社にして井岡の大宮とも唱へらる。岡田はもと井上郷に屬し、當社は井上の岡の大社たりしを以てなり。又大宮愚社大明神五社大明神岡田大宮の稱あり。空海法勳寺を玉井里に移せし時當社をも修造すと云へり。貞治年間長尾城落城の際別當岡田寺と共に兵火に罹り、本殿の外は悉く焼失の厄に遭ふ。應安元年長尾大隅守長尾城に移り、その三男左衛門督、岡田因幡守と稱



村岡神社

し此の地にあり。社殿を修築し、又岡田寺の跡に淨願寺を建て、當社の別當とせしが、寺は應仁以降衰退して他に移され、天正年間長尾氏の滅亡と共に岡田氏亦亡びしが、その後地頭近藤氏の崇敬する所となれり。明治初年岡田神社と改稱、村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 今名勝圖繪 香川縣史) 大正二年^{宇池}内西山神社を合祀す。

例祭日 十月二十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫 社務所 器具庫 手水舎

境内坪數 二千九百六十坪

氏子區域及戸數 大字岡田西字森俊 東原 井岡 田中 北

山 重光 新田 成願寺 向王子 大字岡田上字西山 池

内 俊正 平塚 室塚 片山 延命寺 赤坂 三百四十七戸

境内神社 地神社(天照皇大神 少彦名神 埴安姫神

大名持神 倉稻魂神)

(三九二) 愛宕神社 岡田村大字岡田西字重光

祭神 倉稻魂命

由緒 岡田村社岡田神社境外末社
祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十八坪 崇敬者人員 十八人

(三九三) 重光神社 岡田村大字岡田西字北山

祭神 天御中主神
由緒 岡田村社岡田神社境外末社
祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 十九人

(三九五) 北宮神社 岡田村大字岡田西字北山

祭神 品陀和氣命
由緒 岡田村社岡田神社境外末社
祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 十九人

(三九四) 松木神社 岡田村大字岡田西字森俊

祭神 若宇加賣命

綾歌郡

由緒 岡田村社岡田神社境外末社。寛永年間當村地頭職たりし近藤長兵衛なる人創祀すといふ。鎮座地は近藤氏邸跡の東南側にあり。
祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 二十二二人

(三九五) 椋神社 岡田村大字岡田西字向王子

祭神 猿田彦神
由緒 岡田村社岡田神社境外末社
祭日 九月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 三十一人

(三九六) 楠神社 岡田村大字岡田西字向王子

祭神 金山彦命
由緒 岡田村社岡田神社境外末社
祭日 八月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十七坪 崇敬者人員 八人

(三九七) 皇子神社 岡田村大字岡田西字向王子

祭神 神櫛王命

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。傳ふる所によれば香川信景二男景忠は金毘羅金光院法印たりしが、當地に閑居し、慶長年間祖神として當社を創祀せしといふ。景忠は當社鎮座地たる向王寺庄に居住し、生駒一正より多度郡中村、土居を領せしめらるといふ。俗に向王子ノ宮、或は若宮とも奉稱せらる。

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三百〇七坪 崇敬者人員 九人

(三九八) 枚岳神社 岡田村大字岡田上字田中

祭神 齋主神

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。應安年間長尾大隅守の三男岡田因幡守一萬石を領して當村に居住す。當社は同邸の鎮守神として奉齋せられしを、岡田氏亡びて後里人の崇敬神となれりと云ふ。現に其の邸跡を岡田屋敷跡と稱し、當社は其の南側に鎮座す。

祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百七十坪 崇敬者人員 二十人

(三九九) 俊正神社 岡田村大字岡田上字俊正

祭神 金山彦命

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。創祀の年代詳ならざるも里人某鍛冶の神として奉祭せし所といふ。

祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 十五人

(四〇〇) 室塚神社 岡田村大字岡田上字西山(室塚)

祭神 神櫛別命

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。昔此の地に大なる室塚あり、これ必ず貴人の塚なるべしとて里人其塚上に一祠を建て、祀ると云ふ。

祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十坪 崇敬者人員 十四人

(四〇一) 水分神社 岡田村大字岡田上字西山

祭神 天水分神 國水分神

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。往昔より山峯に鎮座ありて、旱魃の節雨を祈りて靈驗あり。里人厚く崇敬す。

祭日 七月二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十坪 崇敬者人員 四百七十人

(四〇二) 片山神社 岡田村大字岡田上字西打越

祭神 玉依姫神

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。當村片山家の傳によれば、昔此の地に火の雨降りて山々の木々悉く枯れしに獨り此の山のみ災を免る。時に一神現れて「吾此山角に鎮まりて此里の霖雨旱魃の水配を掌るべし」と云ひ了へ石の玉となりたり。依りて一祠を建て、奉齋す。後衰廢せしが、延命寺建立に際し同寺鎮護の神として寺の境内に祀りしも延命寺廢寺となりて當社殘存せしかば、更に社殿を造營して奉齋すと云ふ。

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五百五十六坪 崇敬者人員 四十人

(四〇三) 山廻神社 岡田村大字岡田上字西打越

祭神 大山祇命 鹿屋野比賣神

由緒 岡田村村社岡田神社境外末社。當地片山部落開拓の時の奉齋と傳へらる。

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百七十一坪 崇敬者人員 十五人

(四〇四) 若王神社 岡田村大字岡田西字新田

祭神 大鷦鷯天皇

由緒 法動寺村村社八幡神社境外末社
祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百四十九坪 崇敬者人員 七十六人

二七 長炭村

(四四) 社 八幡神社 長炭村大字炭所東字古屋敷

祭神 應神天皇

合祀祭神 須佐能男命

由 緒 文明三年(紀元二一三二)大谷川左近左衛門盛國の創祀と云ふ。盛國は大谷川左近太夫橘光兼の子にして種子城の城主たりし人なり。父光兼は大谷城に居りて初め細川頼之に屬せしが、中院源少將吉野朝の命をうけ此の地に來るに及び之に屬し、貞治元年高屋の役に父子共に陣歿せりと云ふ。古名勝圖繪に『八幡神社炭所東種子にあり……當社は文明三年長尾家臣大谷川左近左衛門盛國社殿造營ありて軍神となす』と見ゆ。貞治元年と文明三年と九年の差あり後考を俟つ。(全讃史 讃州府志)

明治四十一年字立石 須賀神社を合祀す。

例祭日 十月三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千七百九十七坪

主なる建造物 本殿 拜殿 神饌殿 神輿殿 旅殿
境内坪數 百九十四坪

氏子區域及戸數 字大井手 平山 大谷川 廣袖 百四十戸

(四六) 三島神社 長炭村大字炭所東字前畑

祭神 大山祇命 須佐能男命

合祀祭神 天照大神 天兒屋根命 應神天皇

由 緒 長炭村村社大井神社境外末社。 康永元年(紀元二〇〇二)平山大隅守の創祀といふ。寛文八年の棟札あり。

(玉藻集 古名勝圖繪)

明治四十年字新田三所神社を合祀す。

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

寶物 棟札一點 境内坪數 七百九十六坪

崇敬者人員 約二百人

(四九) 松尾神社 長炭村大字炭所東字長通

祭神 須佐能男命

由 緒 長炭村村社大井神社境外末社。 正徳元年及び寛文

氏子區域及戸數 字種子 六十五戸

(四七) 種子神社 長炭村大字炭所東字宮ノ前

祭神 事代主神

合祀祭神 須佐能男命

由 緒 長炭村村社八幡神社境外末社。 文化十三年の棟札あり。

明治四十年字森本松尾神社を合祀す。

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

寶物 棟札一點 境内坪數 八百六十六坪

崇敬者人員 約百人

(四八) 社 大井神社 長炭村大字炭所東字長者

祭神 水波能賣神

由 緒 大永五年(紀元二一八五)當地龜越池築成の時の創祀にして池の鎮守神となす。古く池宮大明神と奉稱せられ、龜

越池關係者の崇敬厚し。(玉藻集 古名勝圖繪)

例祭日 十月十七日

九年の棟札現存す。(玉藻集 古名勝圖繪)
明治四十年字大谷川八雲神社を合祀す。

祭日 二月四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

寶物 棟札二點 境内坪數 四百四十坪

崇敬者人員 三十人

(四九) 廣岡神社 長炭村大字炭所東字新開

祭神 崇徳天皇 六條判官源爲義命 平馬助忠正命

合祀祭神 猿田彦命 應神天皇

由 緒 長炭村村社大井神社境外末社。 長寛二年八月二十六日崇徳天皇鼓ヶ岡に崩御あり。後北條郡青海村より迎へて奉祀すと云ふ。寛保元年、延享三年、文化元年の棟札あり。(玉藻集 古名勝圖繪)
明治四十一年字谷八幡神社を合祀す。

祭日 十月一日 主なる建造物 本殿 拜殿

寶物 棟札三點 境内坪數 三千五百七十四坪

崇敬者人員 約二百人

(四一) 御前神社 長炭村大字炭所東字長者

祭神 猿田彦神
由緒 長炭村村社大井神社境外末社。初め三前神社と書かれしを、明治二十六年御前神社と改む。
祭日 十月八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十坪 崇敬者人員 三十二人

(四二) 水分神社 長炭村大字炭所東字大牟禮

祭神 闇籠神
由緒 長炭村村社大井神社境外末社。康永元年(紀元二〇〇二)平山大隅守の臣大峯谿重なる人の創祀と傳へらる。地名大牟禮は大峯の轉稱なるべしと云ふ。
祭日 六月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二百六十坪 崇敬者人員 二百人

(四三) 金山神社 長炭村大字炭所東字奥佐古

祭神 天御中主神

祭日 六月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五十五坪 崇敬者人員 五十人

(四五) 八雲神社 長炭村大字炭所東字奥佐古

祭神 大己貴命
由緒 長炭村村社金山神社境外末社。天正年中奥田弘満なる人創祀す。奥佐古なる地名は此の人に縁めるものなるよし古記にありといふ。
祭日 三月三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 一坪 崇敬者人員 約百五十人

(四六) 村鳩峰八幡神社 長炭村大字炭所西字八幡岡(片岡)

祭神 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后
合祀祭神 素盞鳴神 大山祇命 天御中主神 橘重康命 八衢比古神 八衢比賣神 國常立尊 大山咋命 久那斗命

由緒 天平十八年の創建と云ふ。社記に『欽明天皇三十一年冬豊前國宇佐郡厩岑菱瀉池畔三歳美童現於虚空。放金光。託而曰我者譽田天皇廣幡八幡也云々依之聖武天皇御宇

由緒 天正八年(紀元二二四〇)長尾大隅守(縣史には長尾備中守)の創建と傳ふ。古名勝圖繪に『妙見社 炭所東にあり……當社肇祀未詳往古は金剛院と云寺地なりしが退轉の跡鎮守社の残りしを村民是を奉崇して氏宮とす其後貞享四年再興(棟札現今存す)今此邊を金剛院と云』とあり。此の妙見社は即ち當社なりといふ。明治三十四年拜殿を建築す。
大正七年十月十九日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

例祭日 十月八日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千四百三十六坪

氏子區域及戸數 字金剛院 六十戸

境内神社 天具神社(奇魂神)

(四四) 大水鳥神社 長炭村大字炭所東字南谷

祭神 市岐島姬命

合祀祭神 豊受姫命 大山祇神

由緒 長炭村村社金山神社境外末社。明治四十一年(字金剛院)石神社・山神社を合祀す。

天平十八丙戌年初建社於此而奉崇八幡宮云々とあり。その後文治三年橘重康之を再興し、應安年中長尾城主長尾大隅守軍神として厚く崇敬し、社殿を修理す。永正年中橘道重又之を再營せり。
明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讚史 古名勝圖繪)

大正九年^{字下}須賀神社、^{字安}荒魂神社、^{字權}常包神社、^{字常}山神社、^{字勝}棚山神社、^{字東}山王社、^{字杉}杉尾社、^{字小}谷山神社、^{字大}塞神社、^{字樋}荒魂社を合祀す。

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 釣殿 客殿

境内坪數 千五百五十七坪

氏子區域及戸數 字常包 木崎 片岡東 片岡西 片岡南

片岡本組 大向上 大向下 二百二十戸

(四七) 八雲神社 長炭村大字炭所西字鹽田

祭神 須佐之男命 大國主命

由緒 長炭村村社鳩峰八幡神社境外末社。延享元年(紀元二四〇四)の創祀と云ふ。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百八十八坪一合
崇敬者人員 約百五十人

(四八) 吉田神社 長炭村大字炭所西字八幡岡

祭神 高皇產靈神 神皇產靈神 玉留產靈神 生皇產靈神
大宮姫命 御食津神 足產靈神 事代主命

由緒 長炭村村社鳩峰八幡神社境外末社。天和二年(紀元二三四二)の創祀と傳へらる。初め吉田八神社と稱へしを、明治二十六年現社號に改めらる。

祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百二十一坪 崇敬者人員 約千二百五十人

(四九) 大水島神社 長炭村大字炭所西字嚴島

祭神 市杵島姫命

由緒 長炭村村社鳩峰八幡神社境外末社。寛政年間高松藩士小川權平なる人の創祀と傳ふ。明治五年三月炭所西村信藏社殿を再建せり。

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十三坪 崇敬者人員 約九十人

(四〇) 山神社 長炭村大字炭所西字志福寺

祭神 大山祇命

由緒 長炭村村社鳩峰八幡神社境外末社。安永二年(紀元二四三三)の創建と云ふ。
境内坪數 三百六十六坪

(四一) 劔神社 長炭村大字炭所西字江畑

祭神 建速須佐之男命

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。慶應三年(紀元二五二七)三月炭所西村大西源藏なる人里人と相謀りて創祀せりと傳ふ。
主なる建造物 本殿 境内坪數 二坪
崇敬者人員 約千五百人

(四二) 長田神社 長炭村大字炭所西字長田原(江畑)

祭神 天照大御神 大名牟遲神 豊宇氣毘賣神 少毘古那

主なる建造物 本殿 境内坪數 二十五坪
崇敬者人員 約二百五十人

(四五) 三種神社 長炭村大字炭所西字下江畑

祭神 應神天皇 神功皇后 姫大神

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。寶曆十一年(紀元二四二一)の創祀といふ。鎮座地は満濃池に注ぐ谷川の上流にして即ち水種なれば、元水種神社と稱せしが、後三種神社と云ふに至れりと。
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 二百二十四坪 崇敬者人員 約二百五十人

境内神社 健神社(須佐之男命) 文政年間炭所西村三好吉平なる人の創祀といふ。

(四六) 大國魂社 長炭村大字炭所西字成政

祭神 須佐之男命 少毘古那命 大國魂命

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明和六年(紀元二四二九)の創祀といふ。初め荒神社と稱せしが、明治二十六年大國魂社と改む。

神 埴山毘賣神

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明和元年(紀元二四二四)三月炭所西村眞鍋淺太郎なる人里人と議りて創祀すといふ。
主なる建造物 本殿 境内坪數 三坪
崇敬者人員 約五百人

(四三) 水分神社 長炭村大字炭所西字江畑

祭神 闇竈神

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。天保十二年(紀元二五〇一)の頃炭所西村白川米太郎なる人の創祀と傳ふ。
主なる建造物 本殿 境内坪數 十坪
崇敬者人員 約千五百人

(四四) 山神社 長炭村大字炭所西字江畑

祭神 大山祇命

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。寛延元年(紀元二四〇八)の創祀と傳ふ。

主なる建造物 本殿 境内坪數 四百八十三坪
崇敬者人員 約二十人

(四三) 平野神社 長炭村大字炭所西字平野

祭神 神速須佐之男命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。天明二年(紀元二四四二)の創祀といふ。初め荒神社と稱せしが、明治二十六年地名に因みて平野神社と改稱す。
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二百十五坪
崇敬者人員 約三十人

(四八) 塞神社 長炭村大字炭所西字上平野

祭神 八衢比古神 八衢比賣神
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。元文五年(紀元二四〇〇)の創立といふ。
主なる建造物 本殿 境内坪數 六坪六合

(四九) 社三島神社 長炭村大字長尾字浦山

祭神 大山祇命 事代主命 八幡大神
由緒 應安年中久米盛重の創祀と傳ふ。久米左京亮盛重は細川頼之の臣なり。應安年間頼之に従ひて伊豫の河野氏を討つ。時に盛重大三島の神に祈りて戦勝を得たり。凱旋の後報賽の爲め此の地に祠を建て三島明神と奉稱す。三代物語に『三島大明神大山積神也應安中久米盛重祈三州大山積神戰有利既凱歸立祠奉之簪筆録』とあり。爾來武家の崇敬厚かりしが、後境内に八幡祠を建て、祭祀するに至り、八幡神殊に崇敬せられて遂に一村の社となり、三島明神はその境内神社たるが如き形となれり。全讃史に『三島大明神 在長尾村八幡境内 是蓋上古之社也足利氏末以八幡爲社遂此祠爲攝社也』又同書に『正八幡宮 在長尾村 迎法教八幡神而祠之一村之社也』と見ゆ。明治維新神社取調べに際し、三島神社を以て村社となし、八幡神社を攝社とす。明治十四年社殿改築に際し八幡神社及び事代主神を配祀となせり。當社例祭日當日社頭の大樹に五十尋ばかりの太きしめ繩を張り、参拜者その下を通りて参拜し、後これを社前に奉るを以て舊慣とせり。日之御

(四二) 勝速社 長炭村大字長尾字大原

祭神 須佐之男命
由緒 長炭村社三島神社境外末社。安永年間の創祀といふ。
祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五十四坪 崇敬者人員 約三百人

(四三) 天神社 長炭村大字長尾字天神

祭神 菅原道眞公
合祀祭神 若姫靈 武甕槌命
由緒 長炭村社三島神社境外末社。享保十年(紀元二三八五)四月二十五日の創祀と云ふ。一説に、創祀は享保より遙に古く中院源少將定忠當社東方西長尾城にありて厚く當社を崇敬せりとも云へり。

明治四十一年^{字天}若宮社・小龜社を合祀す。若宮社は天正七年の創祀にして祭神若姫は長尾大隅守高晴の女なり。高晴長曾我部元親の命により阿波の重清城を攻めしに、元親俄然態度を變じ重清城主豊後守と結託して天正七年七月二十

綱と云ふ。(玉藻集 三代物語 全讃史 今名勝圖繪)

例祭日 十月十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 御饌殿 神庫
祭器庫

寶物 狛犬一對 外八點

境内坪數 四百四十二坪

氏子區域及戸數 字淵ノ上 天神 町代 上武頭 下武頭

上ノ宮 上王子 下王子 北山 浦山 大原 百五十戸

境内神社 祓戸社(瀬織津姫命 息吹戸主神 速開津姫命 速佐須良姫神)

(四〇) 松木神社 長炭村大字長尾字松木

祭神 御食津神
由緒 長炭村社三島神社境外末社。天正年間長尾大隅守高晴の創祀と傳ふ。境内老松あり、依て地名を松木と云ふ。明治十四年那珂郡琴平村仁井久米吉郎社殿を再建す。
祭日 九月二十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十坪 崇敬者人員 約百人

七日豊後守と共に高晴を圍みしかば高晴一族重清城に戦死す。この時若姫乳母と共に城を出で自殺す。因て之を祀れるなりと。又小龜社(武甕槌命)は正徳年間の創祀といひ、一説には延元年間小龜城太郎の創祀といふ。全讃史に『金丸城在長尾國吉山』土人云小龜城太郎之要城也在昔長尾村領主有_二小龜太郎者_一城_二長尾_一而居_レ之建_二其祖廟_一曰_二小龜大明神_一方_二貞治時_一源少將來據_二城太郎要城_一源少將亡時小龜氏殉_レ之而滅于_レ今末裔家_二小龜大明神祠下_一而居』と見ゆ。

祭日 九月二十五日
主なる建造物 本殿 拜殿 遙拜殿
境内坪數 四百二十三坪 崇敬者人員 約百二十人

(四三) 靄神 社 長尾村大字長尾字浦山

祭神 高麗神 闇麗神 大雷神
由緒 長炭村村社三島神社境外末社。慶長年間の創立と傳へらる。

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十八坪 崇敬者人員 約五十人

(四六) 眞區社 長炭村大字長尾字南山

祭神 天御中主命
由緒 長炭村村社三島神社境外末社。天和年間の創祀と傳ふ。

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百八十五坪 崇敬者人員 約百人

(四七) 曉神社 長炭村大字長尾字曉

祭神 月讀命
由緒 仲多度郡吉野村郷社大宮神社境外末社。元和年間の創祀と云ふ。明治二十年本殿、幣殿を再建、同三十七年拜殿を再建す。

祭日 十月一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二百九十五坪 崇敬者人員 約八十人

(四八) 須賀社 長炭村大字長尾字寺ノ前

祭神 須佐之男命

綾歌郡

(四四) 山田社 長炭村大字長尾字王地
祭神 天御主命
合祀祭神 武甕槌命

由緒 長炭村村社三島神社境外末社。天和年間の創祀に係り、古來皇子權現、皇子社等奉稱せられ、地名王地亦これより起る。明治初年山田社と改稱せらる。(古名勝圖繪)
大正十年^{字大}石橋多間社を合祀す。

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二百三十二坪 崇敬者人員 約二百五十人

(四五) 山王社 長炭村大字長尾字櫻林

祭神 大己貴命 大山咋神
由緒 長炭村村社三島神社境外末社。享保年間の創祀といふ。一説に創祀はこれよりも遙に古く延元年間中院源少將の崇敬祈願せし所なりと云へり。

祭日 九月五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 約百二十人

由緒 仲多度郡吉野村郷社大宮神社境外末社。元和年間の創祀と云ふ。明治三十一年十二月本殿を改築、昭和九年三月拜殿を改築す。

祭日 九月十六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 九百六十四坪 崇敬者人員 約百八十人

二八 造田村

(四九) 郷天川神社 造田村字一本杉

祭神 興台産靈命 天兒屋命 酒部黒麿命
由緒 武敏王四世の孫綾眞玉の子酒部黒麿社殿を奉造すと云ひ、或は天平二年(紀元一三九〇)九月十九日の降臨とも云ふ。三代實錄に『貞觀六年冬十月十五日戊辰授_二讚岐國正六位上天川神從五位下_一元慶五年十一月十四日戊午授_二讚岐國從五位下天河神從五位上_一』とありて國史現在社なり。

社傳によれば、天川御嶽山に座す神興台産靈命は往古天より降臨す所なり。これを神場之谷と云ふ。神齋場、釀酒

場の義なり。景行天皇の皇子神櫛王三世の孫須賣保禮命國造となり此の神を祭る。時に手置帆負命の裔をして長尾郷に來らしめ大峽小峽の木を伐りて御殿を造らしめ又神祭の物を奉らしむ云々。是より先、日本武尊吉備穴戸の惡神を誅し給ふ時吉備國に幸し吉備穴戸武媛武彥王を生む。王亦惡神を誅するの功によつて讚岐に留り香川郡以西は王の領有となり當社を崇敬し給ふ。武彥王四世の裔綾真玉の子酒部黑麿は世に城山長者と云ふ。是亦此の神を祭りて釀酒饗饌の儀典あり。今その地傳へて古老の口碑にあり。爾後裔孫相次で崇敬す。黑麿の遠裔那珂湊に居る者黑麿公をこの祠に配祀し社殿を造り崇敬意らす云々、と云へり。又文化四年の天川神社舊記によれば、從五位下天川大明神、所祭神三座、興登魂命・妙見星神、酒部黑麿、社傳の古記曰當社は人皇四十五代聖武天皇天平二庚午九月十九日興登魂命此地に降臨ありて鎮座し玉ふ神境也。其の時讚岐の國造の始祖神櫛王の遠裔益甲黑麿と言ふ者あり那珂郡神野郷に住す。同天平十九年丁亥三月十五日黑麿が庭前に天上より一つの星落ちて忽然として少女となる。黑麿曰く、吾に嗣なし幸に天より與給ふなりと厚く撫育し名を善女と呼ぶ。成長の後此の女能く酒を釀りぬ。酒甘美にして斟む

とも盡る事なく且病を治して人を壽域に至らしむ。四十六代孝謙天皇に奏し酒を献じ奉る。帝大いに賞し玉ひ勅ありて酒部の姓を賜ひ酒部黑麿と號す。神野郷を戸長と稱する事は是酒を酌む人は其の徳に依つて壽命長久を得るの謂ならむか。善女男子を産す。道隆の王と云ふ。又移りて良野の大堀と云ふ處に居住す。其の跡今に存す。此の天川の神社の境内に玉淵あり、善女身を投じて則妙見星神と示現し天上を得玉ふ。是に依て興登魂命を中尊に奉じ、左右に妙見星神、酒部黑麿を相殿に齋き祀り宮中三座を天川大明神と崇敬し奉る者也とあり。當社は往古より天川大明神と奉稱せられ、現存の棟札によれば寛文八年、天明七年に社殿改築あり。明治五年郷社に列せらる。社頭の風致頗る幽邃にして背後の山に奇巖をびえ、前に河川ありて老樹鬱蒼森嚴なり。(全讚史 官社考證 古名勝圖繪) 例祭日 十月十八日十九日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神輿庫 御守殿 寶物 縁起書一點 棟札二點 外二十八點 境内坪數 五千百七十八坪 氏子區域及戸數 造田村 長炭村大字炭所西字鹽田 平野 成正 四百五十戸

境内神社

石門社 (許登能麻遲比賣命)

祭神は興産產靈命の后神に座す。明治初年月創祀。

治五年八月創祀。

伊勢社 (天照大神 豊受大神) 明治初年月創祀。

(四〇) 天神社

造田村字奥谷

祭神 菅原道真公

合祀祭神 須佐之男命 天御中主神

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明應元年(紀元二一五二)里人の創祀といふ。

大正四年^{字菰}健神社、^{字森}森本社を合祀せり。

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二百七十六坪 崇敬者人員 約百五十人

(四一) 大山積社

造田村字梶州

祭神 大山祇命

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。永正十一年(紀元二二七四)八月六日里人の創祀といふ。

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿

綾歌郡

境内坪數 八十三坪

崇敬者人員 約百人

(四二) 地主神社

造田村字梶州

祭神 天照大御神 豊受大神 大己貴神 少彦名神 埴安姫神

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。寛文二年(紀元二三二二)八月の創祀と傳へらる。

主なる建造物 本殿 境内坪數 三十七坪

崇敬者人員 約二百五十人

(四三) 衢神社

造田村字木ノ下

祭神 八衢比古神 八衢比賣神 久那斗神

由緒 造田村郷社天川神社境外末社。文祿四年(紀元二二五五)九月十八日の創祀といふ。

祭日 十二月三十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三坪 崇敬者人員 約二十人

(四四) 野老神社 造田村字櫻木

祭神 野老主神
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明治八年(紀元二五三五)三月當村植野浪次なる人創祀す。
主なる建造物 本殿 境内坪數 三坪
崇敬者人員 約十五人

(四五) 磐土神社 造田村字山ノ神

祭神 大山祇命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。文龜三年(紀元一一六三)七月六日の創祀といふ。
祭日 九月六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二百六十一坪 崇敬者人員 約四十人

(四六) 崎神社 造田村字城ヶ谷

祭神 須佐之男命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明應二年(紀元一一五二)三月の創立と傳へらる。

(四九) 水分神社 造田村字宮田

祭神 天之水分神 國之水分神
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。文龜三年(紀元一一六三)六月一日里人相謀りて創祀すといふ。
祭日 六月一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百坪 崇敬者人員 約百五十人

(五〇) 久真奴社 造田村字上井

祭神 天神地祇千萬神
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。天川神社造營の節酒部黒鷹創祀せしといふ。
祭日 九月一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 八百〇七坪 崇敬者人員 約二百五十人

(五一) 須賀神社 造田村字盛

祭神 勝速日命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。弘治二年(紀元一一五二)三月十六日の創祀といふ。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六百十七坪 崇敬者人員 約七十人

(四七) 荒魂神社 造田村字柞野

祭神 天照大神 豊受大神 大山祇神
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。天正十一年(紀元一一二四三)九月二十三日の創祀といふ。
祭日 九月二十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二百二十九坪 崇敬者人員 約三十人

(四八) 御崎社 造田村字定生

祭神 須佐之男命 久久能智神 草野比賣神
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明應元年(紀元一一五二)三月の創立と傳へらる。
祭日 九月十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四百〇四坪 崇敬者人員 約百五十人

(一一六) 九月九日里人の創祀といふ。
祭日 九月十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二百〇八坪 崇敬者人員 約百五十人

(五一) 須賀神社 造田村字盛

祭神 勝速日命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。享祿二年(紀元一一八九)九月一日里人の創祀といふ。
祭日 九月十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百二十五坪 崇敬者人員 約九十人

(五二) 須賀神社 造田村字新田

祭神 勝速日命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。文祿元年(紀元一一五二)九月九日の創祀と傳へらる。
祭日 九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百四十坪 崇敬者人員 約七十人

(四四) 熊野神社 造田村字西川

祭神 天神地祇
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明應元年(紀元二一五二)三月里人の創祀といふ。
祭日 九月一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九十二坪 崇敬者人員 約百五十人

(四五) 八雲神社 造田村字岡ノ下

祭神 須佐之男命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。明應元年(紀元二一五二)九月五日の創祀といふ。
祭日 九月六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十九坪 崇敬者人員 約五十人

(四六) 忍石神社 造田村字宮田

祭神 天忍雲根命 水波女命 佐太毘古命
由緒 造田村郷社天川神社境外末社。往昔洪水屢あり村

二九 美合村

(四七) 大川神社 美合村大字中通字大川山

祭神 木華開耶姫命 磐長姫命 大山祇命 甕速日命
由緒 神社は阿讃國境の最高峰大川山の頂にあり。文武天皇の御宇役小角の創建する所と云ふ。天平四年國內大旱あり。六月朔日時の國司正五位下平群朝臣豊麻呂奉幣して雨を祈るに忽ち嘉澍あり。爾來歷代國主の崇敬厚く、讃岐、阿波は素より四國の民祈雨の神として深く尊崇し、大旱の節は阿讃兩國の民祈前に雲集し鐘鼓を鳴らし舞踏して雨を祈る。この風今に残りて毎歲陰曆六月十四日を以て阿讃の民社前に夜を徹して舞踊す。應安年中長尾氏社殿を修し、國主生駒一正及び高俊亦之を修す。寛永五年生駒高俊祈雨の器として鐘鼓三十五組を寄進し、承應年間藩主松平頼重大に社殿を修造せり。其の後山火ありて炎上せしかば、寛文十二年頼重重ねて之を造營し、元祿十二年藩主松平頼常封内巡視の節又之を修造す。寶永六年又炎上せしかば、藩主松平頼豊再建し、米穀を賜ひて祈雨の資とし、爾來毎歲之を

中災害多きを憂へ、延寶四年(紀元二三三六)村民相議りて創立せりと傳ふ。

祭日 六月一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十五坪 崇敬者人員 約六十人

(四八) 梶州神社 造田村字梶州

祭神 瀬織津姫命 天照皇大神 伊弉諾命
由緒 大寶三年(紀元一三六三)五月二十三日の創建にして、嘉祥元年從五位下安陪朝臣忠雄讃岐介となり崇敬すと云ふ。三代實錄に『貞觀六年冬十月十五日戊辰授讃岐國正六位上梶州神從五位下』とあるは當社なりと云へり。明治十二年八月村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(官社考證附録)
例祭日 十月八日九日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 百〇六坪
氏子區域及戸數 字東免 百十戸

賜へり。享保五年再建あり。明治十二年八月郷社に列せらる。當社又安産の神として衆庶の崇敬厚く、舊藩主松平家は特に當社を安産祈願社として崇敬せりと云ふ。(讃岐大日記 三代物語 全讚史 讚州府志 今名勝圖繪 玉藻集)

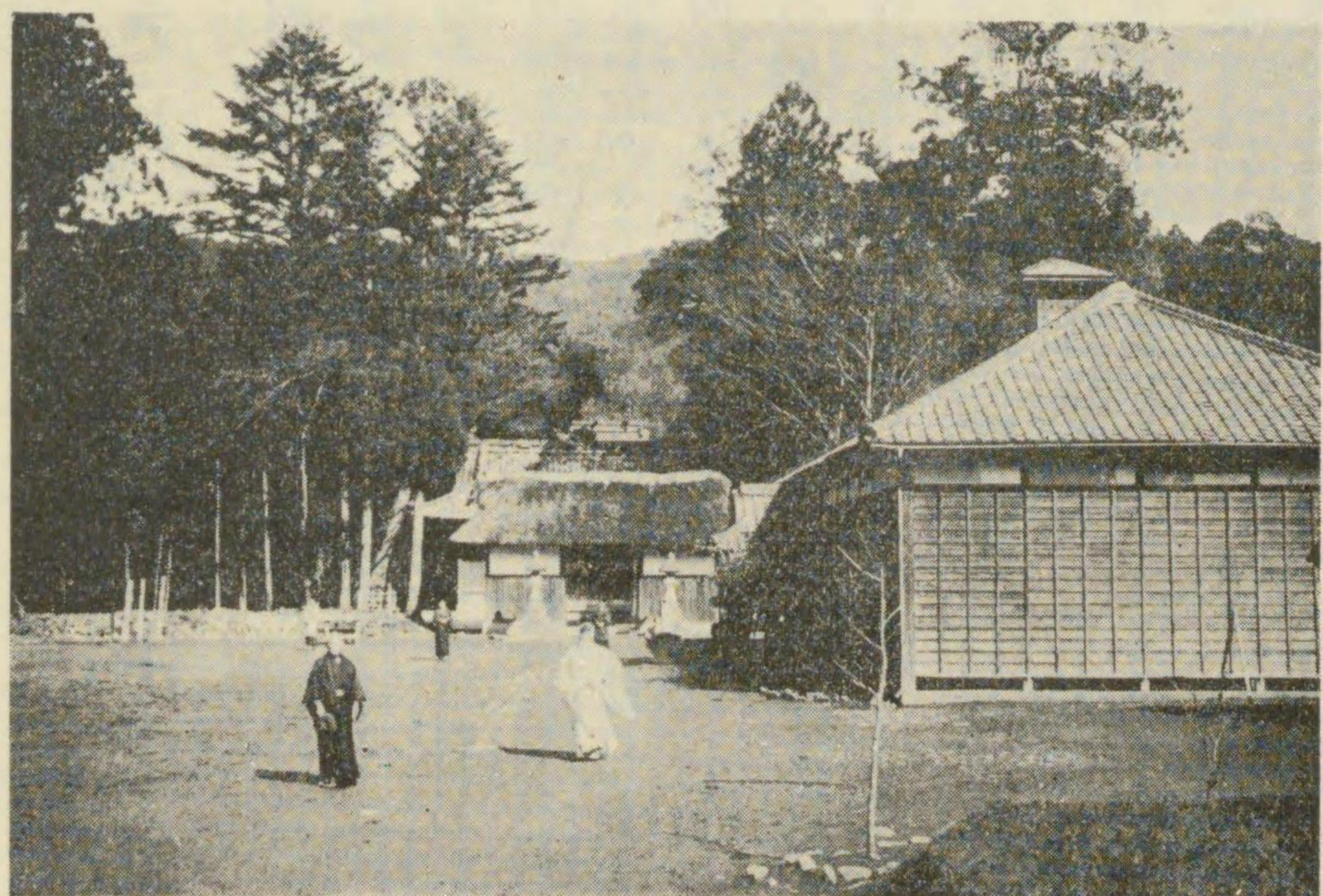
例祭日 陰曆七月二十六日
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 參籠堂
寶物 棟札天明二年 鐘三十六生駒高俊寄進 縁起書 外八十餘點
境内坪數 未定 外二六千六百五十三坪
氏子區域及戸數 美合村大字中通 二百戸

境内神社 水分神社(高靈神 閻魔神 大雷神)天平四年國司平群朝臣豊麻呂奉幣、寛保元年藩主松平頼基より米八斗を念佛踊御幣料として奉納せらると云ふ。(今名勝圖繪)
火魂神社(迦具土神)

(四九) 八幡神社 美合村大字中通字本名

祭神 應神天皇 神功皇后 姫大神
合祀祭神 底筒之男命 中筒之男命 上筒之男命 櫛磐窓命 豊磐窓神(以上中通社祭神) 田心姫命 湍津姫命 市杵島姫命(以上三條神社祭神)
由緒 貞觀年中山城國男山八幡宮鎮座當時の創建にして、

永正十年新名彈正造營すと云ふ。今名勝圖繪に『當社は正
 暦元年大川の麓に赤白旗八流天降りける故に小社を建
 て八幡宮と
 崇奉る。永
 正十年新名
 彈正軍旅の
 時祈願をこ
 めて出陣あ
 りしが奇特
 ありしかば
 社殿造營有
 て正八幡と
 唱奉りけ
 る』とあり。
 全讚史に
 『正八幡宮
 在二中通村
 一村之社
 也』と見ゆ。
 昭和九年十二月本殿、中殿、拜殿を改築す。



村社八幡神社

明治四十四年同村村社中通社及び字皆三條神社を合祀す。
 例祭日 十月十二日十三日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 隨神門
 境内坪數 九百三十九坪
 氏子區域及戸數 大字中通 百四十五戸

(四〇) 皇子神社 美合村大字中通字名頃

祭神 天忍穗耳命 天津彦根命 活津彦根命 天穗日命
 熊野忍踏命

由緒 大字中通村社八幡神社境外攝社
 祭日 十月八日九日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 二百四十七坪 崇敬者人員 約百三十人

(四一) 大山積社 美合村大字中通字名頃

祭神 大山積命
 由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
 祭日 十月九日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 七十二坪 崇敬者人員 十五人

(四二) 菅原社 美合村大字中通字本名

祭神 菅原道真公
 由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
 祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 六十坪

(四三) 地主神社 美合村大字中通字本名

祭神 天照大御神 大御食津神 大名持神 少毘古那神
 埴山毘賣神
 由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
 祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 二十八坪 崇敬者人員 五十人

(四四) 地鎮社 美合村大字中通字名頃

祭神 天照皇大神 豊受大神 大己貴神 少彦名神 埴安
 姫命
 由緒 大字中通村社八幡神社境外末社

祭日 秋季社日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約百人

(四五) 山神社 美合村大字中通字寺名

祭神 大山祇命
 由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
 祭日 陰曆八月三十日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 二十坪 崇敬者人員 十三人

(四六) 山神社 美合村大字中通字浦山

祭神 大山積命
 由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
 祭日 陰曆八月三十日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 二十坪 崇敬者人員 十三人

(四七) 山神社 美合村大字中通字野口

祭神 大山積命

由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 陰曆八月七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十一坪 崇敬者人員 約六十人

(四六) 御誓社 美合村大字中通字平川

祭神 天之忍穗耳命 天津日子根命 活津日子根命 天之
菩卑能命 熊野久須毘命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 八月三十日 主なる建造物 本殿
崇敬者人員 約六十人

(四九) 山神社 美合村大字中通字地下清

祭神 大山祇命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 八月六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約五十人

(四五) 大水上社 美合村大字中通字奥橋谷

祭神 大山祇命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿
崇敬者人員 約二十人

(四四) 金刀比羅社 美合村大字中通字名頃

祭神 大物主命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 十月十日 主なる建造物 本殿
崇敬者人員 二十六人

(四五) 山神社 美合村大字中通字橋谷

祭神 大山積命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 陰曆八月七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十五坪

(四七) 水分社 美合村大字中通字西櫻

祭神 高靈神 闇靈神 大神
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 八月六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百八十九坪 崇敬者人員 約百五十人

(四八) 山神社 美合村大字中通字西櫻

祭神 大山祇命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 八月六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百〇五坪 崇敬者人員 約七十人

(四九) 山神社 美合村大字中通字東櫻

祭神 大山祇命
由緒 大字中通村社八幡神社境外末社
祭日 陰曆八月六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十五坪 崇敬者人員 約二十人

(四六) 村勝浦神社 美合村大字勝浦字本村

祭神 小高命
由緒 弘仁八年邦内大旱あり。僧空海勝浦の御門淵に來りて雨を祈る。時に一老翁淵より現れ、我は讚岐國造神櫛王八世の孫篠目親王小高命勝浦大神なり、我此の淵に入りて年久し、今師に遇ふ幸ひなるかなと宣ひて忽ち見えす。こしばらくして大雨沛然として至り人皆蘇生の思をなす。こゝに於て空海神託に任せ社殿を造營して勝浦大神と奉稱すと云ふ。社傳、全讚史、三代物語、讚陽簪筆錄等傳ふる所皆同じ。其の後勝浦權右衛門社殿を造營せしも、弘化三年五月十八日火災ありて社殿舊記悉く焼失せる爲めその年曆詳ならず。
古來鵜足大明神と稱へられ、祈雨の神として其の名高く、寶曆神社帳には勝浦大明神と載せられたり。明治五年一月村社に列せらる。(讚陽記 三代物語 全讚史 今名勝圖 繪 官社考證追録 玉藻集)

例祭日 十月二十日
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神饌舍
境内坪數 三千五百九十五坪

氏子區域及戸數 字本村 中野 大向 樫 引利木 六十戸
境内神社 荒神社(荒魂神 一に曰 素盞鳴命)寶龜二年
して荒魂神社と云ひ、古く荒神と稱せられ、荒神は后
神の誤りにて産土神の後の神を祀れるならむと云ふ。
手間社(素盞鳴命 少毘古那命)承和年中悪疫流行の際少
毘古那命を祀ると云ふ。

(四七) 石槌神社 美合村大字勝浦字奈良ノ木

祭神 石土毘古神

由緒 美合村村社勝浦神社境外末社

祭日 陰曆九月十二日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五坪 崇敬者人員 五十人

(四八) 村落合神社 美合村大字勝浦字長谷

祭神 瀬織津比賣神 大直日神 伊豆能賣神 速佐須良比

賣神 底津綿津見神 中津綿津見神 上津綿津見神

大綿津見神

合祀祭神 須佐之男命

由緒 神櫛王の裔小高命此の地に留り奉祀せらるゝ所と傳
ふ。此の地勝浦山谷川水、川東水源繪尾谷水と落合ふ所な

殿を建て氏神として奉崇せりと云ふ。當地の岡坂氏は長竹
の裔なりと。

寛文年間藩主松平氏勝浦神社を以て一村の社と定め、當社
は合祀せられたるも、その後又分離せり。(古名勝圖繪
玉藻集)

祭日 十月十六日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 五百五十坪 崇敬者人員 約百十人

(四九) 三條神社 美合村大字勝浦字横畑

祭神 市杵島姫命 田心姫命 高津比賣命

由緒 當所横畑部落開拓の當時、農作物に鳥獸の害多かり

しを以て奉齋し三條大明神と號すと云ふ。寛文年間勝浦神

社に合併せられたるも後復遷せり。(玉藻集 古名勝圖繪)

祭日 九月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千四百二十六坪 崇敬者人員 約八十人

(四一) 福家社 美合村大字勝浦字下福家

祭神 神櫛王

るより落合と云ふ。傳へいふ、當社もと長谷部落に鎮座あ
りしが、文安五年大洪水の爲め社殿流れて落合に着く、落
合は屢々怪物出で、人を惱まししところなりしかば、此の
處に留り給ふ神意なるべしとて、更に社殿を造營して奉齋
せりと。(古名勝圖繪 玉藻集)

明治四十一年^{字長}本宮神社を合祀す。本宮神社は落合神社
の舊鎮座地なりしよりその名あり。

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 二千五百五十七坪

(四五) 三島神社 美合村大字勝浦字家六

祭神 大山祇命

由緒 傳ふる所によれば、延暦年中烏丸大納言の末葉に烏
藏人長竹なる者あり。兵亂をのがれて伊豫に住し大三島大
明神を尊崇す。後當所家六に來り烏丸五良長竹と云ふ。延

暦二年六月朔日西向して大三島大明神を拜す。時に大明神
飛來して石上に止り給ひしかばその石を以て神體となし社

由緒 天安元年(紀元一五一七)の創祀と云ふ。社記によ

れば、四國四面の海中に大魚あり。神櫛王詔を奉じて之を

討ち讃岐國に留まる。其の臣下の後裔福家長者と云ふ人天

安元年社を此所に建て、九月九日を以て之を祭祀し、氏神

と崇敬して皇子權現と號すと云ふ。寛文年間勝浦神社へ合

併となりしも後復遷せり。(玉藻集 古名勝圖繪)

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二千六百〇六坪五合 崇敬者人員 約二百人

(四三) 城村神社 美合村大字勝浦字眞鈴

祭神 建御名方命

由緒 口碑によれば長徳四年(紀元一六五八)矢野某の創

祀にして當時鳥獸の害多きを憂へて勸請すと云へり。今も

鳥獸を狩りて神前に供するの遺風あり。木村大明神と稱へ

られ、寛文年間勝浦神社に寄せ宮となりしが後遷遷せら

る。官社考證追録に『眞鈴神社 勝浦村にあり』とあるは

當社なり。(玉藻集 古名勝圖繪)

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 九百二十三坪七合五勺 崇敬者人員 約七十人

(四八三) 八峰神社 美合村大字勝浦字八峰

祭神 天照大神

由緒 勝浦山の南端八峰山上に鎮座あり。八峰山開拓當時の創建にして、阿讃國境なる山頭神社と同時の奉祀と云へり。古くは十二社權現と稱せらる。寛文中勝浦神社へ合祀せられしが後遷す。(古名勝圖繪)

祭日 九月十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三千百二十七坪一合二勺
崇敬者人員 約六十人

(四八四) 八幡神社 美合村大字勝浦字茂地倉

祭神 應神天皇 姫大神

由緒 京都石清水八幡宮創祀の節、當所亦此の祠を奉齋すと云ふ。寛文年間勝浦神社へ寄宮となりしが、後復遷せり。

祭日 八月二十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百六十三坪 崇敬者人員 約四十人

穀の豊饒を祈ると云ふ。

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 二千二百四十五坪二合五勺
崇敬者人員 約百二十人

(四八七) 龍王神社 美合村大字勝浦字八峰

祭神 天水分神

由緒 八峰山上に鎮座あり。傳ふる所によれば、當所開拓當時山上に湖水ありて往古より水の涸れしことなし。延喜十七年大旱の節こゝに雨を祈りしに忽ち驗あり。里人畏み相謀りて奉齋する所と云ふ。

祭日 六月二十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六百八十坪 崇敬者人員 約百二十人

(四八八) 檜ノ木神社 美合村大字勝浦字奈良ノ木

祭神 素盞鳴命 奇稻田姫命 大名持命

由緒 社傳によれば、元慶元年郷中疫病流行す、依つて山城國愛宕郡八坂神を奉齋して加護を祈る、この時市孫右衛

(四八五) 野田神社 美合村大字勝浦字野田小屋

祭神 國常立命

由緒 口碑の傳ふる所は、昔獵人あり、大川山に登りて獵す。一日大川權現の夢告ありて、明日三股の角の鹿出づるも射るべからすと云ふ。獵人山に行きしに果してその鹿出でたるに夢告を願うしてこれを射しかば忽ち神罰を蒙りて死せり。里人畏みて社を建て鹿の角を祀ると云ふ。この角傳へて今に寶物とせり。古來十二社權現と稱へられ、古名勝圖繪に『十二社權現 勝浦村野田小屋にあり……祭神鹿の角事』と見ゆ。寛文年間勝浦神社に合祀せられたりしも後復遷す。(玉藻集 今名勝圖繪)

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九百八十坪 崇敬者人員 約三十人

(四八六) 二雙神社 美合村大字勝浦字吹佐古

祭神 大山祇命

由緒 神社は阿讃國境二雙山上に鎮座ありて兩國を雙び守護し給ひ、兩國の者參集して祭祀を行ひ鳥獸の害を拂ひ五

門なる人新殿を建立して此の土地の氏神とすといふ。寛文年中勝浦神社に合祀せられしが後現地に還遷せり。古くは三社大明神と稱へらる。(玉藻集 今名勝圖繪)

祭日 九月十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿殿
境内坪數 三千三百七十六坪八合七勺
崇敬者人員 約七十人

(四八九) 荒神社 美合村大字勝浦字下福家

祭神 大山祇命

由緒 不詳
祭日 陰曆九月十九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二百六十二坪二合五勺 崇敬者人員 十五人

(四九〇) 荒神社 美合村大字勝浦字樸

祭神 須佐之男命

由緒 不詳
祭日 十月十九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百四十二坪 崇敬者人員 三十五人

(四二) 山神社 美合村大字勝浦字横畑

祭神 大山祇命

由緒 不詳

祭日 陰曆九月十七日

主なる建造物 本殿

境内坪數 五百六十坪七合五勺 崇敬者人員 八十人

(四三) 村山熊神社 美合村大字川東字中熊下

祭神 木花開耶比賣命

由緒 古名勝圖繪に『山熊神社川東にあり……天文年間
の勸請と云ふ』とあり。

例祭日 陰曆九月十日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 控所 遙拜所

境内坪數 三百二十七坪

氏子區域及戸數 字中熊上 中熊下 明神 林 葛羅野 三
角 株切 二百三十四戸

(四四) 山積社 美合村大字川東字淺木原

祭神 大山祇命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 三百六十坪

崇敬者人員 約六十人

(四五) 山神社 美合村大字川東字沖野

祭神 大山祇命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 五十七坪

崇敬者人員 約六十人

(四六) 川上社 美合村大字川東字日開谷

祭神 瀬織津姫命(一に曰 瀬織津姫命 大山祇命)

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 千〇十一坪

崇敬者人員 約百十人

(四七) 黒岩社 美合村大字川東字株切

祭神 天照國日子火明命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二百八十四坪

崇敬者人員 約六十人

(四八) 杉尾神社 美合村大字川東字柚野

祭神 天大主命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 九百九十八坪

崇敬者人員 約二百人

(四九) 熊野神社 美合村大字川東字川奥

祭神 天神地祇十二神

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 崇敬者人員 約百三十人

(五〇) 霧神社 美合村大字川東字三角

祭神 高靈神 闇靈神

合祀祭神 大山祇命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社。 明治四十三年字大
桂木神社を合祀す。

主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 千百三十七坪

崇敬者人員 約百八十人

(五一) 山神社 美合村大字川東字葛羅野

祭神 大山祇命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 六百二十五坪

崇敬者人員 約四十人

(五二) 照内社 美合村大字川東字中熊上

祭神 天照大御神

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二十四坪
崇敬者人員 約百十人

(五〇一) 劔山神社 美合村大字川東字中熊上

祭神 素盞鳴命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社
主なる建造物 本殿 遙拜所 崇敬者人員 十五人

(五〇三) 藥荒神社 美合村大字川東字中熊上

祭神 大年神 御年神 若年神

由緒 美合村村社山熊神社境外末社
主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 二百三十三坪
崇敬者人員 約百十人

(五〇四) 八幡社 美合村大字川東字明神

祭神 應神天皇

由緒 美合村村社山熊神社境外末社

主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 五十五坪
崇敬者人員 約百二十人

(五〇五) 山神社 美合村大字川東字雨島

祭神 大山祇命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社
主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 三百九十坪
崇敬者人員 約四十人

(五〇六) 大水上社 美合村大字川東字菜種

祭神 靈神

由緒 美合村村社山熊神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 百四十二坪
崇敬者人員 約百十人

(五〇七) 山神社 美合村大字川東字前ノ川

祭神 大山祇命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 百五十二坪
崇敬者人員 約百十人

(五〇八) 前川神社 美合村大字川東字前ノ川

祭神 大穴持命

由緒 美合村村社山熊神社境外末社
主なる建造物 幣殿 拜殿 遙拜所
境内坪數 五百〇一坪 崇敬者人員 約二百五十人

(五〇九) 社八幡神社 美合村大字川東字本村上

祭神 應神天皇 神功皇后

合祀祭神 猿田彦命 大山祇命 天神地祇十二神

由緒 古名勝圖繪に「八幡宮 川東村にあり 社人植松出羽……當社は大寶二年(大寶は大永の誤なるべし)阿波國三好重清當國へ亂入の時香巨守なる者當村八方に陣を張り八色の旗を建て天神地祇を勸請して川東八幡宮と崇め奉り武運を祈り遂に重清を一戦に追拂ひしかば宮社を建て崇信

す。其後明應年中再興せりと見ゆ。

明治四十二年^{字淵}野^{字淵}荒神社・山神社、^{字本}山神社、^{字本}山神社、^{村下}熊神社、^{村上}山神社、^{字藤}山神社を合祀し、大正三年^{字堀}木正殿社を合祀す。

例祭日 十月七日八日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 遙拜所
境内坪數 二千三百四十一坪
堀田 八十五戸
氏子區域及戸數 字本村上 本村下 御出 淵野 猪ノ鼻

境内神社 (社號不詳)(大己貴命 少彦名命 武甕槌命 須佐之男命 天照大神 猿田彦命)

(五〇〇) 山神社 美合村大字川東字先猪鼻 (猪鼻)

祭神 大山祇命

由緒 大字川東村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 遙拜所 境内坪數 百十五坪
崇敬者人員 約五十人

(五一) 所主神社 美合村大字川東字淵野

祭神 所主神

由緒 大字川東村社八幡神社境外末社。 口碑によれば、
壽永年間平氏滅亡の際平權頭某當地に來り宇淵野の地を墾
く。文明年間里人權頭の創業を追想し一祠を建てその靈を

祭り所主神社と稱すと。
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十四坪
崇敬者人員 約百二十人

第八章 仲多度郡

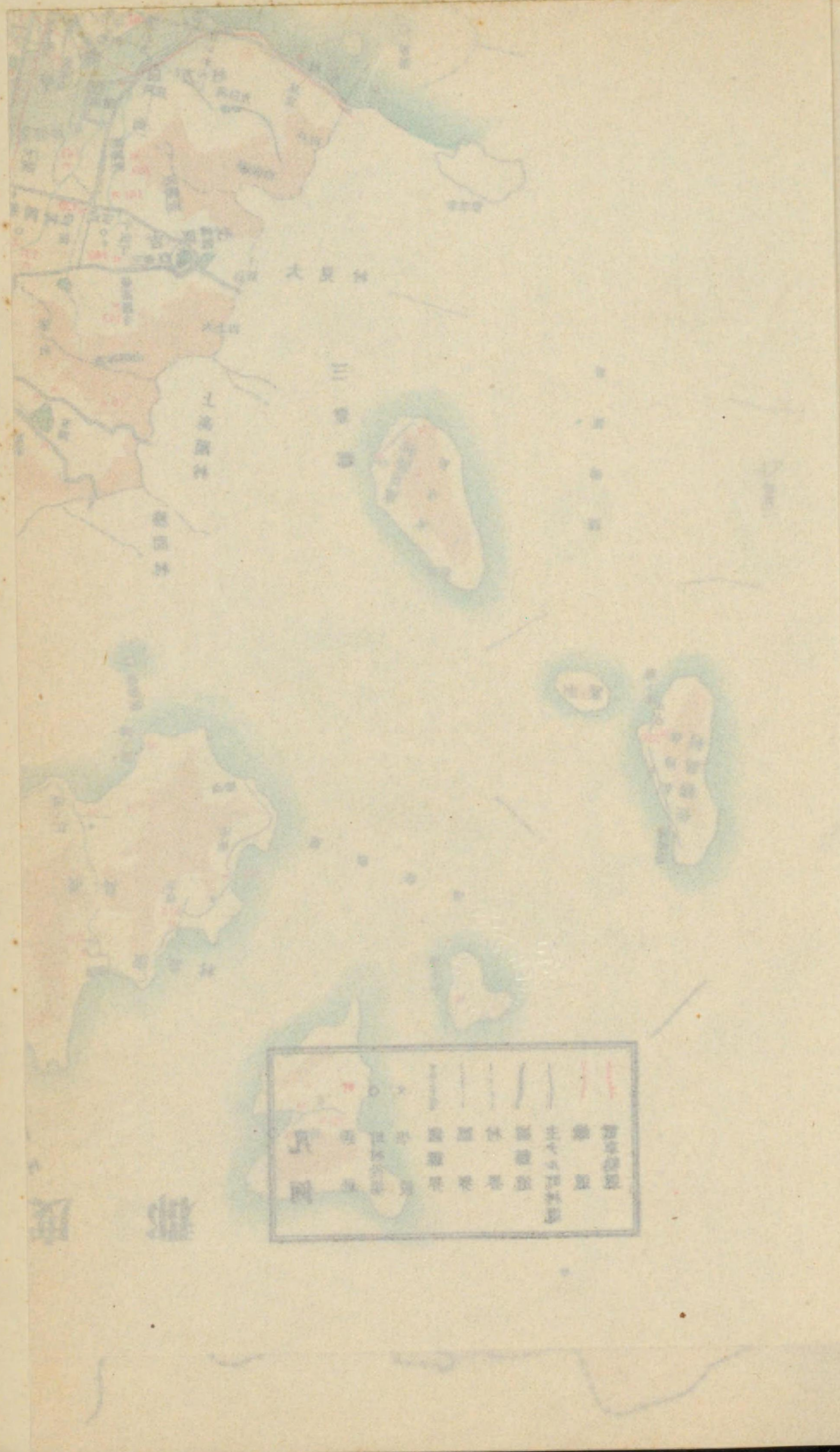
第一節 仲多度郡概説

仲多度郡は綾歌郡の西、三豊郡の東にあつて郡制實施以前
は那珂、多度の二郡に分れてゐた。

那珂郡は倭名鈔に那珂奈加とあつて中郡とも書かれてゐ
る。郡名は全讃史に鵜足、多度の二郡の中には含まれたるよ
り那珂郡と云ふとあり、西讃府志に『今按ニ日向風土記ニ、
那珂郡古老傳云、大穴持命巡行此國至此所詔國之中故
云^ニ中郡トアリ、爰モカ、ル由ナドニヤト思ヒシカド、尙思
フニ是ハ多度郡トモト一ツニテ多度ハ爰ヨリワカレタルナル
ベシ、サレバ彼郡ナル仲村ヨリ出シ名ト聞エタリ』云々とあ
る。所屬の郷は類聚三代格元慶四年太政官符に、讃岐國那珂

郡十郷とあつて、倭名鈔が十一郷として智多郷を載せてゐる
のは金倉の訓註の誤られたものであらうと云ふ。倭名鈔によ
る郷名は、眞野萬、良野、子松^{古萬}、高篠^{多加}、櫛無^{奈久}、垂
水^{多留}、喜徳、那家、柳原、金倉、智多であつて智多は前述
の如くである。眞野郷は神野郷と稱へられ、良野は吉野、子
松は小松、櫛無は櫛梨、喜徳は木徳の字が用ゐられて來てゐ
る。柳原は柞原の誤であらう。各郷所屬の村名を官社考證に
よると

眞野郷 眞野・岸ノ上・生間・買田・帆山・福良見・宮
田・追上・大口・後山・東七ヶ村・西七ヶ村・鹽入・新
目・山脇。(仲多度郡史は、岸上・眞野・五毛・鹽入・東
七箇(春日・小池・本目・後山・帆山・照井・福良見)・
西七箇(新目・山脇・大口・追上・宮田・生間・買田)と



仲多度郡



仲多度郡は綾歌郡
 は那珂、多度の二郡
 那珂郡は倭名鈔に
 る。郡名は全讚史に
 り那珂郡と云ふと
 那珂郡古老傳云、十
 云ニ中郡トアリ、筈
 フニ是ハ多度郡トモ
 ベシ、サレバ彼郡ト
 る。所屬の郷は類聚